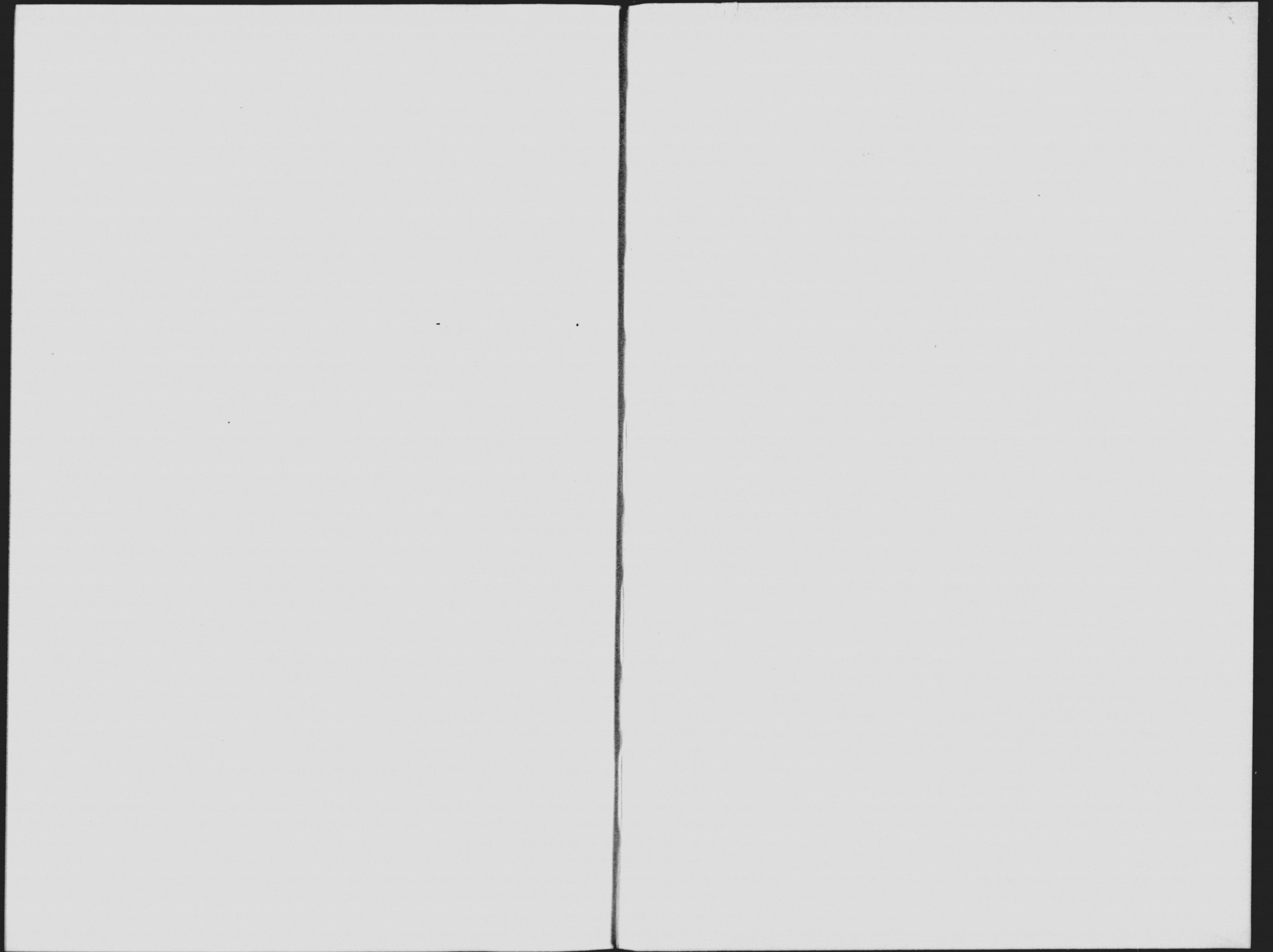
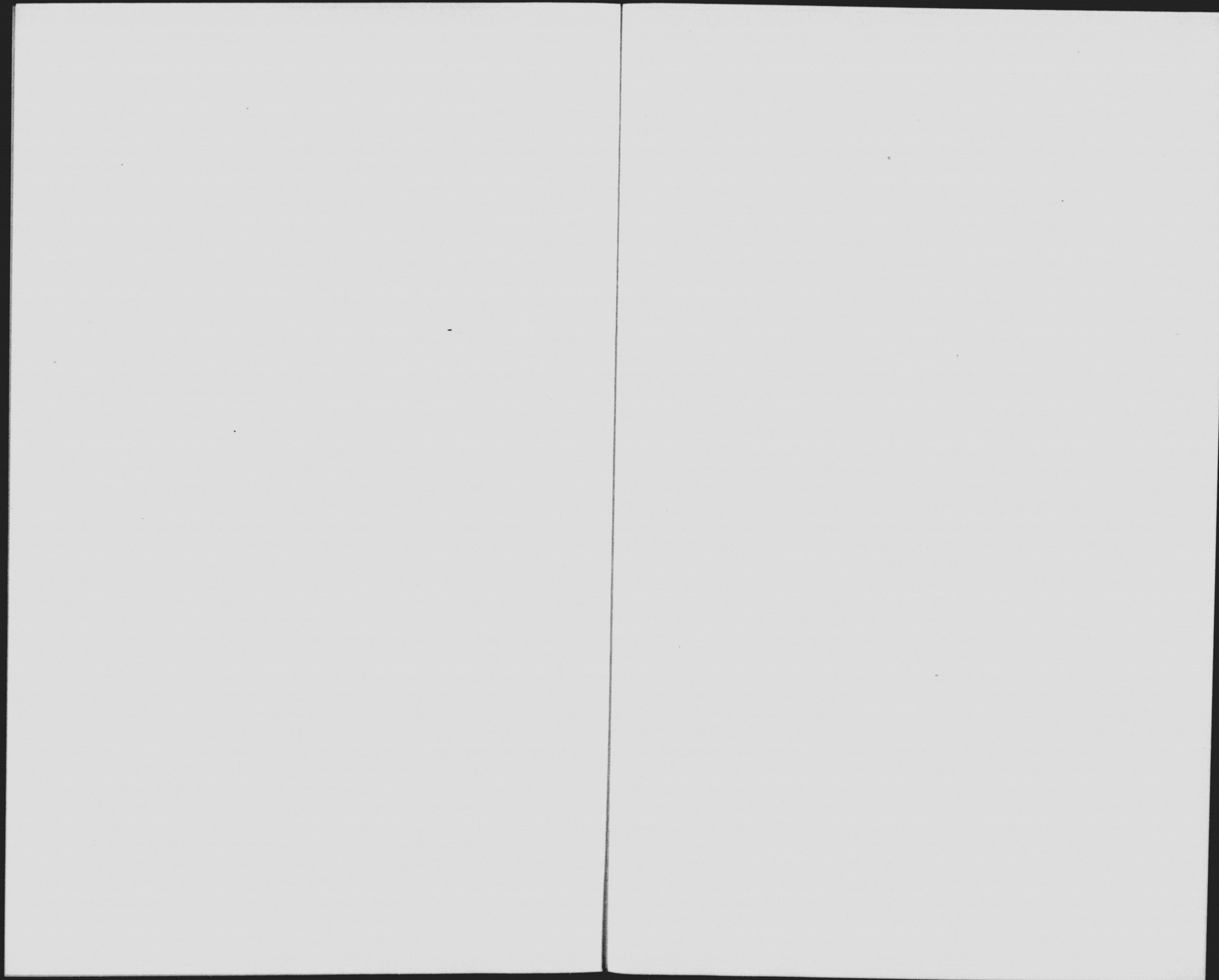
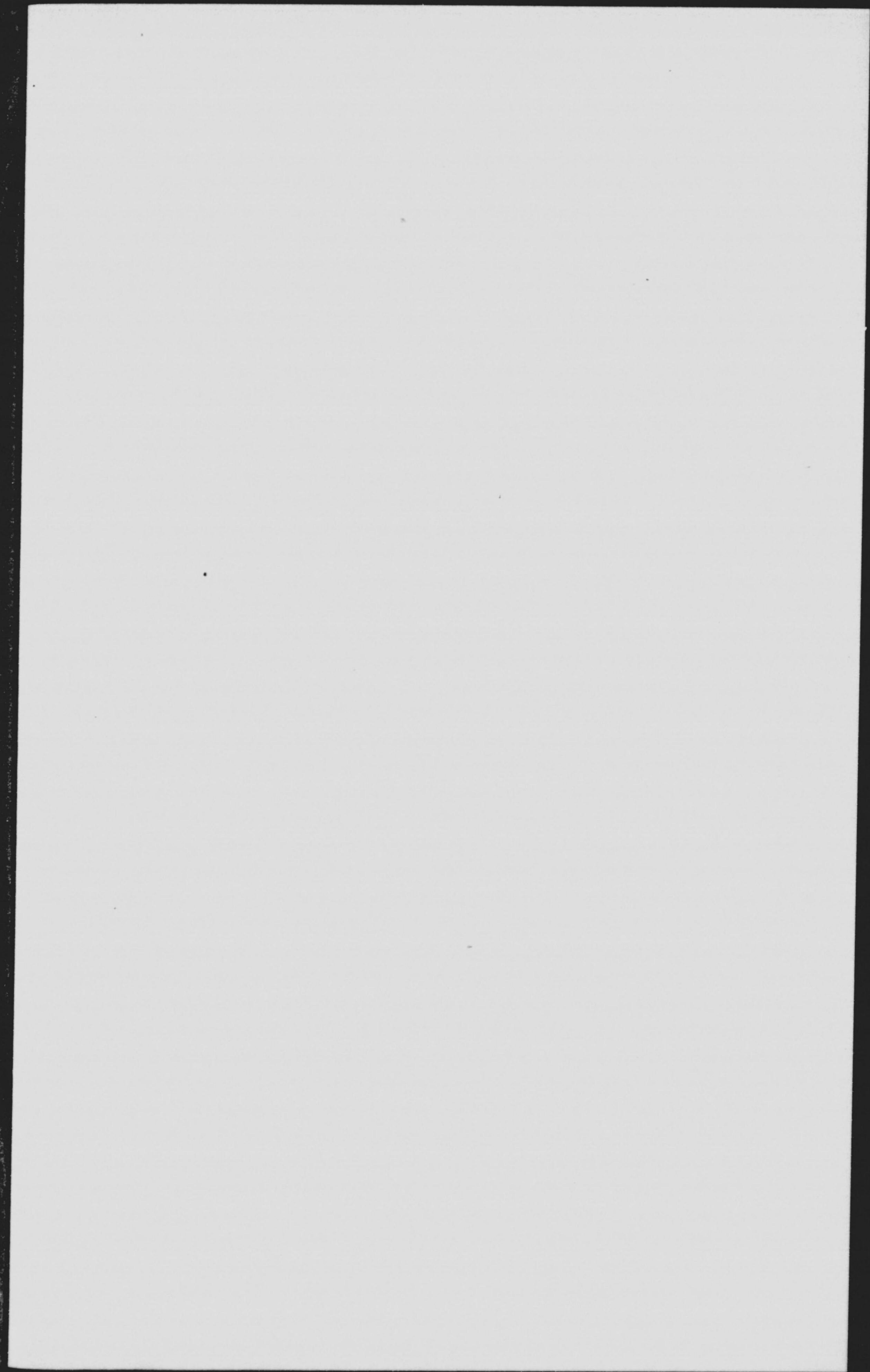


319.1

G13d







外、2T-82

日本外交文書

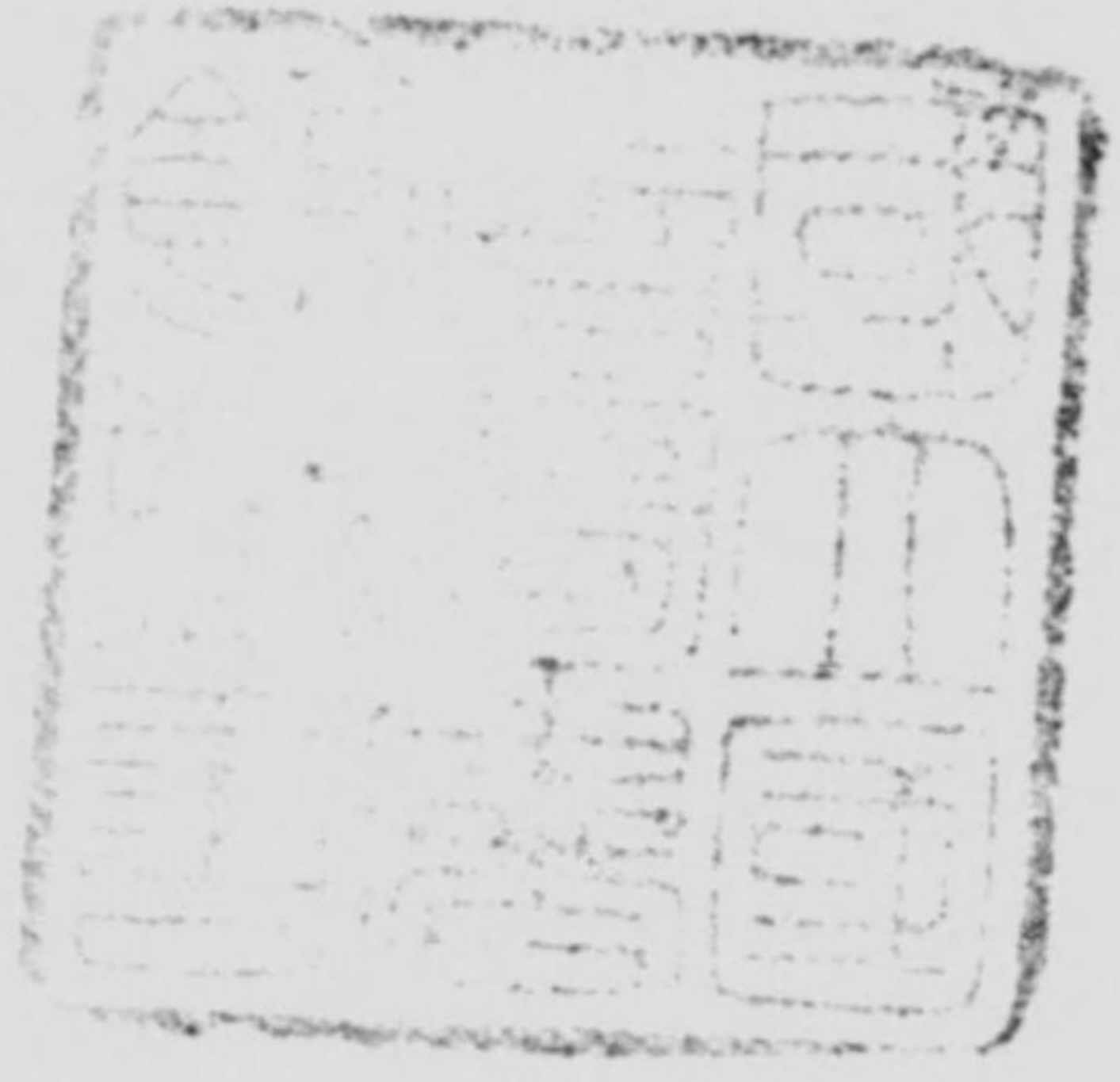
第七卷

自明治七年一月
至明治七年十二月

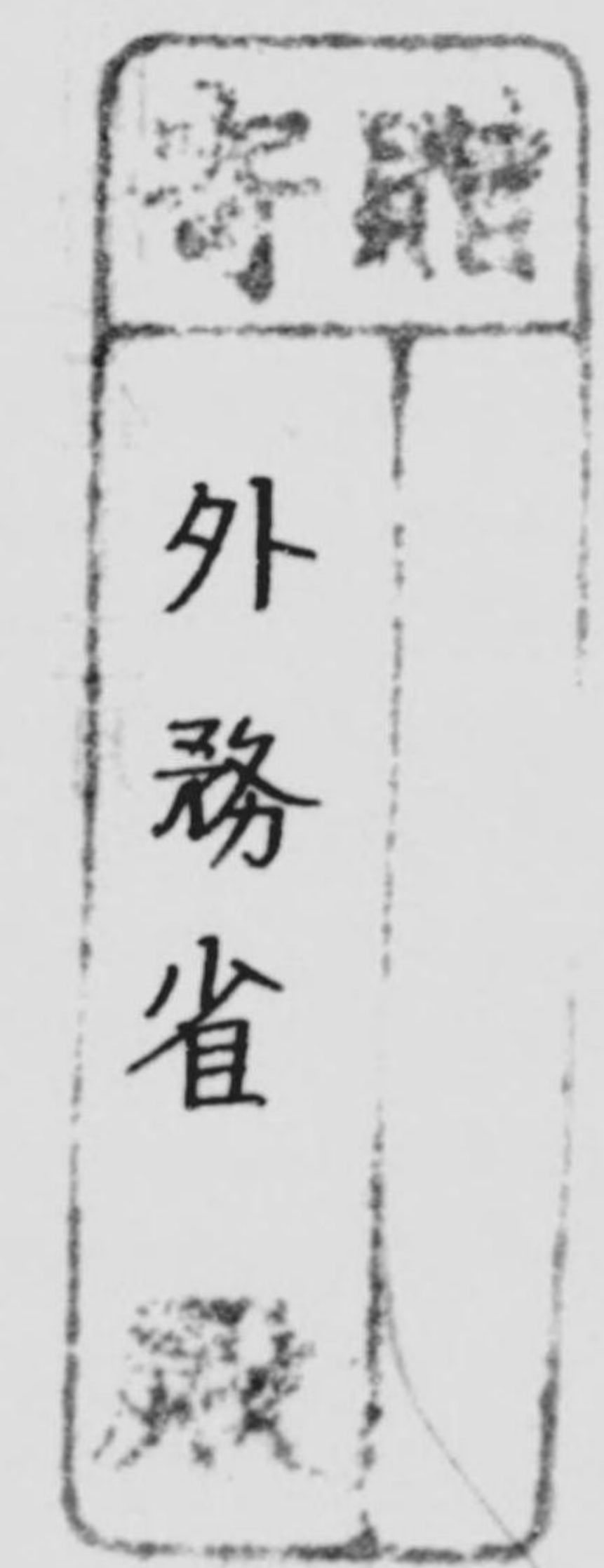
外務省調查部編纂
外務省藏版

日本國際協會發行

316/
G14C
G13d dn
VOL. 10



287085



大日本外交文書 第七卷 自明治七年一月至明治七年十二月

目次

- 一 臺灣生蕃討撫一件……………
- 二 朝鮮國トノ通交ニ關スル件……………
- 三 樺太問題ニ關スル件……………
- 四 小笠原島問題ニ關スル件……………
- 五 下ノ關事件償金支拂ニ關スル件……………
- 六 砲臺構築ニ付元治元年下ノ關約定取調ノ件……………
- 七 箱館賊徒討伐ノ際取押ヘラレタル「ペイホー」號ノ損害賠償請求ニ關



スル件……………四九〇

八 秘露國風帆船「マリヤ、ルス」號ニ關スル件……………四九四

九 高島炭坑回收ニ關スル件……………五三八

一〇 外國人ノ銃獵ニ關スル件……………五六七

一一 外國人内地旅行ニ關スル件……………五八四

一二 稅關諸規則ニ關シ各國公使抗議ノ件……………六三五

一三 銅錢並ニ銅鑛輸出ニ關スル件……………六六七

一四 英獨兩國トノ鑛稅取極書調印ノ件……………六八三

一五 郵便交換條約締結ニ關スル件……………七〇五

一六 獨國代辦領事「ハーベル」殺害一件……………七三七

一七 明治元年神戸事件ニ於ケル蒼隼丸等罹災救助ニ關スル件……………七四七

附錄 大日本外交文書第七卷日附順索引

大日本外交文書 第七卷 目次 終

大日本外交文書 第七卷

自明治七年一月
至明治七年十二月

外務省調査部編纂

事項一 臺灣生蕃討撫一件

一 二月六日

大久保、大隈兩參議上陳ノ「臺灣蕃地處分要略」

七年一月上旬 大久保參議 大隈參議 臺灣蕃地處分取調ヲ命セラレ因テ
左ノ要件ヲ上陳ス

臺灣蕃地處分要略

第一條

一 臺灣生蕃討撫一件 一

一 臺灣土蕃ノ部落ハ清國政府政權達ハサルノ地ニシテ其證
ハ從來清國刊行之書籍ニモ著シク殊ニ昨年前參議副島種
臣使清之節彼ノ朝官吏ノ答ニモ判然タレハ無主ノ地ト見
做スヘキノ道理備レリ就テハ我藩屬タル琉球人民ノ殺害
セラレシヲ報復スヘキハ日本帝國政府ノ義務ニシテ討蕃
ノ公理モ茲ニ大基ヲ得ヘシ然シテ處分ニ至テハ着實ニ討
蕃撫民ノ役ヲ遂ルヲ主トシ其件ニ付清國ヨリ一二ノ議論
生シ來ルヲ客トスヘシ

一 臺灣生蕃討撫一件 一

第二條

一北京ニ公使ヲ派シ公使館ヲ備ヘ交際ヲ辨知セシムヘシ清人若シ琉球ノ屬否ヲ問ハ、即チ昨午出使ノ口蹟ニ照準シ琉球ハ古來我帝國ノ所屬タルヲ云ヒ竝ヘ現今彌々恩波ニ浴セシムルノ實ヲ明ニスヘシ

第三條

一清官若シ琉球ノ自國ニ遣使獻貢スルノ故ヲ以テ兩屬ノ説ヲ發セハ更願テ關係セス其議ニ應セサルヲ佳トス如何トナレハ琉球ヲ控禦スルノ實權皆我帝國ニ在テ且遣使獻貢ノ非禮ヲ止メシムルハ迫テ臺蕃處分ノ後ニ目的アレハ空ク清政府ト辨論スルハ不可トス

第四條

一清政府ヨリ臺灣處分ニ付論説ヲ來サハ昨年ノ議ヲ確主シ判然蕃地ニ政權不逮ノ證據ヲ舉テ動カサ、ルヘシ若シ土地連疆ノ故ニ付論スヘキ者生セハ和好ヲ以テ辨スヘシ其事件至難ニ涉ラハ是ヲ本邦政府ニ質シテ可ナラン唯推託シテ時日遷延ノ間ニ即事ヲ成シ和ヲ失ハサルノ機謀交際ノ一術ナリ

第五條

ニ便ナラシムヘシ

第九條

一探偵ノ心得ハ熟蕃ノ地瓊瑤社寮ノ港ヨリ兵ヲ上陸セシムル積リニ付兼テ此邊ノ地勢其他停泊上陸等ノ便利ナル事ニ注意スベシ

二月

大隈 重信

大久保 利通

註 本號文書日附ハ「大隈重信關係文書」等ニ據ル

二 三月二十四日 御雇米國人「リ・ゼンドル」ヨリ 勝海軍卿宛

米國人「カツセル」雇入ノ儀完了セル旨報告ノ件

明治七年三月十五日附之貴書即チカブテイン、カスセル雇入之儀ニ付電信ヲ以テアメリカ政府ヘ私ヨリ掛合及可申旨ニ付爰ニ前書御答申上候既ニ三月十五日電信ニテ別紙a印寫書之通申遣置候處其後二十三日ニ至リ別紙寫書b印之返書シニナル海軍士官ヘ相達シ并同日カブテインエムシイドンケル海軍輪カブテイン落手之答書別紙寫書c右者カブテイン

一 臺灣生蕃討撫一件 二 三

一土蕃ノ地ハ無主ノ城ト見做ト雖トモ清國版圖ト犬牙接連ノ地勢ナレハ隣疆ノ關係生シ葛藤モ發スヘケレハ福建省ニ屬スル臺灣港ニ領事一員ヲ置キ淡水事務ヲ兼轄セシメ征蕃ノ時ニ方リテ船艦往來ニ付テノ諸用ヲ辨セシムヘシ右職掌ノ外ニ臺蕃處分ニ付清國地方官トノ應接ヲ擔當セシメ極々和好ヲ保獲スルヲ長策トスヘシ但清國視察福嶋九成ニ領事ヲ任スヘシ

第六條

一領事ハ蕃地ノ征撫ニ關セス征撫ニ任スル者ハ應接ニ關セス蓋シ其分界ヲ明ニシ和好ヲ維持セン爲メナリ若シ事至重ニ涉ラハ是ヲ北京在勤公使ニ傳致スルヲ可トス

第七條

一福州ハ福建ノ一大港ナレトモ臺蕃處分ノ便路ハ臺灣及ヒ淡水ヲ要地トス且福州ニハ琉球館アレハ暫ク是ヲ度外ニ置キ嫌疑ヲ避ルヲ佳トヘシ

第八條

一福島九成成富清風吉田清貫兒玉利國田中綱常池田道輝右六名ヲ先ニ臺灣ヘ發遣シ熟蕃ノ地ヘ立入土地形勢ヲ探偵シ且土人ヲ懷柔綏撫セシメ佗日生蕃ヲ處分スル時ノ諸事

カスセル氏ヨリ相達シ私方ヘ相留置候尤明治七年三月十四日大隈公之御宅ニテ入御覽候私儀書面^{第二十條}之通去ル三月二十三日ヨリ一ケ年間之約條ニテ閣下之御差圖相受候爲メカブテインカスセル儀ハ當今私宅ヘ滞留仕居候也
西洋紀元一千八百七十四年
シイ、ダブルユー、リヂェントル再拜

海軍卿 勝 安芳閣下

註一、別紙類省ク

二、右文書日附ヲ缺クモ假ニ此處ニ挿入ス

三 三月二十五日 三條太政大臣ヨリ平井外務少丞ヘノ辭令

臺灣生蕃處置取調方仰付ノ件

臺灣生蕃處置取調被

仰付候事

但御用中陸軍省ヘ出仕可致事

明治七年三月廿五日

外務少丞 平井 希昌

太政大臣 三條 實美

一 臺灣生蕃討撫一件 四

四 三月二十九日

寺島外務卿ヨリ
大隈大藏卿宛

臺灣生蕃處分ニ關聯シ御雇米國人「リ・ゼンド

ル」儀出仕替ニ就キ申出ノ件

附記一、明治五年九月二十三日副島外務卿ト米國公使

トノ對話書

米國人「リ・ゼンドル」ノ紹介竝ニ琉球
人殺害事件處置ニ關スル件

二、明治五年九月二十四日横濱出張所ニテ副島外
務卿ト米國人「リ・ゼンドル」トノ對話書

琉球人殺害事件處置及米國人水夫殺害
事件ニ關スル米清交渉竝ニ臺灣事情等
ノ件

三、明治五年九月二十六日延邊館ニテ副島外務卿
ト米國人「リ・ゼンドル」トノ對話書

琉球人殺害事件ニ關スル 對清交渉竝ニ
臺灣出兵等ノ件

四、明治五年十一月十八日副島外務卿ヨリ米國公
使宛

米國人「リ・ゼンドル」雇入ニ關シ韓旋

方依頼ノ件

五、明治五年十一月二十九日米國公使ヨリ副島外
務卿宛

米國人「リ・ゼンドル」右受諾ノ旨回答
ノ件

外務省准二等出仕李仙得儀今度臺灣事務ニ付陸軍省エ出仕
候様過日太政大臣殿ヨリ御達相成候ニ付而者同人儀陸軍省
也又ハ臺灣事務局 追而御取開 相成候節 也御都合之方エ出仕替相成候
様致度候且同人ハ元來先外務卿副島種臣之顧問之爲聘置候
義ニ而職務ニ付別段約定章程等之類無之候然ルニ今般木人
御引取相成候ニ付而ハ臺灣事務主任ニ而出張候者之指令ヲ
甘服候様御談判有之如何可有之哉此旨及御相談候間否御回
報有之度此段申進候也

七年三月廿九日

寺島外務卿

大隈大藏卿殿

註一、米國人「リ・ゼンドル」雇入ニ關シテハ本書第五卷一
二八參照尙其ノ後見當リタル右關係文書左ニ附記ス

(附記一)

壬申九月廿三日於外務省外務卿副島種臣米利堅合衆國
公使シイデロングえ應接記の内

一 今般支那より來着の貴國人名は何と申候や

一 リーゼントルと申候

一同氏は支那にて是迄何れに在留被致居候哉

一 廈門に在留罷在候一體同人は戦功のある者にて我國に
てセネラール官に被任已前南亞米利加ブラジルの公使
を勤め居我大統領にも深く委任致置候者に有之候

先年我國商船難破および候節臺灣え漂着候處右乗組の
者を臺灣の土人殺害および候に付我軍艦三艘を以問罪
の師を差向け其後ゼネラールリーゼントル支那の兵を
引率致し右の所置におよはん爲め同灣え罷越りゼンド
ルより直に土人の長に掛合向後米人は勿論西洋人渡來
候共暴舉および間敷旨定約致し遂に今日に至りては親
誼も厚く相成候其以來英國船渡來候とも土人暴動およ
ひ候義は無之候

リーゼントルの話に今般琉球人を殺害せしは歐羅巴人種
にあらず且約定も無之事故右の振舞におよひ候由土人

一 臺灣生蕃討撫一件 四

申聞候趣に候

臺灣は氣候も宜く且膏腴の地にして米砂糖芋等并礦山
も數ヶ所有之港も宜く外國人に取りては至極便利の場
所にて外國人中にも着目致居候ものも有之由右は支那
にて管轄といへとも其命令も行はれされは則浮きもの
にて取るものゝ所有物と相成可申候

一 ホルマサ一件に付て左の三條の手續より他無之候

第一直に問罪の師を差向候歟

第二土人え掛合我人民并琉球人とも到着候とも暴舉お
よひ間敷後來の取締を相立候約をなす歟

第三支配所屬の義なれば其政府へ掛合の上所置および
候歟

右はいづれも御見込の次第も可有之候得共思の儘申上
候

此時地圖并人種山川家屋の寫眞米國より支那へ懸合
の手續書等差示す

一 圖中：：印界外は支那の管轄に候歟

一支那管轄に候得共其政府の命令は不行候故人民の保護
も出來兼候間支那へ御掛合にも相成候は、約定に期限

を立彼にて其期に違へは貴國にて直に保護の手續ホル
マサ土人え直に御掛合御所置の方と存候尤支那人と約
をなすは易すけれ共其約を果さるは彼の人情に付右の
順序を経て御所分相成候方上策と被存候
一御同論に候

一臺灣の土人の居る海濱はいつれも暗礁多く海軍にては
責るに地理惡敷候に付裏手より陸軍を以挑み候方と存
候

一體土人は暴威にて手強有之候由に承り候いつれに
も御掛合相成候は、厦門領事リーゼントルえ御打合の
上御所置有之候方可然哉可成は干戈を交して以後取締
を相約し候方上策と存候

一ホルマサ土人の人口は何種なるや相分り居候歟
人種も一種にあらされは人口の多寡は未だ審かならず
候

一往古臺灣を我國にて有し候節は右を名けて高砂島と申候
其後荷蘭人の所有と相成候趣に有之候
一リーゼントルの説に往古荷蘭人臺灣中或る村落へ來り
土人を悉く殺害およひ纔に土人三名を残し置候趣に付

土人於て其仇讐を報せん爲他國人をみれば殺害およひ
候義と申事に候得とも外國に取りては右は尤辨理の地
に有之候

一右は尤我にても所望の地に有之候貴方の御見込は如何
一米國にては他國の地を所有する事は不致義に候得共我
友陸の國々にて他國の地を所有し廣殖する義は好む所
に有之候

此處地圖に附え云ふ 支那にて臺場を設備せんとの見込に候
得共未だ施行に不及候に付リーゼントルより支那へ承
り合候處手廻り兼候趣なれとも其實臺場は設備する共
土人暴力の爲に支那人にては支へさる故なれはなり此
島の一件に付凡御見込も相立候は、不及なから御相談
も可申上候

一此義に付ては現今専ら考案中に付縷々御相談に悉し度候
一人種は支那と土人との種而已に有之候此國は支那人と
いへとも此地にては萬事態に施す事不能候に付リーゼ
ントル古跡等を撥かせその恣意の權を支那人に示す義
に有之候
ホルマサ島は支那の所有と支那人は唱へ候得共千六百

二十年の頃は日本にて此島を略せんと謀り千六百三十
四年の頃には蘭人の所有となりし處千六百六十年に至
り蘭人此島を退去せり其後に至り支那にて此地を四分
に區別し每區鎮臺を置候事に有之候

一土人は面類にいれ墨有之候
一セネラール、リーゼントル今般歸國せしは何等の爲めな
る哉

一事故あつての義に無之一時暇を乞歸國の由然し政府に
て何役に任し候哉は難計候得共ホルマサ一件に付我政
府へ御掛合相成候は、再び貴國え來着の運ひに相成可
申候

リーゼントルえ御面談被成度候は、出省歟御出濱被下
候共御都合次第取計可申候此書籍御用に相成候義も有
之御貸申上度候得共我政府の許可を得されは其都合に
至り兼候間若し御一閱被成度候は、政府へ其旨申通寫
取り差進可申候

一幸ひ出濱の序も有之候間同所にて閣下并に同氏え悉皆御
面晤に可及候
一臺灣え貴國船艦御差出に相成候は、同所海岸地圖等我

方軍艦に可有之候間乍不及御周旋可致候且北京在留我
國公使ロー氏え其手續申通萬事御盡力致し候間御見込
も相立候は、御漏し可被下候

一我見込三等有之候
第一支那政府にて琉球人を殺害候土人を罰候歟其義能わ
されは左の如し
第二支那と日本と戮力して土人を罰し候積右もならされ
は第三の如し
第三支那の手を不經直にホルマサ島え問罪の官員を派出
の目的

一右は御決定次第御漏し被下度候
一リーゼントルえ御面晤の砌子細の情實御話し可及候得共
我方にては第三の手續に可致見込に有之候
一直に土人え御引合にては諸事不纏は必然に付アモイ領
事義は土人の長と懇親の交なれは其手を経て御所置相
成候得は事纏り候と存候右の手續に無候は、支那人等
御携にて御出にては逆も六ヶ敷土人支那人を惡む甚敷
故なれはなり土人は頑黙なれ共厚意を以するより他な
し既にリーゼントル親睦に至るも厚意のなす所也

一右にては土人爵方の義六ヶ敷事と被存候

一爵方六ヶ敷已後の取締を相立候より他なく強て御討し被成度候は、兵を擧て征するより他なし可成は干戈を交へず後來の約を定むる方と被存候

一概略これを云へは爵方所置およひ候以上は尋常といへとも壹萬位の兵はホルマサえ差置候積

一右にては始終交り深からず候間先つ手を経て掛合人民保護の爲約を結び地を借り其上兵備をなすも遅しとせず候間直に兵を擧さる方と被存候

一御尤に候

一彼我人民保護の爲砲臺を設候と申入候得は地所借入の義容易と存候且つ我漂流人民相助け候節は此陣營へ相屆候は、謝物を送り候との趣を以御掛合の方然候

支那え嚴敷御掛合相成候にはホルマサは何れの所屬なるやを問ひ彼所屬と云へは爵方の義を申入尤前申入候通り支那人は容易に承諾するとも約を不果は彼の情に付違約候は必然に付其節直にホルマサえ御掛合相成候手續の方然存候

一御同意にて既に其見込にて所置およひ候積りに候

臺灣の武器中には日本の刀劍も有之候

一夫は支那並日本の書籍にも書載有之候

一往古は荷蘭も領し居候

一昔し臺灣の東方を日本人巡行候節支那人はいまた來りし事無之趣に候

一其通りに御坐候最初日本人は印度邊へ渡航候間右様巡行候事有之同所は支那よりは望見いたし居候所なから參り候事無之日本人は離距いたし居候へとも渡航候旨は史籍に相見へ候

支那人ホルマサを見出したるは千四百年代に有之日本人は其已前より相越候に付右を示し置候事にて候

一體ホルマサは支那にて取り候に無之蘭人來りて之を略取し其後支那政府へ渡し候ものに御坐候

一其頃日本にては此島を高砂と稱呼いたし居候

一右は書史に相見へ候哉

一然り村長を指して翁と書してあり即ち日本の稱名に候

一寫眞にても大概日本服のもの多く見へ候

一高砂とは砂地の多き所より名付け候様被存候

一元來砂地多く候處爾來支那人耕作いたし砂地は少なく

一委細の義は尙御相談可申上候過日ホルマサ一件御話有之候に付今日書籍等供覽候事に候御見込も御確定相成候は、我政府へも申立協力可致候

一御熟考の上至當の御見込御漏し可有之候

(附記二)

壬申九月廿四日於横濱出張所副島外務卿米國人ゼネラル、リゼンドル應接記

石橋外務少丞通譯

米利堅特命全權公使チャルレス、イ、デロング

同國公使館附書記官ライス

井田領事

斯 密

列 席

目 次

一臺灣一件

一米國水夫殺され候よりの手續御話し可申上米政府より支那政府え掛合候には無之米政府の命を奉し北京公使より直に掛合候依て支那政府於ては爾後右様の暴行爲致間數旨の布告書差出右布告書の内外國より兵を被向候節防禦の兵は配置いたし難き旨に有之

相成唯川口には砂地有之候

一昔平戸のもの兄弟兩人にて臺灣へ蘭人え對し仇討に赴き候事有之候蘭人の居りたる所を臺灣人掠奪し琉球人三名漂着せし時殺戮いたしたる事有之其節は日本より使を遣し其罪を責め三百貫目の償金を取り琉球人え與へし事有之候右は二百年前の事なり

一近來御國よりホルマサえ御使を被遣候事御座候哉

一使を遣し候事は無之三四年前拙者の在所のもの香港え渡航の節風様惡敷臺灣へ漂着いたし候事有之候

一其節役人兩名居り候よし

一即ち肥前の役人に有之

今般琉球人臺灣にて被殺候に付ては支那政府えの懸合方の手順御心付の廉は委細御示し被下度候

一其儀は已に米公使より談話有之夫か爲め暫時滯留候事に付及ひ候丈けの御助力いたし候心得に候

琉球人の被殺候義傳聞候節支那政府より右殺し候者共を相當に可罰旨差圖有之候へともワトソンと申役人土人の悍勇に恐怖し此命を通し候事出來不申と相見へ候一さすれば支那政府の權も不被行候哉

一 迎も被行不申琉球人の被殺候は其容貌支那人に似寄候故に有之西洋服にても着し居候へは近年下拙よりの約定も有之候間右様被殺候事はあるましく全く支那人と認められ候故と被察候琉球人殺され候に付其様子取調候處土人十八種有之其長たるものに承り候處右漂着のものには支那人には無之様存候間殺戮等不致候様令を下すべくと存候へとも其間合なく被殺候誰にても土人懸合候もの御坐候へは殺害に遇候事はあるましくと考へ候旨申聞候其長はトキトクと申者にて能く事理の分り候人に有之候

ポタンシヤは荒地にて難所多く入る事甚難し故に右トキトクに篤と掛合候は、順路を得候事出来可申一體人種は正敷もの故當方より正路を以て待すれば決して暴は仕向け不申然るに支那の如く接待候ては何事も行届き不申候

下拙は衆庶に接し候へとも至て穩かの人種にて常に漁業を専らといたし候

性質は剛勇にして感ずる所は約を遵守する事至て正しく候

差出候ては不相成何れの道よりして遣し可然哉の旨申來候依て自分先導可致旨返答及び終に支那の兵隊を引率先導山を越土人の後ろに出土人に對し彌戰ふや穩かに接待せは我亦平穩に接すへしと申入れしに土人も亦如何様にも款待可致候へとも支那人との引合は望まざる旨申出候

當方於ても素より戦争は不好候間此後外國人漂着候節は必ず保護いたし候哉と申談候處土人承諾いたし候乍然彌其約を守り候哉否や難計に付其證を顯すため爾後若漂着を殺し候節は討伐のため砲臺を建築可致旨申談候處此義は支那政府へ問合せすしては爲し難き旨にて先づ兵隊を差置たれとも四五ヶ月にして兵去り其後は絶て兵も不差置候此度琉球人被殺候に付ては相當の處置を可施第一には燈明臺建築可致旨掛合候處ホルマサの役人兵は可置候へとも燈明臺建築は支那政府へ問合可申旨返答有之依て自分の見込には右の企を支那政府にて爲致候へは米國にては土地は敢て取るを不好候間日本政府の管轄と相成候は好む所なれとも可成は支那政府にて右掛合丈けの事を爲果度併多分は出来申聞敷

一 其事は書史にも相見へ候

一 今度ホルマサえ参り候節引合振支那在留米公使との文通御望に候は、御覽に入可申支那政府え掛合の漢文も御坐候

一 借用いたし度候

此度日本より懸合の次第は如何いたし可然哉

一 自分の見込可申上候へとも適不適は難計御取捨は御十分被成候様いたし度候

一 御服藏なき所承り度候

一米船漂着にて被殺候節米政府より支那政府へ右一件相當の處置有之度旨掛合候處支那政府諾して爲し不得故に尙督責候へは支那政府にては元來管轄はいたし居候へとも處置は行届かざる旨返答有之

其節尙又土地も人種も善良なり米人茲に住居せは支那人退去せされは相成間敷旨掛合におよひ候

南海は日本への通路にて難船の節は其港に繫泊不致候半ては不相成其節は其人民を相當に保護せされは相ならず候間當方にて保護行届丈けの事にいたし置候ても宜しきやの旨掛合候處支那政府にてはさすれば兵隊不

さすれば兵隊を向け砲臺を築き此方にて守衛を爲さず候半ては不相成候事と存候

一 其手續至當敷と被存候

一 南方に入江有之東方は土人の住所也其次にハツカスと申所有之候同所は北西より來りし人種と申居候いづれも支那人の人種と見へ候元支那にて惱まされ逃來り候様子に候ハツカスの人質は不良ハツカス迄は通路も易く候へとも土人の住所迄は難所多く有之候

此間地圖に就て談話

土地は山多くして三千フットより五千フット位の高山あり

一 砲臺建築の要地何れに候哉

一 トキトクに談示候は、砲臺築造の都合は出来可申候同人は人種の不良の所をも支配いたし居候へとも名義のみにて構ひ不申ハーフケイスの者等は手に付け易く候先づ土人にて戰を巧者にいたし候ものは凡千八百人程も可有之

ハーフケイスにて用ひ候武器は御覽に入可申候

トキトクは六十歳程の人に御坐候

- 一 ボタンえは權の及ぶ所に候哉
- 一 トキトクは何地えも權の及ぶと申には無之或は喧嘩にても起り候節これを能く裁判いたし遣し候ものにて被信候ものに候
- 一 ハツカスの人数は凡四千人もあるへくと見へ候
- 一 六年已前の計算にはボタンの人員男女にて千八十一人と有之今増殖るとも二百人よりは増し申間敷候
- 一 琉球人ボタンの海岸に上り候節支那人らしきもの兩人居り船具は此者皆掠奪候よし
- 一 夫はハツカスに可有之
- 一 開港場は四ヶ所尤條約にはタンスイ臺灣二ヶ所に候
- 一 外國人は幾人程居留候哉
- 一 北方に十人南方に二十二人に候
- 一 タカラは何れに候哉
- 一 開港場南方の後背に候
- 一 ケイランの東方の島は如何
- 一 ペスフォル是は先づ支那に屬し居候此島を取り候へは支那へ向ふにも最良の足溜りに候
- 一 マジヨルは小島に候哉

- 一 模形は心得候へとも商賣は盛にいたし居候趣に候
- 一 マジヨル島を巡廻いたし候もの御存知有之候哉
- 一 百尤委數繪圖は所持いたし候米人にて同島を商賣に参り度と申候もの有之候へともコンスルも無之且自分支配外故許し不申商賣に参り候へは多少の利益あるへくとの趣此島は一體何れに屬し候哉
- 一 蓋し琉球に屬するならん周圍十八里程にて石炭坑有之よし
- 一 自分の勘考にも琉球に屬し候歟と存居候ホルマサの内トツカドは第一の良港難風も曾て障り不申候其所の人民は支那政府の支配を受候にも不及誰にても能く扱ひ遣し候方に可屬候
- 一 ペスカドの人種は如何
- 一 廣東の人種と被考候
- 一 荷蘭にて取候節砲臺并燈明臺も建築候は足溜りに能き所の故に有之今今燈明臺残り居候
- 一 キロンの港は石炭山近く候間鐵道等造り候には至て易く候
- 一 タカラは砂糖阿仙茶多く産出候又水牛も數多居り候間

- 一 支那人は多く水牛を持行候
- 一 臺灣よりは材木薪木澤山輸出支那全國にも及ぶ程に候
- 一 ポンリーには商賣いたし候支那人は三十人程の居留に候
- 一 ホルマサは周圍を塙にて構ひ外面は鉛に候へとも裏は土故破り易く候
- 一 臺灣の戦兵は凡三百人計りに候
- 一 カークイと申所は北方にて是も塙にて圍ひ候へとも破り易く皆支那の兵卒に候
- 一 マジヨル島は何れに屬するにもせよ早く旗を建候國の所轄と可相成候
- 一 尙明後日東京にて御面晤いたし度候
- 一 承知いたし候
- 一 畢る

(附記三)

壬申九月廿六日於延邊館副島外務卿米國人ゼネラル、リゼンドル應接記の内
砲臺燈臺建築の儀に付支那政府え御掛合の回答はいつ頃差越候答哉

- 一 二ヶ月前掛合置候間其内には可差越と存候支那政府於ては至極尤の内話有之候共臺灣於ては不承知の様子に付如何相成候哉未た其實は相分不申候
- 一 此度琉球殺戮に逢候儀に付福建の總督に掛合候方歟又は支那政府え直に掛合候方歟
- 一 福建え掛合可然候得共人民保護の爲砲臺燈臺建築の儀は矢張本國政府え嚴敷御掛合の方萬國公法の道なり其御掛合は此度琉球人殺戮に逢ひ候儀に付ては保護の爲燈臺砲臺等建築防禦の御談判被成其期限を立御約條可被成定めて支那政府にて防禦不行届旨回答可有之其節は人民保護の爲於此方砲臺燈臺等建築防禦可致間地所借用の儀御掛合可然と存候
- 一 支那政府にて承知致し候共砲臺を築き兵隊を差置く事は無據一時の責を防ぐ爲に致し候儀に付永續の處は決て信用難致候
- 一 ボテルダバコー島は何國にも不屬銅は澤山有之趣に候
- 一 土蕃は私参り見請候處顔色衣服等の様子は西班牙領マレ
- 一 一の人種と被存候
- 一 手を下す順序の見込無服臆御申間有之度候

私共不才の者不申上候共定て好き御見込も可有之乍併心付候廉は乍不及申上へく心得に有之歸帆迄にはスミスとも相談地理等の事迄委細書留可差進候

此度の儀は支那政府への掛合餘程六ヶ敷候其譯は琉球は支那日本兩國に屬し居候

此度琉球人被殺候は漂着に無之フーキンえ貢持參の者に有之候間支那政府にても挨拶に困り可申候
左様の儀は不承眞に貢持參の者に相違無之哉
被殺候所え立入取調候處正敷貢持參の者に相違無之との事承り候

先年琉球人獻貢の途中臺灣にて被殺其時は日本より掛合償ひを取り琉球え差遣し候

ヘスカド島は一體地勢宜敷此を取り足溜りにいたし此より人數大炮等運送候へは充分防禦出來可申候

ホルマサは支那於ては詰り他國の者と思ひ居候様子に候何國の管轄に相成候共宜敷候へ共可相成は亞細亞洲中日本にて所轄被成候得は先相當に付御取可被成乍不及御助力可致候

支那政府於てホルマサの防禦不出來と申事は内々得候書

乍去支那との交際上に於て如何と心配致候

支那との交際を破り候は不好との儀御尤に候得共萬國兵法に依れば人民保護の儀支那政府え掛合同政府於て保護不行届旨申時は此方於て保護致し候旨御掛合至當也

此南方は是非共開かされはならぬ地也故に始終は誰にか取られ可申候

依て貴下より御讓請いたし燈明臺と兵隊とは是非共差置申度候

此度の儀は李鴻章に掛合可然歟

同人は日本との條約取結の儀特に委任丈のものに付矢張政府え直に御掛合の方と存候

(附記四)

李仙得雇入ニ付副島外務卿書翰

米公使へ往翰案

日本政府ニ於テ方今一時當帝國ニ在留スル米利堅人ゼネラルシドツブリユリジャンドルヲ文官トシテ雇入度存候其譯ハ是レハ閣下ヘ十分造述イタシ置キ候間此書中ニハ贅言不致候我カ日本皇帝陛下ヨリ閣下ノ手ヲ經テゼネラルリジャンドルニ誥命シ同氏之ヲ領承セバ當帝國ノ二等官ニ命シ一

物に有之入御覽候

兵隊は如何の者に候哉

請負兵隊にてたとへは五萬人定員に候處其實は二萬人も備置候様にて大炮杯は据付の儘にて地に埋れ居候

ホルモサには支那人何程住居候哉

四百萬人と申事に候得共貳百萬人位に可有之と存候

收入税は何程位に候哉

外國との貿易税千八百七拾年の調に貳拾五萬弗位内地の税は別也

ホルマサは貳千人の兵あれば容易に取れ可申候へ其後を守ることかたし

一萬位の兵は容易に差出可申候

人數は何人にも入費莫大に相掛り候

貴下に面晤せざる迄は一萬の兵ボタンえ出張上陸爲致夫より掛合候は、一言も申間敷と存若し否申聞候は、直に征伐可致見込に有之候

ボタンは險阻にて大炮杯の運送かたかるへし

一萬の出兵容易なる譯は是迄日本四拾萬餘の武士いづれも

勇剛難御者にて此等有事は喜て出兵可致候

ヶ年俸金一萬二千圓ヲ可下賜候ゼネラルリジャンドル直ニ

此誥命ヲ領承シ皇帝陛下ノ文官トシテ勤務ヲナストキハ前顯ノ等級及ヒ俸金ヲ以テ今當政府ヨリ北京ニ在ル清國政府ニ派遣セントスル使節ノ參謀職トシテ隨行可爲致候此一件

ヲ閣下ニ告ルノ主意ハゼネラルリジャンドルノ此事ヲ速ニ承諾イタサレ候様閣下ノ配慮ヲ願ヒ次ニ同氏承諾ノ旨ヲ遅

緩ナク御回答アラン事ヲ希フニアリ閣下此儀ヲ御周旋之レアラハ我カ政府ニ於テハ格段恩惠アル御處置ト感賞可被致

儀相違無之候將又此主意行違ナカラシメ此書翰ニ校明セ

ル英譯文ヲ附屬イタシ置候

明治五年十一月十八日

外務卿姓名

米國特命全權公使 シイデロンク閣下

註二、右文書「英譯文」見當ラス

(附記五)

在日本合衆國公使館ニテ千八百七十二年十二月二十九

日外務卿副島種臣閣下

日本政府へ勤仕ノ爲メシイドツブリユリジャンドル氏ヲ雇入ノ儀ニ付明治五年十一月十八日付ノ尊書落手イタシ候

右一件ニ付余ヨリ其趣通達及ヒ先ツ同人儀合衆國政府ノ勤務ヲ辭シ次ニ御渡シノ誥命領承イタシ候様精々勸諭仕候處同人儀今日清國厦門ノ米國領事官辭職ノ願書差出シ同人へ御渡シノ誥命拜受候旨拙者ヨリ閣下へ報書申上候様トノ趣ニテ自今ハ同人自身ヲ以テ日本天皇陛下ノ政府ノ使令ニ委ネ候旨回答申越候隨テ是ヨリ天皇陛下ノ御政治向猶榮隆ヲ極メ勳業ヲシテ全成ニイタラシメン事切實希望イタシ候段筆末ナカラ茲ニ陳述仕候敬具

シーデロンク

外務卿 副島種臣閣下

註三、右文書ニハ歐文アリタルモノト認メラルル處見當ラス

五 三月三十日 大隈大藏卿ヨリ 寺島外務卿宛

臺灣生蕃處分ニ關聯シ御雇米國人「リ・ゼンドル」出仕替ノ儀ニ關シ回答ノ件

外務省准二等出仕李仙得儀ニ付云々御掛合之趣致承知候右者臺灣事務局御建可相成御内決ニ付李仙得儀者同局出仕被

スル所有ラハ善ク爲メニ聽納シテ其職ヲ供セシメンコトヲ用テ茲ニ敬テ白シ並テ

大皇帝ノ多福ヲ祈ル

神武天皇即位紀元二千五百三十四年

明治七年四月四日

御名 大日本 國 璽

奉勅 外務大臣 寺島宗則

(焚餘)

(右漢譯文)

譯漢文

大日本國

大皇帝敬白

大清國

大皇帝客秋換約使歸載待

復書並辱腆儀具悉

厚意曷勝欣悅茲我親臣柳原前光奉職外務往來

貴國已經四載能贊兩國之好朕器重之乃特命陞任全權公使

駐劄

貴國以掌交涉事宜前光爲人忠實篤厚黽勉從事朕知其能堪

一 臺灣生蕃討撫一件 七

仰付候筈尤約定章程之儀者別段不及取調渾而總督之命令ニ從事勉勵爲致申度右命令書之儀者於正院御面議之上取極候様可致心得ニ候間此旨御承知有之度依而御回答旁申進候也

三月三十日

寺島外務卿殿

大隈大藏卿

六 四月四日

柳原前光ヲ清國駐劄全權公使トシテ御差遣ノ國書

大日本國大皇帝敬白

大清國大皇帝ニ白ス客秋換約ノ使歸リ載チ復書ヲ得並テ朕儀ヲ辱クシ具サニ厚意ヲ悉ス易ソ欣悅ニ勝ン茲ニ我親臣柳原前光職ヲ外務ニ奉シ貴國ニ往來スル已ニ四載ヲ經テ能ク兩國ノ好ミヲ贊ス朕之ヲ器重ス乃チ特命全權公使ニ陞任シテ貴國ニ駐劄セシメ以テ交渉事宜ヲ掌ラシム前光人ト爲リ忠實篤厚黽勉事ニ從フ朕其能ク職ニ堪ルヲ知ル冀ハ大皇帝幸ニ寵眷ヲ垂レ時ニ陞見ヲ賜リ其朕カ命ヲ以テ陳述

職翼

大皇帝幸

垂寵眷時

賜陞見其以朕命有所陳述善爲

聽納俾供其職用茲敬白並祈

大皇帝多福

(焚餘)

註 右國書ハ十一月二十九日柳原公使清國皇帝ニ謁見ノ際

捧呈セラレタリ

七 四月四日 三條太政大臣ヨリ 外務省宛

臺灣蕃地處分ニ付事務局設置セラレタル旨通達ノ件

外務省

今般臺灣蕃地處分ニ付事務局被置候條此旨爲心得相達候事

明治七年四月四日

太政大臣 三條實美

註 蕃地事務局長官ニハ參議兼大藏卿大隈重信四月五日任

命セラレ十五日長崎臺灣蕃地事務局出張仰付ラレタリ
〔百官履歴〕參照)

八 四月四日 勝海軍卿ヨリ
米國人「カッセル」宛

臺灣生蕃處分ニ關聯シ米國人「カッセル」雇入ノ件

今般臺灣生蕃處置之儀ニ付諸事貴君之御盡力相願度先般リ
ーシヤントル氏ヲ以テ貴國政府へ御依頼ニ及候處既ニ御許
可相成候ニ付テハ乍御苦勞一ケ年間當省へ御雇入之様致
度因テハ一ケ年金八千圓月割ヲ以テ差遣候上臺灣往返并彼
地滞在中ハ外ニ旅費賄料等一ケ年金千百圓月割ヲ以テ差遣
可申候間其旨御含御領承被下度懇篤及御依頼候條可否迅速
御回報被下度此段申入候也

明治七年四月四日 海軍卿 勝 安 芳
米國アシユロツト號艦 海軍甲比丹カスセル君貴下

追テ今般直ニ本條約御取替シ可致儀ニハ御坐候得共何
分急遽之際ニテ不能其儀候猶定規精細取調之上右之手
順相立可申ニ付先ツ拙者ヨリ御依頼之儀ヲ以テ御領承

ケラレタリ(岩倉公實記)參照)

一〇 四月五日

西郷臺灣蕃地事務局都督ニ賜ハリタル特諭

特諭 臺灣蕃地事務局都督 西郷 從道

明治四年十一月我琉球ノ民漂流シ臺灣之蕃地ニ至リ土人
ノ爲ニ劫殺セラル、者五十四名又六年三月我小田縣下備
中淺江郡ノ住民佐藤利八等四名漂流シテ亦爲ニ衣類器財
ヲ掠奪セラル其土人兇暴ヲ逞フスルヤ如此而シテ支那政
府ノ管轄ニ屬セス化外自肆ニ任ス若シ棄テ問ハスンハ後
患何ソ極ラン今膺懲ヲ行フノ意ハ彼野蠻ヲ化シテ我良民
ヲ安スルニ在リ宜シク斯旨ヲ體シ左ノ條款ヲ遵守シ以テ
從事スヘシ

第一款

一 第一着眼トスヘキハ土人ノ服從セル者ハ專ラ恩惠ヲ以
テ之ヲ懷ケ緩スルニアリト雖トモ若シ抗敵シ服セサル
ニ於テハ兵威ヲ以テ之ヲ制壓スヘキ事

一 臺灣生蕃討撫一件 一〇

被下度此段申副候也

九 四月五日

西郷臺灣蕃地事務局都督ニ賜ハリタル親勅

臺灣蕃地事務局都督 西郷 從道

臺灣蕃地處分ニ付汝從道ニ命シ事務局都督タラシム凡ソ陸
海軍務ヨリ賞罰等之事ニ至ルマテ委スルニ全權ヲ以テス
乃チ委任ノ條款ヲ遵奉シ黽勉從事其レ能ク成功ヲ奏セヨ
一 我國人ヲ暴殺セシ罪ヲ問ヒ相當ノ處分ヲ行フヘキ事
一 彼モシ其罪ニ服セサレハ臨機兵力ヲ以テ之ヲ討スヘキ
事

一 爾後我國人ノ彼地方ニ至ル時土人ノ暴害ニ罹ラサル様
能ク防制ノ方法ヲ立ツヘキ事

明治七年四月五日

御名 御璽

奉勅 太政大臣 三 條 實 美

(岩倉公實記)

陸軍中將西郷從道ハ四月四日臺灣蕃地事務局都督ヲ仰付

第二款

一 鎮定後ハ漸次ニ土人ヲ誘導開化セシメ竟ニ其土人ト日
本政府トノ間ニ有益ノ事業ヲ興起セシムルヲ以テ目的
トナスヘシ

但シ此場合ニ於テハ支那政府トノ關係及ヒ後來ノ利

害等ヲ詳明ニ

上奏シテ命ヲ乞ヘキ事

第三款

一 彼地ニ手ヲ着クルニ方テハ支那人及ヒ他ノ外國人ノ妬
猜ノ念ヲ引起シ我所爲ヲ妨ル事無ラシムルニ注意スヘ
キ事

第四款

一 若シ支那政府ヨリ異議ヲ起ス事アレハ之ニ關係セス我
北京在留ノ公使ヨリ應接ニ及フヘキ旨ヲ以テ答ヘキ事

第五款

一 着手際ニ臨テ便宜支那人及ヒ他ノ外國人ヲ補役スヘキ
事

第六款

一 一行役員中ニ於テ少シモ不和ヲ生セシムル事無キニ注

一 臺灣生蕃討撫一件 一一 一二

意シ每事必ス協同商量セシムヘキ事

第七款

一 李仙得ヲシテ輔翼タラシメハ其考案ヲ諮ヒ且土人ヲ懷服セシメ又支那地方官或ハ他ノ各國領事ニ對シテ應接等ノ事ヲ掌ラシムヘキ事

第八款

一 支那管轄地ト犬牙錯雜スルノ處ハ能ク其經界ヲ明ニシ彼ヲシテ我ヨリ侵略スルノ嫌疑ヲ生セシムル事勿キニ注意スヘキ事

第九款

一 此地ニ別ニ事務局ヲ開キ命令布告ハ總テ之ヨリ達スレハ凡ソ申請報告等一切本局ヲ經テ 上奏スヘキ事

第十款

一 諸費用ハ務テ簡約ニ從ヒ濫冗ノ弊ナカラシムルニ注意スヘキ事

右條款ノ外細事ハ專決シ大事ハ 上奏シテ命ヲ乞フヘシ

明治七年四月五日

御名 御 璽

二〇

奉勅太政大臣 三條 實美

一一 四月六日

谷、赤松臺灣蕃地事務參軍ニ賜ハリタル勅諭

臺灣蕃地事務參軍

谷 干城
赤松 則良

臺灣蕃地處分ニ付陸軍中將西郷從道ニ命シテ事務都督タラシム凡ソ陸海軍ヨリ賞罰等ノ事ニ至ルマテ委スルニ全權ヲ以テス汝^{干城}則良ニ參軍ヲ命ス其能ク帷幕ノ機謀ニ參シ凡^{海軍}ニ關スルノ事ハ厚ク都督ヲ輔翼シ速ニ成功ヲ奏セヨ

明治七年四月六日

御名 御 璽

奉勅太政大臣 三條 實美

一一 四月六日

西郷陸軍大輔ヨリ
御雇米國人「リ・ゼンドル」宛

米國人「ワツソン」雇入ニ關スル件

以手紙得貴意候然ハ今度フアルモサ出張ニ付ワツソン氏ヲ雇入候儀於政府決定相成候間今日ヨリ始凡一ヶ年之間我政府ニ勤務有之度はニヨリ歲俸六千トルラルト一千圓并別段手當一千トル差進候筈ニ候本約定ハ追テ取結候筈ニ候得共假ニ此書ヲ以テ證據ト致シ候間前書之趣貴下ヨリ同人ヘ御申通被下同人承諾ニ於テハ其旨御回答有之度此段得貴意如此候敬具

明治七年四月六日

西郷陸軍大輔

李仙得 貴下

一一 四月八日

清國駐劄柳原公使ニ賜ハリタル内勅

内勅

特命全權公使 柳原 前光

一 臺灣生蕃討撫一件 一一 一二

一一

一 清國ノ政權蕃地ニ逮ハサル如是蕃人兇暴我民ニ加フル是ノ如シ我今務テ安民ノ義ヲ行フ詎ソ他國ノ異議ヲ容レンヤ但蕃地ハ清國府縣ノ治ト接壤スルヲ以テ恐クハ干係ヲ生セン其尋常當務ハ我派遣スル理事官ノ責任ニ歸ストイヘトモ事若シ至重ニ涉ラハ公使ノ職ニ据リ須ク關切辨論シテ始終兩國ノ和好ヲ保護スヘキ事

一 琉球藩ハ自昔我控御スル所ニシテ既ニ冊封ヲ奉シ政化ニ

一 明治四年十一月我琉球ノ民漂流シ臺灣ノ蕃地ヘ至リ土人ニ劫殺セラル、者五十四名又六年三月我小田縣下備中淺江郡ノ住民佐藤利八等四名漂到シテ亦土人ノ爲メニ衣類器財ヲ掠奪セラル其暴ヲ爲スヤ如此其土人蕃域ヲ分チ嶠ヲ負ヒ暴ヲ恣ニスルヤ久シ然レトモ清國ノ政權逮ハスシテ其化外自肆ニ任セシハ邇年米國政府ノ所行ニ因テ徵知シ且去年特命全權大使副島種臣ヲ清ニ遣シ換約ノ際曾テ此事ニ談及ホシ該國大臣ノ所答ニ据リテ證據判然タリ若シ棄テ問ハスハ後患何ソ極ラム今膺懲ヲ行フ意ハ野蠻ヲ化シテ良民ヲ安スルニアリ敢テ釁隙ヲ隣國ニ開クニ非ス公使トシテ清國ニ駐スルノ際論此事ニ及ハ、宜ク此意ヲ以テ答フ可キ事

服ス其清國ニ貢キ以テ貿易ヲ營ム如キハ未タ舊套ヲ脱セ
ス若故ニ縁テ或ハ疑議ヲ來サハ須ク該藩從前我ニ歸服ス
ルノ證例ヲ辨明スヘシ事兩屬等ノ名ニ涉リ枝節ヲ生スヘ
カラザル事

臺灣ノ事ニ係リ以上各件ヲ訓諭ス若シ事情ノ意表ニ出テ至
重ニ涉ラハ政府ノ指令ヲ請ヒ進止遵行スヘシ

明治七年四月八日

御名 御 璽

奉勅太政大臣 三條 實美 花押

一四 四月八日 三條太政大臣等ヨリ御雇米國人「リ・ゼン
ドル」ヘノ辭令

臺灣蕃地事務局准二等出仕仰付ノ件

外務准二等出仕 李 儼 得

補臺灣蕃地事務局准二等出仕

太政大臣從一位 三條 實美 宣

大内史正五位 土方 久元 奉

明治七年四月八日

註 前件仰付ノ議ニ關シテハ四月七日大隈臺灣蕃地事務局
長官ヨリ「リ・ゼンドル」宛諾否照會ノ書翰アリ之ニ對
シ四月八日「リ・ゼンドル」ヨリ大隈臺灣蕃地事務局長
官ニ對シ前件承諾ノ返翰アルモ共ニ省略ス

一五 四月九日 太政官史官ヨリ
外務大丞等宛

平井外務少丞ニ對シ臺灣蕃地處分ノ爲出張仰付
アリタル旨通達ノ件

外務少丞 平 井 希 昌

今般臺灣蕃地處分ニ付出張被 仰付候事

但本省并事務局御用多ニ付彼地ニ於テ清國關係ノ景

況看認候ハ、早々歸京可致事

右ノ通昨日御達相成候條此旨爲御心得申入候也

明治七年四月九日

史 官

外務大少丞御中

一六 四月九日 英國公使ヨリ
寺島外務卿宛

臺灣出兵ノ意圖及上陸地等ニ關シ問合ノ件

Yedo,

April 9, 1874.

Sir,

It is a subject of common report that foreign
vessels of various nations are being engaged at the
Treaty Ports to convey a large force of Japanese
troops and military stores to Formosa, and also
that the agents who are making enquiry for foreign
vessels on the part of the Japanese Government
appear unprepared to state to what part of Formosa
the Japanese Government desire the said troops and
stores to be transported.

As it is important that the true nature of such
employment should be understood, and as British
subjects have large interests in the open ports of
Formosa, I have to request Your Excellency to be
so good as to acquaint me with the objects which
the Japanese Government have in despatching a
military expedition to that island, and also to name
the ports or places to which Your Government wish

Foreign ships to convey their troops or stores.

As the subject presses for attention, I shall feel
obliged if your Excellency will give me a written
reply to this note at our interview of tomorrow
afternoon.

I avail myself of this opportunity to renew to
Your Excellency the assurance of my highest consi-
deration.

HARRY S. PARKES,

H. B. M.'s Envoy Extraordinary and

Minister Plenipotentiary in Japan.

His Excellency,

Terashima Munenori,

Minister for Foreign Affairs.

(右和譯文)

世上の風聞を承り候に貴國兵隊多數并に兵糧臺灣へ運送致
し候爲め開港場に於て各國船被相雇且貴國政府に代りて外
國船を聞當り候世話人右兵隊兵糧臺灣中何れの港へ貴政府
に於て運送被成候哉知れ兼候事と相見へ申候右様に雇入候
實情明白なるは重大の事に御座候且臺灣開港場に於て我國
人民所持致候物貨利益等不少候間貴政府同嶋へ兵隊御出發

被致候は何等の事を被成候積りに候哉且は兵隊兵糧運送致候外國船何と申候港又は場所え御廻し可被成哉閣下え相伺申候尤右は取急き注意可致候事に候間明日午後御面晤の節御書面を以て宜敷御回答被下候は、辱存候敬具

四月九日

英國公使

ハリエスバルケス

寺嶋外務卿閣下

一七

四月十日 寺嶋外務卿ト英國公使トノ對話書

臺灣上陸後ノ行動及清國政府トノ交渉等ニ關スル件

明治七年四月十日於外務省寺嶋外務卿英國公使ハリエスバルケス應接記ノ内

昨九日附貴翰ヲ以テ臺灣エ出師ノ儀ニ付則右御回答トシテ〔外務卿〕
〔朱書〕四月十日附第四十四號御返簡ヲ公使へ渡且臺灣繪圖ヲ指示シテ此社寮港ト申所ハ碇泊スル事難ク故ニ氣候ノ宜敷ヲ待テ今

日人ヲ派遣スル事ニ決セリ尤貴國及ヒ米國船共ニ二艘ヲ雇ヒ人ト糧仗トヲ積込候筈尤長ク碇泊ハ不致候

〔公使〕何地々々エ配兵相成候哉

只今熟知ノ者不居合候間委曲取調可申入候

只今御返翰中北米利堅ヨリ使ヲ派セシトノ事ハ何等ノ次第ニ候哉

使ト申スハリセンドル氏罷越タルナリ尤アンバツサドール杯ノ名義ニハ無之候

其前使ヲ遣セシ事アリヤ

米國ハ既ニ條約ヲ取結ビタリ

米人共蕃地へ罷越シタル事アリヤ

右ハ委細御尋被成候ニ不及儀ト存候尤米人ハ支那兵隊ヲ借りタリトノ事ナリ

此度ハ我國人ノミヲ遣スナリ尤此地ニ逗留スヘキニハ屯集陣所ヲ建テサルヲ得ス依テ自然人數ヲ多クシ前年米國ノ舉動ヨリハ一層大ナルモノ也

貴國人數彼地エ上陸ノ上ハ如何様ナル事ヲ行ハレ候哉

支那至近ノ地故支那語ヲ能クスルモノ等ヲ遣シ前年ノ罪ヲ糺シ若シ謝スル時ハ夫迄ノ事ナリ

タリトノ事ナリ

西郷氏軍艦ニテ被相越候哉

然リ

米國人カシヨントカ申者御雇被成タル如何

測量等ヲ熟セシ者故ナリ

陣營等ヲ造作スル爲ニ候哉

路ナキ處ハ徑ヲ開橋ナキ處橋ヲ架シ總テ土木ノ事ヲ托セリ

貴國兵隊上陸直ニ臺灣ノ内部ニ推入候哉

海岸近キ處ニ陣營ヲ設候迄ナリ尤土蕃等能强健ニシテ跣脚輕轉攀石跳澗等恰モ猿猴ノ樹抄ニ飛閃スルニ似タリトノ趣

ナレハ西郷氏彼等談判中トテモ如何ナル暴行及ヘク哉難計

ニ付之ヲ防禦スル丈ハ用意ヲセサルヲ不得候

御雇外國船二艘ハ何日逗留スルヤ

兩三日位ナルヘシ

貴國ノ船ハ如何

是迎モ長クハ逗留不致候

清國政府ニテハ此御征伐ノ舉ヲ承知致候哉

今般人數ヲ差遣ス事ハ未清國政府へ報知不致候得共同島人清國政府ノ政令教化不逮トノ儀ハ去年中承リ之アリ尤柳原

昨年三月ノ暴舉トハ如何ナル事ニ候哉不知
備中人四名難船ニ逢ヒ此地ニ到ル土蕃ノ賊來リテ此四人ノ持スル所ノ器財ヲ掠奪シ既ニ之ヲ屠殺セントセリ然ルニ幸ヒ一老父アリ支那人體ノ者ニ助ケラレ辛シテ脱スルヲ得厦門ヨリ支那地方ニ在ル我領事ノ手ヲ以テ漸ク本邦エ立歸リ

〔朱書〕又繪圖面ヲ指示シ此處ニテ琉球人殺害ニ逢フ此處ニテ備中人器財ヲ掠奪セラレ已ニ命ヲ危フスト云々

尤次後難船人此地ニ漂スルモ前舉ノ如キ暴行ニ不逢様所置不致候テハ不相成尤可成早速ニ所分致度候得共之ヲ急ニスル時ハ必無理ニ失スルノ患モ有之候故先十月十一月頃迄ハ可相掛彼地ノ模様次第ニシテ兎角リセントル見込次第ナレハ未確乎タル目的モ立兼候

若シ六七月頃迄ニテ事濟相成候ハ、凱陣可相成哉

只今申陳ル如ク引拂候後トテモ中々一朝一夕ノ教諭等ニテハ行届申間敷一體蕃人共ノ舉動ヲ見ルニ人ヲ殺スハ惡事ナリトノ儀ヲ不知程ノ者故容易ニ平定相成間敷候ニ付盡ク引拂候譯ニハ不相成何程カ警保人ヲ置テ取締ヲ立テザル不能候尤柳原公使近日支那ニ差遣シ候間尙同政府ト談判ノ上何程カ取締行届候ハ、尙更重疊ノ事ニ候

公使ヨリ委曲演舌可致答ナリ

全體前後セシ様相見申候

西郷氏兵ヲ率テ直ニ清國政府へ談判可及積ナリ

貴國軍艦出發ノ事支那政府ニテハ不知儀ト存候

書面ニテハ不盡儀モ可有之候ニ付前申述如ク近日柳原公使

出發ニ付委曲同氏ヨリ清國政府へ掛合候積尤軍艦出發ノ期

ハ已ニ切迫シタレトモ處々へ立寄り兵仗等ヲ積入候答ニ付

手間取レ可申候

清國政府ニテハ承諾可致哉

畢竟他邦人ノ力ヲ以テ征伐ニ成ルハ不好儀ニ可有之候へ共

政令教化モ速ハサル所ナレハ不得已儀ニ可有之候也

只今御話ヲ以テ見レハ清國政府ニテハ管轄不相成候哉

昨年中清國政府所轄ニハ屬セスト申候へ共境界接續致シ居

レハ一應掛合ハサルヲ不得候

(朱書)
「又繪圖ヲ指シテ」

清國政府ヨリ此川ヲ界トノ事ヲ申聞タルヤ

只蕃地ト唱へ候ノミニ付段々取調見候處ニ有之候

清國政府ニテ異論ヲ立此處堺ニ無之ト云ハ、如何

右ハ牡丹地ノ事ニテ牡丹部ハ支那管轄ニ無之只惡奴ノミ住

居セル處ナリノ事ナリ

此前拙者清國事件ニ因テ此處へ出張セシ事アリ已ニ其頃

難船有之英人四名程モ殺害セラレタル事アリ

土蕃人能戰フト相見或ハ銃ヲ造リ候趣ナリ

土蕃ハ多ク山野ニ在リ拙者罷越タル時ハ海岸ニ支那人土

蕃混淆セリ

然リ既ニ前申陳ル備中人ノ助命ヲ得タルハ支那人ノ恩惠ナ

リト云

(朱書)
「又繪圖面ヲ指示シテ此處」

此線則リセントル經歷セシ處ナリ

先達テ我國人此邊エ罷趣候處其地ノ長ハ女人ニテ人ノ爲

ニ背負セラレ行列セシトノ事ナリ貴國ノ視察使此處へ相

越タルヤ

不然

如何シテ港ノアル否ヲ御知得被成タルヤ

是皆リゼントルノ調ニ因テ知了セリ

拙者上陸セシナレトモ船ノ碇泊ハ不相成候故上陸直ニ船

ヲ還シ復船ノ來ルヲ待テ歸清致候事有之候

此社寮港ハ海岸ヲ距ル七丁ニシテ碇泊スヘシト云

御書簡中「警卒」トハ如何警卒ハホリスナラスヤ

警卒トハ直ニ軍事ヲ執行フモノニモ無之談判中ノ取締ニテ

官員ヲ保護スルヲ主任トス尤談判無事ニテ平和ニ至リ干戈

ヲ動サマレハ則是警卒ニテ可也

支那ノ開港場へ軍艦ニテ兵ヲ遣ス事ハ如何

我國ト清國トノ條約ニ軍艦丈ハ港へ遣ストノ事アリ併シ此

港ヨリ上陸那ノ地へ通行ハ不致候

警卒ヲ置カハ航海ノ爲ニ可相成哉

否談判中官員ヲ保護スルヲ專ニシ若彼ヨリ暴行スル時ハ不

得已戰フヘシ尤平定後戍卒ヲ置カザル不能也

平安後條約ヲ御取結被成候哉

條約ハ已ニ米利堅國ニテ結タリ然レトモ其條約ヲ今日閱知

モ無之候ハ、尙様子ニ寄り何程カ約ヲ設ケサル能ハス候

ヘーラン^{名地}地へ人數ヲ上ルハ如何

此地ニ戍兵ヲ置カサレハ應援運搬ニ不便ナリ譬へハ我方ニ

傷人有之時モ之ヲ送ル等ノ儀差支無之爲ナリ

傷人ノ送り方ハ如何

右ハ譬へ迄ニテ未タ用意ヲ不承候

此版圖内ニ蠻ナラサル良地有之候哉

未タ能了知セスリセントルモ蓋シ心得居申間敷候

西郷氏或ハリセントル氏彼等ト談判セル哉

西郷陸軍大輔兼中將談判及ビリセントルハ傍ニ坐スル積ナ

リ

十一月ニハ必凱陣ナルヤ

然リ

入費ハ如何

多分也

肥後薩摩ヨリ人ヲ募リ召連ラレ候トノ風聞ハ如何

土工等ノ爲ニ多人數ヲ積込答凡入費四十萬圓ト見込申候

同地ヲ平定セハ之ヲ償フヘキヤ

容易ニハ償フ克ハザルベシ

西郷氏ハ大悦喜ナルヘシ

今進ムハ快ク候へ共彼地ニ至ラハ氣候モ不宜必飽クヘキ事

ト存候

リセントル氏ハ已ニ出發セシヤ

昨日出發セシトノ事未分明

人數ハ何程ニ候哉

二大隊ニシテ土木炊夫等ヲ合シテ總計凡二千人計

何レ地ニテ不殘乘込候哉

未確知不致候

世間ノ噂ニハ佐賀ノ賊徒不殘進發スルトノ事也

未其處分ニハ不至候

東京ヨリ出發スル者ハ官員ノミ候哉

東京ヨリハ官員或ハ諸具ヲ積遣シ申候

彼地於テ耕耘等ノ事アリヤ

否

同地ハ米穀等如何

少々ハ可有之候へ其他邦人ノ備ニスル程ハ無之義ト存候

清國政府ノ助ヲ乞トハ援兵等ノ儀ニハ無之哉

固ヨリ援兵等ノ儀ニハ無之接境故薪水等ノ助ヲ乞フ迄ナル

ヘシ

清國政府ヨリ人ヲ副テ談判ニ涉ルトノ事如何歟

不然之ヲ望ム時ハ清國政府ニテ決議迄待タサルヲ不得候

註

臺灣出兵ニ關シテハ四月十日ノ寺島外務卿ト伊國公使トノ、又上野外務少輔ト露國代理公使トノ對話書アルモ何レモ略ス

英國公使

ハルリエパークス閣下

一九 四月十三日

大隈大藏卿ヨリ
三條太政大臣宛

臺灣蕃地事務、長崎分局設置ニ關シ伺ノ件並ニ
之ニ對スル指令

長崎分局設置之儀ニ付伺

臺灣蕃地事務本支兩局之間文書往復其他之用便者橫濱長崎
稅關ニ而擔當爲致候付不都合有之間敷候得共於蕃地必需之
物件缺乏之節々本局ニ申請致候而者時日遷延シ或者重病等
之人員於蕃地養療難行届者ハ一旦差戻候等之處是以東京迄
絶遠罷在旁以長崎港ニ而事務分局取設置稅關長官へ御用掛
被命外ニ一兩名致出張前兩件等之用便於分局所分爲致申度
存候至急御評決何分之御指揮有之度依而相伺候也

明治七年四月十三日

大藏卿 大隈 重 信

太政大臣 三條實美殿

一 臺灣生蕃討撫一件 一九二〇

一八 四月十日

寺島外務卿ヨリ
英國公使宛

臺灣ニ官員發遣ノ意圖及上陸地等ニ關シ回答ノ
件

四月十日達了

第四十四號

英國公使え返簡案

昨日附の貴翰致披見候然は今般我政府より官員等臺灣地方
へ發遣せしめ候は我明治四年十一月又六年三月我國民臺灣
の蕃地に漂到して或は劫殺せられ或は衣類器財を掠奪せら
れ極て苛酷の所爲に遭ひたり此土蕃は清國の政權不逮所に
て曾て北米里堅合衆國政府より使を派し處分せし例に倣ひ
我政府も當路の官員を派し右苛酷を行し者等を懲し且如是
の惡業を停止し後患を防ぎ嗣後我國民航海の安寧を保護す
るにあり右處分に付土蕃の暴舉預防のため警卒等差送り候
に付右運輸の爲め外國船相雇總て臺灣蕃地社寮^{シヤウヤウ}と申港へ差
向候事に候右は閣下の御問合に就き御答迄如斯に候敬具

明治七年四月十日

寺島外務卿

(朱書)
一伺之通

明治七年四月十三日

太政大臣
三條實美印

二〇 四月十三日

西郷臺灣蕃地事務都督ヨリ
李清國閩浙總督宛

臺灣蕃族征撫事情通告ノ件

大日本陸軍中將兼陸軍大輔西郷

爲

照會事臺灣土蕃之俗自古嗜殺行劫不奉

貴國政教海客蓄難是樂邇年我國人民遭風漂到彼地多被慘害

幸逃脫者迫入

貴國治下之境始活

仁字恩恤藉得生還本國稔知

貴國矜全我民之意厚且至也我國

政府感謝奚似而彼土蕃反是害我人民如此爲民父母豈忍漠然

是以我

皇上委本中將以深入蕃地招彼酋長百般開導殛其凶首薄示懲

戒使無再踏前轍以安良民本中將謹遵

欽旨即率親兵將由水路直進蕃地至若船過

貴境固無他意應毋阻拒但恐閭巷之說或觸于

貴國之詫異特茲備文報明爲此照會

貴大臣希即查照轉飭各該地方官咸使知之可也須至照會者

右照會

大清兵部尙書兼都察院右都御史閩浙總督部堂李

明治柴年肆月拾日 陸軍省蓋印

附片

明治四年十二月我琉球島人民六十六名遭風壞船漂到臺灣登岸是處屬牡丹社竟被蠻人劫殺五十四名死之十二名逃生經蒙貴國救護送回本土又于明治六年二月我備中州人佐藤利八等四名漂到臺灣卑南蠻地亦被劫掠僅脫生命幸蒙

貴國郵典送交領事旋已回國凡我人民學受恩德啣感無限茲我政府獨惟土蕃幸人之災肆其劫殺若置不問安所底止是以遣使往攻其心庶使感發天良知有人道而已故本中將雖云率兵而往惟備土蕃一味悍暴或敢抗抵來使從而加害不得已則稍示膺懲之勢耳但所慮者有

貴國及外國商民在臺灣所開口岸運貨出入者或見我國此間行事伊等便思從中竊與生蕃互通交易資助敵人軍需則我國不得不備兵捕之務望

貴大臣遍行曉諭臺灣府縣沿邊口岸各地所有中外商民勿得毫犯又所懇者倘有生蕃偶被我民追趕走入臺灣府縣境內潛匿者煩該地方隨即捕交我兵屯營是望特此附片以陳惟請
貴大臣煩爲查照施行

註 本號文書ハ四月十日附ナルモ五六等ニヨレハ四月十三

日附ナラサルヘカラス尙右ハ四月二十七日長崎出帆ノ有功丸ニ塔乗セル福島領事ニヨリ同船五月三日廈門着ノ上清國側官員ニ手交セラレ五月八日李鶴年之ヲ接受セルモノノ如シ

一一一 四月十三日 英國公使ヨリ 寺島外務卿宛

清國政府ニ於テ日本ノ臺灣出兵ヲ敵對行爲ト見做スニ於テハ之ニ關係スル英國人竝ニ同國船舶ハ呼返スヘキ旨申入ノ件

Yedo,
April 13th 1874.

Sir,
I have the honor to acknowledge the receipt of
Your Excellency's letter of the 10th Instant inform-

ing me that the object of the military expedition now being sent to Formosa by the Japanese Government is to chastise the savage inhabitants of that island who have committed outrages on Japanese subjects, and who you state are not subject to Chinese jurisdiction. You add that Your Government is following in this instance the precedent set on a former occasion by the Government of the United States.

I should observe to your Excellency that according to the information which I possess no expedition of the character and dimensions of that which is now being despatched by the Japanese Government to Formosa has ever been sent there by a foreign Power having Treaty relations with China, but being unacquainted with the communications which have passed on the subject between China and Japan, I am unable to judge as to the view which will be taken of this expedition by the Government of China.

I think therefore that before British ships or British subjects are engaged by the Japanese Govern-

ment to proceed to Formosa, Your Excellency should assure me that the Japanese Government contemplate taking no step that can be considered hostile by the Chinese Government, and that you are ready to accept any responsibility that may be incurred by British subjects towards China by engaging in this expedition before the views of that Government have been declared. If the Japanese Government has come to a clear understanding with that of China on this subject no difficulty will of course occur, but if on the other hand the Chinese Government should regard the expedition as hostile to themselves, Your Excellency will readily perceive that all British subjects engaged in it would have to be at once recalled.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my most distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,
Her Britannic Majesty's Envoy
Extraordinary and Minister
Plenipotentiary.

His Excellency
Terashima Munenori,
Minister for Foreign Affairs,
etc., etc., etc.

(右和譯文)

去る十日附の貴翰致落手候然は今般貴政府に於て臺灣え兵隊御差向相成候は清國の管轄無之同嶋にて貴國人民に對し苛酷を行ひし土蕃の者を懲し候事にて曾て亞米利加合衆國政府にて致せし例に倣ひ候との御主意委細致承知候就て拙者承知の處に於ては貴政府より今般臺灣え御差向け被成候同様同數の軍勢未だ他の清國條約濟の外國より差向け候はずと雖貴國と清國と往復の事は存不申候間清國政府に於て右軍勢如何存候や拙者に於て難相辨依て貴政府に於て我國船舶又は人民御雇臺灣え御差向け相成候は、貴政府に於て清國政府に敵對すと可被思様の事不被成積り且同政府如何なる存寄有之や不申出内我國人民此發舉に與る時は清國え對し其責貴政府に當ると申事閣下より拙者え確報可有之尤貴政府に於て此事件に付清國政府と情實相通し候事に候得は差支無之候へ共清國政府にて右軍勢敵と致し候は、其舉

之候へ共臺灣ヲ距ル凡三四十里ニシテフリツブ島ト申處ニ「バンタン」トテ我領地有之候ニ付貴國兵船ノ求アル時ハ石炭等ノ缺乏ヲモ補ハサルヲ不得然レトモ何等ノ御趣意アリテ御出師相成候哉旨御報知被下候へハ則我政府へ申遣シ候上其領地鎮臺へモ通達及ヒ候儀ニ有之候間右御趣意委詳御通知被下度候

我琉球藩人臺灣へ漂着ノ處凡五十人ヲ暴殺シ且其後備中ノ人四名漂到ノ節モ衣類及ヒ所持ノ器財等盡ク之ヲ掠奪セラレタリ依テハ同島近邊ニ我屬島モ有之候ニ付爾後漂流人等有之候節如是暴惡ノ所爲無之様旋ト取締相立度則西郷陸軍大輔兼中將爲都督出張被命タル儀ニ有之尤先年米利堅國於テ同島人ト約ヲ立テ將來航海等ノ爲メ害無之事ニ成リタリ我政府ノ趣意モ右ニ同シク敢テ戰ヲ專ニスルニ非スト雖モ西郷氏彼島司ト談判中モ如是暴行無之トモ申シ難クニ付防禦ノ爲メ若干ノ警卒等ヲ帥ヒ候儀ニ有之候

若御掛合御談判等彼輩於テ受ケサル時ハ如何御所分相成候哉

掛合等ヲ受ケサルトノ儀ナラハ其旨報知有之次第我政府ノ決議ニ因ルヘシ然レトモ卒然西郷氏ヲ暴殺セントセハ其時

に與り候我國人民早速呼返さるへからすと閣下に於て御了解有之事と存候敬具

四月十三日

英國公使

ハリエスバルケス

寺嶋外務卿閣下

二二 四月十三日 上野外務少輔ト西班牙國臨時代理公使トノ對話書

臺灣出兵力領土侵略ヲ目的トスルニ於テハ西班牙國領ヨリノ石炭補給等ハ致シ難キ旨等ノ件

明治七年四月十三日午前於外務省上野外務少輔西班牙國代理公使勤方エミリードオエダヘ對話

一 臺灣へ出師ニ付公使ヨリ尋問ノ事

(朱卷) 最初暫時雙方英語ニテ談話アリ

臺灣南部繪圖面ヲ指示ス

公使曰 今般臺灣へ貴國ヨリ出師ノ儀ハ固ヨリ何カ其條理モ可有

ハ臨機ノ所分ニ可有之候

茲ニ一言申上度儀有之貴政府於テ御受合被下間敷哉

臺灣島ヲ御領地ト被成候儀無之様致度候其仔細ハ全島咸ク清國所領ト見做居假令政教速ハザルニセヨ是乃「スマタラ」地方荷蘭ニ不服ト雖モ各國ニテハ之ヲ荷蘭所屬ト見做シテ手ヲ降サス「アルゼリー」地名ノ西班牙ニ於ケルモ亦然リ依テハ今般琉球人等ノ爲ニ膺懲ノ師ヲ起サセラレ候儀外國人航海ノ爲ニモ相成至極悅バシク候へ共清國ノ所屬タル臺灣地ヲ御征討ニ付我領地ニ於テ石炭等ノ應接ヲ致サバ後日ニ至リ貴國ノ爲ニ清國ヲ敵視スルニ相當リ不都合ノ儀ニ有之候間右同島取締丈ケニテ地ヲ略取スル儀無之様トノ事ニ候

此御受合ハ難相成候尤我國人等ノ劫殺掠奪ニ逢ヒ候丈清國政府於テ補埋相成候ハ、宜敷候并前年副島外務大臣同政府へ對シ右一件談判及ヒタレトモ何分確乎タル答モ無之此末同政府ノ所分ヲ待タバ幾年ノ後航海漂流人等保護可相成期ニ至リ候哉際限モ無之儀既ニ米國人清國政府ニ談判及ヒ候節モ何等抄々敷事モ不相見候ニ付直ニ同島へ取掛リ候儀ニ有之候

清國ノ政令速ハザル故貴國於テ御所分相成候儀當然ニハ
候ヘ共前年米國ノ所置候此地ヲ取ントスルニハ無之候
我所分トテモ之ヲ取ラントスルニハ非ス然レトモ清國政府
於テ琉球或ハ備中人ノ爲ニ満足スル丈ケノ埋合セテ爲サバ
敢テ手ヲ降スニモ及申間敷候ヘ共其儀ナケレハ不得已事ナ
リ

貴政府ノ御決議ニ於テ同島ヲ取ル趣意ニ無之只懲戒丈ノ
趣公然御報知被下度儀左モ無之候テハ前申陳ル如ク我領
地「バンタン」於テ石炭等ヲ補フ能ハス候

假令土蕃等ヲ鑿殺シ村落ヲ燹滅シ無人ノ郊原トナストモ將
來航海人ノ安寧ヲ見ル丈ケノ所分ヲ爲サスハ不相成尤清
國政府ノ政令速ハスト云ハ、不得已儀ニ有之併シ貴下ヨリ
書面ヲ以テ御問合ナクハ我方ヨリ公然御報知難相成候

委曲書面ニテ伺度候ヘ共昨日佛國郵船出發ニ付右便ヲ以
テ本國ヘ申遣度候間只今伺候儀ニ有之候
前申陳ル如クニシテ盡クセリ

同島ヲ御略取被成候共御勝手次第也併シ膺懲ノ典丈ニ候
ハ、「バンタン」於テ石炭等ノ助ヲ爲スヘシ然レトモ同島
ヲ御取被成候トノ御目的ニ候ヘハ後日清國政府ヘ對シ不

四月十四日達了

本月十日附ヲ以得御意候書翰ノ貴答致披見候陳ハ今般我政
府ヨリ臺灣地方ヘ警兵差向候主意ハ此程之書翰及御面晤之
節モ申陳候通ニテ閣下既ニ御了解有之候得共右ニ付猶御配
意云々之趣モ有之候ニ付尙又左ノ通及御斷候今般ノ舉動ハ
同地方於テ嘗テ我人民ヲ劫殺シ或ハ掠奪之惡行ヲ相働キシ
者共ノ罪ヲ懲シ嗣後右様ノ惡行ヲ制止シ患者ヲ防キ我民航
海ノ安穩ヲ保護セントノ目的ヲ達センカ爲ニシテ素ヨリ清
國政府ノ對テ惹クカ如キ處置ヲ成スニ非ス抑同地方ハ閣下
御承知之通り清國政府管轄外ノ地ナレハ我政府ニ於テ貴國
ノ船艦及人民ヲ雇用候トモ我ヲ敵視シ異議申出ツヘキ筋ハ
無之儀ト存候此段御再答得御意候敬具

明治七年四月十四日

外務卿 寺 島 宗 則

大不列顛國特命全權公使

ハルリーエス パークス閣下

一四 四月十五日

寺島外務卿ヨリ
大隈臺灣蕃地事務局局長官宛

一 臺灣生蕃討撫一件 二四

都合ニ付局外中立セサル不克候
兎角清國政府ノ答次第ニ因ルヘキ事ニ有之候

畢

(註 右同日午後同人等尙左ノ如キ對話ヲナセリ)

臺灣へ御出師ノ儀ハ全ク琉球人等ヲ殺害セシ問罪ノ爲ニ
テ敢テ地ヲ略スル儀ニハ無之ニ付我領地「バンタン」於テ
ハ局外中立ニ無之貴國人ヘハ薪水食料ヲ贈リ方ノ儀ハ友
邦ノ所置ニ可致旨明日便船ヲ以テ本國ヘ申遣スヘクト存
候右ニテ宜敷候哉

今朝御答申候儀尙只今外務卿ヘモ承合候處彌右ニ相違ナシ
トノ事ニ有之候

畢

一三三 四月十四日

寺島外務卿ヨリ
英國公使宛

臺灣出兵ノ地方ハ清國政府管轄外ノ地ニ付清國
側ヨリ我行動ニ對シ異議ヲ申出ツヘキ筋ナキ旨
回答ノ件

生蕃事務支那各港在勤帝國領事擔當條件ニ就キ

テハ異存ナク右直チニ各領事ヘ差送ルヘキ旨回

答ノ件

附記 生蕃事務支那各港在勤帝國領事擔當條件

(朱本)
「第五十號 四月十五日達了」

蕃地事務局長官

大隈重信殿

外務卿 寺 島 宗 則

生蕃事務支那各港我領事擔當條件御取調上ノ御差越相成則
致一覽候處右にて異存無之候間各領事へ速に差送り右條件
の旨趣夫々心得居候様可相達候也

明治七年四月十五日草

註 右ハ四月十四日附大隈長官ヨリ寺島外務卿宛來翰ノ返

翰ナル處該來翰ハ省略ス尙「生蕃事務支那各港領事擔
當條件」左ニ附記ス

(附記)

淨書ノ分四月廿日品川總領事へ達

生蕃事務支那各港領事擔當條件

第一條

臺灣生蕃地處分ノ爲メ事務局ヲ東京ニ置キ蕃地ニ一局ヲ開

キ分局ヲ長崎ニ設ケ其間協議通信ヲ要スルヲ以テ支那各港領事ニ命シ其事件ヲ擔當セシムル事左條ノ如シ

第二條

國蕃ノ間往復ノ文書ハ兩局交々直ニ相達スルアリ或ハ領事館ニ委托スルアリ其委托スルモノハ務メテ早便ニ付ス可シ若シ本書封緘整密ナラサレバ更ニ外包ヲ施シ達所ヲ詳明ニシ之ヲ遞送スル事毫モ遲々ス可ラズ

第三條

電線ノ報告領事館ニ依ルトキハ瞬間ニ其通信ヲ遂グベシ若シ事ノ暴露ヲ戒シムルモノハ暗號ヲ用テ明書セザル者アリ猥リニ憶度シテ革ム可カラス

第四條

公用ヲ帶ヒ國蕃往來スル人員港内ニ於テ宿泊ヲ需メ便船ヲ要スル者アレバ必ス懇切處分スヘシ病人患者ニ至テハ尙ホ一層ノ注意ヲ加フ可シ

第五條

蕃地ニ於テ諸般ノ物件缺耗シ之ヲ本國ニ請フニ其時日無キトキハ便道ノ領事館ニ需ム此時ニ當テ輸出公許ノ物件ハ速ニ之ヲ買收シ即チ蕃地ニ送致スベシ其代價ハ蕃地ヨリ支出

スルヲ則トス

第六條

各港内及ヒ近傍都鄙ニ於テ生蕃處分ノ外議紛紜モ亦知ル可カラズ能ク茲ニ注意シ其原由ヲ詳明ニシ事毀譽ヲ論ゼズ確説ト風聞トヲ區別シ速ニ國蕃諸局ヘ密ニ通知ス可シ

第七條

各國郵船本國及ヒ支那諸港且臺灣ニ回航スルノ時日豫定アルモノハ便宜速ニ之ヲ國蕃諸局ニ報告スベシ

第八條

物價ノ昂低貿易ノ景況及ビ目今ノ形勢等ハ時々報告シ新聞紙中必讀ニ係ルモノハ速ニ之ヲ諸局ニ報告スベシ

香港ヘハ左ノ一條ヲ加フ

第 條

蕃地ニテ用度缺乏ノ時ハ東洋銀行香港枝店ニ於テ墨銀五萬弗以内ノ金額ヲ借用スル事ヲ橫濱同店ト結約セリ若シ非常急遽ノ際此金額ヲ借ラント欲セハ陸軍一等副監督川崎祐名ノ名印ヲ以テスベシ其時譯官ヲシテ斡旋セシメ事務ヲ滯

セシムル事勿レ

二五

四月十六日 英國公使ヨリ
寺島外務卿宛

臺灣出兵ノ地方ハ清國政府ノ管轄外ナリトノ理
由ヲ詳細承知シ度旨申入ノ件

Yedo,

April 16, 1874.

Sir,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's despatch of the 14th Instant informing me that nothing will be done by the expedition now being sent to Formosa of a nature that will draw upon Japan the hostility of China. Your Excellency adds "besides, the territory in question is, as you are aware, beyond the jurisdiction of the Chinese Government."

This observation of Your Excellency renders it necessary for me to observe that I really am not aware whether the territory in question is or is not

beyond the jurisdiction of the Chinese Government.

During a residence of upwards of twenty years in China, I always heard that the whole of Formosa was claimed by China. The Japanese Government may have reasons for disputing this claim, and if Your Excellency will state to me upon what grounds the Japanese Government consider that that part of Formosa against which they are sending this expedition is not under the jurisdiction of the Chinese Government, I shall be glad to receive the information. As Your Excellency does not assure me that Your Government accepts the responsibility of employing British ships and British subjects on this expedition before the views of the Chinese Government respecting it have been declared, it is important that I should understand Your Excellency's reasons for saying that the Chinese Government cannot object to their employment.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my most distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,

Her Britannic Majesty's Envoy
Extraordinary and Minister
Plenipotentiary.

His Excellency
Terashima Munenori,
Minister for Foreign Affairs.

(右和譯文)

本月十四日附の貴簡致落手候然は今般臺灣え軍勢被差向候て清國政府の對を惹が如き所置を爲すにあらず且同地方は拙者承知の通清國政府管轄外の地なりとの趣致承知候然る處同地方彌清國政府管轄外にあるや否や拙者に於て不分明に有之清國表に二十年餘滞留致候得共臺灣全嶋は清國政府にて所有致候積りの様子に始終承り居候處貴政府に於て同政府所有に無之子細有之哉も被相知難く候間貴國政府に於て何の子細を以て今般軍勢被差向候地方清國政府管轄外に有之と被存哉御告知被下候は、忝存候清國政府右事件に付如何なる存意有之哉未申出ず候間我國船艦并人民貴政府御雇用の責に預るとの主意御申無之候に付同船艦人民御雇被成候とも同政府より異議可申出筋無之と被仰越たる閣下の意は拙者に於て領解致す事入用に御座候敬具

“and subsequently, if permitted, a permanent occupation of the Eastern side of the Island of Formosa.” It is also asserted in the same article that “American ships have been employed to sail under the American flag on what must be regarded, in the absence of the necessary authoritative declarations, as a semi-filibustering Expedition and that “Mr. Bingham, the American Minister, has tacitly, “if not expressly, sanctioned such employment” and that the “American Government has so far sanctioned” the expedition “as to grant leave to officers “in its service to identify themselves with it” etc. Inasmuch as these charges gravely imply that your Government is about to commit an act of war against China, or a portion of her people, I beg leave to know whether any ships of the United States have been chartered under the authority of the Government of Japan to engage in a military or naval Expedition against and hostile to Formosa, and whether any officers or citizens of the United States have been employed by the Government of Japan in such Expedition.

四月十六日

英國公使
ハリエスパルケス

寺島外務卿閣下

二六 四月十八日 米國公使ヨリ
寺島外務卿宛

清國政府ニ對スル敵對行爲ニハ米國人竝ニ同國
船舶ノ参加ヲ禁止スヘキ旨通知ノ件

附記 四月十七日「ジヤパンデーリーヘラルド」
紙抜萃記事と譯文

No. 32

U. S. Legation, Japan,
Tokai, 18 April, 1874.

Your Excellency :

For the first time I learn by an article in the “Japan Daily Herald” of the 17th instant, that the Japanese Expedition now being fitted out “comprehends within its scope effecting a settlement on

It is due to myself to say that I have at no time been consulted about employing either American ships or officers for any such hostile purpose. I was assured by two American citizens, who were invited to take employment in your Government, that they were not to engage in hostilities against any power whatever, and that no act hostile to China or any other Power with which the United States is at peace was contemplated by Your Excellency's Government. It is due to my Government that I should know at once whether any such hostile purposes are entertained by Your Excellency's Government towards China or any portion of the people thereof, or any other Power or people, as are attributed to it by the article I have cited, and I have the honor to request that Your Excellency will advise me without delay and definitely on that subject. Without assuring that any such purposes are entertained by the Japanese Government, I beg leave to say that it is my duty in the name of my Government to protest, as I do hereby protest, against the employment by Your Excellency's Government of any ship or any

citizen of the United States in any military or naval expedition hostile to the Government or authority of China, or to any portion of her people, inasmuch as such employment is expressly forbidden and prohibited by the laws of the United States.

I am, with great respect,

Your Excellency's obedient servant,

JNO. A. BINGHAM.

H. E. Terashima Munenori,

H. I. J. M.'s Minister for Foreign Affs.,

etc., etc., etc.

(右和譯文)

四月廿日譯成

第三十二號

本月十七日發行「ジャパンデーリー」ヘラルド新聞紙中一條款アリ始テ致承知候即チ日本方今征討ヲ擧ク其目的タルヤ臺灣島ノ東部ニ居留ヲ開キ隨テ永世爰ヲ領略スルニ在リ云々又右條款中確ト論セル趣ハ米利堅ノ國旗ヲ翻セル米利堅船ヲ雇ヘリ然ルニ此儀ニ付テハ必要至當ノ公告モ無レハ此擧ハ則チ半ハ掠奪ニ屬セル者ナリ而シテ米國公使ビンハム氏モ右船雇入ノ儀明許セストモ默許致セシナリ又米利堅政

府ニ於テモ士官ヲ其職務ニ雇入ル、ヲ許セシナレハ全ク此征討ヲ允可セシ者ナリ云云右ノ議論ハ貴政府ニ於テ清國ニ對シ或ハ其國民ノ一部ニ對シ戰爭ヲ起セル段嚴然辨說有之候ヘハ米國ノ何船カ臺灣ニ對シ陸海征討ノ爲メ日本政府ヨリ御雇入相成候趣ニ有之哉且又右征討ノ爲メ何等ノ米國士官或ハ米國人民御雇入相成候哉致承知度候

拙者儀ハ斯ル戰爭ノ爲メ米國船或ハ米國士官雇入ノ儀ニ付談判ヲ受候儀決シテ無之米國人ニ名貴政府ニ雇入ラレ候者モ何レノ國ニ對シテモ戰爭ノ爲ニ雇入ラレ候儀ニ無之且又清國或ハ其他米國ト平和ナル何等ノ國ニ對シテモ閣下ノ政府ニ於テ爭鬪ノ舉動無之段確證申候

ハ拙者ノ職務ト相考候蓋シ如此使役ハ我國法ニ因テ禁制致ス所ニ候敬具

於東京一千八百七十四年四月十八日

ビン ハム

外務卿 寺島宗則閣下

註

右文書ニ謂フ「ジャパンデーリー」ヘラルド新聞紙ノ譯文ト認メラルルモノ便宜左ニ附記ス

(附記)

余輩曩ニ臺灣征伐ノ一條ヲ刊行シタル以來別ニ詳報ヲ得ス其處置ノ曖昧異常ナルヲ以テ考フレハ日本政府ハホルモサニ兵ヲ遣ル目的ヲ明カニ世人ニ報知セサル可カラサル事必セリト雖トモ臺灣ニ赴クヘキ船隊ヲ備ヘタル外政府ヨリ一ノ信スヘキ陳述ヲ得ス

臺灣即チホルモサハ支那帝國ノ境界内ニ在ル事論ナシトスレバ和親國ノ土地ヘ兵卒ヲ上陸セシムルハ豫メ兩國ノ間ニ約ヲ定メテ相互ヒニ同意シタルヲ示スニ非サレハ其土地ヲ犯セルナリ臺灣ノ蠻民暴行ノ罪アルハ余輩之ヲ聞知セリ日本人之ヲ支那政府ニ訴ヘタルトキ支那政府ハ臺灣蠻民ノ所行ニ擔任セスト答ヘ日本人ノ意ニ任シテ償ヲ取ルヲ許シ若

シ償ヲ得サレバ力ヲ用テ強テ償ヲ取り懲罰スルヲ肯シタルモ亦余輩ノ聞知スル所ナリ然レトモ政府ハ此事ヲ公告スルヲ怠タリシノミナラズ數回ノ應接ニ外國公使ヲシテ明カニ之ヲ知ラシメス此事ノ明瞭ナラサル間ハ後來ノ困難ヲ避ル爲メ固ク局外中立ヲ守ルハ外國公使ノ職務ナリ其故ハ他國ノ土地ニ兵卒ヲ上陸セシムルハ戰爭ノ原因ニシテ必要ナル政府ノ公告アルニ非サレバ其處置敵意ヲ表セリトセザルヲ得ズ然レトモ東京政府ノ日誌ニモ北京政府ノ日誌ニモ是等ノ公告無シ實ニ異シム可キ事ナリ支那ハ僻遠ノ所領ヲ管轄スル嚴ナラスシテ威權十分ニ行ハレス其地ノ主宰ニ良政府ノ要訣ト兩立シ難キ大權ヲ與ヘ又露西亞漸々其北境ヲ蠶食スレトモ之ニ抗スル能ハザルハ余輩ノ知ル所ナリ然レトモ露西亞ト日本トヲ比較スレバ其大小強弱固ヨリ同日ノ論ニ非ス支那ハ強大ノ露西亞ニ許ス自由ヲ恐クハ小弱ノ日本ニハ與ヘサル可シ北京ニテハ日本ノ臺灣ニ兵ヲ遣ルヲ何ト看做スヤ未ダ聞知セサレトモ其目的ハ晉ニ一ニノ蠻民ヲ懲罰スルノミニアラズ又島ノ東方ニ殖民シ終ニハ永ク之ニ占據セント欲ス此ノ如キ日本人ノ舉動ヲ見テ支那人ノ意ニ介セサルハ余輩ノ信スル能ハサルナリ又目今日本政府ヨリ臺

灣遠征ノ事ニ付テ北京へ遣差スル使節ノ巧言ノ爲メニ支那人ハ説服セラルヘシト支那人ヲ蔑視シ難シ

縱令ヒ日本ハ土地ヲ取ラント欲スル意無キニモセヨ其所行常ニ異ナリ試ミニ之ニ類似スル例ヲ設ケテ論セン夫レ新ジ
ーランド島ハ英國ニ屬シ島ニハマオリースト云フ人種アリ
名ハ英國ノ管轄ナレトモ實ハ自カラ隨意ニ事ヲ處シ島内ニ
在テハ英國政府少シモ制御セズ假リニ亞米利加ノ漁鯨船島
ノ海岸ニ於テ破船シ生存セル者土人ニ殺サレタリト看做セ
英國政府ハ土人ヨリ償ヲ爲サシムル力無シ然レトモ亞米利
加人ノ英國ノ領地ニ上陸シテ罪ヲ犯セルマオリース人ヲ伐
タン爲メ兵ヲ遣ルニ任センヤ此間ニハ唯一ノ答アルヲ知ル
又亞米利加人征伐ヲ爲サント決シ運送船ヲ備ハント欲スル
ト看做セハ亞米利加人征伐ノ目的ヲ公告セズ英國ニテモ亞
米利加人ニ征伐ヲ許シタリト明言セサルニ他國ノ旗章ヲ豎
タル船艦之ニ備ハル、ヲ許サンヤ然ルニ日本在留ノ亞米利
加公使ビンハム氏ハ獨リ其同僚ニ反シテ支那日本兩國ニ於
テ缺ク可カラサル公告ヲ爲サル間ハ半ハ却掠ノ征伐ト看
做ス可キ事ニ其國旗ヲ揚ケタル船艦ノ使用セラル、明カニ
許ルシタルニ非サレバ暗ニ默許セリ亞米利加政府ハ此征伐

ノ眞ノ目的ヲ十分ニ知ラサルニ似タリ否ラサレバ何ヲ以テ
其國ノ官吏日本政府ニ使用セラレテ征伐ニ加ハルヲ許スニ
至ランヤ亞米利加ハ支那ト和好ヲ結ヘル國ナレバ他國ノ支
那領ヲ攻ムルヲ助ケハ支那ヨリ損失ノ償ヲ要セラル可シ若
シゼネバニ於テ定メタル大理ニ本テ後來再ヒ仲人ノ裁判ヲ
乞フ可キ事起リ英國ノ次ニ其大理ヲ犯シテ苦シム者第一ニ
亞米利加ナラバ實ニ奇トスルニ足レリワシントン氏其國人
ニ紛亂ヲ拓クヘキ盟好ヲ避クヘキ事ヲ勸メシハ賢ト謂フ可
シ亞米利加人方今ノ情狀ニテハ早晚擾亂若クハ失錯ニ陥ル
ヘキ事件ニ加ハリタルヲ後ニ悔ユル事アル可シ

(日清交際史提要)

二七

四月十九日 臺灣蕃地事務局ヨリ
外務省宛

臺灣蕃地事務局正院へ移轉ノ旨通達ノ件

當局本日正院へ移轉候條此段申進候也

七年四月十九日

蕃地事務局

外務省御中

二八

四月十九日 寺島外務卿ヨリ
米國公使宛

臺灣出兵ノ目的ハ生蕃問罪ニシテ清國政府ニ敵
對スルニ非サルニ付米國人竝ニ同國船舶ヲ雇フ
トモ支障ナカルヘキ旨回答ノ件

附屬書 西郷都督派出ニ關スル手續書

四月十九日達す

第廿四號

千八百七十四年四月十八日附貴簡落手一昨十七日横濱出版
のジャツパン、ヘラルト新聞紙中に臺灣之兵を送り右島東
方を占有せんとするの主意に有之候處我國政府にて貴國の
船を雇入候義は閣下默許被致且貴國政府おゐても貴國士官
被雇候義許可被致候杯記載有之候得は我國政府より清國又
は其人民に對し兵端を開かんとする趣意相合居候に付我國
政府臺灣に對し敵對するに貴國の船又は人民を仕役可致哉
否且彌清國或は其人民に對し敵對可致哉右兩條早々承知被

一 臺灣生蕃討撫一件 二八

致度旨云々御申越致承知候然るに昨日御面晤の折も委細申
述置候通嚮に生蕃我國漂流民を暴害せし罪を問ひ後來我人民
航海の安全保護のため相當の所置を爲さんため今般都督を
臺灣生蕃の地に遣し候に付ては萬一彼より暴動の振舞有之
哉も難計候に付ては保護兵差添遣し候義にて清國政府に對
し敵對するの主意毫も無之候就ては貴國船舶人民相雇候と
も全く平程の目的に有之候左様御承知有之度此段御答旁申
進候敬具

明治七年四月十九日

寺嶋卿

米公使閣下

追伸今般都督派出に付ての手續書御心得まで差進申候

(附屬書)

去一千八百七十一年第十二月臺灣生蕃地ニ於テ日本臣民五
十四名殺害ヲ蒙リタルニ付其事情詰問ノ爲メ并ニ後來再ヒ
斯ル兇惡ノ處置アルヲ防クニ須要タル基礎ヲ起サン爲メ爰
ニ其防禦ニ足ルノ兵備ヲ附シ臺灣生蕃事務都督ヲ派出スル
ノ記事左ノ如シ

臺灣生蕃ノ爲メ漂流人ノ殘虐ヲ被ルハ航海者并ニ其窮厄ノ

際ニ當リ之カ防護ヲ與フル責任アル政府ニ於テ大ニ思慮ヲ苦ムル事爰ニ多年ナリ然リ而シテ斯ル土蕃ニ對シ西洋諸邦問罪ノ師ヲ擧シハ其例間々之アル所ナリ其結局ニ至リ南方土蕃ノ十八種酋長「トーキトク」ヲ戴ク者終ニ英米ノ爰ニ加ル所ノ兵力果シテ抗スベカラサルヲ實驗了得シ一千八百六十七年廈門兼臺灣擔任米國領事ト漂流人防禦ノ盟約ヲ致スニ至リ爾來其土蕃能ク此盟約ヲ遵守シテ曾テ犯セシ事ナシ臺灣東濱ノ部ハ其地方未タ詳明ナラサルカ故ニ「トーキトク」一所領ノ北方ニ在ル土蕃平撫ノ事業ヲ起スニハ先ツ其地理ヲ搜索通明スル事急務タリ然ルニ此舉ヲ起スヤ莫大ノ經費ト勉力トニ非レハ能ハサルカ故ニ未タ曾テ何者ノ此事ヲ謀ル事アラス今ヤ時勢ノ來リテ日本ヲシテ此仁慈ノ實業ニ憤起セシムルニ至ル

千八百七十一年第十二月十一日六十六名ノ日本人臺灣東方ノ海岸北緯大約二十二度十八分ノ地ニ於テ破船ノ難ニ逢タル時悉ク彼地土人ノ一種屬タルポータン人ノ爲ニ殘殺セラレ幸ニ虎口ヲ脱シタル者僅ニ十二名ナリ千八百七十三年三月八日我國民四名臺灣ノ海岸（マパキ）ニ於テ破船ノ難ニ逢ヒ其積荷及ヒ所持ノ品ニ至ル迄悉皆奪掠セラレタリ因

テ客歲我國ノ使節北京ニ行セル際彼ノ兇徒等ヲシテ至當ノ罰ニ所セラレン事ヲ談判シタリト雖モ總理衙門之ニ答ルニ彼地ハ清國ノ藩屬タルニ非ル旨ヲ以テセリ清國地圖ヲ檢閱スルニ千六百三十五年和蘭人ノ臺灣島ヲ探索シ得タル彼島内清國藩屬ノ地（註地圖ハ總テ不詳）（A號地圖ヲ見ルベシ）即北方海岸并西方海岸ノ一部ノミヲ記載ス故ニ我カ使節ハ清國政府ノ固ク此論ヲ主張シ且「ボンリー」ヨリ「サウス」港（BCD號ノ圖ヲ見ルベシ）へ延亘セル山列アリテ清國ト生蕃臺灣地トヲ分界スレハ清國政府ニ於テハ其界外ヲ管轄スルノ意ナキヲ洞察セリ是ヲ以テ使節歸朝スルニ方テ事務都督ヲ生蕃臺灣へ派出セルノ準備ヲ爲スヘキノ命發セリ是レ我國人ヲ殘殺シタル其顛末ヲ搜索シ自今斯ル慘酷ノ舉勿ラシムルノ處置ヲ爲サシメンカ爲ナリ今ヤ準備整々ニ及ヒタレハ應ニ日本ヲ發セストス此行事軍兵ヲ率ヒ「ポータン」人へ對シ威力ヲ示シ以テ上命ノ趣ヲ談判セシメ一滴ノ人血ヲ流サス前罪ヲ謝シ自今斯ル暴舉ナク違背スル事有ラハ日本ニ於テ賠償ヲ請求スルノ條理アルヘキ旨ヲ保證セシメント欲ス

二九 四月十九日 米國公使ヨリ 寺島外務卿宛

日本政府ノ臺灣出兵ハ清國之ヲ敵對行爲ト見做ス虞アルヘク清國政府ノ書面ニ依ル諒解ヲ得ル迄ハ米國人等ノ從軍差止メラレ度旨申入ノ件

No. 33. U.S. Legation, Japan, Tokyo, 19 April, 1874.

Your Excellency:

I have the honor to acknowledge the receipt of Your Excellency's despatch of this date in reply to mine of the 18th inst. relative to the employment of American ships and American citizens in an expedition to Formosa.

Your Excellency reiterates in this despatch the assurance given to me verbally by Your Excellency in our interview of yesterday that the government of Japan is "far from entertaining even the slightest intention of performing any hostile act against China, and that the officers and ships of the United States engaged by Japan in the proposed expedition are employed in a quiet and amicable undertaking

"and without any hostile intent." Upon careful consideration of your despatch of this date and its enclosure, I am constrained to say that I deem it my duty to again protest against any ship or citizen of the United States of America being sent to Formosa by Your Excellency's government in connection with a military and naval force as proposed, until the written consent of China be first obtained in approval of the proposed expedition to that island. Your Excellency's government may intend no hostile act by sending out a High Commissioner to the aborigines of Formosa under the protection of an armed force, yet China may decide that such act is hostile to her government within the territory of Formosa, and may accordingly meet and resist it with force of arms. To avoid such a result, which would be most unfortunate for Japan, I cannot but say that Japan before approaching Formosa should obtain the written and authenticated consent of the Chinese government to the expedition proposed and its objects. This is surely in accordance with the custom and usage of nations, and I have heretofore

understood that the consent of China had been obtained, but am pained to say that I find no evidence of the fact in the despatch received by me.

I have further to request that the United States vessel "New York" and the three citizens of the United States to wit: General Le Gendre, Lieut. Commander Cassel and Mr. Wasson, employed, as I am verbally informed, by Your Excellency's Government, be detained by Your Excellency's Government, from proceeding to Formosa with the expedition until the written consent of China thereto shall have been obtained by the Government of Japan.

I am, with great respect,

Your Excellency's obt. servant,
JNO. A. BINGHAM.

H. E. Terashima Munenori,

etc, etc, etc.

(右和譯文)

第三十三號

臺灣島へ御出兵ニ付米國船舶并人民御僱役ノ一件ニ付差出候去ル十八日附拙翰ノ回答トシテ御差送相成候本日附ノ貴翰正ニ落手陳者昨日拜話ノ節口上ヲ以テ閣下御保證有之候

通右御出兵ハ毫モ清國ヲ敵視スルノ主意ニ非ス又米國ノ官員船舶ヲ雇入候ハ穩靜平和ノ企望ニシテ決シテ敵對ノ旨趣ニ非ル旨同書中更ニ御陳述有之御差越ノ別紙共留心熟讀致シ候乍去右臺灣島御出兵ノ儀ハ清國政府ヨリ認可ノ證書御入手相成候迄ハ御企望ノ通り米國ノ船民ヲ貴國ノ海陸軍ニ附屬セシメ貴國政府ニテ御差送相成候儀拙者職掌ヲ以テ承諾致兼候趣無餘儀申進候儲貴國政府ニテ高官ノ委員ニ護衛ノ兵ヲ附シ臺灣ノ土人ニ對シ發出セラル、ハ毫モ敵意ニ非ルモ清國ニ在テハ其領地臺灣ノ官府ニ對シ敵スルノ所爲ト見做シ得ベキナリ若シ果シテ然ランニハ清國ニテハ兵ヲ以テ之ニ抗シ得ベキナリ終ニ事爰ニ至ラハ貴國ノ不幸是ヨリ甚シキハ有ラサルベシ故ニ之ヲ避シニハ先ツ臺灣出兵ノ主意ヲ清國政府ニ告ケ以テ其政府ヨリ書面ニテ異儀有ラサル旨ノ確證ヲ取り然ル後臺灣へ御出兵有之候方可然存候旨敢テ及陳告候右ハ各國ノ通義風習ナルハ毫モ疑ヲ容レサル所ニ御坐候尤清國政府ニテ應諾有之候得共趣承リ候御送致ノ貴翰中確證ト可見做者無之候依之貴國政府ニテ右出兵ノ儀異論無之旨清國政府ヨリ證書御受取相成候迄ハ貴國政府ニテ御僱入相成候旨拙者口上ニテ承リ候米船「ニユーヨルク」

號并ニ「ゼネラル、レゼンドル」氏「リユーテナント、コムマンドル、カツセル」氏及「ワツソン」氏ノ三名貴國ノ兵隊ト共ニ臺灣ニ赴候儀貴國政府ヨリ御差止有之度此段相願候敬具

千八百七十四年四月十九日於米國公使館

エム、エ、ビンガム

寺島宗則閣下

註 本號文書ニハ三〇等ヨリ察スルニ米國公使ヨリ「リ・ゼンドル」宛「カツセル」宛及ヒ「ワツソン」宛ノ書翰添附シアリタルモノナル處右書翰中「リ・ゼンドル」宛書翰ハ三六附屬書ノ原文ナリ

三〇 四月十九日 寺島外務卿ヨリ
三條太政大臣宛

御雇米國人「リ・ゼンドル」等竝ニ同國船舶差止

方指令アリ度旨上申ノ件

三條太政大臣殿

寺島宗則

米國公使ヨリ唯今書簡到來李仙得カス、ル及ウアスワン宛三通ノ書東添書右等并ニウヨルク船御國政府ニテ御差留相

一 臺灣生蕃討撫一件 三〇 三一

成候様申出候差懸リ翻譯間ニ合兼候間明日ニモ本書譯可奉入御覽候得共右船并人員差留方ノ儀ハ夫々其筋へ御達有之度奉存候也

明治七年四月十九日

猶以本文三名宛書東ハ直ニ金井權少内史へ相渡候也

三一 四月二十二日 寺島外務卿ヨリ
米國公使宛

御雇米國人「リ・ゼンドル」等竝ニ同國船舶差止

ヲ征蕃ノコトニ使用ノ儀差止方指令セル旨回答

ノ件

第二十六號

四月十九日附第三十三號の貴翰落手致披見候處リゼントル、カツセル、ワツソン三氏を此度臺灣の事件に付使用致候義并ニウヨルク船を運送船とし相雇候義閣下御不同意の趣に付早速我政府より差留の義其筋へ下命相成候尤御托の右三名宛の御書簡も速に相届候様取計置候右貴答如此候敬具

明治七年四月廿二日

外務卿 寺島宗則

米利堅合衆國特命全權公使

ジョン・エ、ビンナム閣下

三二一 四月二十三日 米國公使ヨリ
寺島外務卿宛

御雇米國人「リ・ゼンドル」等竝ニ同國船紐育號
使用差止ニ對シ謝意表明ノ件

No. 35.

U. S. Legation, Japan,
Tokai, 23 April 1874.

Your Excellency:

It gives me pleasure to acknowledge the receipt of Your Excellency's despatch No. 26, dated the 22d instant, in reply to my despatch of the 19th instant, in relation to the proposed expedition by the Government of Japan to Formosa.

Your Excellency's Government have my thanks for so promptly recognizing the rights of the United States and ordering that neither the American ship "New York", nor the American citizens named in

my despatch, shall proceed with the armed expedition to Formosa, but shall be detached from that service.

I beg leave to add that while it is not the wish of my Government to interfere in the relations of Japan with other Powers, the law of the United States declares that the citizens thereof shall not enlist in the military or naval service of any Foreign Power to make war upon any Power with which the United States are at peace.

I have every assurance that Your Excellency's Government will take care that this provision of American law shall be respected by all persons in the service of Your Excellency's Government.

I am, with great respect,
Your Excellency's
obedient servant,
JNO. A. BINGHAM.

His Excellency,
Terashima Munenori,
H. I. J. M. Minister
for Foreign Affairs.

(右和譯文)

此寫正院エ出ス可シ 四月廿八日正院へ出ス
第三十五號

臺灣事件ニ付本月十九日附拙翰ノ回答トシテ廿二日附二十六號ノ貴翰正ニ落手致披見候陳者貴政府我合衆國ノ權理ヲ早速御領承被下米國船「ニウヨルク」號并拙翰中ニ掲擧シタル米國人民臺灣御出兵ニ附屬シ出進不致様御差留被下候段奉感謝候借我政府ハ日本國ト外國トノ交際ニ關係スルノ意ハ無之候得共我國法ニ於テ合衆國ト平和ナル國へ對シ戰爭ヲ爲ス國ノ海陸軍ニ我人民ノ從事スルハ堅ク禁止スル處ニ有之貴政府ニ於テ御備役相成居候我人民等右國法遵守可致様貴政府ニテ御注意被下候ハ敢テ不疑處ニ御坐候敬具
千八百七十四年四月廿三日

外務卿 寺島宗則閣下

ジョン・エ、ビンナム

三三三 四月二十三日 寺島外務卿ト英國公使トノ對話書

臺灣出兵ニ付事前ニ清國政府ニ掛合フコトニ關スル件

一 臺灣生蕃討撫一件 三三三

明治七年四月二十三日於外務省寺島外務卿英國公使サ
アハルリーパークスエ對話記の内

臺灣島え御出兵の義御見合相成候趣右は何故に候哉
前以支那政府え及照會候方可然との考へ且柳原公使もいまだ派遣せざる故等なり

柳原公使には二十九日御出發の趣然る歟
先つ其積り

柳原公使北京御到着の上支那政府え御懸合右御回答御收
手次第臺灣島御處分に御取懸の御手続き歟

先つ夫れ等の手都合なり
右等の往復は必壹ヶ月も相懸可申候

左もあるへき歟

其往復の相濟迄船舶は都て長崎港え滞錨に候歟
大隈參議の乗艦せし北海丸着灣せざれば難相分候

大隈公にはニウヨルク號船にて御歸府可相成と存候
如何哉

何に故前以支那政府え御懸合無之候哉
夫れには種々の都合ありし事にて假令は其往復に曠日候て
は臺灣島え航するの時季を失するの患あれはなり

時季とは何々

臺灣島は時季に因て投錨する不能地なり

一體先きに柳原公使は北京へ御派遣相成候へは可然候
柳原公使の派遣には時節の關係なし臺灣へ航するには時季
の限りあり然れとも前以支那政府へ照會および置候方可然
と考候に付先づ其發續を見合せし也

此の義に付支那政府より何等懸合にても有之候歟
表向何等も懸合無之只支那にて物議を生せしとの風説ある
のみ

新聞紙歟或はいつれ歟書送にても有之候歟
此程申越たる趣もあり

實に前以支那政府へ御懸合相成候方當然なり
誰れも其論は辯する處なり乍去客歲副島大使使清の際其諾
話に涉り候處支那政府にては關係無之との回答も有之候
拙者は前々より臺灣全島は支那政府の管轄内と聞及候蓋
し同政府へ御懸合の末御降手相成候迄には必一ヶ月は相
掛り可申と存候

三四 四月二十三日

露國臨時代理公使兼橫濱在勤露國總領事
ノ布告

日本政府ノ臺灣出兵ニ露國人ノ關與ス可カラサ
ル旨布告ノ件

下名ノ者ヨリ惣テ魯國ノ人民ハ此後再ヒ布告スル迄テ其身
或ハ魯國ノ船舶ヲ臺灣島へ進發スル目的ノ爲日本政府ノ務
ニ從事スル事ヲ禁スル旨布告ニ及フ者也
橫濱於テ千八百七十四年四月十一日

魯國代理公使兼總領事

エイフロウスキー

右文書日附ハ前後ノ關係ヨリシテ露曆ト認ム

三五 四月二十五日

御雇米國人「リ・ゼンドル」(長崎ニテ)ヨリ
米國公使宛

米國公使ノ米國人渡臺差止命令ニ對シ回答ノ件

於長崎千八百七十四年四月廿五日

在東京合衆國公使

ジョン、エ、ビンハム閣下

君

シ、トブリヨ、リジヤンドル

此書翰ハ大藏卿大隈重信閣下ヲ以テ呈スル者ナリ

三六 四月二十七日

長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官ヨリ
御雇米國人「リ・ゼンドル」(在長崎)宛

米國公使ヨリ「リ・ゼンドル」等ノ渡臺ニ關シ異

論申出アリタル旨通知ノ件

附屬書

四月十九日米國公使ヨリ御雇米國人「リ・ゼンド
ル」(在長崎)宛書翰和譯文

日、米兩政府ヨリ再命令アル迄ハ渡臺差
止ム可キ旨通達ノ件

第一號

以手翰申入候然ハ東京に在る米國特命全權公使ジョンエビ
ンハム氏義今度フアルモサ出張の事件に付異論有之貴下を
始めカツセルワツソン兩氏の出張をも我政府より差留候様
四月十九日付の書翰を以て申立有之候段東京政府より申來
候且同時に貴下及前條兩名へ米公使よりの書翰三通差出さ
れ貴下宛の書翰は拙者落手いたし候に付即刻御達申置兩名
宛の分は北海丸船中にて福島より夫々配達致し候に付ピン

一拙者日本ト米國ノ兩政府ヨリ外ニ諭示ヲ受ル迄ハ貴下ノ
慮見ニ於テ「フアルモサ」等ニ拙者赴キ得サル旨貴下ノ記
名シ且ツ合衆國ノ印ヲ捺テ千八百七十四年四月十九日
附書翰ヲ以テ御通知ノ趣承知セリ因テ左ニ返書ヲ呈ス
此事件ニ付貴下ノ意思ヲ得感謝ニ不堪尙貴翰ノ意ヲ深ク
鑑考スルト雖モ又拙者ノ右事件ヲ決定セシ事ハ米國ノ拔
擢ナル評議役ベシヤイン、スミツチ氏ノ説ト同意ナル旨
健ニ拙者ノ秘書生ナル「ハウス氏ヨリ承知シタリ但シ此
スミツチ氏ハ國內多事之折米國和聖頓府ニ在ル國政府ノ
「レガアトワイスル」ニシテ現ニ東京日本政府ニ於テモ
同様ノ職ヲ奉セリ故ニ拙者ノ方向ヲ變セサルヘシ且合衆
國ノ法ニ依リ拙者我政府ヘノ義務ハ心得置キ拙者ニ於テ
ハ日本政府ノ命令ヲ守ルトス拙者ノ日本政府ニ雇レタル
貴下先役在勤中強テ其官ヲ以テ拙者ヲ勸ムレハナリ此人
ヨリ拙者ノ日本政府ニ仕ヘ職トスル其源因ヲ合衆國ノ政
府ニハ通達シアリ則今現ニ務ムル處ナリ且右ノ事ニ助力
ヲ與ンカ爲メ千八百七十二年中貴下ノ記録書類
通覽アラン事ヲ仰請スヘシ此段新ニ謹テ高貴下ニ備ン
恐惶謹言

ハム氏異論の趣は各委詳御承知の事と存候因て別紙米公使四月十九日付の書翰寫相添前條の次第も貴下へ御達し及候條此旨領承前陳兩名えも御達し有之度候敬具

明治七年四月廿七日

蕃地事務長官 大隈重信

李仙得費下

(附屬書)

今日公用書拜見仕候就テハ貴君此上更ニ日本政府及ヒ合衆國政府ヨリ沙汰ヲ御受ケナサレ候迄ハ決シテ日本ニ奉仕シ兵隊ヲ引卒シテ臺灣ニ進往致サル間數旨貴君ノ爲メ且ツ合衆國政府ノ爲メニ貴君へ申達候也

千八百七十四年四月十九日

東京合衆國公使館ニテ

アビンガム印

長崎ニテ

ゼネラル、シ、ウ、レゼンドル君

三七 四月二十八日

御雇米國人「リ・ゼンドル」(長崎ニテ)ヨリ長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官宛

米國公使ヨリ米國人渡臺ニ關スル異論申出ニ對シ意見開陳ノ件

附屬書一、

四月二十七日御雇米國人「カツセル」(長崎ニテ)ヨリ同「リ・ゼンドル」(在長崎)宛書翰和譯文

米國公使ヨリノ異論ニ對シ反駁ノ件

二、四月二十七日御雇米國人「ワツソン」(長崎ニテ)ヨリ同「リ・ゼンドル」(在長崎)宛書翰和譯文

右同伴

當月廿七日付の尊翰落手致候然は臺灣出張事件に付清國政府より許諾の書面御落手ある迄は合衆國人民及び米利堅船舶を日本政府より雇入相成候義異論たる由米國公使より去る十九日申立之れありし趣且同使よりリウテナントコンマンドルカツスルリウテナントワツスン及拙者へ宛再度米國并日本政府より消息之れある迄は必ず臺灣出使と共に渡航すへからすとの告知書寺島氏を經由して差送られ候趣にて右の内拙者宛一書は閣下より御達し被下外兩人えは北海丸船中にて福島より夫々え御渡被成候趣御申越相成隨て前條

の趣リウテナントコンマンドルカツスル并リウテナントワツスンえも拙者より通達致し候様御申越し有之候右回答として申上候はビンハム氏異論申立の事は日本皇帝陛下の政府と米國公使との兩間にのみ關係する事件に付拙者爰に與論不致尤ビンハム氏より去る十八日付の書翰に對し拙者相答へ置候次第は閣下御承知置に致し置度甲比丹カツスルリウテナントワツスンえは拙者昨夜面會いたし此事件に付存意書差出させ置候に付別紙甲乙兩號書面の寫差出し候敬具

千八百七十四年四月廿八日 シウイ リゼンドル

蕃地事務局長官

大隈重信閣下

(附屬書一)

〔甲〕

於蒸氣ネボウル船

千八百七十四年四月廿七日

君

一拙者ヲ日本政府へ勤仕セシメント御雇入ノ儀ニ付合衆國公使ヨリ政府エ書翰ヲ以テ故障申出ノ趣貴下ヨリ御通達ノ旨ニ依リ申述度拙者ハ既ニ此事件ニ付只ビンハム氏ノ

一 臺灣生蕃討撫一件 三七

慮見ノミヲ書載セシ書翰一通同氏ヨリ落手セリ因テ拙者ハ此書翰ニ於テ些少ノ制限ヲモ受ルト鑑考セサルナリ一ビンハム氏ヨリ政府へ何ノ故障ヲ爲シタルトモ夫ハ全ク同氏ト日本政府ノ間ニアル事ニテ外ニ申出スベキ事更ニ之レナク且ツ拙者ヨリ些少ノ注意ヲモナスヲ望マサルナリ謹白

トウラス、カスセル

記名

ゼネラル

シ、ドブリーヨリゼンドル

(附屬書二)

〔乙〕

於蒸氣ネボウル船

千八百七十四年四月廿七日

君

一此度「フォルモサ」エノ使節ニ屬シ拙者ヲ日本政府エ御雇入ノ儀ニ付合衆國公使ヨリ故障申出タル事件ニ付書面ヲ以テ拙者ヨリ返答ナスヘキ様拙者貴下ヨリ御達ヲ受ケリ因テ申出度拙者ハ右ノ事件ニ付ビンハム氏ヨリ書翰一通

落手セリ然リト雖モ書中ノ趣ハ只忠告ノ體ナルカ故ニ之ヲ毫モ注意セサルナリ如何トナレハ同氏ニ於テハ此事ニ付拙者ヲ妨クルノ權アルト拙者認メサレハナリ
一前件ニ付「ビンハム」氏ヨリ政府エ故障ナシタル儀ニ係リテハ拙者自カラ辭ヲ發スベキ事情更ニ之レナク拙者ハ既ニ此政府ニ雇レタリ因テ命セラルベキ職ヲ奉セント其用意致シ居レリ「ビンハム」氏「己レカ適當ト考ヘテ何廉故障申出ルトモ是ハ同氏ト日本政府ノ間ニアリテ談論ヲ爲スベキ事ナリ謹白

シヤス、アル、ワスソン

記名

ヲノレーブル

チャレス、ドブリヨ、リセンドル

三八

四月二十九日 寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

米國船紐育號竝ニ米國人差止等ニ關スル件

明治七年四月廿九日於外務省米國公使ビンハム寺島外務卿應接

石橋少丞通辯

米公使云
過日手紙を以臺灣へ出帆せんとする我國郵船ニ「ヨーク」號并御雇我國人差止め義申上候處御差止め被下候旨御返書有之候間必御差止め被下候事と存候
然リ

御雇人も同様御差止めと存候右は幾日の事に候哉
本月廿日北海丸と申船を別段に遣し廿五日長崎へ着港いたし候

其命令は誰に屬し御遣し相成候哉

日本官員を遣し候

誰に宛被遣候哉

大隈參議同所に參り居候に付同人へ申遣候

廿七日の話には「ヨーク」號は既に御差止め相成候故最早出帆は出来ぬ筈に候處其差止め不構出よと命ぜられたりと

厦門へ出帆せし船は有之候へ共「ヨーク」號は不出帆

併し廿七日迄は不構出帆せよと命せしものありといふ

夫は風聞ならん有功丸と申船厦門へ出帆いたし候へ共其外の船は不出帆有功丸の出帆せし事を申來りたれば其外の船

も出帆すれば必申越す筈也

被差止し事は太政官にても御同意の事ならん

然リ

横濱ジャバングゼット新聞昨日の所に貴國人難船朝鮮へ漂着候處拾八人不殘朝鮮にて殺したり右は日本人故に殺したりとあり

夫は未不聞

必虚説ならん其新聞に朝鮮にて砲臺を築銃器を備へ支那の兵士を乞て師となし兵を練る是は日本を防ぐが爲め也と

夫は如何なる説に候哉

只インボルメーションを得るにより書すとあり約り日本政府を困却せしめんとするもの記せしならん國と云ふものは容易に戦闘は不可致維持せらるゝ丈は軍は不出貴國は獨見を以て政事を被致候に付或説に被誘軍を出し候様の義は必無之と信用いたし候是は私の考丈の事に候貴國は成丈泰平にして人民を安堵せしめ長く富優ならしめ度兵を用ゆれば外國は御國の爲めには不成却て虚に乘し己れが利を謀るへし夫故兵を臺灣に遣る事は不宜

固より戦争を爲すため行事には無之航海の爲め二三艘位支那邊へ參る事はあり且今度臺灣の事も戦闘には無之支那にて管轄外と云ふ故罪を問ふ丈の事に參る也

ニ「ヨーク」は如何

夫は差止め申候閣下の御書面にては臺灣へ我軍艦と共に行事を禁せられしにて支那杯へ「ヨーク」が行事は不構筈也然り一體御差止め方如何様被申遣候哉

兵事の爲め臺灣へ行を禁ずとの事故其通申遣したり差止め方は御手紙にて御申越の通り申遣候

長崎に留り居先へは不行歟

然リ

我國領事へ電報を以申遣度候

夫は無差支

朝鮮の事は如何

朝鮮は條約は有間敷候

支那と同盟故に御尋申たる也臺灣は管轄外なればとて兵を向る時は危し如何となれば臺灣の半部は我有にあらすとの布告支那政府より出たる事なし新聞に支那より今般軍艦を臺灣に送りたりとあり

夫は福州に亂ありて鎮めんが爲め軍艦を出したる事との由に候

日本に權利ありて臺灣へ被參候を我方にて彼是申候義には毛頭無之我國人并船等を御用被成候事丈を申上候事に候ニイヨルク御差留の義猶一應御申遣し有之度候

今日出帆の船あれば委細申遣すべし

私よりも領事へ申遣すへし

宜

三九 四月二十九日

米國公使ヨリ
長崎在勤米國領事宛(電信)

米國船紐育號ノ臺灣行ヲ禁シ同船ヲ長崎ニ停泊セシムヘキ旨指令ノ件

政府電線ニ托ス

長崎「ステーション」五月一日

午前九時廿八分着報告

ビンガム氏ヨリ 長崎在留合衆國領事官

マンクム エ

「ニューヨーク」船ハ蕃地行ヲ免サレ日本政府ヨリ従行ヲ止ムル命アリ港中ニ停泊セシメヨ

五月一日午前十時着

姓 名

註 右文書ハ蕃地事務局用紙ニ認メラレアルモ別個ノ記録中ニ左ノ文書アリ

「長崎ニテ

合衆國領事

「フブリユ、ビ、マンゴム

ニューヨーク船をエクスベジションより離し先に進まざる様日本政府命じたらば其船港内に留め置べし

千八百七十四年四月二十九日

ジョン、エビングハム

仍テ右文書ノ發信ハ四月二十九日ト認メラル尙三八參照

四〇 四月二十九日

長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官ヨリ
御雇米國人「リ・ゼンドル」(在長崎)宛

米國人「カツセル」等出發ノ噂アルニ付キテハ其ノ際ノ出帆命令書寫一覽シ度旨申入ノ件

第二號

臺灣事務ニ付米國人民日本政府雇入ノ儀米公使故障申立候一件ニ付貴下ヨリ甲比丹カウツスルワツスレ氏ノ兩名エ御尋問アリシ回答トシテ前兩人ヨリ貴下エ差出シタル書翰兩通御入封ノ廿八日付貴翰落手イタシ候然ルニロツスルワツスレノ兩氏ハ既ニ有功丸ニ乗組出帆致シ候由傳承ス右ハ貴下覺書第二十二號ノ趣意ニ隨ヒ候得ハ同人等エ必ス貴下ヨリ命令書御差出有之候事ト存候乍御手数右寫一通拙者一覽ノ爲御廻シ被下度候也

明治七年四月廿九日

蕃地事務局長官

大隈 重 信

李仙得貴下

四一 四月二十九日

御雇米國人「リ・ゼンドル」(長崎ニテ)ヨリ
長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官宛

米國人「カツセル」ヘノ出帆命令書送付ノ件

附屬書 四月二十七日右出帆命令書

長崎往復第二號ノ尊翰落手イタシ候右回答左ニ申上候然者去ル二十六日拙者旅亭ニ於テ西郷中將甲必丹カウツスル及拙者集合イタシ談話ノ砌西郷中將ヨリ承リ候ハカウツスル氏ハ明日有功丸エ乗組ミ厦門へ進發イタサレ度且又明朝ハ同船中ニテ再タヒ「カウツスル」氏エ面會イタシ度儀有之トノ趣申聞ラレ候然ルニ果シテ兩人面會有之此時有功丸出帆ノ手順相立候ニ付拙者ヨリモ甲比丹カウツスルエ都督ノ命ニ從ヒ出帆イタスベキ旨ノ命令書差遣シ申候然ルニ此時命令書中都督ノ與印無之ニ付右ハ今日中印濟相成ル様取計候旨申聞置候然ルニ午後譯官盧氏ヨリ閣下第一號御書翰ノ譯稿相示サレ候ニ付其節拙者ハ都督ノ來訪ヲ待請居候ヘトモ差置カス有功丸へ相越シカウツスル兩氏へ面會彼ノ二十七日付ノ書翰ニ通テ請取申候此書翰ノ寫ハ第一號ノ愚翰トトモニ閣下ニ差上置候拙者相考候ニ屬下ノ士官へ命令ヲ下スニ唯都督ノ口達ノミニテハ不都合モ可有之ト存シ候ニ付都督與印相濟シ候上差返シ候趣カウツスルニ申聞ケ候テ其朝與印ナシニテ相渡置候命令書ヲカウツスルヨリ取返シ歸宅イタシ都督へ面談米公使異論申立ノ一件談論ニ及ヒ甲比丹カウツスルリユテナントワツスンヲモ呼集メント人ヲ發シ候后ニ

至リ有功丸既ニ出帆セシ趣承知イタシ候此時約ハ夜十時頃ニ有之候而シテ彼ノ二時間前カツスルヨリ取戻シ候命令書ハ于今拙者手許ニ留置有之候付右原書一通呈贈イタシ候敬具

千八百七十四年四月二十九日

李 仙 得

蕃地事務局長官

大隈重信閣下

(附屬書)

我カ去ル四月十七日付ノ書翰ニ関シ下文ノ趣告知致候然ハ北海丸儀東京ヨリ横濱ヘノ航海中損所出来ニ付貴下有功丸へ乗換ヘ相成候付テハ今日十二字或ハ成タケ差急キ同船ニテ厦門ヲ向ケ長崎ヲ出發シ兼テ領掌ノ委任狀施行可被致候謹言

千八百七十四年四月廿七日

シドブリユ リゼンドル

長崎ニ在留

日本皇帝陛下ノ運送船有功丸ニテ

甲比丹 トクラス カツスル

蕃地事務都督 西郷 從道

四二 四月三十日 長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官ヨリ御雇米國人「リゼンドル」(在長崎)宛

米國人渡臺ノ儀ニ關シ米國公使ト會談ノ爲至急上東方指令ノ件

一長崎ニ於テ第二號ノ貴朝落手リウテナントコマンドルカスセル氏リウテナントワスソソ氏有功丸船ニ乗組ミ發港ノ次第承知イタシ候
一フォルモサ島出使一件ノ爲メ雇入候米國人ノ儀ニ付合衆國公使申立ノ意ニ反シタル此新規ノ所行ニテ此上尙皇帝陛下ノ政府ノ處置ヲ煩ワスニ至ル可シ然レトモ面晤ニアラサレハ運ヒ難キ辯論モ有之候ニ付政府重官ノ輔翼ヲ以テ之ヲ合衆國公使ニ説與セハ同人モフォルモサ島ノ蕃地エ出使スル皇帝陛下政府ノ意ヲ速ニ解シ得テ此タメ同人ノ引起セシ難事ヲ避ケ除カル可シト信用ス此等ノ意ヲ貴下合衆國公使ト談議アラシ事格別適要ナル可シ且皇帝陛下ニ於テ「フォルモサ島エ使節ヲ發遣セシカ爲メ貴下ニ

高職ヲ任シタル其希望ヲ達センニハ貴下東京ヲ指シテ發足シ「ピンハム氏へ面會セラル、コソ右ノ意ヲ充分運ヒ得タリシ事ト拙者固ク信用ス因テ此見込ニ付貴下御同意ナレハ西郷都督ト談議ヲ遂ケ貴下ノ便宜次第速ニ長崎ヨリ發足アラシ事ヲ希望ス敬具

明治七年四月三十日

事務局長官 大隈 重信

李仙得貴下

四三 四月三十日 御雇米國人「リゼンドル」(長崎ニテ)ヨリ西郷臺灣蕃地事務都督(在長崎)宛

米國人渡臺ノ儀ニ關シ米國公使ト談議ノ爲上京シ度旨願出ノ件

東歸ニ付李仙得ヨリ都督ヘ呈書

第三號

別紙大隈氏の長崎往復第三號の書翰貴下へ差出申候隨て同氏より申來れる趣意を幫助せんには左に陳述する丈の事件

一 臺灣生蕃討撫一件 四三

有之候合衆國公使ピンハム氏は貴下へ數ふへからざる程の難事を引起せり因て此難事を避け除さる間は既に臺灣嶋を指して出發したる人々と貴下の合體せられん事之か爲に妨碍せらるべし亦た彼の既に發せし人々は若し首長なくして彼の野暴の土地に永く滯居せられ候或は最も悲歎すへき命運に遭遇する事あるべし而して予は現に臺灣嶋への使節に加はり同行の榮を蒙むるに皇帝陛下は予か力の及ふたけは貴下の爲に盡すべしとの叡慮あらせられたり然りと雖も東京に於て前條の難事を正に處分することなり「ピンハム氏不正の壓制に任せんと決定せらるゝ間は予か此地に在つて貴下の爲に用を爲すや甚た僅かなる事判然なり故に之に反し予若し東京に赴き大隈氏の擇まれし處の予か奉すへき使命に付ては假令予に不適當の事と雖も政府の重官に謀り輔翼を仰き助力を得て以て成功を奏し貴下の憂慮を少ふせんと信用する所あり因て貴下もし此等の見込に付御同意あらは其旨御回達あらん事希望いたし候而して予は直に發足の用意可致候謹言

千八百七十四年四月三十日

李 仙 得

蕃地事務都督

西郷従道貴下

註 別紙ハ四二ト同文

四四 四月日 寺島外務卿ヨリ
廈門在勤福島領事宛

我力征臺ノ趣旨ヲ傳ヘ清國側ヨリ問難アルトキ
ハ柳原公使ト談判スルヤウ應酬スヘキ旨指令ノ
件

内要旨

領事 福島 九成

一明治四年十一月我琉球ノ民臺灣ノ蕃地へ漂到シテ土人ニ
却殺セラレ死者五十四名又六年三月我小田縣管下備中淺
江郡ノ住民佐藤利八等四名漂到シテ衣物ヲ掠奪セラル其
久ク俗ト爲ルト雖トモ蕃ノ地清國ノ政權不逮シテ害他國
ニ及フモ清國政府之ヲ化外ニ置キ曾テ焉レニ與ラス宜ナ
ル哉土蕃ノ人ヲ拒ムニ却殺ヲ以テスル也
一是ヨリ先ニ彼蕃米國ノ漂民ヲ却殺ス米國艦ヲ移シテ之ヲ

註 右文書日附ヲ缺ク尙福島領事ハ四月二十七日有功丸ニ
テ長崎ヲ出帆シ五月三日廈門ニ到着セリ

四五 五月一日 西郷臺灣蕃地事務都督(長崎ニテ)ヨリ
御雇米國人「リ・ゼンドル」(在長崎)宛

大久保利通ノ着崎後上京スヘキ旨指令ノ件

東歸に付西郷都督ヨリ李仙得へ回答案

貴下ノ長崎往復第三號ノ書翰并別紙とも落手致候即今ノ形
勢に當つて貴下ノ出發せらるは實以遺憾千萬ノ事に候得共
足下及大隈氏ノ陳述する所の主意に於ては拙者も同意の外
他事無之候唯足下長崎出發日限の儀は大久保氏一兩日中當
地え來着の筈に付右を被相待候上にて東京へ御出發相成可
然と存候此段回答如此候敬具

明治七年五月一日

蕃地事務都督 姓

名

李仙得 貴下

註 右文書ハ「回答案」トアルモ事實違セラレタルモノト認
メラル

討ツ款ヲ通シテ約ヲ成ス清國終ニ與知セス其版圖ノ外ニ
在ルヲ以テ也今我人民既ニ慘害ヲ被ル若シ棄テ問セ不
ハ後患何ソ極ラン此レ我國ヨリ蕃ヲ伐テ宛ヲ伸ル所以也
一去年副島種臣清ニ適キ約ヲ換ユルノ際柳原前光鄭永寧ニ
命シ已ニ此意ヲ以テ總理衙門大臣ニ當面説明セリ

一清國ノ政權蕃地ニ速ハス蕃人ノ兇暴我人民ニ加ハルヲ以
今我政府務テ安民ノ義ヲ行フ故ニ此舉ニ於テ他國ノ異議
ヲ容レス但シ蕃地ハ清國府縣ノ治ト接壤シタレハ須ク注
意ヲ加ヘ其或ハ干係ヲ生スル事ヲ免カルヘシ
一其港地ニ在テ條約面ニ據リ當務ノ職掌ハ領事ノ責任ニ歸
スト雖トモ臺蕃處分ノ事ニ就テ清國官吏ヨリ辯論問難ス
ル所有ラハ前條ノ要旨ヲ根柱トシテ反覆應對スルヲ除ク
ノ外其事情ヲ決裁スル如キハ總テ其政府ヨリ北京ニ在ル
我國全權公使ト談決セヨト斷ルヘシ
一伐蕃之意惟野蠻ヲ化ヘテ良民ヲ安スルニ在リ敢テ釁隙ヲ
隣國ニ開クニ非ス此間ニ從事スル者宜ク此意ヲ體シ始終
兩國ノ和好ヲ保護スヘシ

明治七年四月 日

外務卿 寺島宗則印

四六 五月四日

大久保、大隈兩參議及西郷中將ノ長崎ニ於ケル
申合

〔案書〕

〔甲〕

- 一カツセル、ワツスン、兩氏行違ヲ以テ有功丸ヨリ出帆致シ
候ニ付西郷都督到着迄ハ其儘待受候様電報ヲ出ス事
 - 一西郷都督到着ノ上ハ、カツセル、ワツスン兩氏ノ雇ヲ放免
シ早々差返シ候事
 - 一李仙得ハ早便ヲ以テ歸東致サセ候事
 - 一生蕃處分濟ノ上兇暴ノ所業ヲ止メ我意ヲ遵奉スル迄ハ防
制ノ爲メ相應ノ人數殘シ置ヘキ事
 - 一生蕃處分ニ付清國ト關係ヲ生シ萬一事變ヲ醸スノ時宜ニ
及節ハ雇入ノ英人其他ヲ免シ同船艦ヲ返スヘキ事
 - 右條件御委任中ニモ掲載有之候得共更ニ協議一決致シ候事
- 明治七年五月四日
於長崎

參 議 大久保利通 印

參 議 大 隈 重 信 印
陸 軍 中 將 西 鄉 從 道 印

〔乙〕明治七年五月四日於長崎左ノ件々ヲ決ス

一 柳原公使至急派出セラルヘキ様東京へ電報差出シ候事
一 西郷事雇船或ハ買得船ヲ以テ至急生蕃社寮へ出發スル事
一 大隈事柳原公使當港著迄待受篤ト旨趣申合メ協議致スヘキ事

一 大久保事明五日中出帆實地ノ景況ニ依リ進退決着ノ形行可及言上事

一 前條決着ニ付難題ヲ釀出シ候節ハ大久保始其責ニ任スヘキ事

大隈參議重信 印
西郷中將從道 印
大久保參議利通 印

註 右文書ハ五八附屬書ナルモ便宜ココニ挿入セリ

四七 五月四日 沈清國上海道臺ヨリ
上海在勤品川領事宛

臺灣出兵ノ實否及柳原公使ノ上海到着ノ期間

飛速轉詢示知如果寔有派兵赴臺之事則請止住師船俟

柳原大臣到此與

總理衙門商議妥協再行定奪本道與

貴領事共事一方諸承

和衷共濟事關大局用特奉商順頌

勛社竝盼

惠覆不具

三月十九日

品川大人 台啓

(焚餘)

註 右文書ハ五七ノ附屬書ナルモ便宜ココニ挿入セリ

四八 五月五日 上海在勤品川領事ヨリ
沈清國上海道臺宛

柳原公使ノ上海到着ノ期日ハ不詳ナル旨等回答ノ件

品川忠道

啓者昨接

貴道來函以屢閱新聞紙述及貴國派撥大兵赴臺事係確鑿臺

一 臺灣生蕃討撫一件 四八

合竝ニ若シ出兵事實ナラハ柳原公使來着迄右艦
船ヲ停メラレ度旨申入ノ件

沈秉成

啓者前聞

貴國有派兵赴臺灣生蕃地方之說當囑陳司馬赴

臺端問信經

繙譯官將二月二十八日接到長崎電報抄示係

貴國外務省派員前往臺灣生蕃查問等語竝未提及派兵之事

迨後本道屢閱新聞紙述及

貴國派撥大兵竝租美國牛約輪船裝載赴臺事係確鑿臺灣生

蕃地方係在中國幅員之中亦即中國之人今

貴國與問罪之師前往彼處必從廈門瓊瑤等口經過自應先向

中國商議方爲正辨現在

貴國竝無來文究竟有無派兵赴臺之舉

柳原大臣曾否起程約計何日可以到滬即祈

貴領事詳細賜悉以便稟報

通商大臣核辦倫

貴領事未接確信竝望

灣地方係在中國幅員之中亦即中國之人今貴國與問罪之

師前往彼處自應先向中國商議方爲正辨究竟有無派兵赴

臺之舉

柳原全權公使曾否起程約計何日到滬即祈詳細賜悉以便

稟報

通商大臣核辦如果寔有派兵赴臺之事則請止住師船俟

柳原大臣到此與

總理衙門商議妥協再行定奪等因查此事本領事未得本國

確信至止住兵船一事本領事未能擅主業將

尊意飛電寄致長崎縣速即轉稟

外務省立候回電等語去後據長崎縣復電云柳原公使未知

幾時到滬云々適今早有

英國商船兩隻一開往長崎一開往橫濱之便又另修公函兩

封附寄

外務省暨長崎縣矣此恐

柳原公使在半途故也

柳原公使一到長崎必以電信知照一切公事除候示遵行再

行奉達外合先泐覆即頌

時祺

五月初五日

六三

沈大人台啓

(俟餘)

四九

五月五日

御履米國人「リ・ゼンドル」(長崎ニテ)ヨリ
西郷臺灣蕃地事務都督(在長崎)宛

上京ニ際シ蕃人征服ノ策略開示ノ件

〔(案書) リジヤンドル氏歸京ノ節都督ニ差出ス策略〕

於長崎千八百七十四年五月五日

今月二日附ノ貴翰正ニ收掌致候陳ハ私儀貴意ノ通大隈公ト
會議ノ上コストリカ號ニテ出帆不致決居候處只今大久保公
着港相成愈フアルモサへ出使ノ命有之趣ニ候ヘトモ東京ニ
テ事ノ決定ニ及フ迄ハ拙者「シヤリヤフ」へ隨行難相成旨政
府ヨリ申來候由大隈公并貴君ヨリ御報知ノ旨承知致候依之
拙者儀ハ明日或ハ明後日東京へ出立可致候間其前ドクト
ル、マンリンノ助ヲ乞ハスシテ「ピラム」出發ノ方法ヲ別紙
ヲ以テ申進候又十一月ノ始寒冷ノ季ニ至ル迄ハ「ホータン
ス」ニ向ヒ事端ヲ開カサル様深ク御注意有之度候此節ヨリ

十一月ニ至ル迄「シヤリヤフ」ニ居ヲ占メ「瓊瑤」谷中ノ雜人
種「タンケトツク」管下ノ生蕃「ピラム」ノ土人トニ親睦シテ
貴下ヒラムニ御滞在中又其近隣ニ住居セル他ノ種族トモ親
睦ヲ結フニ時日費スベシ「然レハ十一月迄ノ時日甚長シト
スルニタラス」且其事ヲ遂ケ候内ニハ貴兵全ク風土ニ馴レ
候ヘハ貴下勞心更ニ無之ト存候此ノ如クシテ此ノ備設セ
ル兵及同盟ノ助ヲ得テ此地ヲ過キ「ホータン」ノ地方へ侵入
セハ敢テ抵抗スル事ナク多分恐怖シ一發ノ彈丸ヲモ發スル
ニ至ラス各其兵器ヲ投シテ降ルニ至ン「サリヤフ」地方ハ殊
ニ炎熱ニシテ飲水甚惡シク且其土質ノ砂石ヲ挾雜スルヲ以
テ貴兵務メテ適宜ノ良地ニ移ルヲ要スベシ南西ノ定風ヲ受
ルト清水ノ傍ニ接近スルトヲ以テ能ク健康適宜ノ良地トス
此ニ三地アリ其一ハ島ノ南西部「トツスボン」ニ近ク其二ハ
「ゴローツク」ノ西「トノパンナツク」河口ニアリ其三ハ「ク
アリヤン」海灣ノ高地ニアルナリ「シヤリヤフ」ハ根據トスル
ヲ以テ常ニ此地ニ大軍ヲ屯集セシムベシ若貴君「タンケト
ツク」管下ノ種族ト戰フヲ要セハ南東岬頭ノ北方ニテ東海
濱第一ノ河流ナル「ツイラツク」河ト云フ河流ハ「ツイラサ
ツク」地方ニアリテ河口ニ一村落ノ外ニ數多ノ小邑アルヘシ

又河口ヲ離レハ水入淺キ船舶ノ碇泊場アリ此ノ河ノ北部ハ
山國ナリ又ツイラツク河ニ沿フテシヤリヤフニ通スル一條
ノ車路アルヲ思惟スヘシ若シ貴君「リヤンキヤン」山谷ノ居
民「タンケトツク」管下ノ人民及ヒ上ニ記セル他ノ種族ト和
親ヲ結ヒ其望ヲ得ハ之ヲ分テ別伍トナサス均シク日本人ノ
内ニ編入スルヲ要ス此ノ如クセハ皆貴君及ヒ貴君ノ官吏ノ
配下ニ歸シ以來其背叛ヲ防禦セラルベク候此節ノ征行速ニ
成効アラン事ヲ希望致シ候敬具

チヤレスドブリヨ、リジヤンドル

都督西郷中將閣下エ呈ス

五〇

五月五日

英國公使ヨリ
寺島外務卿宛

清國政府ニ於テ日本ノ臺灣出兵ヲ公認セサル限
リ之ニ干與スル英國人並ニ同國船舶ヲ日本政府
ニ於テ雇入ルル事ハ承認シ難キ旨申入ノ件

British Legation, Yedo,

May, 5, 1874.

Sir,

In your despatch of the 14th Ultimo on the subject
of the Japanese expedition against Formosa, Your
Excellency remarked that the territory to which
that expedition was being despatched is beyond the
Jurisdiction of the Chinese Government, and, in my
reply of the 16th Ultimo, I asked Your Excellency
to inform me of the grounds upon which you made
this statement, and also of your reasons for saying
that the Chinese Government cannot object to the
employment of British ships or British subjects upon
this expedition.

To this Despatch Your Excellency has made me
no reply. In conversation Your Excellency has
informed me that the expedition has been postponed,
by orders which were telegraphed to Nagasaki on
the 20th Ultimo, but I am informed by Her Majesty's
Consul at Nagasaki, under date the 29th Ultimo
that the Japanese steamer the "Nepaul", full of
troops, and with two American officers, had just
left Nagasaki for Amoy.

I should now inform Your Excellency that I have

learned from Her Majesty's Minister at Peking that the Chinese Government state that they have no knowledge of this expedition, and that the country in Formosa which is inhabited by the savage tribes does belong to China.

It is difficult to reconcile this statement with that made me by Your Excellency that the territory inhabited by the savage tribes of Formosa is not under Chinese jurisdiction.

It is, therefore, my duty to point out to Your Excellency that I cannot approve of British ships or British subjects being employed in a Japanese expedition against any part of Formosa, until the Consent of the Chinese Government to such an expedition shall have been publicly declared.

I take this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

HARRY S. PARKES,
H. B. M.'s Envoy Extraordinary
and Minister Plenipotentiary in
Japan.

His Excellency,

Terashima Munenori,
etc., etc., etc.

(右和譯文)

去月十四日附を以兵を御差向被成候臺灣の地方は清國政府管轄外の地に有之との御主意に候處去月十六日附答書を以右は如何の主意に御坐候哉且今般の擧に付我國船艦人民被成御雇候共清國政府より異議可申出筋には無之との議相伺候得共未だ閣下より御返答無之口演にて去月廿日電信を以長崎え致下知右の擧御見合相成候旨御告知有之候處長崎在留我領事より去月廿九日附書翰を以貴國蒸氣ニツホール船え兵隊又は亞米利加士官二人乗組廈門に向け長崎出帆致す所なりと拙者え申越候就て今般北京在留我國公使より清國政府に於て右の擧一向不存臺灣番士居留の地方は自分附屬の地なりと申居候趣拙者え申來候左候は、閣下土蕃居留致候地方は清國政府管轄外の地也との御來意と矛楯の事と存候間清國政府にて公に右の擧致承諾候事申出候迄は臺灣何處にても御差向の擧に付我國船艦又は人民御雇被成候事拙者に於て許可難致段閣下に申入候は職掌に有之候敬具

五月五日

英國公使

ハリエスバルケス

寺嶋外務卿閣下

五一 五月六日 米國公使館ニ於テ上野外務少輔ト米國公使トノ對話書

米國人二名日本兵ト共ニ廈門へ向ケ出帆セル件

明治七年五月六日米公使館ニ於テ外務少輔上野景範米國全權公使ビンハム氏ト對話如左

一禮畢

今日參館候ハ外務卿寺島ヨリ命令ヲ受閣下ニ左ノ事件ヲ御報知ニ及ハンカ爲也

昨夜長崎在勤ノ官員ヨリノ報知ニ我政府雇入ノ日本郵船へ貴國人兩人我兵隊ト共ニ乘込廈門へ向ケ發帆相成タル由右ハ多分ワツソン氏并ニカススル氏ナル可シ同氏等へハ曾テ閣下ヨリ御申越ノ次第モ有之間已ニ書簡ヲ以テ御報知ニ及置候通同氏等ヲ此度ノ役ニ使用候儀ハ差止置候儀ニテ且閣下ヨリ御托ノ書簡モ相達居候筈ニ候得共行違ニテ右ノ次第

一 臺灣生蕃討撫一件 五一

ニ立至リ殘念ノ至ニ候

夫ハ甚氣ノ毒ノ至ニ候我政府ハ平生貴國ト懇親ノ交際イタシ居ニ付可成丈不都合ノ儀到來不致様注意イタシ先度モ書簡ニテ右人名等貴政府ニテ此度ノ事件ニ御使用不相成候様御掛合イタシ候儀ニ有之候

ワススン氏并ニカススル氏ハ拙者ノ命令ヲ不奉且貴政府ヨリノ御命令ニモ相背キ候モノナレハ如斯事件ハ我政府ニ於テ法則甚嚴重ナルニ付追テ夫々ノ所分可致儀ニ有之候

カススル氏并ワススン氏已ニ出帆相成候ニ付テハ如何ノ御處分貴政府ニテ御施可被成也

右ハ内務卿大久保近日歸着可有之且外務少輔山口モ已ニ當地へ向長崎表出帆ノ由ニ候間イツレ委敷情實相分リ候上處分可有之候得共同氏等ハ廈門へ向出帆セシ儀ニ付同所ニ於テ我政府ノ命令可待居候様傳信相成候

廈門へハ日本ノ軍艦入港不相成旨支那政府ヨリ命令セシ趣ヲ聞ケリ

夫ハ誰ヨリ御聞取相成候ヤ

六七

右兵隊出帆ハ貴政府ノ御命令ニ有之候ヤ
先度命令イタシ置候儀有之候得共尙我政府ノ都合モ有之長
崎へ相待居候様更ニ命令イタシ候得共行違ニテ右ノ次第ニ
相成候

我國旗ノ下ニ在ル船舶并ニ我國ノ人民サヘ此度ノ役ニ御
使用無之候ハ、拙者ニ於テハ貴政府ノ御所分ニ聊關係可
致儀ハ勿論無之儀ニ候得共御命令ノ行違ニテ右様ノ儀到
來イタシ實ニ不容易事件ニ至リ候様相考候間平生交和ノ
親意ニ依ツテ想像スルニ甚御氣ノ毒ノ事ニ候
リセントル氏ハ如何相成居候ヤ
同氏ハ多分此次到着ノ郵船ヨリ内務卿大久保等ト一所ニ當
地へ歸着可相成候

ニウヨク船ハ如何相成居候ヤ
右ハ命令通長崎迄ニテ差留候

此度出帆ノ船ハ日本郵船而已ニ候ヤ
我政府ノ軍艦モ兩三艘出帆セシ趣ニ候

西郷氏ハ何地ニ被居候ヤ
同氏ハイマタ長崎へ滞留イタシ居候

何故ニ支那へ公然使節ヲ御差出相成夫々ノ御應接無之ヤ

五月七日午後一時三十分發

大隈參議殿

三條太政大臣

昨日英公使ヨリノ書翰ニ曰ク同國北京在留公使へ臺灣土蕃
ノ住メル地ハ支那ノ管轄ナリト支那政府ヨリ明ニ答ヘシ趣
ニ付日本ヨリ送ル兵ノ爲ニハ船モ人モ貸シ難シト右ニ付北
海丸乗組ノ「ブラウン」ハ指留メラルヘシ

五三 五月八日

英國公使館ニ於テ寺島外務卿ト英國公使
トノ對話書

日本兵船ノ長崎出帆ノ意圖及目的地等ニ關スル
件

明治七年五月八日英國公使館於テ寺島外務卿同公使バ
トクステ應接記ノ内

一我上海領事ヨリ申越タルヲ見ルニ一ト先御見合タリト
ノ事ニ有之處已ニ長崎ヨリ數艘出帆セントノ儀ナリ如
何ノ次第哉伺度候

一臺灣エ遣ス事ハ見合セ福建鎮臺へ向遣シタリ尤電報故委
曲難相分候

一 臺灣生蕃討撫一件 五三

其順序ヲ踏ミ御處分相成候ハ、我政府ハ勿論他ノ政府ト
雖モ敢テ違論無之儀ニテ却テ貴政府ノ信用モ各國へ對シ
相増可申儀ニ有之

御最ノ御注意ニ有之候其趣外務卿へ尙亦可申述候前件ワス
ソン氏并ニカスル氏出帆ノ儀若風評等ニテ御聞謬無之様
前以テ閣下エ御報イタシ置様外務卿ノ命ニ依リ參館イタシ
候也

夫ハ御懇篤ノ儀ニテ外務卿へ宜敷謝辭御申入可被下候内
務卿大久保氏外務少輔山口氏等歸着相成候ハ、尙巨細ノ
情實分明可致候間其節ハ公然公翰ヲ以テ御報知有之度候
也

承知イタシ候其旨外務卿へ可申述候

畢ル

五二 五月七日

三條太政大臣ヨリ
大隈臺灣蕃地事務局長官(在長崎)宛(電
信)

北海丸乗組御雇英國人「ブラウン」差止方指令ノ
件

一臺灣ニハ無之哉

一否福建ナリ

一斷リニ行クナラバ餘リ多人數過ル様相見申候全ク談判
丈ケナラバ一艘ノ船ニ二三人ヲ乗セテ可然候

一電報ノミニテ不明尤山口少輔モ今日頃ハ歸京可相成ト
存候多分リセンドルモ同船ナルヘシ

一リセンドル氏ハ大切ノ人ナルヘシ

一然リ同氏等歸京相成候ハ能相分可申候

一大隈氏ヨリハ何トカ被申越タルヤ

一始終音信アレトモ電報ノミデ委細ノ儀ハ相分リ兼候

一先日ハ御見合相成タルトノ趣ニ付其段本國へ申遣シタ
リ然ルニ今般又候出兵ナサル、ハ何人ノ決裁ナル哉

一臺灣行ヲ見合セタリ

一臺灣ト廈門トハ何ノ相違アルヤ

一臺灣ヲ管轄スル道臺へ爲掛合相越候儀ニ有之尤前舉ハ直
ニ臺灣エ可相越ノ處ヲ延遷シテ先ツ廈門へ差出候也

一土蕃等ノ管轄ハ支那政府トノ事故前時琉球人暴殺及備中
人ヲ切カシタル事ヲ掛合シ時ハ化外ノ地ト答タリ

一右故段々偵探セシニ支那政府於テハ化外ヲ罰スルハ自然

六九

構無之シカシ表向公然掛合ヲナサバ面倒故不掛合シテ直ニ問罪スル分ハ奏聞モ不致仔細ノ體ナリナレドモ彼地ヲ略スル杯ノ風聞有之モノト相見ヘ支那於テ我ニ敵スルノ說モ有之旁以表向不掛合方可然トノ事尤一旦ハ表向掛合タレトモ通辨官等同士ノ内談ニテ内々出兵不苦トノ事ナリ

一今日兵船支那港内エ被差遣候ハ、同國人民モ必憤發可致候

一前舉ハ多數ノ船ヲ遣ス積ナレトモ今舉ハ僅ニ四艘計ナリ

一福建ノ鎮臺ハ去年北京副島氏ノ談判ハ不了知

一同鎮臺ヘ書面遣シタリ、尤鎮臺於テ蕃地ノ所分ヲセヨトノ責ヲ受ルハ甚迷惑ト見タリ尤不日大隈立歸リ候ハ、柳原公使ヲ北京ヘ向ケ出發爲致候積リ有之候

一先舉ハ見合此度ハ廈門ヘ兵ヲ被向候ハ大隈氏ノ意ニ出ルカ

一只臺灣行ヲ廈門行ト變シタル迄ノ事

一先ノ御談ニハ柳原氏ヲ北京ヘ派シテ談判ヲ爲遂候トノ事然ルニ今日議ノ變スルハ大隈氏ノ意ニ出ルカ

一否大久保内務卿ヲ九州ヘ遣シタリ

一貴政府ニテ數艘ノ兵船ヲ支那地方ヘ被差遣候義同政府

ニテハ心切ト可見做哉

一牡丹社ノ事件ノミ其餘仔細ナシ

一支那地面ヲ侵スニ相當候

一夫故去年談判ヲ遂ケタリ尤書面ハ無之候

一廈門ヨリ牡丹部ニ渡ラレ候哉

一終ニハ可渡候

一廈門ヘハ二三日逗留セル哉

一未明瞭ナラス

一支那ト交兵可相成モ難計候

一否ハ如是事ナキ積ナリ

一支那ニテ如何カ難計候ヘ其他國ナラハ必干戈ノ事ニ可及候西洋ト東洋トハ其見ル處相異リ候儀ト被思申候

一副島氏去年談判ノ模様ヲ聞クニ自カラ他國ト異ル所アリ

右牡丹部ノ事ヲ強テ論スル時ハ支那政府ニテ甚困却シテ

不答臺灣ノ事聞ヲ厭フト見ユ

一拙者ノ考ヘニハ必爭端ヲ可開ト存候恐ラクハ柳原氏北

京ヘ行カレ候共境ニ入ル事且面會等ハ無覺東ト存候

一右ノ邊去年中談判ヲ遂タレハ入京不能トノ積リニハ無之

一否大久保氏彼地ヘ到着ノ前已ニ船五艘兵二千四月廿七日ヨリ五月二日迄ニ追々出帆相成タル由柳原氏北京ノ談判相濟候上兵船等廈門ヘ爲待被置候哉

一大久保ノ取計ヲ委細承リ不申候テハ不相分只今迄ノ處ニテハ道臺ヘ談判及フ迄ノ事大久保氏モ十一日頃ニハ歸京可致候

一柳原氏福建ヘ行カル、カ

一北京ヘ向ケテ行ナリ一ヶ所ノ意^{福建}ニテ談判スル丈ノモノヲ

北京ニテモ談スヘシ

一福建エハ誰ヲ被遣候ヤ

一西郷氏ナリ

一未出發不相成哉

一已ニ出發セリ

一何日頃

一已ニ發後兩三日ヲ過クヘシ

一當月六日ハ長崎ニ在リト聞ク

一昨日ノ報知ニハ必既ニ出發トアリ

一リゼンドル氏ハ何ツ頃出發スル哉

一歸京ノ上ナラテハ難相分候

候

一支那政府ハ此舉動無用ト可思モ難計併シ柳原氏途中於

テ能熟考被致候儀ト存候北京ニハ承知可有之候ヘ共福

建ニテハ突然ニテ可驚愕事ニ候

福建ニテ貴國人臺灣エ上陸シテ差支無之ト許スモ若シ

北京ヨリ咎ムレハ如何

譬ヘハ貴國北海道ヘ支那兵船來リテ去年來政府ヘ談判

濟ト陳フルモ黒田氏之ヲ可許哉

一自カラ支那政府ニテハ默許ノ體ニ有之自カラ降手ハ不好

事ト存候

一降手ハ不好共略取サルレハ不本意ナルヘシ

先陣ノミニテ不足ナル時ハ援兵モ御繰出可相成哉穩便

ノ御掛合ニハ餘リ多人數過交戦ニハ人數少ク相見候尤

鎮臺ハ廈門ニ不在福州府ニ在ルヘシ

一然リ福州ヘ向ル積ニ有之候

一福州ハ繫泊惡シク廈門ニハ良港アリ

一廈門ヨリ福州迄ハ何程アルヤ

一貴國ノ里數ニシテ百四十里計江路ニシテ往返及談判ヲ

合シテ一週日モ可費

畢

五四 五月九日 寺島外務卿ヨリ
三條太政大臣宛

征蕃一件ニ付英國公使ヨリノ申入ニ對スル回答
方針ニ關シ伺ノ件竝ニ之ニ對スル三條太政大臣
指令

〔朱書〕
〔第三百六十五號〕

臺灣事件に付英公使ヨリ來翰の回答伺

臺灣事件に付別紙の通英國公使ハルリーパークスより申立候右來書中蒸氣ニツホール船へ兵隊又は亞米利加士官二人乗組廈門に向け長崎出帆云々と記載有之且清國へ關係の廉等來書に對し如何回答書差遣可然哉御指揮有之度依て公使よりの横譯書翰添相伺候也

明治七年五月九日

外務卿 寺島宗則

太政大臣 三條實美殿

〔朱書〕
一伺之趣ハ別紙之通大隈參議へ電信ヲ以テ相達候條其旨相心得可致

吏部 尙書 毛
軍機大臣 兵部 尙書 沈
頭品頂戴 兵部 左侍郎 崇
三品頂戴 通政使 司副使 夏

照會事、照得

貴國與中國自換約以來、各盡講信修睦之道、彼此優禮相待、友誼日敦、上年

貴副島大臣奉

使來華、與本王大臣諸事和商、情意頗洽、五月間

副島大臣特遣隨員柳原繙譯官鄭來本衙門面詢三事、一澳門是否中國管轄、抑由大西洋主張、一朝鮮諸凡政令、是否由該國自主、一即臺灣生番戕害琉球人民之事、擬遣人赴生番處說話各情、本王大臣當於晤譚時、詳論所詢原委、嗣經

貴國繙譯官鄭答覆、謂澳門地方、恐須通商、不過詢問明晰、爲將來議辦張本、朝鮮之事、冀望中國調停其間、可藉中國之力勸解、若臺灣生番地方、祇以遣人告知、嗣後日本人前往好爲相待、其意皆非爲用兵等語、足見邦交益固、彼此均泯猜嫌、迨

貴副島大臣瀕行時、握手言別、本王大臣曾向

一 臺灣生番討撫一件 五五

回答事

七二

明治七年五月十八日

〔朱印〕
太政大臣 三條實美印

註一、本號文書中ニアル「公使よりの横譯書翰」ハ五〇和譯文ノ寫ナリ
二、右文書朱書指令中別紙ハ五二ナリ

五五 五月十一日 清國恭親王等ヨリ
寺島外務卿宛

征蕃一件ニ關シ眞僞照會ノ件
附記 右英譯文

六月四日清國總理衙門雇英人ケーン本省え持參

〔朱書〕
照會

理藩院 右侍郎 成
工部 尙書 崇
戶部 尙書 董
軍機大臣協辦大學士吏部尙書 寶
和碩 恭親 王
軍機大臣大學士管理工部事務文 爲

大清欽命總理各國事務

貴副島大臣觀面提及、嗣後須按照修好條規所稱、兩國所屬邦土、不可稍有侵越、承

副島大臣以固所甚願一言相答、溯自

副島大臣駐華多日、竝未向本王大臣議及前詢三事、而本王大臣亦從無於條規外、允有別事、彼此兩國、當不致另有言外事端、惟現准

各國駐京大臣均來向本王大臣告知、

貴國與兵前赴臺灣有事生番、竝新聞紙所載、及接到中國沿海各地方官申報、本年二月間、有

貴國大戰船一隻寄泊廈港擬借校場操兵、竝據貴國帶兵官聲稱、係自臺灣澎湖而來、查臺灣一隅、僻處海島、其中生番人等、向未繩以法律、故未設立郡縣、即禮記所云不易其俗、不易其宜之意、而地土實係中國所屬、中國邊界地方、似此生番種類者、他省亦有、均在中國版圖之內、中國亦聽其從俗從宜而已、此次忽聞貴國欲與師前往臺灣是否的確本王大臣未敢深信、倘貴國真有是舉、何以未據先行議及、其寄泊廈港兵船、究欲辦理何事、希即見覆、是所深盼、爲此照會

七三

貴外務省大臣查照可也、須至照會者

右 照 會

大日本國外務省大臣

同治拾參年參月

貳拾陸 日

(右和譯文)

照會

(原注未書) 各名号下ノ一字ハ皆姓也内 恭親王ノ王ハ姓ニアラス

理藩院 右侍郎・成
工部 尚書・崇
戶部 尚書・董
軍機大臣協辦大學士吏部尚書・寶
和碩 恭親 王
軍機大臣大學士管理工部事務・文
吏部 尚書・毛
軍機大臣兵部尚書・沈
頭品頂戴兵部左侍郎・崇
三品頂戴通政使司副使・夏

大清欽命總理各國事務

照會スル爲メノ事。照シ得タリ。貴國中國與換約セシヨリ以來。各々信ヲ講シ睦ヲ修ムル之道ヲ盡シ。彼此優禮相待チ。友誼日ニ敦ツシ。上年 貴副島大臣。使ヲ奉シ華ニ來リ。本王大臣與諸事和商シ。情意頗ブル洽ラク。五月間ニ。

島大臣ノ華ニ駐マレル自リ多日。竝テ未タ本王大臣ニ向ヒ。前詢ノ三事ヲ議カリ及ボサズ。而シテ本王大臣モ。亦タ從テ條規ノ外ニ於テ。別事有ルヲ允スル無ケレバ。彼此兩國當サニ另ニ言外ノ事端有ルヲ致サ、ルベシ。惟現ニ 各國駐京ノ大臣。均シク來テ本王大臣ニ向ヒ告知スル事ヲ准ス。貴國ノ兵ヲ興シ臺灣ニ前赴シ。生番ニ事有ラントスル事ヲ。竝ニ新聞紙ニ載スル所。及ヒ中國沿海各地方官ノ申報ヲ接到スルニ。本年二月間。貴國ノ大戰船一隻有テ。厦港ニ寄泊シ。校場ヲ借テ兵ヲ操セント擬ル。竝ニ 貴國帶兵官ノ聲稱スルニ據レハ。臺灣澎湖自リ而來ルニ係ル。查スルニ。臺灣一隅ハ僻處ノ海島。其中ノ生番人等ハ。向未タ繩ニ法律ヲ以テセズ。故ニ未タ郡縣ヲ設立セズ。即チ禮記ニ云フ所ノ。其俗ヲ易ヘ不。其宜キヲ易ヘ不ル之意。而シテ地土實ニ中國ノ所屬ニ係ル。中國邊界ノ地方。此ノ似キ生番種類ノ者。他省ニモ亦タ有リ。均シク中國版圖之内ニ在リ。中國モ亦タ其俗ニ從ヒ。宜キニ從フニ聽スル而已。此次忽チ聞ク。貴國師ヲ興シ臺灣ニ前往セント欲スト。是レ的確ナルヤ否。本王大臣未タ敢テ深ク信ゼズ。倘シ 貴國眞ニ是擧アラバ。何ヲ以テカ未ダ先ニ議及ヲ行フニ據ラザル。

副島大臣特ニ隨員柳原。翻譯官鄭ヲ遣ハシ。本衙門ニ來リ。三事ヲ面詢ス。一ツハ。澳門ハ是レ中國ノ管轄ナル否ヤ。抑モ々大西洋ノ主張ニ由ルヤト。一ツハ。朝鮮諸凡ノ政令ハ。是レ該國ノ自主ニ由ルヤ否ヤト。一ツハ。即チ臺灣ノ生番。琉球人民ヲ戕害スル之事ハ。人ヲ遣ハシ生番ノ處ニ赴キ。說話セント擬ルトノ各情ナリ。本王大臣晤譚ノ時於當リ詳ラカニ詢フ所ノ原委ヲ論ス。嗣テ 貴國翻譯官鄭ノ答覆ヲ經。謂ハク。澳門ノ地方。恐ラク須カラク通商スベシ。詢問明晰ニシテ。將來議辦スルノ張本ト爲スニ過キズ。朝鮮之事ハ。中國ノ其間ニ調停シテ。中國之力ヲ藉リ勸解ス可キ事ヲ冀望ス。臺灣生番地方ノ若キハ。祇以テ人ヲ遣ハシテ告知ス。嗣後日本人ノ前往セハ。好ク相待ツヲ爲サシ事ヲ。其意皆ナ兵ヲ用ユル爲メニ非ラザル等ノ語ナリ。邦交益々固キヲ見ルニ足リ。彼此均シク猜嫌ヲ泯セリ。貴副島大臣。行クニ瀕ム時ニ追ヒ。手ヲ握リ別ヲ言フ。本王大臣會テ 貴副島大臣ニ向ヒ。面ヲ覲テ提シ及ベリ。嗣後須カラク修好條規ノ稱スル所ヲ按照シ。兩國屬スル所ノ邦土。稍々侵越有ル可カラザル事ヲ。副島大臣ノ固ヨリ甚タ願フ所トノ一言ヲ以テ。相答フルヲ承ケタリ。溯ルニ。副

其厦港ニ寄泊スル兵船ハ。究ニ何事ヲ辦理セント欲ス。希クハ即チ覆見ヨ。是レ深ク盼スル所。此ガ爲メ。貴外務省大臣ニ照會ス。查照シテ可也。須カラク照會者ニ至ルベシ。右照會ス。
大日本國外務省大臣へ。
同治十三年三月二十六日

註 右文書ノ英譯文記録中ニ存スルニ付便宜左ニ附記ス

(附記)

Translation.

26th, 3rd Month, 13th year
of Do-Chi.

To
His Excellency, the
Minister of Foreign
affairs of Japan.

Sir,
Since your country concluded a treaty with China, the obligations of mutual concord and goodwill have been fulfilled on both sides and the sentiments of respect and friendship have been more and more

cultivated towards each other. Last year too, on the occasion of the mission of the Minister Soyeshima to China, we had very friendly consultations with him on several matters.

The same year, in the fifth month, Yanaghiwara, an officer attached to the mission and the interpreter Tei came to our office by the special order of the Minister Soyeshima to ask us the questions about the three points, first of which was whether the island of Macao belongs to the jurisdiction of China or to that of Portugal; the second was whether Corea constitutes an independant Sovereignty or not, and the last related to the question of the proposal of despatching a mission to the savages of Formosa for the purpose of inquiring them after the murder of some Loo-Choo islanders by them; and in this interview we explained accurately the true positions of these points. Subsequently it was again said on the part of the minister Soyeshima, by the words of the interpreter Tei, first that it being possible for Japan to trade with the island of Macao, she only desired beforehand

to establish a basis for the future negotiations by ascertaining whether this island belongs to China or not, secondly that as for the affair of Corea, Japan desired to get the intervention of China for settling the dispute and lastly that the intention of Japan in regard to the Formosan savages in sending off a mission was only to desire from them the good treatment of her people in future, if they ever go to their districts, and not in any ways to make war upon them. This was a token of good relation between China and Japan and all distrust, if any, was at once cleared away on both sides. Afterwards, when on the occasion of the Minister Soyeshima's taking leave of us, we shaking hands said that the two nations must always observe the provisions of the treaty and forbear to intrude on each other's territory, he answered that this was the very point he most desired. Since the departure of the Minister Soyeshima, there have elapsed a great number of days, but there was again no question to us of the above-said three points nor we ever admitted the existence of any matter beyond the

provisions of the treaty and we thought there shall be no reason to apprehend any disturbing cause between the two governments. But now, all the foreign Ministers residing at Peking inform us that Japan is going to dispatch an army to Formosa to make war upon the savages of that island and besides, the Newspapers, the intelligences from the seacoasts and the reports from our local officers inform us, that in the second month of the present Year, a vessel of war belonging to your Country anchored in the harbour of Amoy and demanded to make use of the drilling-ground there for drilling her crew, and also that in the words of the commander, she came from Formosa and the Pescadores. Formosa is an island lying far off amidst the sea and we did not yet restrain the savages inhabiting it by any legislation nor establish any government over them, following in this a Maxim mentioned in Rei-Ki "Don't change the usages of a people but keep their proper ones". But the territories inhabited by these savages are truly within the jurisdiction of China; and this is also the case

with several savages inhabiting other remote provinces within the jurisdiction of China with whom China permits to preserve their own usages proper to them. We hear now with astonishment, that Japan intends to send an Expeditionary Corps to Formosa, but still we do not firmly believe that this is truly the case. If truly so, why do you not consult us beforehand of it? For what purpose is the vessel destined which lies now anchored in the harbour of Amoy? Truly hoping your Excellency therefore to reconsider and examine this matter.

We have the honour to be your
Excellency's obedient servants.

The signatures of the Prince
Kong and nine other general
Commissioners of the foreign
affairs of China (Tsungli-Yamen).

五十六 五月十一日 李清國閩浙總督ヨリ
西郷臺灣蕃地事務都督宛

臺灣全地ノ清國版圖タル所以ヲ力説シ臺灣ハノ
出兵ハ日清條約違反ナルニ付撤兵アリ度旨照覆

ノ件

附記 右英譯文

大清欽命頭品頂戴兵部尚書閩浙總督部堂李

照覆事照得本年三月廿三日、接准二月廿七日

貴中將照會、內開

等因前來

本部堂查臺灣全地、久隸我國版圖、雖其土著、有生熟番之別、然同爲食毛踐土、已二百餘年、猶之粵楚雲貴邊界、獠獠苗黎之屬、皆古所謂、我中國荒服羈靡之地也、雖生番、散處深山、獠狃成性文教或有未通、政令偶有未及、但居我疆土之內、總屬我管轄之人、查萬國公法云、凡疆內植物動物居民、無論生斯土者、自外來者、按理、皆當歸地方律法管轄、又載發得耳云、各國之屬物、所在即爲其土地、又云、各國屬地、或由尋覓、或由征服遷居、既經諸國立約認之、即使其間或有來歷不明人、皆以此爲掌管既久、他國則不應過問、又云、各國自主其事、自任其責、據此各條、則臺灣爲中國疆土、生番定歸中國隸屬、當以中國律法管轄、不得任聽別國越俎代謀、茲

貴中將照會、以臺灣生番、戕殺遭風難民、奉

貴中將、撤兵回國、以符條約而、固邦交可也、須至照會者、
右 照 會

大日本陸軍中將兼陸軍大輔 西鄉

同治十三年三月廿六日

註一、右文書ハ六六附屬書ナルモ此處ニ掲ケタリ

二、右文書ハ五月二十三日琅璫ニ於テ西郷都督ニ手交セ

ラレタリ

三、右文書ノ英譯文記錄中ニ存スルニ付便宜左ニ附記ス

(附記)

Translation.

Li, appointed by Imperial authorities of China official head, Governor-General of Fookien and Che-kean, Chancellor of the military board, and the bearer of the Cap-ornament of the first class,
The subject of Communication

Whereas on the twenty-third day, the third month, the present year, I have received the communication of your Excellency dated the twenty-seventh day, the second month, informing me of such and such

命率兵、深入番地、殲其兇首、以示懲戒、在番、疊逞悍暴、殺害無辜、即按以中國之法、亦律所必誅、惟是臺灣全地、素屬中國、

貴國政府、並未與總理衙門商允、作何辦理、逕行命將統兵前往、既與萬國公法違背、亦與同治十年所換和約內、第一第三、兩條不合、然詳閱來文、先云、招彼酋長、百散開導、使毋再踏前轍、復云雖云率兵前往、惟備土番抗抵、不得已始稍示膺懲、是

貴中將之意、但在懲辦首凶、以杜後患、並非必欲用兵、所開兩案首凶、其備中州遭風難民、前由生番送出、並未戕害一人、當經本部堂、派員送滬、交領事官送還、自枋寮至瑯瑤一帶、早經本部堂、飭令臺灣道委員、建造隘寮、選舉隘丁隘首、遇有外國遭風船隻、以便隨時救護、此後

貴國商民、來往該地、當不至有劫殺之患、去歲備中州難民、並未被害、即其明證、其琉球島、即我屬國、中山國疆土、該國世守外藩、甚爲恭順、本部堂一視同仁、已嚴檄該地方官、責成生番頭人、趕緊勒限、交出首凶、議抵、總之臺灣在中國、應由中國自辨、毋庸

貴國代謀、各國公使、俱在京師、必以本部堂爲理真、應請

circumstances concerning the matter, on examining the subject I, official head, have found that the whole country of Formosa has belonged to our country for long time and though there is the distinction of tame barbarians and wild barbarians they equally live in our land, and are our people, for two hundred years, just as the Yo, Dou, Mean and Lay who live in the borders of Canton, Kwan-si, Hu-nan (湖北) Hoo-pih (湖北), Yun-Nan and Kwei-Choo, all these being what in the ancient times, were called the continuation of "Wild dominion". Though the wild barbarians have isolated themselves in distant mountains and assumed wild habits and it is possible that the influences of civilization should not penetrate them and that the orders of the government should not reach them, yet they are within the limits of our Empire and subject to our jurisdiction.

In examining the international laws I have found that it is said that the laws of every state control, of right, all the real and personal property within its territory, as well as the inhabitants of the ter-

ritory, whether born there or not, any citing Vattle that, the domain of a nation extends to all its just possessions, and also that their (Nations) claim to the possessions held by them was originally derived from discovery, or conquest and colonization and has since been confirmed in the same manner, by positive contract. Independently of these sources of title, the general consent of mankind has established the principle that long and uninterrupted possession by one nation excludes the claim of every other; every nation can control every act made by it and is responsible for such a act.

Citing the above passages as authorities, as Formosa is the land belonging to China and wild barbarians are certainly under the control of China, they ought to be governed by the laws of China and it is not allowed that another country should act in place of China.

Now it is stated in the communication of your Excellency that, as the wild barbarians of Formosa have murdered the poor people who have met the contrary winds, your Excellency who has received

chastise the principal offenders to prevent the future repetition of barbarious acts; and you do not necessarily make a war.

To return to the case of the principal offenders, those poor people of the province of Bichiu who have met the contrary winds, have already been sent out from the land of the wild barbarians and there is no one who has been murdered; on the contrary, I, official head, appointed a member who sent them to Shanghai and delivered them to the consul there who sent them home; and as to the tract of land from Fou-Lion to Lankiou, I, official head, gave to the circuit of Tae-Wan the orders to the effect that one member should be appointed who shall construct the watching office beside the entrances and appoint watchmen and a chief of them so that whenever any foreigner who should have his vessels meeting the contrary winds may be saved; thus henceforth the merchants of your country who would come to those places will be free from further disasters.

Under such circumstances it is evident that those

the orders, advances into the native's land very deeply, leading the troops and that your Excellency will put to death the principal offenders, so that for the future such atrocities may be prevented. The wild barbarians who gratified their barbarious passions without cease and murdered the innocent, ought by the laws of China to be put to death; and Formosa belongs to China, but your government did not negotiate with the Tsun-li-ya-men as to how they act, before they appointed a general who is advancing forward, leading the army; such a proceeding is contrary to the international laws and also to the first and the third articles of the treaty contracted in the tenth year of Toung-Chi. But on closely examining your communication I, found you say that you should call the chieftan and instruct him by all means in your power in order that he may not repeat the recent acts; and that it is true that you advance forward leading the army, but this is a mere provision against the resistance of the natives and exercising some punishment, if necessary; such being facts, your intentions are to

poor people of the province of Bichiu had not been injured the last year.

As for the islands of Loo-Choo, they are the territory of Chiu-zan-Kok, our tributary state, and have kept our distant dominion and very obedient, therefore I do not consider the people as strangers and in the present case, gave to the proper local authorities the orders to the effect that they should require of the chiefs of the wild barbarians the conclusion of the case by delivering the principal offenders within a stated time; and that they shall institute the proceeding against those offenders.

Lastly Formosa belongs to China and consequently should be managed by China itself and it is not needful that your country should act in place of us. All the representatives of every nation who are in the Capital, will deem me right.

And I beg you that you will disband the troops and return home to comply with the treaty and confirm the international relations.

The above is my communication.

To Saigo, General of the second class, with addi-

tional office of Vice Minister for the Army.
Twenty sixth day, the third month, the thirteenth
year of Young-Che.

五七 五月十三日

小牧開拓七等出仕(上海ニテ)ヨリ
黒田開拓次官宛

征臺一件ニ關スル清國ノ動靜通報ノ件

拜啓愈御清健御奉職被成御坐奉恐賀候陳は下官義去る十日
長崎より申立置候通同日夜十時頃飛脚船へ乗込今日午前十
時無異上海へ着港佛國租界内大馬路の長崎商人木棉屋と申
店へ寓居仕候今便は下官並丸田兩人にて松村谷元兩氏は長
崎へ滞在次便より來航の筈に御坐候當地着早速日本領事初
め面會當國の事情聞糺し候處去る五月四日上海道臺沈秉成
と申者より別紙の通日本領事品川忠道へ申遣候由右の趣に
ては臺灣生蕃地方とても支那輻員中なれば我國より勝手に
着手可致筈に無之意十分に相見尤是は道臺一己の議論には
無之即ち當國の外國事務總理衙門の趣意と被察申候左候得
は支那政府は臺灣全島を其管内と致し居候には相違無御坐
且又當地新聞紙をも略覽仕候に日本の支那政府に照會なく

臺灣に出兵するは不條理との議論餘多有之畢竟昨年天津に
ての談判は全く無證據の物に屬し此末長崎より臺灣へ向け
出發の諸船彼地にて事を發し候上は尙更當政府とは勿論各
外國へ被對候ても御難題の次第と鄙考仕候前條書面早速領
事より東京へ差立候由に御坐候得は最早入尊覽候半と相考
候へ共爲念寫取差上申候下官にも當地着緊急の事情も御坐
候は、直に歸朝親述仕候含に御坐候處先た切迫の形況には
無之候間六七日も此表事狀探偵仕松村氏等來會の上は福州
厦門へ罷越可申候
福建地方へ支那より出兵の事は確乎たる報知相分り不申候
得共福州には數多の兵員有之候事故此節防備の爲兵隊繰出
し候義は左も可有之との評判に御坐候
長崎より進發の諸船の内二隻は已に厦門着の由當地へ相分
り居申候
前條沈秉成の書面に我領事の回答此義は自分限り回答可致
事件に無之間早速本國政府へ稟報の上何分の挨拶に可及と
の大意に御坐候就ては何れ追々使節被差立不申候ては不相
叶儀と奉察候何分にも此節の事件は乍恐御着手の順序不相
整頓る勿卒に涉り候歟と奉存候

支那政府も兩三年來軍艦を造り又はカウトリンク砲并スベ
ンセル銃或は水雷等外國より購入乍不開化も兵備には格別
注意致居候事に承り申候

支那帝は従前九重の内に深居極めて尊大に致居候處此頃は
北京市中を不時騎馬杯にて往來人民帽を脱して敬禮するの
み甚易簡の爲體且老人に遭ふときは馬を止て之を慰問する
杯と申程の次第追々開化に赴き候義と被察申候 此は新聞紙
に見る所なり

右は草略明日長崎への船便へ托し候積にて不取敢見聞の儘
御報知申上候也

五月十三日

小牧 昌 業

黒田次官公閣下

追伸先日當地に一混雜の事件有之候由上海城西に當地寄
留甯波人の墳墓有之右の地を佛人馬車道を造るとて打崩
候故甯波人大沸騰遂に去る三日同所にて甯波人佛人と争
鬪支那は六人即死佛は二人手疵の由其夜支那人佛人の家
屋二軒放火致し夫より兩國官員立會に相成各兵を備へ談
判あり其後稍平穩に相成候得共今に未決着の由支那人は

固より過激に候得共佛人も不安の所爲有之候由尙追々詳
細の始末可申上候

一昨日英公使パークスより當地の英領事へ電報日本にて
臺灣出兵暫く見合候得共決して取止め候趣意には無之旨
申遣せり當地領事より直に北京英公使へ通知致候由に御
坐候

註 右文書ニ「前條書面早速領事より東京へ差立候由云々

トアルモ其ノ記録見當ラス尙小牧ヨリ黒田宛送附セル
該書面寫ハ四七ニ掲ケ置ケリ

五八 五月十五(假)

大久保參議復命書

先月廿九日横濱出帆本月一日午前八時神戸へ着艦同日二日曉
四時同港ヲ發シ同三日夜九時半長崎へ着艦翌四日於生蕃
事務本局大隈參議へ面會仕實況ノ顛末具ニ承り候既ニ先月
廿七日夜福島領事雇米人カツスル。ワツスン。ハウス。三
名ヲ卒シ福州總督へ公告書ヲ齎シ有功丸ヨリ厦門へ向ケ出
帆續テ本月二日谷副總督赤松少將護兵千餘ヲ卒シ日新艦孟

春艦三邦艦類船四艘社寮ニ向ケ出帆セシ趣ナリ依テ熟考スルニ一舉進退ノ儀何レニ致セ大難事ノ所係ハ論ヲ竣タス剩ヘ如此機會ヲ誤リ終始全備ノ策ヲ得ル能ハス既ニ福州總督ヘ公告書ヲ送リタル上ハ不可止ノ實況故此上可成清國ニ對シテハ勿論外國交際上不都合ナキ様注意シ生蕃處分着手宜ヲ得寬急順ヲ追ヒ其目的ヲ達スルノ所斷ニ出ル外考慮無之第一ニ柳原公使至急渡清雇米人三名進退西郷都督速ニ出發等ノ件々別紙ノ通即決仕候且西郷都督儀東京出發前奉スル處ノ

勅旨ニ乖戾セル號令等ハ今日迄無之積年去萬一不都合ノ次第モ有之候テ御譴責ヲ蒙リ候儀ハ固ヨリ期スル處ナリト承リ候

右於長崎生蕃處分兵隊進退等實際ニ附

御委任ノ權内ヲ以テ裁決セル大略ナリ不容易重事勿卒

ニ涉リ

御旨趣ニ觸レ候儀恐縮仕候得共清國ニ對シテハ勿論外

國交際上不都合ヲ生シ國家ノ大難ヲ釀出候節者 臣利通

其責ヲ引請候覺悟ニ候此段復

命仕候ニ付宜

ハ臺灣全島ヲ我管内ト見做居候譯ニ御坐候且又英公使ハ一クスヨリ日本ニテ臺灣進討ハ暫時見合ノ筈ニ候ヘ共到底取止メノ意ニハ無之自カラ清國ヘ使節差立候様可相成旨當在留英領事ヘ電報致候事情等推考仕候得ハ外國人支那政府ヲ挑撥致候儀モ可有之尤新聞紙等生蕃地方ヲ清國管轄ト斷然記載候ハ多クハ道臺贈書ノ後ニ御坐候支那人ヘ相尋候テモ皆臺灣全島ハ我中國ノ地ト相答申候

一昨年臺灣事件談判ノ趣品川領事ヨリ承リ候處柳原副使大使ノ命ヲ受ケ通商大臣ヘ面會臺灣ノ土蕃我國民ヲ殺害致候ニ付其罪ヲ正シ候筈ニ候間此旨及通知候段被申述候處彼レ同島ノ土蕃ハ未開ノ人民ニテ屢兇惡ノ所行アリ然ルニ貴國ノ人民ヲ害セシハ未聞ト答フ琉球人ノ殘害ニ罹リシヲ以テ演說被致候ヘハ彼琉球ハ我屬國ニテ貴國ノ有ニハ有之間敷旨答ヘタリ柳原副使今日ノ應接琉球ニ付テ議論致候義ニハ無之琉球ノ我管轄タルハ素ヨリ確證モ有之ト言捨被罷歸其後此儘ニ相成居候由左スレハ口頭ノ掛合スラ未タ不決着ノ次第閣下ニハ兼テ事實御承知御坐候半下官共從前承リ居リ候義トハ大ニ逕庭仕居候
一當地ヨリ福州邊ヘ軍艦兵員等差送り候義ハ無之只兵器輸

御執奏奉願候誠惶

明治七年五月

參議兼內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美殿

註一、本號文書ハ「大久保利通文書」ニ據レハ五月四日附ナル處「大久保利通日記」ニハ五月十五日ニ三條太政大臣ヘ提出ノ旨記載シアルニ付假ニ此處ニ挿入ス

二、「別紙」ハ便宜四六ニ掲ケタリ

五九

五月十七日 小牧開拓七等出仕(上海ニテ)ヨリ 黒田開拓次官宛

征臺一件ニ關スル清國ノ動靜續報ノ件

附屬書 五月十四日上海申報拔萃

琉球人清國福州ヘ進貢ノ件

拜啓文履益御清適御奉職被成御坐奉恐悅候陳ハ下官儀去ル十三日無異上海着港仕早速見聞ノ形況第二號同日附ニテ開申仕置候間御落握ノ儀ト奉存候

一上海道臺沈秉成ヨリ品川領事ヘ贈書ノ趣意道臺一己ノ旨ニ出候歟又ハ政府ノ意ヲ承候歟粗聞繕候處全ク外國事務總理衙門ノ議論ニ相違有之間敷左スレハ支那政府ニ於テ

送ノ事有之趣ニ御坐候福州ハ福建省ノ在ル所自ラ兵營モ相立居候得ハ同所ヨリ保護ノ爲臺灣ヘ出兵ノ儀ハ有之候半福建省總督ノ意ハ如何有之候哉當地ノ景況ニテハ政府ノ命ヲ以テ此度日本派遣ノ人員ニ抗拒ノ勢ハ相見不申候下官ニハ折角福州廈門ノ兩處ヘ出帆ノ便ヲ相待申候五六日中ニハ彼地ヘ發向其實境ヲ探リ可申筈ニ御坐候
一長崎進發ノ諸船不殘臺灣ヘ着上陸ノ由當地ニ相分リ申候得共其後ノ動靜ハ未詳

一前ノ如ク臺灣事件葛藤ヲ生シ候^(附屬書)別紙ノ通新聞紙中ニ琉球人福州ヘ來貢セリ先例ノ通進口ノ貨物海關稅ヲ免候趣閩海關稅管務ヨリノ届書相見申候右ハ北京ノ官報ヲ記錄致候者ニ付全ク實說ニ相違無之臺灣土蕃ノ支那ノ管内管外ハ姑ク置テ不論琉球進貢トアレハ琉球ハ猶支那ノ屬國タルニ似タリ昨年黒岡勇之丞當國內地遊歴ノ節琉球人北京ヘ罷越候ヲ見受候由先承居處此事件旁參考仕候得ハ矢張臣禮ヲ支那ニ修メ候様子ニ御坐候事々不都合ヲ極候儀ト嘆息ノ至ニ不堪候

一大久保公歸京後廟議如何御決定相成候哉定テ當地ヘ使節差遣ノ御都合ニ可相成歟乍毎閣下内外御配慮ノ筈ト奉恐

察候

一 清國軍艦總數二十艘計有之由各處ニ散在當地ニハ一艘川口ニ停泊致居候上海製造局ニテ軍艦一隻不日成功ノ筈ニ御坐候

一 下官着港前當地ニテ佛蘭西人寧波寄留人墳墓ノ地ヲ馬車道ニ致候件ヨリ紛紜ヲ生シ聊爭鬪ヲ起シ終ニ支那人佛人ノ家屋ニ放火シ二軒程燒失支那ニテハ上海ヲ距ル二十里計モ有之候鳳凰山ニ屯駐ノ英式兵隊千人餘モ來集巡備佛ニテハ軍艦ノ兵員ヲ繰出シ各防護ノ手當致シ一時ハ騷擾ノ由當時ハ全ク鎮靜致候得共兩國ノ談判未タ結局ニ至ラス先ツ穩ニ相運候模様ニ御坐候外國人モ皆佛ノ不條理ヲ咎メ居申候

一 開通號ノ儀何分昨年ヨリ當港貿易不景氣ニテ商法十分ニ不相立輸送ノ貨物總テ相場下落致シ仍テ僅ニ十ノ二三ヲ賣捌キ候ノミ餘ハ藏圍致置候處此頃社中ノ者壹人漢口ヘ罷越同處ノ景況探索ノ趣ニ御坐候右ハ一ト通承リ候迄ノ事ニテ尙委細ノ義ハ追テ取糺シ上申可仕候
右ハアカンタ號船使ニ托シ草々拜呈仕候尙後便可奉得貴意候頓首謹言

五月十七日

昌

業

次官公閣下

再啓同行ノ松村谷元兩氏ハ長崎へ上陸明後日當地着ノ船便ヨリ來航ノ筈ニ御座候下官ニモ本文ノ次第ニテ直様復命可致程ノ事モ無御座候間福州厦門等一ト通經歴彼是時日相懸可申候得共來月中ニハ是非歸 朝仕候様見積ニ御座候左様御含被下度此段申上置候也

一 長崎臺灣事務局ヨリ當地領事館へ電報致シ候節ハ暗號ヲ用候旨兼テ掛合相成居處未タ其符號相廻リ不申既ニ今日事務局ヨリ電信到來候得共何事タルカ領解難致由緊要事ニ可有之候得共兼テノ手筈不行届故終ニ其用ヲ失候義ニ御坐候

(附屬書)

三月廿九日上海申報

錄三月十三日京報

福州將軍兼管閩海關稅務奴才文煜跪 奏爲琉球國接貢船隻進口隨帶貨物循例免稅恭摺奏 聞仰祈 聖鑒事同治十二年十二月初六日據南臺口委員協領成基稟稱琉球國接貢船一隻

進口據通事楊延昇開送該船隨帶貨物清冊按則核計應征稅銀一百三十四兩三分一厘七毫五絲當即查照向例批令免其輸納以廣 聖主柔遠深仁宣示洋使去後隨據該口委員飭領成基報稱該通事楊延昇率領官伴水稍人等赴關望 闕叩謝天恩稟報前來除安頓館驛事宜由督撫衙門照例出奏外所有免過稅銀數目另繕清單恭呈 御覽伏乞 皇上聖鑒謹 奏奉 硃批該部知道軍併發欽此

六〇 五月十八日

寺島外務卿ト御雇米國人「リ・ゼンドル」トノ對話書

米國公使ノ申入ニヨル御雇米國人「リ・ゼンドル」等ノ差止ニ關スル件

明治七年五月十八日於外務省寺嶋外務卿御雇米人リゼントル臺灣事務に付對話の大意

石橋少丞通辯

一 應挨拶畢て

寺島卿 今度足下を呼戻せし義最初は此方にては支那於て格別故障は有間敷と思へり各國にても矢張同様に思ひ居たり足下達

一 臺灣生蕃討撫一件 六〇

が長崎へ出立後支那より軍艦を出せしなど諸説紛然と沸騰するに終りに呼戻す事に至れり

素より軍を出すには無之使節を送るなり

それを論ずるにはあらず只話を爲す而已

私出立前私が此事に付出立する事をビンハム承知いたし居候筈也又ワツスル外壹人も此事に付御雇相成し事も心得居る筈に候

一體此事件支那政府へ能く談判が整て居らず乍去支那政府にても敢て抗せざる筈也後ろより竊に往き事を爲すは支那政府於て見ぬ振にて黙許し置へし然るに其取計に無之公然と事を始めし故支那政府於ても黙許し置兼る事に立至れり最初支那政府と我官員と話致せし如くにすれば差支無し譬は長崎より不行佗處より竊に行かばよかりしに

私に於ては夫等の事には不構と存し候米國にて罪を問ひし事と同じ手續きなればなり

同じ手續にても違ふ處あり夫は足下か熟知する處なれば言ふに及ばず違ふ處は小兒が大人の爲す事を眞似るが如し、云はゞ支那政府は牛の如し容易に立上らず併尻を鞭つ者多き故止を得ず立上らねばならぬ

それ丈の者は以前は懼れなし今は懼れある様になりたり足
下等が長崎え行きて後夫が強くなりたり

ビンナムに不拘各國公使の言ふ所は此度の仕組を問ふに
あり其仕組をすれば跡で異論をする事はなし夫故出立前
スミツの處にて其仕組を告る方差支なしと私申したる事
あり

其報が六ヶし候

一時には六ヶ敷けれ共段々の話にて自然と其目的が相分
り候

支那政府の許を不受遣ると云ふ所の報知が六ヶ敷し

夫は已に先例あり米國にて行し時も土人に直に懸合たり

支那政府の臺灣を見る半分は海の如し

併夫は悪しといふ

昨年北京より歸りし頃圖面上に付てパークスにも一應話
したり其時パークスは私の見込に力を附られたり別段私
の見込をよしとは不云候へ共早く往ねば其内に風が吹く
風が吹は急に模様替ると云ひたり

餘り米英などの船を雇ひ事が大きくなりし故

私も事の大きくならぬ様にと思ひ大隈大久保兩君と私か

に談判致したり然るにいつとなく事が大きくなる様に至
りたり

夫が遂に政府の務めを缺ねばならぬ様になりたり
ビンナムは素より臺灣には不構ビンナムの論は新聞など
より起りし事なりビンナムは其土地の經見もなし固より
構ふ譯は無之候

此節支那よりも手紙來たり夫も英などの説と同じ事也

政府へ宛て参りし哉

上海にある領事迄参りし也

左様の筈にはあらず

夫が則尻を打つ者あれば也

私承りし説には支那では不構と今左様に
夫が則立たる也

諭は支那政府は石段の如し極めて重もし脇より搥んとす
る共仲々重て不揚

船の事も何も云ふ筈はなし

僥倖で云ねはよし米公使が足下に逢度と云足下逢れて宜

實は今日面會いたしたり併し私は平民にて逢ふたり公然
と此事を話すには閣下の命なければ不逢今日逢ふたる處

公使曰委細承度候余曰日本政府より命を得る非れは公然
と話し難し公使曰素より強て聞んとは不云此事日本政府
と談判致置たる事なれば猶又談判すへし余曰元附きたる
ものは必離る事あり素より私出師に附たる事に非れば離
たと云ふ事はなし且今度の事は出師に非ず私此地の用が
濟臺灣へ往けとならば直に行へし公使曰ワツスル外一人
は厦門に出帆せしと眞なる哉余曰然り公使曰誰の命にて
出帆せし哉余曰不知公使曰米國の法に背く事はあるまじ
余曰兩人の心得は私不存候へ共先米國の法に背く事は爲
まじと思へり

此處はリゼン
ドルの考也

元來ビンナム此兩人の此事に付被雇たる事

は兼て存知居候尤ビンナムは支那管轄地へ

行く事と思ひ居たり然るに支那管轄地へ行

たる故ビンナム不承知なり併支那管地へ行

ともアジロットが西海岸を測量すると同様

也測量の節土人が襲撃せば捨置譯には不參

公使曰臺灣處分の後日本政府より同所へ人を置と此事如
何余曰夫は如何歟不知以前日本管轄のもの被殺害し故其
罪を問ん爲め也公使曰足下が離て仕舞へは不構夫丈の事

を聞は其先の事は日本政府へ引合ん余曰二人の事は如何
歟は不知私一分の事は話すへし私義昨年歸國せんとする
に當りデロングより此事の目的の爲め止まれと云然るに
私既に歸國の意決したれば止らぬ積咄致候處段々我政府
へデロングより申立政府にても承知の上止まる事になり
たり然るに君より解職される筋はなき筈也公使云辭職せ
よとは不云余曰此目的を果たす爲に止りて夫を果す事を
拒まれては則辭職せよと云に同じ且私の月給を奪ふなり
君に於て法に觸ると云ふとも私に於ては法に觸るとは
不思議に又私平民になりて臺灣へ行は如何公使云出師に
離たる上は異存なし

以下同じ事を繰返すの語略す

只今の話は君と公使との間の事也右は委細承知致したり

ビンナムえ委しき事を話せよとならば如此重冊なりと手

眞似を以云ふ

私よりビンナムえ對し辯解を望まるゝ事はあらず哉

只今承りたる所にて充分也今日は他の用事ある故他日更に
逢ふへし

六一 五月十九日 三條太政大臣ヨリ院省使府縣ヘノ達書

臺灣生蕃問罪ノ爲西郷都督ヲ發向セシメタル旨
通達ノ件

第六十五號

院省使府縣

明治四年十一月琉球藩人民臺灣蕃地へ漂到シ土人ノ爲ニ
刎殺セラル、者五十四名同六年三月小田縣人民四名漂到
シ亦兇暴ノ所爲ニ罹リ候事共有之去歲全權大使清國ニ於
テ此事談判ニ及ヒ置候抑臺灣島ノ儀我國ニ接近シ往々漂
流人モ有之殊ニ方今我航海次第ニ盛ナルノ際向後我人民
彼地方へ航スル者可有之然ルニ前件ノ如キ所爲屢有之ニ
於テハ甚以テ憂慮スヘキ事ニ候依テ今般陸軍中將西郷從
道ヲ都督ニ任セラレ發向爲致曩ニ我人民ヲ暴害セシ罪ヲ
問ヒ相當ノ處分ヲナシ且ハ後來我人民航海ノ安寧保護ノ
爲メ屹度取締ノ道ヲ可相立御趣意ニ候條此旨相達候事
明治七年五月十九日

太政大臣 三條 實美

六一 五月十九日 寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

征蕃一件ニ關シ清國駐劄米國代理公使ヨリノ來
信ニ關シ内報ノ件

明治七年五月十九日於外務省寺嶋卿米公使臺灣事件に
付應接の大意

石橋少丞通辯

一應挨拶畢

今日罷出候は臺灣の事に付支那政府の説を口上を以申上
んとなり此説貴政府に於て御裨益とも可相成存し候間申
上度尤拙者の申立に依り斯く被致よと申事には無之候
四月十九日ゼンドルより北京への電信を得たり拙者共
より臺灣の事に付異論の手紙を差出したる日と同日也
其電信は誰が落手せし哉
其電信を落手せしものは米人にてゼネラルウイリヤムと
申もの也
臺灣一件に付關係のものが日本政府と支那政府と行違ふ
たる事を爲すを許すへからず

然るにウイリヤムは此事件も又リゼンドルが此事に關し
て如何なる任たるを知らされは返事する事能はず且公使
の手を経ず電信の來るを恠しめり

日本より出兵の事支那政府へ報知したるものあり是は拙
者にはあらず誰か他の公使なり夫に付支那政府於ても此
事に注意する由也

支那政府の答方は昨年副島閣下清行の節清國役人と臺灣
の事に付副島より會て談判なし且書簡も不受取又生蕃は
各風俗も異なり居候へ共夫を支那風に改むる事は致さず
并清國の法下に置譯にはあらず去土地に於ては清國の
管下なり

支那にては外國々が日本より攻入る事を留めると思へり
ウキリヤムの考は日本人を臺灣に於て住居せしむる企あ
りと此事支那にては黙許せまじ又生蕃於て日本人の來住
するを喜ひはせまじ支那日本は共に帝國也共に條約もあ
り今日日本の爲す處は條約上のライトより過たりと考ふ
リゼンドル、インテレスパリチイと書したり此譯不分
臺灣を取んとせば外國に敵對するものあるへし
以上はウキリヤムの考也委細の事はウキリヤムは不知右

書通は四月廿四日の狀也委細の事は日本公使清行せは道
々分るへし此時の手紙は始て也是より前は此事に付絶て
手紙を得たる事なし
拙者より此返事は雇米人の事は引合て雖手續を申遣ん
とす右報知の趣は御心得にも可相成と存し御懇親に付申
上候公然たる御話には無之候
御内話を承り大に心得に相成候
此時内話致すへき義有之趣米公使中に付筆者退く

六三 五月二十日 陸清國福建鹽法道ヨリ
上海在勤品川領事宛

臺灣蕃地ハ清國ノ領土ナルヲ以テ日本ノ出兵ニ
抗議スル旨ノ李閩浙總督ヨリ西郷都督宛申入ヲ
轉報スルノ件

大清欽命三品銜督辦通商事務署福建鹽法道陸
照會事同治十三年三月三十日奉
閩浙總督部堂李 牌開本年三月二十三日接准二月二十
七日

貴國陸軍中將照會內開臺灣土蕃之俗自古嗜殺行劫海客
蓄難是樂邇年我國民人遭風漂到彼地多被慘害我國委本
中將深入蕃地招彼酋長百般開導殛其凶首薄示懲戒使毋
再踏前轍以安良民即率親兵將由水路直進蕃地特備文報
明又附片內開琉球島人民六十六名遭風壞船漂到臺灣登
岸是處屬牡丹社竟被蕃人劫殺五十四名十二名逃生又備
中州人民利八等四名漂至臺灣卑南蕃地方亦被劫掠僅脫
生命我國政府是以遣使往攻其心庶使感發天良知有人道
而已故本中將雖云率兵而往惟備土蕃一味悍暴或敢抗拒
來使從而加害不得已則稍示膺懲之勢耳等因前來本部堂
查臺灣全地久隸我國版圖雖其土著有生熟蕃之別然同爲
食毛踐土已二百餘年猶之粵楚雲貴邊界獠獠苗黎之屬皆
古所謂我中國荒服羈縻之地也雖生蕃散處深山狹狹成性
文教或有未通政令偶有未及但居我疆土之內總屬我管轄
之人查萬國公法云凡疆內植物動物居民無論生斯土者自
外來者按理皆歸地方律法管轄又載發得耳云各國之屬物
所在即爲其土地又云各國屬地或由尋覓或由往復遷居既
經諸國立約認之即使其間或有來歷不明人皆以此爲掌管
既久他國即不應過問又云各國自主其事自任其責據此各

條則臺灣爲中國疆土生蕃定歸中國隸屬當以中國律法管
轄不得任聽別國越俎代謀茲准
貴國陸軍中將照會以臺灣生蕃戕殺遭風難民奉
命率兵深入蕃地殛其凶首以示懲戒在生蕃疊逞悍暴殺害無辜
即按以中國之法亦律所必誅惟是臺灣全地素屬中國
貴國政府並未與
總理衙門商允作何辦理逕行命將統兵前往既與萬國公法
違背亦與同治十年所換和約內第一第三兩條不合然詳閱
來文先云招彼酋長百般開導使毋再踏前轍復云雖率兵前
往惟備土蕃抗拒不得已始稍示膺懲是
貴國陸軍中將之意但在懲辦首凶以杜後患並非必欲用兵
所開兩案首凶其備中州遭風難民前由生蕃送出並未戕害
一人當經本部堂派員送滬交領事官送還自枋寮至瑯瑤一
帶早經本部堂飭令臺灣道委員建造隘寮選舉隘丁隘首遇
有外國遭風船隻以便隨時救護此後
貴國商民來往該地當不至有劫殺之患去歲備中州難民竝
未被害即其明證其琉球島即我屬國中山國疆土該國世守
外藩甚爲恭順本部堂一視同仁已嚴檄該地方官責成生蕃
頭人趕緊勒限交出首兇議抵總之臺灣屬中國應由中國自

辨毋庸

貴國代謀各國公使俱在京師必以本部堂爲理直除照覆
貴國陸軍中將請其撤兵回國以符條約外合行飭屬即便知
照等因奉此合就照會爲此照會
貴領事請煩查照辦理是荷須至照會者

右 照 會

大日本欽命駐劄上海管理通商事務領事品川

大清同治拾參年肆月初五日 照會

(焚餘)

註 「焚餘」ニ據レハ右文書ハ五月二十八日ニ陳上海同知ヨ

リ品川領事宛ニ函送セラレタルモノナリ

六四 五月二十二日(傳)

寺島外務卿ヨリ
英國公使宛

英國船艦及人民ノ征臺干與ニ關スル英國公使ノ
申出諒承ノ件

貼 紙

以手紙致啓上候然ハ五月五日附貴翰を以て我國兵隊臺灣發
向の義に付縷々御申越の趣致承知候右は此程中も屢申述候

一 臺灣生蕃討撫一件 六四

一札ケ下

(一記註外欄) (二同)

通りに候處我國民彼地へ漂到の節兇暴の所爲に罹り候事共
有之候に付會て副島全權大使清國政府え談判の次第も有之
候事にして右臺灣島は我國接近の地にして爾後往々漂流人
も可有之に付向後航客の安全を謀るため且先年我人民を暴
害せし罪を問ひ相當の處分をなさんため西郷陸軍中將を都
督に任し彼地へ發向爲致後來屹度取締の道を可相立見込に
有之候然るに右蕃民居住の地は清國所轄に屬し候により貴
國船艦人民とも此舉に與り候事御不承知の趣致承知候此段
回酬如此候敬具

明治七年五月廿二日草

寺島外務卿

大不列顛國全權公使

ハリリーエスパークス閣下

(貼紙)

此の返翰は今暫く可見合置事 (註 此處ニ山口外務少輔ノ花押アリ)

(下ケ札ニ)

人民の答ありて船艦の答なし且プロウンは英人に相違なき哉或は
米人にはあらざる哉再應正院え何ふへし (註 譯未也)

(圖外註記)
プロウンは英人に相違なし此答は既に出せし事ありと覺 宗則
(圖外註記二)
此答書翰を以て差出せし事更に無之候 (朱印)
(下ケ札二)

○今般清國政府に於て右蕃民居住の地は清國所轄附屬なる旨貴國
北京在留公使へ申出居候趣申來候由にて○貴國船艦云々に續く可
し

註 本號文書ノ達否不詳ナルモ惟フニ五四三條太政大臣ノ
指令ニ鑑ミ達セラレタルモノト認メラル尙日附ハ假ニ
草案ノ日ヲ探レリ

六五 五月二十九日(假)

上海在勤品川領事ヨリ
陸清國福建鹽法道宛

臺灣出兵ニ對スル李閩浙總督ノ抗議ニ關シテハ
西郷都督ヨリ同總督へノ答復ニヨリ處理スヘキ
旨回答ノ件

大日本欽命駐劄上海管理通商事務領事品川

爲

照覆事明治七年五月二十九日准

貴道照會同治十三年三月三十日奉

閩浙總督部堂李 牌開本年三月二十三日接准二月二十

來文但在懲辦首凶以杜後患竝非必欲用兵所開兩案首凶
其備中州遭風難民前由生蕃送出竝未戕害一人當經本部
堂派員送滬交領事官送還自枋寮至瑯瑤一帶早經本部堂
飭令臺灣道委員建造隘寮選舉隘丁隘首遇有外國遭風船
隻以便隨時救護此後

貴國商民來往該地當不至有刼殺之患去歲備中州難民竝
未被害即其明證其琉球島即我屬國中山國疆土該國世守
外藩甚爲恭順本部堂一視同仁已嚴檄該地方官責成生蕃
頭人趕緊勒限交出首凶議抵總之臺灣屬在中國應由中國
自辨毋庸

貴國代謀各國公使俱在京師必以本部堂爲理直除照覆
貴國陸軍中將請其撤兵回國以符條約外合行飭局即便知
照等因奉此照請查照辦理等因到本領事准此查此係重大
事件不在領事權柄之中且
貴道來文內開

閩浙總督部堂李 牌開照覆

貴國陸軍中將一語是此項事件應由

我國陸軍中將查照備復則亦應請

貴道俟

七日

貴國陸軍中將照會內開臺灣土蕃之俗自古嗜殺行劫邇年
我國民人遭風被害委本中將入示懲戒使毋再踏前轍以安
良民即率親兵將由水路直進蕃地備文報明又附片內開琉
球島人民六十六名遭風壞船漂到臺灣登岸是處屬牡丹社
竟被蕃人刼殺五十四名十二名逃生又備中州人民利八等
四名漂至臺灣卑南蕃地方亦被刼掠僅脫生命我國政府是
以遣使往攻庶使感發天良知有人道故本中將雖云率兵而
往惟備土蕃悍暴抗拒來使從而加害不得已則稍示膺懲等
因前來本部堂查臺灣土著有生熟蕃之別居我疆土之內總
屬我管轄之人查萬國公法各條則臺灣爲中國疆土生蕃定
歸中國隸屬當以中國律法管轄不得任聽別國越俎代謀茲
准

貴國陸軍中將照會以臺灣生蕃戕殺遭風難民奉

命率兵深入蕃地殛其首凶以示懲戒在生蕃疊逞悍暴殺害無辜

即按以中國之法亦律所必誅惟是臺灣全地素屬中國

貴國政府竝未與

總理衙門商允作何辦理逕行命將統兵前往既與萬國公法

違背亦與同治十年所換和約內第一第三兩條不合然詳閱

我國陸軍中將照復後查照辦理也茲准前因合就照復爲此
照復

貴道請煩查照施行須至照覆者

右 照 會

大清欽命三品銜督辦通商事務署福建鹽法道陸

(焚餘)

註 右文書日附ヲ缺クモ假ニ來翰六三ヲ接受セシ日ヲ探リ
此處ニ挿入ス

六六 五月三十日

廈門在勤吳外務一等書記生ヨリ
外務大丞等宛

臺灣視察報告ノ件

無號

一 翰啓呈仕候時下向暑の候先以 各様御多祺御奉職恭壽雀
躍候陳は當廿日福島領事に隨ひ孟春艦に駕し廈門を發し臺
灣府へ渡航同所鎮臺張其光外道臺知府知縣通商局委員等え
面晤蕃地事務主意の概略申入候處右は何れにも北京にて貴
公使柳原と清政府と談論を被遂候後事を被舉候儀に可有之
と申而已方今清官は唯北京總理衙門にて柳原公使の辯論と

瑯瑤にて西郷都督に福建總督より致せし照覆を被接候上如何行わるゝ哉と申所而已を目的とし政府の談決を窺ひ居候外他論は無之候故廿六日臺灣府を發し廿七日拂曉打狗港え上岸福嶋は翌廿八日高砂丸に附駕し瑯瑤を越し西郷中將と面會の積り碩は便船を覚め同日打狗を發昨廿九日厦門へ歸着候隨て方今の近況働すれば外人の臆度を以區々の傍議を流言し間々は節外生枝の嫌を生せん歟にも候へとも大局清より兵を擁し我を敵視する如き景況と固より少も相見へ不申唯蕃地を制せは我も俱にせんと云衷情歟と被察候在官の者陽に稱ふる所は蕃地と雖も我屬地なれば日本より事あらむには我清の政府と熟議あらむと欲すと面上嘴頭に務て論する而已其實心に不相應の處もあらむ歟と被察民間の者は蕃地は日本より迅速に手を下たさんにかかすと竊に攪擾する者も不少候へは必竟北地に公使南邊に都督雙方の權度を用て猶 廟議の在る有り候御議に可有之哉に奉存候細情福嶋歸厦の上可被爲詳報候へとも先碩昨日回厦の儘彼地の情態概略此段報申候也

五月卅日

吳 碩

廿二日朝臺灣港通商局委員華廷錫我旅舎へ來り本府道臺へ面晤スルヤ否ト問ヒ候故實ハ張鎮臺へ面話イタシ度事有之寄舶セシカドモ道臺接見被致ナハ晤話可致ト相答候處然ラハ今午後二時ニ道臺其他一同衙門ニ於テ候駕セント申テ華廷錫引取ル午後二時福嶋領事碩ヲ率へ道衙ニ至ル 道臺夏獻周憲琦 知縣白鸞卿 全臺通商委員華廷錫 我等ヲ接シ坐定リ 彼云頃聞ク貴國臺灣生蕃ニ事アル由生蕃ト雖モ我屬地又我瑯瑤ニ軍艦進來碇泊兵士上岸屯集セラル此地方ハ我鳳山縣ニ屬セシ處ナリ不知貴國ヨリ我京師總理衙門へ商妥ノ上ニテ然ルヤ 此中瑯瑤ハ我鳳山縣ニ屬セル語事實其證據アルヲ見レトモ其句ハ難ヲ辨シ唯生蕃ハ屬地ト申テ我レニ聞取リ答話ノ柄トナシ以後瑯瑤ヲ是ヨリ題セス 我云生蕃ノ事去歲我欽差大臣北京ニ在テ總理衙門諸位大臣へ委曲面達ヲナセリ而シテ今年我陸軍中將西郷都督トシテ兵ヲ領シ進發スルニ付貴國福建總督李部堂へ照會ヲ通シ緣由ヲ達セリ尙此舉ニ因テ貴國政府ノ疑問モアラハ我欽差大臣柳原北京ニ在ル故貴政府へ辨解スルナラン本領事者貴政府張鎮臺ト舊好アリテ今時生蕃事務ノタメ瑯瑤ニ至ル便路張鎮臺へ舊時款待セラル、ノ厚キヲ晤謝シ併セテ生蕃ノ情由ヲモ語ラント昨船ヲ費港ニ寄セラレシニ適張大人公出スルニ値ヒ見ルヲ得サレトモ貴道臺モ各位ニ拜晤シ來由ヲ面

外務大少丞御中
追て福建總督李鶴年より西郷都督に致せし照覆文寫の一
通附呈候

註 右文書ニ謂フ「照覆文寫」ハ五六本文ニ掲ケ置ケリ

六七 五月三十日 厦門在勤吳外務一等書記生ヨリ
清國駐劄柳原公使(在上海)宛

福島領事等ノ臺灣當局往訪ノ概略報告ノ件

〔朱書〕 厦門領事館ヨリ柳原公使へノ告白
柳原へノ控第一號付 郵船
一 翰拜呈致候時下向暑ノ候益御多祥一昨日上海へ御安抵ノ旨恭壽此事ニ御座候昨廿九日上海ヨリ電報拜接略答仕置候
一 本月廿日午後五時碩福嶋領事へ隨從孟春艦へ乘シ臺灣府へ發往翌廿一日午後三時臺灣安平へ着岸直ニ上陸孟春艦ハ直ニ瑯瑤へ廻リ三日ヲ過又迎ヒニ可來事ニ約シ赤嵌城へ入
一 鎮臺張其光ヲ訪候處不圖其光軍務ヲ以彰化縣へ出張セシ由ニ付福嶋ヨリ翌日來意ヲ書翰ヲ以申送置迎船着次第直ニ瑯瑤へ轉航可致碩ハ便船ヲ以厦門へ可引取ト打轉イタシ候處

述スル條尙張鎮臺へモ藉便代致ヲ乞
彼曰福建李總督カ貴中將ニ送レル照覆ヲ見タルヤ
我曰我中將ノ照會ハ逐一見テ其事繇ヲ知レリ只李部堂ノ照覆ハ去ル十九日厦門ニ在ル定道臺ヨリ我ニ收到シ原封我中將ニ遞送シタレハ其内開載ノ事由ハ我輩會テ知ラス
彼云今次生蕃ヲ伐ル西郷中將貴國皇上ノ旨ヲ奉シ發向セラ
ルヤ
我云原ヨリ然リ豈國命ヲ奉セス安リニ他域ニ兵ヲ帶ヒテ入
ルノ理アラシヤ其確證及ヒ生蕃ヲ問罪處分スル大意ハ我中將ノ李部堂へ致セシ照會及ヒ附片ヲ貴道臺見テ了悉セラレ
ン
彼云生蕃ト名稱スレトモ必竟我中國ノ屬地ナレハ貴國政府
我政府ト商妥シ而テ後事ヲ舉ケラルヘク不然ハ去年換約セ
シ條款中ニ符合セス且和誼ヲ傷フノ道理ニテ各國モ尙傍議
スル所アラシク
我云其事ハ前ニ陳スル如ク去年貴國總理衙門ニ於テ我カ欽
差大臣副嶋ヨリ言明シテ今年方ニ始メテ事ヲ起スニ今再ヒ
其由ヲ改報スルニモ及ハザレトモ隣端ノ好誼ヲ失ハザルタ
メ我政府ノ欽差柳原北京ニ派シ在レハ若論其事ニ及ハ、柳

原逐一之ヲ明辨セン西郷中將ハ福建總督ニ照會ヲ行ヒ聊モ
貴國ニ對シ侵越波及等ノ事無キヲ叮嚀告知ス且瑯嶼以南ノ
蕃地ハ貴國人平常往來スルトモ素ヨリ貴國ノ所轄タル地ニ
非ラスト我輩ハ從來思ヒ居タレトモ猶貴國是レニ問フ處ア
ランニハ我輩ノ答議ヲ加フル所ニ非ラス請フ北京ニ有テ欽
差大臣柳原之ヲ辨解スルヲ待タレヨ

彼云貴中將ハ瑯嶼ニ到ルヤ

我云頃日已ニ着セシヤト察ス

彼云西郷中將彼地着後事ヲ行フ如何
我云是必貴省總督李部堂ノ照覆ヲ我中將接到セハ其開載セ
ラル事宜ニ因テ進退定奪シ斟酌辨理スル所モ有ンカト察ス
レトモ是亦我輩預議傍論スル所ニ非サレハ未タ其行フ處如
何ヲ不知

知府周懋琦曰生蕃ノ地ニ貴國ヨリ事アランニハ曾テ我中國
ト和約ヲ訂明セザル以前ナレハ何レモ異議スルニ及バサレ
トモ今既ニ和約交換セシ上ハ今度貴國ノ舉動稍不穩ニ似タ
リト

我云素ヨリ我政府ハ換約セシニ依テ即昨年預メ北京ニ在テ
其事ヲ談及ボシ貴國大臣ノ所答アリシニ據テ今茲ニ及ヘリ

若其レ和約ナクンバ何ソ必ス多ク周折ヲ費サン
彼云只冀フ所ハ兩國約ヲ遵守シ永ク和好ヲ保タンヲ要ス
我云夫レハ素ヨリ命ヲ勞セス我尙同然ナリト
話畢テ別レ寓ニ歸ル

一廿三日朝道臺夏ヨリ我寓館ニ差ヲ使ハシ云道臺今日府城
ノ文武生員ヲ考試スルヲ以テ回拜スルヲ得ス故ニ知府知縣
通商委員來テ回拜セント約ス午前十時各到ル茶菓洋酒ヲ供
ヘ之ヲ饗ス彼是談話數刻只閑話ノミニシテ別ル

但知府周福嶋ノ武官ヲ以テ領事ヲ兼ル所以ヲ問フ福嶋前
年浙粵間ニ漫遊シ此邊ノ情態稍熟スルヲ以テ領事ニ命セラ
ル然ルニ今度西郷都督ヨリ先ニ兩艘ノ我軍艦瑯嶼ニ至ル
ヲ以テ先到ノ兵士等貴國ト生蕃トノ境界ヲ語知セス尙或
ハ粗忽ノ舉動モ有ンカヲ恐ソレ福嶋ヲシテ兵士等ヲ約束
セシメンガタメナリ西郷中將至ラバ福嶋ハ辭シテ厦門ニ
歸ルノミト笑テ答フ

翌廿四日朝張其光彰化ヨリ本府ニ歸著スト告來ル因テ我ヨ
リ拜晤セント差ヲ遣ハス彼答今午後夏道臺ト公務ヲ談シ畢
テ歸途貴寓ニ造候セント傍晚張又差ヲ馳セ今將ニ來リ拜セ
ントスレトモ已ニ晚ナリ敢テ造擾セスト謝ス但若興アラハ

我營ニ來レ一酌疎濶ヲ敘セント我答フルニ請フ鞍馬ノ勞ヲ
願エヨ夜間敢テ來リ驚動セス翌早必踵門拜晤セント辭ス
翌廿五日午前十時張其光鎮營ニ至ル其光款接頗ル殷ナリ福
嶋去年數月攝待ヲ煩セシヲ謝シ藉テ來由ヲ述ブ
張曰貴國蕃地ニ事ヲ及ボス海途渺遠到底兵力糧餉ヲ費シ頗
ル無益ニ屬ス我ハ接近ノ地ナルヲ以止ムヲ得ス近年已ニ野
蕃ヲ導化シ琉球人ノ爲ニモ膺懲セント專ラ其策略ヲ準備ス
已ニ頃日彰化ニ近キ土蕃方數里ノ區甚狡惡ナルヲ以テ親ラ
往テ之ヲ征シ一日間其凶徒ヲ伐テ二百人許ヲ殺セシニ惜哉
魁首二人生蕃中ニ鼠入シテ之ヲ獲ザリシ貴國姑ク手ヲ勞ス
ル勿レ我國自ラ爲ニ應スル所アラン

我云然ルヤ琉球ノ我屬嶋タル已ニ久シ然レハ牡丹ノ琉民ヲ
害スルノミナラス我備中人民モ亦卑南人ニ衣物ヲ掠奪セラ
レ僅ニ命ヲ逃レ奇特ニ陳安生ノ救護留養ニ依リ生ヲ全シ繼
テ又幸ニ貴國ノ恩郵ヲ蒙リ衣食ヲ給セラレ本國ニ歸ヲ得ル
ト雖モ安平ノ外卑南人ハ尙惡ムヘキノ甚キ容レ難キ者ナレ
ハ此兩般ニ由テハ我國自ラ必ス問罪膺懲セサルヲ得ス
是ヨリ後ハ昨日夏獻綸ト應接中ノ條目大抵同シ因テ略ス
彼曰此舉我カ主意ヲ張ル權ハ無シト雖モ貴國欽差大臣我北

京ニ在テ辨論シ情狀ニ由テハ閩浙ノ總督ヨリ必ス我ニモ調
處ノ命ヲ傳ヘ來ラン總督ハ我素ヨリ說得者ナレハ貴國ト
我國ト兩國從善ノ辦法ヲ君ト供ニ熟議セハ如何君現在厦門
ノ領事タレトモ我思ヘルハ臺灣ノ領事ヲ兼サルヲ得サル
ノ勢アリ然レハ乞フ貴國欽差大臣及ヒ西郷中將ノ眞意ヲ君
ニ了悉シ我レト議スヘキ所アラハ只管ニ隔意ナク俱ニ議セ
ン我自ラ兩全ノ策アラン
我云ク好意ヲ謝ス他日尙叩教セン
彼云我ハ又數日ノ後鳳山縣ニ至リ辨理スヘキ事務アリ君モ
其間ニ貴國欽差大臣及中將ノ指畫スル所ヲ叩問探知セヨ惜
哉今我ト君ト各官卑ク權輕ク自己ニ當事主張スル能ハサル
ト笑テ話ヲ畢レリ
廿六日午前十時張其光我旅舎ニ來ル送別シ前日ノ餘話彼是
叮嚀相敘シテ別ル
頃日孟春艦ノ來テ我ヲ迎フヲ待テトモ不來故ニ小瀛船ニ附
搭シ打狗ニ至ラントセシニ此夕臺灣府ノ洋面ニテ高砂丸ニ
逢フ五ニ瀛ヲ停メ來意ヲ問フニ則福嶋ヲ迎爲ナリト答參軍
之ニ乘レリ今夜臺灣府ニ泊明晨食料ヲ購ヒ明日打狗ニ來
リ福嶋ヲ迎取スヘシト約シテ別ル右福嶋領事臺灣府滯在中

ノ概略ニ有之扱當日午後五時福嶋領事一同出城安平ニ抵ル
駕舟小瀛船ニ移リ七時發輪打狗ヘ向ケ夜十一時打狗港ヘ着
ス其儘停泊待且翌廿七日登岸投宿シ福嶋領事ハ高砂丸ニ附
駕シ琅瑤ヘ轉行ノ積リ碩ハ厦門ヘ通航ノ便船ヲ覓メ同日午
後四時乘船直ニ發輪ノ筈ニ候處支度届兼候故翌廿八日午前
九時打狗口ヨリ放洋昨廿九日午前十一時厦門ヘ抵着上岸ノ
處則閣下ノ電報ヲ拜シ御一行申江御順抵ノ旨ヲ領悉欣慰ノ
至ニ候不取敢前條摘略報申候

電信來問ノシンボウテイト申人蕃地事務ヲ委任セラレシ事
當港ノ人ニ問ヘトモ知レス

一 閩浙總督ノ西郷中將ヘ照覆歸厦ノ上抄呈ト存居候今日別
紙福建兵備道定ノ照會ヲ厦門ニテ至手候間此内中外往復載
開兼盡ニ付是ニテ御推覽可被下候

一 蕃地ノ情狀未得確實候ヘトモ當廿五日臺灣府ニテ清艦ノ
長統領北洋輪船參軍貝錦泉我旅舎ニ來リ話ス十八日日本ノ
兵士三名蕃地ヲ巡歴スル折不意ニ樹間ヨリ發銃一名ヲ射殺
セシ由十九日ヨリ廿一日迄ニ日本ノ兵蕃人ヲ伐首級十二ヲ
斬リ日本ノ兵受傷六名内三名恐クハ難保翌廿二日西郷中將
琅瑤ヘ着船ト云昨朝厦門口外ニテ三邦丸長崎ヘ發向スルヲ

見ル歸館シテ田邊書記生ヨリ三邦丸長ノ話ヲ傳聞スルニ具
錦泉ノ説ト稍同シ先此段托便章報猶期後鴻忽々不恭
明治七年五月三十日

吳一等書記生

柳原全權公使閣下

六八 六月二日 清國恭親王等ヨリ
寺島外務卿宛

臺灣事件處理ニ關シ沈船政大臣ヲ欽差辦理大臣
ニ任命シタル旨通知ノ件

①號
照會

理藩院 右侍郎 成
工部 尙書 崇
戶部 尙書 董
軍機大臣協辦大學士吏部尙書寶
和碩 恭親王
軍機大臣大學管理工部事務文
吏部 尙書 毛
軍機大臣兵部尙書沈
頭品頂戴兵部左侍郎崇
三品頂戴通政使司副使夏

大清欽命總理各國事務

二、本號文書ハ八九附屬書ナルモ便宜ココニ掲ク

六九 六月三日 陸清國福建鹽法道ヨリ
上海在勤品川領事宛

李清國閩浙總督ヨリ西郷都督ニ對シ臺灣撤兵方
ノ申入アリタル次第ヲ通報シ本件ヲ柳原公使等
ニ轉報アリ度旨申出ノ件

大清欽命三品銜督辦通商事務署福建鹽法道陸 爲

照會事同治十三年四月十八日奉

閩浙總督部堂李 牌開本日照會

貴國陸軍中將西郷公文一件内開前准照會得悉 貴中將
奉

命統兵懲傲臺灣生番當經本部堂接據萬國公法請 貴中將撤
兵回國以符條約具文照覆在案茲於四月十二日接臺灣道
稟稱

貴中將統率部兵已在我鳳山縣所屬琅瑤柴城一帶地方紮
營與屬地生番爭鬪經委安平協副將周振邦署臺台防同知
傳以禮等馳赴該處於初八日與貴中將相見面詢本部堂照
會曾否達覽貴中將答以已經收到竝語該文武官以此次用

照會事照得本王大臣前據中國沿海各地方官咨報竝准
各國駐京大臣告知

貴國有派兵前往臺灣之事當以此事未經先行議及未之深
信曾於本年三月二十六日彙敘函報各節照會

貴外務省大臣查照見覆在案刻下想已

接閱當有覆文在途矣本年四月十四日奉

上諭沈葆楨著授爲欽差辦理臺灣等處海防兼理

各國事務大臣以重事權欽此本衙門查臺灣等處遇有各國事
務閩浙總督駐紮省垣相距較遠船政大臣沈 素悉中外情

形茲奉

特旨派充

欽差辦理臺灣等處海防兼理各國事務大臣必能悉心籌畫盡其

事權以符條約而敦睦誼相應照會

貴外務省大臣查照可也須至照會者

右 照 會

大日本國外務省大臣

同治拾參年 肆 月 拾捌

註一、本號文書ハ「焚餘」ニ據レハ六月十三日上海ニ於テ上

海關長「グロウエル」ヨリ柳原公使ニ手交セラレタリ

兵生番因去年

貴國副島大臣早與

總理衙門商明近又有

欽差赴北京專論此事俟北京信到再行照覆不肯即日回兵等因

又據稟稱四月初七日有

貴國駐厦領事官福島九成書記吳碩往見該道面言要赴琅

璠查明不准本國兵船與中國民人滋事以敦和好特來拜謁

該道詢以何故動兵答稱欲將生番稍示懲儆不敢擾害中國

地方等語先後到本部堂准此詳閱各情深佩

貴國政府敦信睦益固邦交之意而 貴中將謹承

上命情意殷拳務泯猜嫌以敦永好聞之亦甚欣愜因思

貴國與中國立約未久方期兩國和好可與天壤無窮乃此舉

並未商由總理衙門移知本部堂作何辦理徑命

貴中將統師赴中國所屬邦土本部堂所管地方用兵蓋由輕

聽浮言誤會生番非中國所管之謠傳遂致

貴國政府與貴中將近日所爲事々與萬國公法暨修好條約

違背宜中外輿論皆不以爲然也除詳載本部堂前次照會外

合再將本部堂確查證據及

貴國此舉不合萬國公法暨修好條約之處爲貴中將更詳告

之查琅璠番社人物地方確歸中國轄屬證據歷々分明可核者三南路琅璠十八社向歸鳳山縣管轄每年征完番餉二十兩有奇載在臺灣府誌此證據一也臺灣設立南北路理番同知專管番務每年由各該同知入內山犒賞生番鹽布等物證據二也柴城又名福安街建有我

朝中公堂福公康安碑廟此證據三也證據確鑿歷來已久特以禮記不易其俗不易其宜故向來中國不全繩以法律而已查兩國修好條規第三條云兩國政事禁令各有異同其政事應聽己國自主彼此均不得代謀干預查臺灣生番久屬中國其不全繩以律法者即政事禁令各有異同之一端也按約應聽中國自主

貴國不得代謀干預況兩國所屬邦土不可稍有侵越第一條顯有明文尤宜共相篤守又第十四條載日本人在中國指定口岸及附近洋面不准與不和之國互相爭鬪夫附近中國洋面與不和之國尙不准爭鬪況爲我疆土之內隸屬之人今貴中將在琅璠柴城一帶於我設立隘寨之疆土徑行登岸築營於我納食糧之番民竟行接仗爭鬪與條約各款種々不合設令他國效 貴國之所爲於

貴國屬地屬民並不先行商准遽爾命將舉兵據其地誅其人貴國其能任聽容所爲而不門乎 貴中將反已以思必有爽然自失者據臺灣道稟稱 貴中將及理事官福島九成俱言上年使臣到京曾對總理衙門說過以生番非中國所管及此舉早經商明故爾前來查中國自來與各國立約俱 欽差全權大臣各遵所奉

諭旨訂立條約並特條聲明兩國全權大臣先行畫押蓋印俟兩國御筆批准後刊刻通行今 貴中將及理事官所云上年使臣向

總理衙門說過等語是否遵照公法照中國律法立約抑將商明之事或蓋關防于公函或兩國互行告示或互換照會以爲

憑据本部堂並未接准 總理衙門移知 貴中將奉

命遠來定悉詳細如當時立有憑約請將彼此原議文約抄示本部

堂自當聽 貴中將照約辦理如當時未立有憑應請 貴中

將撤兵回國不得于中國所屬邦土地方久駐兵旅以符條約

窺照

貴國政府祇因生番戕害難民兩案故命將統兵深入番地殛

其首凶使無再踏前轍查我屬中山國被戕遭風難民一案仍

應由本部堂自行嚴檄該地方官辦理毋庸

貴國干預外其

大日本國欽命駐劄上海管理通商事務領事品川
大清同治十三年肆月十九日照會

貴領事查照轉呈
貴國 外務省衙門 察核須至照會者
右 照 會

註 右文書ニ謂フ李清國閩浙總督ヨリ西鄉都督宛申入ハ文意ヨリ推シ同治十三年四月十八日頃ニ發セラレタルモノト認メラルモ其ノ全文記録中ニ見當ラス

(按餘)

七〇 六月七日 清國駐劄柳原公使(上海ニテ)ヨリ
潘清國欽差幫辦宛

臺灣生蕃處置方針三箇條ニ關スル件

〔朱書〕
〔第十一號〕

柳原全權公使往翰摘譯

昨獲良晤。多聆大教不啻親佩。

昨日ハ御目ニ懸リ、段々御
咄ヲ承リ、誠ニ難有存候

承示將我 朝派員處分土蕃一事。的係作何了結之處。詳爲

筆記送覽。故本大臣摘錄其錄如左。

儲我國朝廷ヨリ兵員ヲ派出シ土蕃ヲ處分スル儀ハ詰リ如何ノ結局
ヲ付ケル見込ニ候ヤ、委シク書キ記ルシテ見セヌヨト御示談ニ付
拙者其次第ヲ大略書
キ取ル處左ノ如シ

明治四年十一月間。八重山島人民遇風漂流。到生蕃牡丹鄉
内。被該土人掠奪衣物。五十四名死之。

明治四年十一月比、琉球八重山島ノ人民大風ニ吹流サレ、生蕃牡
丹社ノ郷内ニ漂着セシガ、其處ノ土人共ニ着物モ手廻ノ品モ悉ク
奪ヒ取ラレ、五十
四人殺サレタリ

又于六年三月。小田縣民四名。漂至生蕃卑南之地。亦被剝
衣奪財酷虐已甚。幸脫一死救養于熟蕃陳安生家。然被土人
作踐。欲自經者再三。

マシテ我國ノ薩摩琉球邊ヨリ、生蕃ノ地ヘ渡ルニハ島渡ノ間ナリ
方今日本ハ西洋及貴國ト往來スルニ因テ船舶ノ行カヒ少カラサル
折柄右土地ニ如此野蠻ノハビコリテ、人ヲ殺シ物ヲ盜ミテハ、我
隣近ニ在ル故、萬一此後漂着スル人ノ爲メニ甚氣遣ハシク思ヘリ
若不即事下手懲辦。後患何極。此我朝之所以斷然舉行。而
從前英美二國。亦有此舉。非創見也。

若シ我國ノ民ヲ殺セシ罪ヲ鳴ラシテ手早ク我ヨリ處分ヲナサズバ
此患更ニ際限無ルベシ、此理有ルヲ以テ我朝ヨリ斷然ト舉ケ行フ
ニテ、而カモ英米ナドノ國ヨリ、先年蕃地ヲ如此處分
セシ例モアルカラハ、人ノセヌ事ヲ爲スニハ非サル也
故我欽差頭等全權大臣。去年在天津換約後。進京議觀之際。
派本大臣至總署。告明遣使問罪之意。

故ニ我全權大使副島、去年天津ニテ本條約取換ハセシ後、北京ニ
入テ謁見論ヲナス折ニ、態々拙者ヲ總理衙門ニ差遣ハシ、生蕃ヘ
我ヨリ使ヲ遣ハシ、我民ヲ殺害
セシ罪ヲ問フベシト説明セリ

今于發遣陸軍中將西郷之時。特送公文。知照浙閩制臺。然
後經由水路直至蕃地。慎防兵丁滋生事端。

今度陸軍中將西郷ヲ討手ニ出スニ因テ、態々照會文ヲ送り、福建
ノ總督ヘ掛合置キ、夫レヨリ船ヲ押シ出シ、直チニ生蕃ノ地ニ向
ハシメ、且我兵若シ貴國府縣ノ地ヘ獵ニ這
入テ騷動シテハ濟マヌト注意セシメタリ

凡此。俱出保存兩國和好之衷。並非有他意也
斯クマテ注意スルハ只々我ト貴國ト和好ヲ失ハヌ様大切ニ存スレ
バナリ、決シテ貴國ノ境界ヲ侵スナドノ心ハ毛頭無之事ナリ
茲聞陽歷五月十八日。即貴國四月初三日。我兵已與生蕃交

又六年三月ニハ、小田縣ノ人民四人、生蕃卑南ノ地ニ漂着セシガ
是亦着物ヲ剝ガレ器財ヲ奪ハレ酷トク苦ルシメラレシ處。幸ニ一
命ヲ救ハレ、熟蕃ノ陳安生ナル者ノ家ニ養ヒ置カル、ト雖トモ、
其處ノ土人等ヨリ犬猫ノ如クニ取扱ハレ、無念ノ餘何レモ首ク、
リテ死ナントセ
シ事度々ナリ

後送至鳳山縣。得蒙貴國官長救卹。送還本國。我朝感德奚
窮。當時經由駐滬領事。贈物酬勞陳李兩人。及難民到滬日。
並具不腆之物。稱謝護送員役。

其後鳳山縣ニ送ラレテヨリ、貴國官員ノ救助憐憫ヲ蒙リ、本國ヘ
送り返サレタル故、我朝廷ニ於テモ厚ク其德ヲ感シ其勞儀ヲ述ヘ
又難民ヲ上海領事ニ渡サレシ時ニ於テ、同様輕微ナガラ
禮物ヲ差向ケ、護送シテ來リシ役人達ヘ謝ヲ申述タリ

特所恨者。蠢彼蕃人。殺難民如麋鹿。盜財物爲生業。而脫
然於化外。凡數百年于茲。

只我恨トスル所ハ、生蕃ノエビスドモ難船ノ寄リ來ルヲ見テ其人
ヲ殺ス事鹿ヲ狩ルカ如クシ、衣服器財ヲ奪ヒ取ルヲ渡世ノ如クニ
行ヘリ然レトモ國王ノ管轄政教モ無キ土地ニ住居シタル故、如
此所業ヲナシテモ罪咎ヲ受ケシ事無ク、是迄數百年ヲ過セリ
夫殺人償命。盜物受罰。萬國通典、爲君上者。不可一日忽
諸。

全體人ヲ殺セハ其代リニ己ノ命ヲ取ラレ、人ノ物ヲ盜メハ夫レ程
ノ罰ガ當ルト云事ヲ民ニ教ヘテ其惡心ヲ戒シムルハ、萬國一般ノ
定法ニテ、民ニ君タル者ハ、一
日モ此義ヲ怠リ置ク事相成ズ

況我國境。與該蕃地一葦可杭。方今東西。海船旁午。該地
蓄此蠻種。嗜殺行劫。深堪憂慮。

鋒。至十九二十二等日。互有殺傷等語。

然ルニ我國ノ五月十八日、即チ貴國ノ四月三日ニ當リ、我兵ハ生
蕃ト既ニ戰爭ヲ始メ十九日二十二日迄、雙方討死手負等有シ由ヲ
開ケ

此事。經于日前收到西郷來信。已知本因生蕃伏于窰間。狙
擊我兵之入牡丹社爲斥候者而起。理所當然。

右一件ハ、此程西郷ヨリノ書狀到來シテ之ヲ讀ムニ、元來我ヨリ
戰ヲ開クニ非サレトモ、生蕃共森ノ内ニ隠レ居リ、我兵斥候セン
カ爲メニ牡丹社ヘ這入ラントスルヲ規ヒ打ニ砲擊セシヨリ
起リタル由ヲ知レリ、是ニハ我兵モ戰ハサルヲ得ザルベシ

本大臣以不肖。恭蒙簡拔此來。無非我朝保存兩國和好爲重。
于十日前到滬。得晤沈道臺。即悉貴國總署特發公文。寄我
國外務省。又經浙閩制臺給西郷以回文云。生蕃亦屬清國之
民。即有殺人之罪。應憑中國查辦。不必日本代謀。故須西
郷退兵回國等因。

拙者不肖ヲ以テ悉クモ選拔ヲ蒙リ貴國ヘ遣ハサル、モ、皆我朝貴
國トノ和好ヲ保護スルヲ重シトノ上旨ナリ、十日バカリ前ニ
當地ヘ着シ、沈道臺ニ面會シ、即チ貴國總理衙門ヨリ生蕃ノ事ニ
就テ照會文ヲ出シ、我國外務省ニ送ラレタルト聞ク、又福建ノ總
督ヨリ西郷ヘノ返書ニハ、生蕃モ清國ノ民ナレハ、假令人ヲ殺セ
ル罪アルトモ清國ヨリ之ヲ吟味裁判スルカ當然ナリ、何ソ日本ヘ
御苦勞ヲ掛ルニ及ハンヤ、故ニ西郷殿ニハ
早ク兵ヲ引キ歸國アツテ然ルベシトナリ

本大臣因思。我師既出交鋒。況西郷奉君命。豈肯輕退。我
朝經已布告通國。誓其保民之義。何可中止。恐貴國未熟悉

我情。故有是言。

拙者右ニ就テ考ルニハ我國ノ兵士、既ニ生蕃ノ地ヘ到テ戰爭ヲ始メタリ、マシテ西郷ニハ君命ヲ受ケタマハリテ居ルカラニ、如何ナル事アリトモ一步モ退クマジク、且我朝廷ニテハ既ニ全國ヘ布告シテ人民保護ノ大義ヲ誓ヒタルカラ、如何ナル事アリトモ中途ニシテ止ムルノ理ナシ、此情實ヲ貴國ニテ未タ篤ト御了解ナサラヌ故、前文ノ通りヒタスラ兵ヲヒケケト申サル、ベシト思

旋據西郷信云。五月二十三日。有中國兵船到琅璦。其兵官傳以禮。周振邦吳本杰三名。來索李制臺前送回文之照覆。本中將答云。我奉軍權行事而已。如其交涉兩國和好辨論事宜。請與全權公使柳原協議可也等語。

其後西郷ノ書狀ヲ見ルニ五月二十三日、貴國ノ軍艦琅璦ノ地ヘ來タリ李總督ヨリ此程送リタル返書ノ再答書ヲ求ムルニ因リ拙者之ニ答ルニ、我ハ只軍權ヲ奉シテ事ヲ行ナフ而已ナレハ、貴國ノ官員ト應接スルノ暇ナシ、若シ兩國ノ和好ニ關係シテ辨論スル事情有ラハ、何卒柳原全權公使ト萬端都合

本大臣。亦聞沈船政大臣已奉欽差。查辦臺灣生蕃事務。應與西郷談論一切。忽遇閣下奉旨。回閩幫辦沈欽差大臣。

拙者ハ此積リニ心得タレトモ亦福建ノ船政大臣沈葆楨ガ今度上使ト爲リテ、臺灣生蕃事務ヲ查辦セラル、ニ因リ、西郷ト諸事御談論ニ及ハルヘキ由ヲ聞ケリ然ルニ拙者又圖ラスモ閣下北京ニテ上旨ヲ奉シ、福建ヘ歸テ沈大ノ副使ヲ御勤メナサルノ機會ヲ得タリ

本大臣。幸獲剖心吐赤。惟閣下宏度容納焉。

拙者幸ニ面會ヲ得テ、斯ク心底ヲ打明ケ申述ル事故何トゾ閣下幾重ニモ御存込置下サレタシ

如有樂教。敢効篤力。和衷酌辦。以爲兩國愈敦和睦之地。

謹啓。
若シ又御存奇ノ次第モ有之仰セ聞ケラレナハ、如何様ニモ相働キ都合克ク御談判ヲ遂ケ、兩國愈ヨ和睦ヲ敦ウスルノ基ト相成ル様取計申度、右

註一、本號文書ハ一〇一附屬書第十一號ノ前半ナルモ便宜
茲ニ獨立文書トシテ採録セリ尙日附ハ「焚餘」ニ據レ
二、本號文書ノ和譯文ノ部分ハ在清國日本公使館ニテ作成セシモノカ

七一 六月七日 西郷臺灣蕃地事務都督ヨリ
大隈臺灣蕃地事務局局長官宛

臺灣生蕃討撫ノ情況報告ノ件

附記 六月四日ノ「焚餘」記事

臺灣出兵ニ關スル上諭等ヲ 陳清國上海同
知ニ示シ清國側ヘ轉達方依頼ノ件

如此惟此生蕃。原有三十六社。未知西郷欲向何社生蕃問罪。究竟作何結局。

閣下上海ヘ立寄ノ序、拙者ヲ御尋訪有之、下問セララル、ニハ、貴國此度臺灣之處分今日既ニ如此次第ニ至リシ處一ト口ニ生蕃ト申セトモ原來是ニハ三十六社ノ區分有リ然ルニ西郷氏ハ右ノ内何社ト申ス生蕃ヘ向テ問罪シ、到底如何ノ結局ヲ爲ス見込ナルヤト

故本大臣。陳以我民被害情由。並據西郷奉勅限辨三事答云。
第一。捕前殺害我民者誅之。第二。抗抵我兵爲敵者殺之。
第三。蕃俗反覆難制。須立嚴約。定使永遠誓不剽殺難民之策。

故ニ拙者我國人民害ヲ被リシ次第ヲ申述ヘ並ヒニ西郷中將勅命ヲ奉シテ處分スルノ三個條ヲ以テ相答フ

其一ニ曰フ、前年我國ノ人民ヲ殺害セシ者ヲ捕ヘテ之ヲ誅スル事

其二ニ曰フ、此處分ニ付我兵ニ抗抵シテ敵ヲ爲ス者ハ之ヲ殺スヘキ事

其三ニ曰フ、蠻野ノ性、今日從ヘトモ明日背クノ風俗ニテ、誠ニ制シ難ルヘシ、因テ必ス嚴ク取締ノ道ヲ設立シ、永遠誓テ難民ヲ劫殺セサラシムルノ策ヲ定ヘシ

此本大臣請閣下。到閩會同沈欽差大臣辦理。言歸兩國和好。是所切望。

此段拙者ヨリ專ラ閣下ヘ願ヒ置キ福建ヘ御着ノ後沈欽差大臣ト會同辨理シテ、何事モ兩國ノ和好ニ歸着セシメ玉ハン事ヲ踴躍致ス所ニ

謹呈ス從道嚮ニ全軍ヲ率ヒ去月廿二日ヲ以テ臺灣西南部社寮港ニ著セリ先キ兩次發スル所ノ將卒先ツ假營ヲ軍城南ノ南郊ニ建テ近傍各地ノ地ノ熟蕃ヲ誘導シ漸次事ニ就凡ソ西岸一線該港ヨリ北風港ニ至ル迄恩威宣布土民爭テ役ニ趣キ實ニ子來ノ狀アリ其南地大樹房ニ至ル又同シク我風下ニ靡クト雖モ其手ヲ下ス日淺クシテ未タ十分ノ心ヲ收ムル能ハス南部ノ生蕃ハ米人「カツセル」及ヒ通辨者ノ紹介ヲ以テ「テキラツ」ノ頭目「トキトク」先ノ「ト」ノ「サコリー」ノ頭目「イサレ」ヲ「マンスア」ニ叫ヒ已ニ情和ヲ通セリ近頃又形勢ヲ探リ社寮ノ西龜山ニ本營ヲ設ケ此ニ轉移セントス凡從道預メ命スル處粗成リ少シモ違謬アルナシ然ルニ偶々邏兵ノ生蕃牡丹境石門口ニ至ル者アリ二次蕃人ノ爲メニ狙撃セラレ死傷數人故ヲ以テ將卒悉ク憤ヲ發シ之ヲ報復センヲ謀ル其石門口ニ濱スル一里四重溪ト云該地ノ土人私ニ牡丹ニ通スルノ疑アリ乃チ二小隊ヲ發シ之ヲ圍ミ悉ク各戸ノ兵器ヲ奪ヒ續テ石門ニ進ム生蕃人七十餘人崖門ニ據リ能ク防ク我兵奮闘シテ之ヲ破リ首級ヲ獲ル十二傷ヲ受ケ死スル者二十餘牡丹社ノ頭人父子又同ク此戰ニ死スト云此日ヤ乃チ從道進港ノ日ニ屬セリ

從道熟々考ルニ牡丹生蕃ノ不逞ナル兇暴至ラザルナシ彼常ニ支那人ノ柔懦與シ易キニ慣レ外人ヲ見ル事核兒ノ如ク敢テ王師ニ抗シ不敵ノ働キヲナス今僅ニ之ヲ掃撃シ其鋒ヲ挫クト雖モ到底其巢窟ヲ殲スニ非レハ其殘害ヲ除クニ足ラス且ツ土人稍我恩惠ニ慣レ漸ク我意ヲ生シ叨ニ財利ヲ貪ル等ノ事アリ不如一旦彼レカ鬼視スル所ノ牡丹蕃部ヲ盪盡シ大ニ兵威ヲ派及センニハ既ニシテ「テキラソ」「サコリー」ノ頭目等「コワルツ」ノ頭目ヲ携ヘ共ニ來リ面見シ各々我命ヲ遵守シ且牡丹蕃人ノ彼地ニ入ルモノ一々之ヲ捕ヘ我營ニ輸サンヲ約セリ又聞ク卑南ノ頭目陳安生嚮ニ打狗ニ在リ我兵ノ牡丹ヲ討スルヲ聞ク急ニ彼社ニ歸リ虛ニ乘シ牡丹ヲ襲ハンヲ謀ルト人心ノ集所兵氣ノ向フ所固ニ屈止スヘカラス從道之ニ於テヤ意ヲ決シ大舉ヲ謀ル乃チ兵ヲ三道ニ分チ本月一日ヨリ次ヲ以テ牡丹ヘ向フ沿道ノ諸蕃悉ク家ヲ空シテ深谷ニ逃レ入り敢テ支ル者無シ三日全軍牡丹社ニ會シ其巢窟ヲ屠リ燒滅遺スナク四日全軍次ヲ以テ歸營假リニ分營ヲ牡丹山下雙溪口ニ設ケ二小隊ヲ留メ之ヲ守ラシム此役ヤ從道初メ獻スル所ノ策ト緩急少シク異ナルモノアリト雖モ其逐次處分スル所ノ

事業大略已其效ヲ收メリ敢テ急遽事ヲ苟スト云ニハ非ス從道是ヨリ專ラ地方ノ事ニ心ヲ寄セ永遠ノ基礎ヲ開カントス然ルニ該地南西ノ風頻リニ強ク船艦ヲ停住スルヲ得ス因テ又兵ヲ「コアルツ」ニ進メ分營ヲ此地ニ建其南岬五轆鼻ノ東灣ニ一港ヲ設ケ先ツ運輸ノ便宜ヲ開キ且土人屈強ノ氣ヲ抑ヘ次ヲ以テ生蕃内部ノ地ヲ處分スヘシ先ツ今日ノ狀ヲ以テ之ヲ見レハ處蕃ノ大綱已ニ定レリ唯其清國ニ關スル所ノ事或ハ要緊ニ涉ル者アリ預メ其事由ヲ探リ之ヲ處分セザルヘカラス已ニ閩浙總督李鶴年照覆スル所ノ書慢リニ無稽ノ異論ヲ起シ稍我ニ抗抵スルノ勢アリ又近口兵ヲ出シ琉球ノ罪ヲ問フノ浮言アリ從道竊ニ其狀ヲ察スルニ彼唯我政府ノ運動ト英米公使ノ橫議ト從道命ヲ矯リ兵ヲ行ルノ浮言トヲ側聽シ慢リニ虛言ヲ張リ之ヲ却スニ過ズ福島九成現ニ臺灣府ニ至リ鎮臺知府知縣海防委員等ノ諸官員ニ逢ヒ應接スル所彼等敢テ鶴年照覆ノ意ヲ維持シ我ニ論ズルノ力ナク又兵ヲ出シ我ヲ拒ムノ色ナシ蓋シ此事實ニ我

天皇ノ親諭ニ出テ其處分スル所苟ナラザルヲ知り且我兵氣ノ強盛ナルヲ憚リ九成ノ間言ニ迷ハサレ少シク和容安ヲ

偷ムノ情アリト從道即チ此際ニ乘シ急ニ諸ノ處分ヲ達ス

ベシ今其成算已ニ定レリ伏テ請貴下幸ニ前意ヲ固シ務テ廟議ヲ維持シ以テ此局ヲ了センヲ今更ニ谷干城樺山資紀ヲ遣シ具ニ此地ノ景況ヲ通シ又赤松則良福島九成ヲ北京ヘ出シ柳原公使ノ意想ヲ添ヘシム從道ハ乃チ優ニ將士ヲ養ヒ漸ク山野ヲ墾キ以テ其良報ヲ得ヘシ貴下幸ニ從道ノ意ヲ取容シ具ニ諸大臣各卿ノ熟議ヲ經敢テ奏聞ヲ忝スルヲ得ンヲ從道誠ニ感戴ノ至ニ堪ス不宣

明治七年六月七日

蕃地事務都督 西 鄉 從 道

蕃地事務長官 大隈重信殿

註 「焚餘」六月四日ニ左ノ記事アリ便宜此ノ處ニ挿入ス

(附記)

同日廈門領事館ヨリ寄スル所ノ電報及ヒ本年五月ノ上諭ヲ譯シ陳同知ヘ示シ沈道臺ヘ轉送シ之ヲ總理衙門ヘ報告セシム

「六月四日午前七時五十五分

廈門領事館電致

在上海日本公館

柳原欽使收照

五月我兵已入生蕃境內詎該番人即開槍砲亂擊我兵只得于十八日交戰我兵即死四名負傷十二名因于十九及二十二日兩戰獲番首級十二等語由日進艦回廈告而知之至于都督見清官時所答言語則我奉本國政府命令往辦土番耳貴國政府如有異議只問柳原公使議辦可也云々電信殊難細述」

明治七年五月太政大臣三條實美奉 旨布告通國

上諭曰前于明治四年十一月間有琉球藩人民漂至臺灣蕃地爲土人所劫殺死者五十四名又于六年三月有小田縣人民四名漂到該地亦罹兇暴所爲去年經我全權大使副島濤清言及此事夫臺灣島接近我國南境往々有人漂難至此況我海船加多之際嗣後我民由此邊航行者當亦不少或有遇艱仍被如前所爲甚可憂慮乃今簡派陸軍中將西鄉從道作爲都督發往蕃地即問曩日暴害我民之罪隨施相當處分且要嚴設約束之道以便今後保護我民航海悉獲安寧可體朕意徧行通國咸使知之

(焚餘)

七一 六月七日 廈門在勤吳外務一等書記生等ヨリ
外務大臣等宛

臺灣ニ於ケル戰況並ニ清國ニ於ケル近況等報告
ノ件

附屬書 六月六日廈門在勤米國領事ノ布告文寫
日本ノ臺灣出兵ニ米國人ノ協力方禁止ノ
件

一 翰啓仕候先以各様助祺多康欣頌の至に候然は蕃地の近事
概略昨六日午前孟春艦廈門へ進港福嶋領事の來翰并同艦長
官磯部氏より面悉の次第は先月十八日我斥候者三名蕃地徘徊
せし折野人詐て之を招き寄せ不意に樹間より小銃を以影
射し壹人被射殺即死す外兩人幸ひ逃れ本營へ引取夫より翌
十八日廿一日迄の間出兵稍膺懲を示し候に諸社降伏する者
多き内唯牡丹の近傍依然抵抗候間本月一日より我兵を三手
に分配し風港の口一手谷少將指揮長官とし樺山少佐副とし
陸軍六小隊を引率し進發石門口の一手佐久間中佐指揮長官
とし陸兵三小隊を率へ進發翌二日竹社口より一手赤松少將
を以指揮長官とし福嶋領事副となり陸兵二小隊を率へ進發

我か欽差北京に在る故彼にて是を應答辯明すへければ李總
督の照覆を我におゐて照准する能わすと答へられし趣此儀
も亦柳原公使へ遞達仕置候
一 昨日在厦の米國領事より別紙寫の通り佈告文を各國領事
へ廻達致し候間附呈候

一 福嶋領事も彼地御用向大抵相纏候は、不日歸厦可致旨申
來候間何れ其上諸緒可詳告候先此段乘良便申報候也

六月七日

田邊貞雅
吳碩

外務省大少丞御中
猶以時下御自重奉遙祈候且乍憚闔省諸位御序御咄致被下
度所拜望候

(附屬書)
Copy

Notification.

United States Consulate Amoy and the
Dependencies thereof June 6, 1874.

Whereas the Chinese Authorities of the Foh-kien
province have informed me that a Japanese armed

第三日三手の諸軍三路均しく進擊沿路各蕃を追拂ひ終に牡
丹の巢窟を討挫き假に牡丹部并石門の兩所に屯營を設け三
小隊つゝを屯守せしめ其餘の諸兵翌四日都て凱旋本營え引
纏候由右野蕃の内一部落を全く空虚にして男女壹人も不殘
逃亡せし所も有之候へは其等は山林間に潛匿せし者なれば
日後必食を求る爲め山を下る者あるへき其時を窺ひ時々討
取手筈に有之由先即今彼地の景況十分の勝利に有之清官よ
り少も故障等申出候模様無之各處降伏の土人は彌増盡力候
姿に至り一段の次第に候此上は唯柳原公使北京に在て議論
應答昨年の閱照に基き嚴敷辯解を被遂度其儀都督西郷中將
より専ら企望する旨申來候依之右段概略昨六日午後二時柳
原公使及長崎事務支局へ電報を以轉達及ひ猶蕃地本營より
柳原公使并事務局へ蕃地の情實説明のため近日中別段人を
派出すへき旨申來候是亦昨日の電報に附言す

一 西郷中將瑤瑤に在て福建總督李鶴年の照覆を被接候未清
官姓名知レス西郷中將へ面晤し李の照覆接到の上は此後行
ふ所如何と問ひしに中將答曰我は我皇の聖旨を奉し茲に來
り蕃人を膺懲するに付隣端接近の貴境を經過するを以特と
李總督へ照會を通せし而已若夫に可否する所あるに至ては

force has invaded the island of Formosa; that that
island is a part of the Chinese Empire, and have
requested me to prevent American citizens from
taking part in the enterprise; also, that they have
demanded of the Japanese forces its immediate eva-
cuation; and

Whereas, citizens of the U. S. in China are under
the protection and subject to the jurisdiction and
laws of their own country:

Now, therefore, I, the undersigned consul, charged
with the care of American interests and the execu-
tion of the laws of the U. S. and treaty obligations
with China in the island of Formosa, hereby notify
and command all citizens of the U. S. to at once
withdraw, and hereafter abstain from all enterprises
unfriendly to the Chinese Government and to avoid
all acts which are inconsistent with the said laws
and treaty obligations.

Any citizens of the U. S. who shall refuse to com-
ply with, or offend against the provisions of this
notification, shall forfeit the protection of the Ameri-
can Government.

J. J. HENDERSON,
United States Consul.

七三 六月七日 上海在勸品川領事ヨリ
陸清國福建鹽法道宛

臺灣撤兵一件ニ就テハ柳原公使ト潘幫辦トノ間
ニ打合セ濟ナルニ付潘幫辦福建ニ歸ラハ總テ明
瞭トナルヘキ旨回答ノ件

大日本欽命駐劄上海管理通商事務領事品川

照復事明治七年六月初六日准

貴道照會同治十三年四月十八日奉

閩浙總督部堂 牌開本日照會

貴國陸軍中將西郷公文一件内開云々等因到本領事准此
當將原文轉呈

柳原公使經已閱過茲奉 公使飭云爲此事件已晤

貴省藩臺潘於滬城商議一切應請

貴道且俟

潘藩臺回閩自有道理等因奉此合就照復爲此照復

貴道請煩查照可也須至照復者

右 照 會

大清欽命三品銜督辦通商事務署福建鹽法道陸

大日本明治七年六月七日照會

(焚餘)

七四 六月七日 潘清國欽差幫辦ヨリ
清國駐劄柳原公使(在上海)宛

臺灣生蕃處置方針三箇條ニ對シ回答ノ件

福建布政使欽差幫辦潘幫辦復前摘譯

昨今兩奉教言甚慰渴念。具見貴大臣和衷共濟。壽畫周詳。
莫名欽佩。

昨日今日兩度御談話ヲ承リ、誠ニ渴望ノ思ヲ慰サメ、且貴大臣兩
國ノ爲メニ御注意ナサレ徹底遺漏スル所ナク御決盡ナサル、段、
逐一相伺ヒ、感服譬
トヘンカタ無之候

頃奉惠書。承示辦法三條。第一條第二條。經貴大臣面稱。

此係專指牡丹社卑南社二處搶害之生蕃而言。與別社並未滋
事之生蕃無涉。足見辨事頭事頭緒分明。如再有滋事者。應
由中國派兵查辦。事屬可行。

成セシモノカ

七五 六月十一日 清國恭親王ヨリ
清國駐劄柳原公使(在上海)宛

臺灣生蕃一件ニ關スル寺島外務卿宛兩度ノ照會

ニ對シ未夕回答ニ接セス就テハ同伴ノ平和的解

決ノ爲應江蘇藩司、沈上海道臺ト妥議セラレ度

旨申出ノ件

大清欽命總理各國事務王大臣

照會事照得上年

貴國副島大臣奉

使來華會令

貴大臣同繙譯官鄭 來本衙門面詢臺灣生蕃戕害琉球人
民之事當經細詢原委曾准答復臺灣生蕃地方祇以遣人告
知嗣後日本人前往好爲相待其意非爲用兵等情迨

貴副島大臣竝

貴大臣瀕行時本王大臣會向

貴副島大臣觀面言及嗣後須按照修好條規所載兩國所屬

爲

只今御手紙ヲ拜閱シテ、貴國處分ノ方法三個條ヲ承知致シ候、其
第一條第二條之義ハ、貴大臣ノ御面話ニ、是ハ專ラ牡丹社卑南社
ノ二個處ニテ我民ヲ劫殺セシ生蕃ヲ指テ言フモノニシテ、別社ノ
曾テ人ヲ害セシ事ナキ生蕃ニハ干係無シトノ旨ヲ御申開ナサレ
拙者是ニテ御處分ノ筋道分明ナル事ヲ了解致シ候、然ル上ハ此後
若シ再ヒ右様ノ惡事ヲ爲セシ者有ル時、必ス清國ヨリ兵力ヲ以テ
處分スヘキ義ニ候ヘハ、今
度ノ事ハ行ハル、可存候

第三條所云。中國自當照約竭力。保護。擬於海船經過要隘。

或設營汛。或派兵船。或設望樓燈塔。使商船免致誤入。再

被生番擾害。請紓貴國錦懷。永敦和好。

第三條ニ御申述ノ義ハ、清國ヨリ屹ト約束ヲ踐ミカノ及フ丈ケ保
護致スヘケレハ、此後都テノ航海船通行スル要隘ノ處ニ、或ハ兵
營見張所ヲ建、或ハ軍艦ヲ出シ置キ、或ハ遠見臺燈明臺ヲ設ケテ
商船ノ此邊ニ迷入り、又々生蕃ニ殺害セラレサル様ニ手配イダシ
貴國ノ御安心ヲ計リ、永ク
和好ヲ敦ク致シタク存候

本司到閩後。向沈大臣稟商。咨請總理衙門核示。即行奉覆。

現將貴大臣來函。一併照錄轉送矣。用特先行布覆順頌助祉。

拙者福建へ着ノ上、沈大臣へ申立商儀ヲ遂ケ。總理衙門へ申送リ
其指令ヲ伺ヒ、早速貴大臣へ返答致スヘク候、貴大臣ヨリノ來翰
ハ、只今拙者ノ返簡ト一同寫シ取り、總理衙門へ差送
置候、因テ先ツ此段御答ニ及ヒ、且御安ヲ祝シ候也

註一、本號文書ハ一〇ノ附屬書第十一號ノ後半ナルモ便

宜茲ニ獨立文書トシテ探錄セリ尙日附ハ「焚餘」ニ據

レリ

二、本號文書ノ和譯文ノ部分ハ在清國日本公使館ニテ作

一 臺灣生蕃討撫一件 七五

邦土不可稍有侵越承

貴副島大臣以固所甚願一言相答乃本年三月間准各國駐京大臣向本王大臣告知

貴國與兵赴臺灣將有事於生番竝疊據中國沿海各地方官申報有

貴國戰船一隻名春日艦自臺灣澎湖來寄泊厦港帶兵官海軍少尉家柯聲稱擬借地操兵等語本王大臣當彙敘函報各節

先行照會

貴國外務省大臣四月十四日本王大臣續將欽奉

上諭沈葆楨著授爲欽差辦理臺灣等處海防兼理

各國事務大臣以重事權欽此照會各在案迄今均未准見復嗣

接閩省咨開

貴國火輪船一號駛過旂後口外又有輪船二號到琅璫社寮港口停泊至柴城踏看紮營地勢各情竝接

貴國中將西鄉照會率親兵由水路直進番地因琉球人民遭

害招會開導殛凶示懲等情咨報前來本王大臣查臺灣全地

久隸中國版圖雖生番種類散處深山向未繩以法律總屬中國管轄之人即偶有洋面失險如琉球人民受害前事亦當知

大日本國柳原大臣

同治十三年四月貳拾柒日

註 右文書ハ「焚餘」ニ據レハ六月二十日沈上海道臺ヨリ在上海柳原公使ニ手交セルモノナリ

七六

六月十七日 御雇米國人「リ・ゼンドル」ヨリ 大隈臺灣蕃地事務局長官宛

渡臺中ノ御雇米國人「カツセル」ヨリノ報告書寫

送付ノ件

附屬書一、五月二十四日御雇米國人「カツセル」(臺灣ニテ)ヨリ御雇米國人「リ・ゼンドル」宛書翰寫

臺灣蕃地ノ情勢報告ノ件

二、五月二十六日御雇米國人「カツセル」(臺灣ニテ)ヨリ御雇米國人「リ・ゼンドル」宛書翰寫 右同伴

以手紙啓上仕候然レハ這回「カピテイン、カツセル」ヨリ「ネボウル」船「フアルモサ」へ到着致候ヨリ五月廿六日「デルタ」船出帆ノ時ニ至ル迄「フアルモサ」南方ニ於ケル諸事件

一 臺灣生番討撫一件 七六

會應管轄之地方官查辨此次貴國與兵未經向本王大臣議及亦未准知照因何事派兵赴臺既與上年所言非爲用兵之語未符亦與條規內所載兩國所屬邦土不可稍有侵越等詞相背本王大臣殊爲不解今據各處探報

貴大臣奉

命來華已抵上海經江蘇應藩司沈道將

貴國船赴臺灣一事向

貴大臣詳細剖說業經

貴大臣允爲函致

貴國外務省竝由電報知會厦門領事轉告

貴國中將等因足見

貴大臣克敦和誼顧全大局俟

貴外務省暨厦門覆信到滬仍希

貴大臣與應藩司沈道平心妥議總期彼此同守修好條規永

久弗渝

貴大臣既爲兩國通好而來如能盡其事權以固睦誼本王大

臣自當與各國來華大臣一體優禮相待爲此照會

貴大臣查照可也須至照會者

右 照 會

ヲ委細書狀ニ通ニ書認メ私方へ差送り申候處右ハ頗ル重大ノ者ト被存候間ニ通トモ寫取り閣下へ差進申候尤モ右書狀ハ全ク私書ニ御坐候ニ付何卒閣下ノ爲メ御用立申度トハ奉存候得共公ケノ書類中ニ御書入ノ儀ハ御差留被下度偏ニ奉願候謹言

六月十七日

チャーレス、レゼンドル

大隈重信閣下

(附屬書一)

寫書

五月廿四日「リアン、キアン」谷陣營ニ於テ認之

貴下ノ石筆ニテ記セル短書及ヒ「ゼネラール」西郷へ出セル覺書ノ寫并ニ「ヒラム」ニ付テノ指令書ト予カ書狀トノ入りタル一封ヲ十分時程以前ニ落手シタリ然ルニ當時折悪シク

「ネボウル」船丁度港口ヲ出航スルニ方リ其船便ヲ以テ答書ヲ差出ス能ハス儘「セネラール」西郷ハ一昨日「デルタ」船及

ヒ「シヤフテスバリー」船ト共ニ到着シ其小船ヨリ直ニ予カ帳幕ニ來リシカ其荷物ヲ陸揚セシハ漸ク只今ナルニ因リ之

レカ爲メ貴下ノ送り給ヘル一封モ予ニ届ク事遅延シタルナ

ルヘシ因テ予ハ種々ノ事件ヲ記セシ報告書ヲ「ネボウル」船ノ便ヲ以テ貴下ニ呈スル能ハサルハ甚タ残念ナリト雖トモ「デルタ」船明後日出帆ス可キヲ以テ此船ハ「ネボウル」船ヨリモ多ク後ル、事ナキヲ望ム所ナリ抑々先ツ予カ自カラ行フタル諸事及ヒ其他今ニ至ル迄成就シタル諸件ヲ簡略ニシテ遺脱ナク陳述スルニ其第一ハ福島氏ハ之ヲ遇スル甚タ難ク實ニ同氏ハ其權ヲ取ル大ナルニ過キテ予辛フシテ我受ケシ指令ノ旨ヲ執行フヲ得タルコトナリ故ニ予ハ以後如何ナル有様ニ於テモ同氏ト共ニ決シテ何事ヲモ爲スヲ承諾セスト言フヘシ

予ハ去ル六日ノ夕厦門ヨリ當地ニ到着シ曉ニ至リ「ジョンソン」ヲ陸ニ送りテ「ミア」及ヒ「キーン」ノ二人ニ通信セシ處兩人共貴下ヨリノ使者面會シタキ趣ヲ聞キテ直チニ船中ニ來レリ因テ予ハ予カ受ケシ指令ノ要旨ヲ兩人ニ通セシニ兩人共大ニ之ニ感シ其意頻リニ予ヲ助ケントスルカ如ク殊ニ兩人共早速予カ求メニ應シテ道案内者タル可キ事ヲ承諾セリ然ル後予「ワツソン」及ヒ福島并ニ其他士官兩三輩ト共ニ上陸シ終日地勢ヲ檢視セシ後予陣營ノ爲メノ場所ヲ撰ミ定メ翌日其餘ノ人數及ヒ「ガットリン」砲ヲ上陸セシメ其

後常ニ帳幕ヲ張りテ其場所ニ居リシカ蓋シ此場所ハ「ミア」ノ村落所在ノ河岸ヨリ更ニ北ニ方リ而シテ此場所ハ戰鬪ノ初マル後多分此地ニ遺シ置カル可キ少人數ノ據有スルニハ廣大ニ過クルカ故ニ港口ノ著名ナル漂物タル頂上ノ平タキ小山ヨリ南西ニ於テ更ニ他ノ陳營ノ地ヲ撰ミ成ルヘキ丈速カニ之ニ據ラントス又予ハ初メテ上陸セシ時ヨリ谷中ノ人民ト交誼ヲ結フニ盡力セシカ予カ盡力頗ル其功ヲ奏シタリト言フ可シ今試ニ其證ヲ擧クルニ頃日「ホントン」人ト小鬪ノ節我兵士ヲ前面ニ進マシメシ時谷中ノ人民忽チ其兵器ヲ携へ來リ其有様實ニ我ニ與ミシテ戰ハントスルカ如ク又或時我堡障ヲ造ルニ方リ谷中ノ人民來テ之ニ助力スル者五百人ニ降ラス蓋シ此等ノ事情ハ貴下ノ自カラ善ク判斷シ給フ可キ所ナリ抑々予ハ谷中ノ人民ニ語ルニ我等ハ彼等ノ友ニシテ彼等ノ財産、眷族、生命ヲ安全ナラシムル爲メ法ヲ立テ政ヲ設クルノ目的ヲ以テ此地ニ來リ且ツ我等ハ生蕃ヲ抑制シ己ヲ得サレハ此地面上ヨリ全ク此生蕃ヲ薙リ盡ス可キカ故ニ彼等ヲ指シ云フ我カ味方トナラハ土地ト財貨トヲ以テ之ニ酬ユ可ク加之各男女小兒ニ至ル迄其權利ノ安全ナル事我等中ノ最高貴ナル人ト敢テ異ナラサルノ利益アル可キ旨

ヲ以テセシニ彼等甚タ之ヲ歡ヒ且ツ其他之ニ類スル言ヲ彼等ノ中ニ流布セシメ竝ニ予ハ此等ノ諸事ヲ貴下ノ指令ニ因テ告知スル旨ヲ彼等ニ保證シタレハ予思ヘラク此地ノ人民ハ速カニ我カ味方トナルニ相違アル事ナシ又我等ノ據有セシ土地ハ必ス其代價ヲ拂ヒ且如何ニ少許ノ勞功ト雖モ一トシテ之レカ報酬ヲ爲サ、ル者ナシ去ル十日「アドミラル」赤松日新艦ニ乘リテ到着シ又其後間モナク運送船二艘到着シタルニ因リ我人數増シテ五百人許ニ及ヘリ此時予貴下ノ朋友タル「エスツク」ノ紹介ニ因リ南方ノ人種ト通信ノ道ヲ開カント欲セシカ蓋シ此人ハ「トケトク」ノ死去以來其後嗣タル同人ノ男ノ幼年ナル間首長ノ名義ヲ有スル者タリト見ユ緒又土人等ハ我等ヲ畏懼スル事實ニ甚タシク予漸クニシテ「ミア」ノ紹介ヲ以テ右「エスツク」ニ音信ヲ通スル事ヲ得タリ而シテ其通信ノ旨ヲ言フニ予ハ貴下ヨリ同人ヘノ書信ヲ持參シ貴下ハ其朋友タル南方人種ノ居間者若クハ其保護人トナル爲メ間モナク此地ニ着ス可ク且ツ予ハ彼「エスツク」レニ面會シテ我等カ彼レニ對スル親睦ノ意ヲ表シ支那ノ奸商等ノ彼レニ告ケシ由ノ評判アル「日本人ハ大ナル孔ヲ穿チシ耳ヲ持テテ各人ヲ刎首

ス可シ」トノ語ハ全ク虚誕ニシテ我等ト彼レト相親ムヲ妨クル爲之ヲ作りタル旨ヲ予自カラ彼レニ語ラント欲スル等ノ諸事ナリ緒此通信終ニ彼レニ達セシカ彼ヨリ之ニ答ヘテ曰ク其音信ノ旨ハ頗ル喜ハシキ所ニシテ速カニ來リテ予ニ面會セント欲スレトモ兵士ノ數甚タ多キニ因リ其中ニ來ルハ頗る慮アリテ若シ予彼レカ村落ニ最近ナル雜人種ノ一村落ニ至ラハ彼レ他ノ酋長等ト共ニ予ニ面會ス可ク然ラハ安ンシテ互ニ談話ヲ爲スヲ得可シト而シテ予其事ハ余輩ノタメニモ都合ノヨキ趣キヲ言送レリ但シ予ヨリ彼レニ行クニ護送兵ナク且ツ武器ナクシテ十分彼レヲ知ル事ヲ明カスニアラサレハ彼等モ亦十分ニ我レヲ信セサル様子ナルヲ甚タ悲ミタリ緒テ其翌日ニハ將軍「タイニー」海軍總督赤松「ワソン」オヨビ余輩出張シテ名指ノ村落ニ到着シテ最美ナル家ニ案内サレ程ナクカノ名高キ「エシユツク」現ハレ出テタリ然ルニ隨從ノ者ハ只ニ三酋長ニアラスシテ四五十人以上ノ生キ鬼トモ見ユル兇惡ナル者アリ地中ヨリ突然ト現ハレ出テタルカト疑ハレタリ而シテ其打扮ヲ見ルニ齒ニ至ルマテ軍裝シテ我等ハ恰カモ係蹄ノ中ニ陥リタルカ如クナレハ二三「セコンド」ノ間ハ我カウキンテエストル 銃砲ノ名ニ指

ヲカケテ離サスハモト我カ忠實ナル案内者「ミヤカ」所持シタルモノナリ然レトモ予ハ氣ヲ喪フ事ナク平氣ニテ其場ニアリタリ情「エシユツク」ニ問ヒテ予ハ書狀ヲ持チ來レル者ナルヲ話シケレハ遂ニ坐ニ就キタリ又程ナク「トケトツク」ノ子ニシテ當時病臥セル第三酋長「アーラツク」ノ兄弟ナル十六才ハカリノ容顏美麗ナル者入り來リテ談話ヲ初メテ予先キニ文通ニテ申送りシ事ヲ今皆之ニ話シテ我信切ナルヲ知ラシメテ其僞リナラサルヲ之ニ納得セシメ又彼等ヲシテ非常ニ安心セシメタルハ幸ト謂フヘシ右等ノ事ヲ言畢テ後ニ之ニ願ヒタル趣キハ其領地ニアル海岸ヲ測量シタキ事并ニ其人民ニ布告シテ我等ノ敵對ヲ好マサル事ヲ知ラシメ又我カ船ト人ノ南灣并ニチユイラツク河ノ中ニアル間ハ炮發スヘカラサル様布告スヘキ旨ヲ頼ミシニ彼レ答ヘテ云フエシエツク并ニ其人民ニ於テハ日本人ノ船ニ駕シ何處ニ到ルモ差支ナシ依テ恐ル、事勿レト但シ極南ノ人種ハ極メテ猛惡ナル人民ナレハ日本人モシ其地ニ船ヲ上ケ或ハ其地ヲ徘徊スルトキハ彼レ炮發スルモ測ルヘカラスモシ然ラントキハエシユツクノ罪トナルヲ以テ決シテ上陸セサラン事ヲ望メリ依テ是事ヲ猶ホ逼ラサルヲ可トシ之ヲ止メテ後

日勘考ノタメニ殘シオキタリ情テ彼等ハカネテ晝飯ノ用意ヲナシ我等ヲ招キ且ツ自身ハ我等ノ食スル間別間ニ退キテ食ヲ取ラン事ヲ懇ロニ願ヒシカ我レヨリ共ニ食セン事ヲ勸メテ遂ニ安心シテ會食シタリ食事終テ予言テ曰ク我前途尙ホ遠シ和親ヲ固フスルタメニ一杯ヲ傾ケテ相別ルヘシトエシユツク答テ曰ク是レ亦予カ願フ所ナリト而シテ我カ彼ノ親友ニシテ敵ニアラサルヲ信シタリ此ヲ立チ去ルノ時海軍總督赤松我ニ言テ曰ク我カ親任ノ證據トシテ酋長ニ物ヲ贈ラントス依テ同行中ニ持チ合ハスル「ブリーチ、ローチンダ」ト云フ施條砲ニ悉ク粧飾ヲ添ヘテ贈ルヘシト是ハ固トヨリ酋長ノ好ム所ナレハ予直チニ總督ノ命ニ從カヒ其銃砲ヲ贈リタリ又酋長我ニ言テ曰ク途中マテ護送兵ヲ送ラント言シカ余輩路ヲ知リテ聊カ恐ルヘキ所ナケレハ之レニ及ハサル旨ヲ申シ送レリ又一事尤モ驚クヘキ事アリ是ハ酋長ノ貴下ヲ信スル様子ナリ酋長最初我ニ言フニ貴下ノ遠征ノ事ニ預カルト云フハ全ク信シ難ク只々予カ信ヲ取ランカ爲メニ貴下ノ名ヲ用フルモノト思フト言ヘリ依テ彼ヲ招キ陣營ニ至ラシメントスレハ彼レ答テ曰フ未タ信シテ來リカカシ但シ貴下來ラハ就ハチ恐ナクシテ來ルベシト予彼レニ告テ

曰フ貴下ノ到着次第其趣キヲ通達スベシ又貴下ノ到達モ必ラス近キニアルヘシト而シテ相別レテ陣營ニ歸リタリ爾後二三日打過キテ海軍總督赤松「ネイシユ」號ニ乘リテ南方ノ海灣并ニ東海岸ノ南部ノ中チユイラツク河ノ河下ニ當ルトコロニ進ミシニ其船到ル處コアリユツト種族并ニリンワンス種族ヨリ炮發サレ「リアンキアン」灣ニ歸リテ其犯罪ノ人民ヲ罰スルニ付キ我レニ相談アリ「ネイシユ」號ヲ以テ「リンワンス」種族ヲ撃チ又一時ニシヤリアヲヨリ兵ヲ出タシテ「コアリユツト」村ヲ側面ヨリ取り同時ニ兩地ヲ破ラントス是ハ極メテ爲シ易キ事ニシテ上策ナレトモ如此事ヲ爲スニ太夕早キトキハ近頃「エシユツク」下面談ノ甲斐モナシト思ヒタレハ總督ニ勸メテ其事ヲ止メシメタリ然ルニコ、ニ一害アリテ之ヲ防クノ術ヲ知ラス是ハ別事ニアラズ士官兵卒免許ナクシテ小群ヲナシテ内地ニ進ム事ナリ但シコ、ニ免許ナシト云フト雖トモ其進入多クハ指揮スル士官ノ命ヲ受ケテ然ル後ニ行フニ必セリ予カ始メテ聞キタルハ士官六名同行シテ國ノ南部ニ進入シ南灣マテモ到リシニ遂ニ近所ニアル半種者ニ諫メラレテ止マリタリ其半種者曰クモシ更ニ遠ク東方ニ進ムトキハ「コアリユツト」人々種必

ラス攻メ來ルヘシト云ヘリ又予カ恐ル、所ハモシ南方ニ於ケル土人ト相觸ル、事アラハ「エシユツク」トケトツク「其外凡テ近ゴロ和親スル人民トノ交際ニ大害アリト思フタルニ因リ是ニ於テ此ノ如キ所業ハ以後爲スベカラスト余嚴シク告ケ置キケレトモ諸士官等其隊ノ者ヲ制セサルト見ヘテ余ノ言絶ヘテ其甲斐ナク十七日ノ少許ノ人數法ヲ畏レスニ「ボンタン」村落ノ方ヲ指シテ出掛ケ其歸路ヲ敵ニ要セラレ我兵一人殺サレタリ其屍ハ取戻セシカ首ハ「ボンタン」人ノ風習トシテ奪去レリ是レ元來右ノ人數ハ或人ノ見込ニテ本營ノ前二里許離レテ据ヘタル一分營ヨリ出掛ケタル者ニシテ右ノ事起リテ余始メテ之ヲ聞ケルナリ余ハ元來此前營ヲ分チ置ク事ヲ失策ト思フタリシ故其人數ヲ引揚クヘキ旨ヲ議セシカハ其議ノ如クナリシ然レトモ從來經驗ナキヲ以テ二十一日ニ又十二人ノ一組命ヲ受ケテカ受ケスシテカ余ハ知ラサレトモ數日前ニ一人ノ殺サレタル同場所ニテ同様ニ三十人許ノ土蠻ニ襲撃セラレタリシ然シ此度ハ巧ニ戰ヒ援兵トシテ「コムベニ」ノ馳付カサリシ前ニ敵二人ヲ殺シ一人ヲ傷ツケタリ右援兵ノ近寄ヲ見テ土蠻ハ固ヨリ遁逃シ我兵無事ナリシカ「ボンタン」人必ス夜中或ハ拂曉ニ歸リ來

ルヘシ之ヲ待受ケントテ其夜「コムペター」止リテ其地ニ露宿シタリ抑此地ハ日本人少シモ知ラサレトモ石門トイヒテ「ボンタン」部ニ入ルノ要害堅固ナル絶處ノ直外ニシテ余ハ案内者ミアキインノ兩人ヨリ聞キ早ク之ヲ知り且ツ「ボンタン」人皆ヲ築キ此地ヲ守ラント謀ヲ決セシ事ヲモ聞知シタル故一戰略ヲ考ヘタリ「ボンタン」人愈々此策ニ出ツルナラハ其種族ノ兵力ヲ此ニ集ムル事必セリ余既ニ「ホンカン」及ヒ「ボンタン」近邊ノ處々ヨリ來リタル人ニ就テ聞知シタル道アレハ游兵ヲ石門ニ張り「ボンタン」人ヲ此谷ニ誘引シテ騎兵ヲ以テ「ホンカン」ヨリ進マシムレハ一夜ニシテ其後ニ出ツヘシ左スレハ「ボンタン」人ハ我手中ノ物籠中ノ鳥ニシテ遁逃スヘキ路ナク盡ク之ヲ獲ヘキ事必セリ然ルニ彼石門前ニ露宿シタル「コムペター」隊廿二日ノ朝兼テ命セラレタル如ク直ニ退カスシテ却テ石門中へ進ミ掛ケ土蕃ノ兵ニ出遇ヒ二時間劇戦シ之ヲ退ケ十五人ヲ殺シ三十八人ヲ傷ツケ我兵モ死者六人傷者十人或ハ十五人トモイフ之ヲ聞キシ時余ノ憤懣如何ソヤ加之我兵敵ノ首十二級ヲ切テ陣營ニ歸リケルニ此村ノ支那人等皆「ボンタン」部ノ首酋「アロク」ノ首級全其中ニアリト云ヘリ嗟日本人彼怖シキ野蠻ノ

風ニ從ヒ死者及ヒ傷ツキテ未タ死セサル者ノ首ヲ切り分取トシ敵ノ兵器裝束ヲ褫取シ持歸レリ此戦ハ固ヨリ勝利ヲ得タルナレトモ「ボンタン」人ヲ一舉網羅スヘキノ策之カ爲メニ破レケレハ得失相償フニ足ラサルナリ船將赤松命ヲ待タスシテコトヲ爲シタル者ヲ論シ全隊ニ令シテ直ニ此地ヲ退カシメ以テ余カ策ノ猶行ハル、様ニ爲サント云ヒケレトモ復タ此ノ如キノ機アル哉否期シ難シ余惟フニ兵卒此ノ如ク血氣ニ猛ルノ時ニ當テ進撃セサルヘカラス否ラサレハ事ナキヲ不足ニ思ヒ必ス忽マテ事ヲ企テ之カ爲ニ患害ヲ起サンモ計ラレサレハ余ヨリ大將西郷ニ説キテ沈靜ニ事ヲ爲スヘクセヨト貴君ハ言ハルレトモ余惟フニ貴君若シ此ニアラハ必ス自ラ此策ヲ用ヒラルヘケレトモ兵卒ノ意ニ滿テンカ爲ニ余暫ク之ヲ言フ事ヲ猶豫シテ他日貴君ノ余ニ教示セラル、カ如ク爲シ得ント欲スル爲メ余ハ大將西郷ニ告グルニ若シ兵卒沈靜シテ居リ得ルナラハ固ヨリ貴君ノ教示ノ如クスル事最良ナレトモ若シ兵ヲ用フルナレハ余ノ言ノ如ク爲サ、ルヘカラサルヲ以テセント欲ス

一艘外ニ「ゴンボート」小船一艘ヲ率ヒ來リテ大將西郷ニ福建ノ總督ヨリノ禮辭ヲ傳ヘタリ翌日其船出發前ニ日本ノ國旗ニ對シ祝砲ヲ發シテ洋中ニ馳セ去レリ請フ此事ヲ國中ニ布告シ我友ノ「ビ」及ヒ「ビ」ノ虚言者ナル事ヲ衆人ニ示サレヨ此書ハ「デルタ」船明朝出帆ノ期ニ後レサランカ爲ニ忽々ニ筆ヲ報ルヲ以テ誤謬ヲ正スニ暇ナク疎略ヲ極ム希クハ恕セヨ

尙一事アリ尤モ重要ノ者トス一昨日案内者「ミア」「エシユツク」ヨリノ使ノ趣ヲ以テ余ノ處ニ來リ「エシユツク」ノ牝牛二疋豚數疋鶏數羽ヲ余ニ贈ラントスル旨ヲ告ケタリ然ルニ余ハ我等ノ方ヨリ信スレトモ彼等ノ方ヨリ我ヲ信セサル人民ヨリ贈物ヲ受ル能ハスト答ヘタリ

余ハ彼ノ陣營ニ來見セン事ヲ願ヘリ是レ彼ヲ大將ニ謁見セシメンカ爲メナリ大將既ニ到着有リテ彼ニ贈ラントテ數多ノ贈物ヲ用意セリ是レハ曩キニ尊君ヨリ彼カ事ヲ云送リタルニ依テナリ余亦使者ニ任カセ難キ種々ノ事件ヲ彼ニ面談セン事ヲ願ヘリ又彼ハ余輩ト友親ヲ結フ前ニ先ツ其言ニ於テ信用ヲ表ス可キ事ヲ願ヘリ案内者ミアノ歸リ來リシ時余ニ告ケテエシユツク既ニ余カ言ヒタリシ總テノ事皆正實ナ

ルヲ承知セシノミナラス公然宣言シテ余ヲ信任シテ未タ嘗テ爲サ、リシ事ヲ爲ス可キ由ヲ云ヒタリ因テ決定トナリタリト云ヘリ然レトモトクイトクノ嗣子幼酋長及ヒ近隣部落ノ三酋長ハ次夜(即今夜ナリ)シヤリアオノ村落ニ在ルミアノ家ニ彼ニ同伴シテ來リ大將及余等ニ會シテ友親ヲ取結フナル可シ

目今好機會ニ乘シ速カニ此處ニ降臨有リテ尊君ノ方略ヲ施行成就セラル可シ一瞬間時ヲ失フ可カラス

今晚差掛リタル會見ノ様子ハ早速書記シテ尊君ニ贈ル可シ若シ然ラサルモ余輩既ニ此人民等ト直實ノ友親ヲ結成セシ事ト御推料可被下候

猶申シ上度事モ寸暇ヲ得サレハ記載スル能ハス是迄ニテ筆ヲ止メ申候

ドウクラス、カッセル

リアンキアン谷中ノ陣所ヨリ

五月二十六日

大將貴下ニ申ス

幸ニシテ「デルタ」號少々延引セシ故ニ余昨夜「エシユツク」トクイトクノ嗣子他ノ小酋長二名及ヒ就中最要緊ナルハ

コロアツト種族ノ酋長ト會見セシ事件ヲ尊君ニ申呈スルヲ得タリ余カ既ニ云ヘル如ク此輩ハ余輩ニ其服從ノ盟若クハ友親ノ情ヲ表センカ爲メニ來リシナリ余曩ニ大將ニ呈書シテ兵士七時後ハ河ノ南方ニ行クヲ許ルサ、ル命令ヲ下サン事ヲ請ヘリ是ハ土人ニ出逢ハ、無益ニ之ヲ驚愕セシメテ再ヒ山中ニ逃入ルノ懼有レハナリ此命令施行有リ斯クテ時間余程過タリシカハ頗ル心配シ居リシカ九時頃ニ至リテ案内者入り來リ諸酋長既ニミヤノ家ニ來リ諸君ヲ待受居レリト告タリシカハ甚タ喜ヒタリ酋長等ハ大勢ノ從者ヲ連來リシカ村落ノ外半英里許ニ殘シ止メテ唯五人ノ酋長ノミ入來レリ余ヲ信任スルノ深キ故ナリ余直チニ大將ヲ召ヒ之ニ隨伴シ水師提督赤松將軍タイネー、ワツソフフラン、ハウス及ヒ譯司兩三人ト共ニ二百「ヤルト」ノ距離ヲ村落ノ方ヘ出張セリ大將ヨリ又命令有リテ極メテ美麗ナル行季ヲ持來ラシメ會見終リテ之ヲ諸酋長ニ贈リタリミヤノ家ノ庭上ニ入りタルニ甚タ立派ニ燈燭ヲ點シ有リテ諸酋長共ニ椅子ニ坐シ全然兵器ヲモ持セス居レリ直チニ坐ヲ離レテ通例ノ如ク喧雜ノ事無ク恭默シテ立チ彼等ノ手ヲ連結シテ大將及余ヲ禮セリ是蓋シ案内者ヨリ彼等ニ教ヘタルナル可シ余ヨヒ

ユソウニ依テ左ノ事ヲ云ヘリ此島ニ來リシ諸兵士ノ總大將ノ面前ヘ此人々ヲ招納セシハ甚タ幸福ナリト思ヒ且大將今夜此所ニ來リ諸酋長ノ友親信實ノ意ヲ表セシヲ見テ甚タ喜ヒタル由ヲ云ヘル事ヲ告ケタリシニ「エシユツク」ハ語ヲ通スル者ニテ是ニ答テ云ク吾ハ公等ヲ信用セリ此故ニ公等カ請フニ任カセテ友親ヲ表スル些少ノ贈物ヲ持來レルナリト云タリ此時余左ノ事ヲ云ヘリ爰ニ余輩カ此仕方ニテ彼ニ面會スル事ヲ喜フ他ノ事故有リ就中余輩ノ自身ヲ以テスルニ非レハ使者ニ任スルヲ欲セサル他ノ事故有リ余曰ク汝等君民及ヒ總テ南方諸部落中汝ヨリ其異心ナキヲ擔保スル者ハ皆我カ友國ト爲シ之ニ害ヲ加ヘサルノミナラス我レ之ヲ助ケテ他ノ敵ノ害ヲ防クベシ然レトモ茲ニ我レト深仇アリテ我曹誓テ一人ヲ遣サス殄絶セント欲スルニ部落アリ是レ牡丹人種ト之ヲ助ケタルキユシユキツト人種トニシテ此民ノ我手ニ屠戮セラレ終ニ子遺ナカラン事ハ其誤タザル事譬ヘハ太陽ノ東ニ出テ西ニ没スルガ如シ然ルニ或ハ聞クラバリ一及チユイルラソツク人種等其他南方部落ノ中潛カニ山路ヲ遶リ陰ニ此殘暴兇惡ナル牡丹人ヲ助ケル者アリト因テ汝ニ告ク若シ眞ニ此事アラハ嚴罰必ラス汝等君民ニ及ブベシ

又我兵牡丹人種ヲ剿スルニ及テ其民遁レテ汝カ境土ニ入り我カ南方諸部落ニ與ヘタル守護ノ下ニ其身ヲ匿サントスル者アルヘシ然レドモ汝必ラス力ヲ盡シテ之ヲ拒ミ特ニ之ヲ隱匿セサル者ノミナラス之ヲ知ラハ其人ヲ捕ヘ其手足ヲ縛シテ我ニ交附スベシトエシユツク之ニ答テ曰ク牡丹人種及キユシユキツト人種ノ兇惡ナル事ハ我曹ノ熟知スル所ニシテ貴君ノ言一々皆理アリ我民ヲシテ必ラス貴國ノ威ヲ冒ス如キ愚ヲ爲サシメズ若シ牡丹キユシユキツトノ民敢テ我境土ヲ踐マント欲スル者アラバ必ラス之ヲ捕ヘテ我カ貳心ナキヲ示ス可シト

彼レ又曰ク我ニ屬スル一村貴軍ノ牡丹國ニ向ントスル途上ニ在ル者アリ我レ其民ノ誤テ敵トセラレ不虞ノ害ニ罹ランヲ恐ル其良民タルハ我固ク之ヲ保スルヲ以テ願クハ貴軍ノ之ヲ庇護セン事ヲ請フト我答テ曰曩キニ我兵之ヲ以テ牡丹人ノ同盟也トセリ故ニ前日ノ役既ニ之ヲ苦ム然レトモ汝躬カラ其良民タルヲ保セハ我汝カ辭ヲ證トシ今ヨリ之ヲ害スル事勿ル可シト

余又言ント欲スル一事アリ遂ニ之ヲ彼レニ告ク其事ハ左ノ如シ曰ク前日我船海岸ノ模樣ヲ探リ且土人ト好ヲ結ハン

爲メ南灣ニ至リタルニコアリユツト及リユイグワン人種等我船ニ向テ發砲シタリ是レ我レニ友情ナキノミナラス即チ兵端ヲ挑ム者ニシテ我レ決シテ此ノ如キ徒ニ寬假セス再ヒ此ノ如キ事アルカ或ハ速カニ來テ罪ヲ謝スルニ非サレハ我レ之ヲ殲シテ遺類ナカラシメント初メ余此家ニ入ルニ當リコアリユツトノ事ニ就テ問フ事アリシニエシユツク答テコアリユツト酋長ハ今日來謁セス彼レ固ヨリ異心ナシト雖モ恐レテ余ト共ニ來ル事ヲ辭セリト云ヘリ然ルニ余右ノ事ヲ告ルニ及テエシユツク急ニ其次席ノ人ヲ指サシ答曰今日コアリユツト酋長實ニ席ニ在リ前日ノ放火ハ全ク誤ニ出テタル事ニシテ當日村内ノ兒童鳥ヲ觀射シテ爲ス所ナリト此辨解實ニ不都合ノ辨解ナレトモ余敢テ之ヲ詰ラス又言テ曰何レノ民ニテモ汝其異心ナキヲ保セハ余ハ復タ之ヲ問ハス然レトモコアリユツトノ民ヲ庇護シ之ト好ヲ訂スルニ先テ彼レニ請フヘキ一事アリ琅璫灣ハ時アリテ風浪高起シ我兵上陸散步シ或ハ薪水ヲ求ムルニ便ナラス因テ別所ニ於テ此ノ如キ一地ヲ得ント然ルニ東岸中稍チユイルラソツクノ下方ニ當リ曩日我船ノ放火セラレタル地ニ於テ好澳脚アリ我レ此地ニ就キ土人ノ價ニ從テ一小土ヲ買ヒ我カ用ニ供セント

欲ストエシユツク之ニ答テ曰ク我曹今貴國ト親愛ヲ結フ以上ハ貴軍島ノ南方ニ於テ何ノ地ニ上陸スルモ決シテ危害ナシ然レトモ彼ノ地ハチユイルソツクニ屬シ而シテ薪水ノ事ニ於テハ我等既ニ彼酋長ト熟談シタリ故ニ貴軍唯薪水ヲ求ルノミニ於テハ南方諸港中何レニ上陸スルモ曾テ差支ナシ若シ敢テ貴軍ニ向ヒ發砲スル者アラハ我レ貴軍ヲ先導シテ其村ニ至リ貴軍ヲ助ケテ之ヲ剿盡スヘシト余諸酋長ノ地ヲ賣ルヲ拒ム意アリテ其議ヲ直チニ成ラサルヲ視ル故ニ又答テ曰ク今日ノ會百事實ニ満足ナリ汝等歸途皆遠ケレハ長ク拘留ス可カラス快ヨク一杯ヲ飲テ友情ヲ訂シ我總督ノ親愛ヲ表シテ贈レル諸品ヲ受ケテ今日ハ速カニ歸去スヘシ然レトモ汝等明朝迄留ラント欲セハ將軍汝等ニ陳營兵卒ノ操練大砲其他珍奇ノ物ヲ示ス可シト「エンユツク」之ニ答テ曰ク己大イニコレヲ欲スレトモ人民其歸ヲ待ツテ以テ再ヒ白日陣營ニ來ノ時ヲ期スヘシト此時贈物ヲ出シテ分配シ「エシユツク」ニハ他物中殊ニ極テ美麗ナル日本刀ヲ與ヘ慰撫シテ後余輩ハ別レテ陣營ニ歸レリ猶遺漏セル一事アリ茲ニ之ヲ言ハン余將軍ノ記名上ニ文字ヲ書シタル日本旗章ヲ忠實ナル各村ニ與ヘント約シ其旗ヲ飄カヘセル村落ハ我保護

ノ下ニ在リテ日本兵卒行軍ノ時之ニ依テ我朋友タルヲ知ルヘキ事ヲ説示セリ諸酋長就中「エシユツク」喜テ其意ヲ了シ直チニ旗章ヲ得ント欲シ「エシユツク」ハ十六流ヲ乞ヒ各社ニ一流ヲ與ヘ「エシユツク」其責ニ任ス可シト言ヒ又各社ノ人民旗章ヲ得ハ十分ニ保護ヲ受ケタリト思想スル事之ニ過ルモノ無カル可シト言ヘリ余之ニ答テ曰ク旗章ハ未タ備ハラサルヲ以テ成就セハ一流ヲ「エシユツク」ニ與ヘ同行ノ酋長ニモ各一流ヲ與フヘシ然レトモ他ノ村落旗章ヲ得ント欲セハ先ツ其酋長若クハ頭人「エシユツク」ノ例ニ倣ヒ來テ大將軍ニ散禮ヲ致シ我ヲ眞ノ朋友ナリト信セン事ヲ表セサル可カラスト「エシユツク」答テ曰ク彼等ハ皆君子ノ言ニ從テ訪ヒ來ル可シ今日ニ至ルマテ彼等ハ恐レテ來ラサリシカ余歸テ聞知セン所ヲ一々説話セハ彼等喜テ訪ヒ來リ親友タルヲ表シ保護ヲ得ント欲ス可シト此商議ヲ爲ス以前將軍西郷此一件ヲ全ク余ニ任シ便宜ノ事ハ一々之ヲ行ハンヲ望ム事ヲ語り商議中西郷及ヒ其他日本高貴ノ官吏ハ坐シテ之ヲ聽キ一言ヲ出サス歸後將軍余ノ成シタル事ヲ謝シテ其重要ナルヲ稱セリ我將軍ニ告ク今日ニ至ルマテ成功セン所ノ事ハ余カ熱心期望セン所ニ過キタリ唯哀ム此好機會ニ當テ君ノ

此地ニ在テ其策ヲ施行セサル事ヲ

東岸ノ事ニ付キ更ニ數言ヲ述テ結局トス可シ余ノ茲ニ來リシヨリ以來此事業ヲ成スニ適セル船ノ有用ナルノミナラス實ニ缺ク可カラサル事日ハ一日ヨリ切迫シ手ニ入ルヘキ船ノ中ニテ唯「タボル」號ノ用ニ適セルヲ覺ユ成丈ケ早ク「タボル」號ノ此地ニ來ルヲ主張スル事ヲ誤ル勿レ余カブテイソフラウンニ電信ヲ以テ「タボル」號成ルヘクハ來月中此地ニ達スルヤウ長崎ナル君ニ報知スヘキ事ヲ語レリ余ハ東岸ノ事業ヲ成スニ「タボル」號ヲ缺ク可カラスト思想ス勿卒亂筆請フ恕セヨ謹言

ドーグラスカツセル記名

註

右御雇米國人「カツセル」ハ歸國後明治八年六月十五日臺灣ニテ得シ病氣ノ爲死去セラレハ約定ニ基キ明治九年九月一日月給六ヶ月分ヲ日本政府ヨリ其ノ遺族ニ送付スル處アリタリ

七七

六月十八日 寺島外務卿ト英國公使トノ對話書

征臺一件ニ對スル清國政府ノ抗議等ニ關スル件

明治七年六月十八日於外務省寺嶋外務卿英國公使パークスト應接記の内

一 柳原公より御書昨日方り到來せさりしや
〔記者柳原公の來書の有無を調べに立つ〕
一 支那政府より來書の意御話有之候ても御差支無之候得は承度候

一 柳原より昨日は書狀不來支那より來書には副島應接の時政令其蕃地に不及化外の地なれとも支那管轄の圈内に相違無之人を遣し罪を問ふは不苦と申せり兵を送る事を許せし事は無之旨也支那政府は其地奪われん事を懸念致居候様子也我は掠る見込は無之候

一 其見込地を奪ふためならされは何の爲めなる哉
一 先年暴害を蒙りたる者等のため其罪を糺し後來如此の危険を防んかため也右野蠻の地なれば夫を爲すにも何程歟の事をなさしは不能也先年米國人の害せらるゝや米人來て條約を結ひ爾後の防禦を爲すと雖も復如此事を行ふ故に只約を結ぶのみ位の事にては後來を戒むるに足らず故に恐れ伏せしめて後の戒となさは追々改心するに至らん彼も人も他國人を害するを善事となすまじ彼犬猫にあ

らす一度懲せは後來他國人を害せは復も難儀を來さんと恐れ慄き終には害をなさざるに至らん乍然我永く鎮臺を彼地に置き始終防禦をなす事は不能且無益に屬す故に一且懲せし後は支那政府え懸合爾後の取締をなさしめむと欲るなり

一支那と兵を交へて其地を取り兵を置いて守らんとの御見込ならずや

一否

一臺灣の地を押領せは終には支那と兵を交るに至らん一初めより押領する見込は無之候其地の取締は支那政府に任すへき也支那政府も其地を失わん事を恐れなば取締位の事は可致ならん

一支那官員の言に貴國より兵を遣り永く其地に居留せは承知せぬと也北京より來書中に其地を押領して永く兵を居留せしむる事を否む事なきや

一書中に其事なし只先年の談判は人を遣り罪を問ふ事は既に許せり兵を送る事を不諾也とのみなり勿論此書は我兵渡る前七日程前に發せしもの也

一北京より西郷等へ宛たる書翰二通世に公布せり書中に

居候歟は存不申候得共他國に於ては無論戰爭と見做申候然るに未た各國公使へ公けに御報知無之先に私に兵隊出發せり此舉動文明國には有之間敷事也貴政府動もすれば能萬國公法を引て論するに此舉のみ公法に反す支那政府之を處する如何と關係無之事ながら貴國の萬國公法を犯すは明か也支那は不論萬一他國へ三千の大兵を送る時は必ず戰爭と可相成候今貴國如此舉動を支那政府へ向て爲せは他國より貴政府え向て如此事をなすも異議あるへき理なし萬一他國の兵三千北海道に向て來らは貴國夫之を何と歟するや

一人を彼地に遣る事は既に談判濟の事なり其時兵の事は不談依て何とも斷りなしに兵を送りし事を彼より論せり彼政令不及といふは我其處分を彼に托せん事を恐れし故の事ならん

一此舉甚可怪事也初め兵を出し程なく呼戻し又發し又歸るの末兵隊私に發程し彼地上陸の後初て布告を發せり一最初福建え船艦來着するに及て布告を出せし也

曰く日本政府萬國公法に基き早く兵を退かせよと有之候
(註)ノ書翰不詳
去月五日附の御書に我國人民船艦を雇ふて此役に用せらるも支那政府に於て素より異論あるへき理なしと被申越たり然るに御雇米人の事に付北京にて米國公使へ異議を以て懸合たる趣なり依て考ふるに閣下より支那政府より異議可申理無之と被申越候は御量簡違に可有之候

一其地は支那政府化外に置く故に人を我より遣る事は承知せり其人穩かに事をなすへき人歟又は彼よりの仕向により夫々應すへき何程歟の用意を備へたる人歟初より不相分候但し兵を送る事は支那政府不承知なるを以て我より遣したる者支那政府へ對して戰ふ意は毛頭無之候未た事を舉ざる前既往同様に論するは不當歟と存候故に支那政府に於ては異議なかるへしといへり

一右異議を申せしは支那政府よりならず廈門の道臺よりなり

我方に於て中立するに早き事無之旨は大兵を他國の領地に送る焉んぞ戰に非すとせんや支那政府は何と思ひ

申入候

一此末如何成行も貴國と支那との間の事なれば何も申に不及候得共貴國萬國公法に反せり北京への回答は未た不被成哉

一然り

七八

六月二十日 清國駐劄柳原公使(上海ニテ)ヨリ 清國恭親王等宛

恭親王等ヨリ寺島外務卿宛照會ニ對シテハ近日 寺島外務卿ヨリ回答アルヘキ旨竝ニ征蕃一件ニ 關シ六月六日、七日潘幫辦ト面談セル旨通告ノ 件

謹啓者本大臣猥以菲材

簡命駐華陽曆五月二十八日 即四月 十三日 行抵上海晤沈道臺始悉同

治十三年三月二十六日經

貴王大臣早有公文專人寄往東京給我

外務大臣取具覆文等語故本大臣暫停滬上等候本省有何 音耗續于六月十三日 即四月 念九日 本大臣接由

上海新關稅務司將

貴王大臣于十三年四月十八日再給我

外務大臣之公文一角傳遞前來本大臣接此即于是日付郵
寄回去後于六月十八日即五月二十五日接到本省六月九日即四月二十四日
發來給本大臣函文內云本月四日即四月二十日有英國士人麥堅
者來省面遞總理衙門十三年三月二十六日所發之公文本
省接閱之下此郵未及即修覆文等因並照錄

貴署來文咨送前來據此可期下郵必有回文或委本大臣代
爲辦具照覆惟以海路迢遞雖有汽輪一往一來輒需兼旬知
關

貴王大臣盼念理合先茲具

聞至于本國命將征番一事會

潘藩臺奉

旨下閩路經滬濱本大臣于本月六七兩日即四月念二三因

沈道臺得與邂逅面談一切所有情節開經

兩憲具達

尊聽故不贅述昨日探得麥堅已回滬地趁船北上本大臣聞即
派員就見問以我外務省接了總署公文有何說話有何收條
麥氏秘而不言本大臣但見

貴國人回未見本省文來中心不禁耿耿用特附佈寸悃以冀

丙原竝頌

助祺不宣

柳原前光

中 堂

王 爺 台 啓

大 臣

再者本日臨封此函承

沈道臺捧

貴王大臣四月二十七日所發給本大臣之公文來館親手遞下

又述

貴王大臣函囑致慰勞之意本大臣接已閱悉竝感

惠言諄至除俟日再具覆文外箋端片言奉

謝不莊

(焚餘)

七九

六月二十二日 臺灣社寮、車城ニ於テ西鄉臺灣蕃地事務
都督等ト潘清國幫辦等トノ對話書

臺灣生蕃處置ニ關スル件

〔第十二號〕

〔朱書〕

〔應接第一號〕

明治七年六月二十二日午前第八時社寮營中ニテ西郷中將
佐久間中佐川崎副監督ト清國欽差幫辦福建布政使潘爵臺
灣道臺夏獻綸同知謝寶鼎等福州造船場備佛朗西人セゴン
ザツクジケルト云者兩人ヲ帶來テ應接

挨拶畢テ

昨日當地ヘ御着艦ノ由早速御尋可申ノ處彼此取紛レ失敬致
シタリ今日ハ特ニ被相越忝ナシ御來意承知致度

此度當地ヘ貴所被相越候義於我政府頓ト承知不致四月初
旬ニ至リ初メテ聞及候故政府ヨリ早速欽差沈ト自分ヲ派
出相成蒸氣船ニテ四月十二日清發京二十二日上海清港於
同所貴國公使柳原前光大臣ニ兩度出會致シ承ルニ貴中將
ハ已ニ當地ヘ御出發相成シ由シ自分ハ右様火急ノ出立殊
ニ長途ノ船中ニテ個様ニ腫物出來候ト面部一面ノ小瘡ヲ指シタリ

今度御出發ノ儀前以テ承知致セハ於此方如何様トモ幫辦
致方可有之處何ノ御掛合モ無之義ニ付延引漸ク只今罷出
候

上海ニ於テ柳原公使ト引合致シ候義有之候處其事ニ付同

公使ヨリ貴所ニ來信有之候哉
同人ヨリ未タ何タル音信モ無之依テ何事モ承知不致候
同公使ヘ引合候書類茲ニ持參致ス御一覽可被下哉
拜見致シ度
此トキ柳原公使ヨリ清國欽差沈(譯カ)ヘ遺シタル書類ヲ差出
ス都督一覽ス即チ別紙(別紙ニ通ヘ七〇、七四參照)寫ノ通り終テ又右書ノ答書トテ
一通差出ス是又別紙寫ノ通是ハ二度目出會ノ節列坐ノ
上右返答ヲ書記シテ渡セト柳原公使被申聞タルニ依リ
右之通認メ遣シタリト云一見畢テ差戻ス
貴中將當地ヘ御出發ノ次第ハ如何ノ御手續ニ候哉
本國出發前委曲福州總督(註ニ〇參照)ヘ掛合置候間夫ニテ御承知可有之
然ラハ上海ニ於テ柳原公使ヨリ承リ候ト同様ニテ相違無
之
楮大人當地ニハ何等ノ御見込ニテ被相越候哉
此度ノ儀ニ付テハ定メテ御聞及モ可有之昨年副島外務大臣
北京ヘ罷出候節前年生蕃ヨリ我國民被殺害剽掠候義ヲ御引
合申候通ニテ其後一年間ニモ及ヒ候得ヘトモ何タル御申越
モ無之依テ此節我政府ノ命ヲ奉シ問罪致候筈ニテ此地ニ罷
越

夫ハ牡丹社ニ候哉

左様併シ當地ニ罷越候後聞糺候處牡丹ノミナラス龜士滑爾
乃等モ關係有之趣ニ候

牡丹社ノ義ニ付御相談ノ義有之候ハ、此方ニ於テ隨分取
計方可有之

御處置振ハ如何可被成其殺害致候者ヲ不殘御捕ヘ可被成
哉捕ヘタル者ハ此處ニテ被切捨候哉本國ヘ被召連候上ヘ

御處置有之哉又ハ贖罪金ニテモ被取立候哉承り度
處置ハ此方ニテ可致尤モ結局ノ所分ハ未タ治定無之

先日當地ヘ罷越候際船都合有之未タ着手ニ不及内ニ兵士共
近傍散步致シ候處四重溪邊ニテ不意ニ生蕃ヨリ銃殺セラレ
候故不得止進撃ニ及候處牡丹龜士滑等ノ者山林ニ逃散シ候
得共追々巡邏ノ兵卒ヘ對シ林中ヨリ小銃ヲ開發致シ候

果シテ右様ニ候得ハ速カニ御處分モ出來間敷ト存候我々

モ此義ニ付特ニ政府ノ命ヲ奉シ罷越シ素ヨリ我支配地ノ

義ニ付貴國ニ替り處分致シ差出シ可申貴所ニ於テ右様山

林ニ逃隱シ居候蕃人ニ兵隊ヲ用ヒラレテハ彌彼等驚怖致

シ敢テ出テ來リ中間敷故ニ我等法ヲ設ケ召捕差出シ候テ

ハ如何

其儀ハ不及候既ニ此方ニ於テ折角手ヲ着ケ置候事故不遠
事濟可申見込ニ候

併シ我々ニ於テモ特ニ北京ヨリ派出致候得ハ御處分向キ

ニ付テハ西郷大臣ニ篤ト御相談致シ度且ツ柳原公使ト上

海ニ於テ應接中第三條此地以後之規則相定置候義及御談

度

其儀ハ我ニ於テ可承答ニ無之我ハ唯奉 勅ノ限ヲ盡スノミ

貴國應接等ハ一切柳原公使可承筋ニ付若シ御談判之件有之

候ハ、其趣北京ヘ御申越ノ上同所ニ於テ柳原公使ヘ御談有

之且ツ御見聞ノ通り御申通シ被下度左候ハ、同人ヨリ我政

府ヘ可申達ト存候其上ニテ我政府ヨリ我ニ申越候ハ、其旨

取計可申候間乍御手数數左様御承知有之度

是ハ御尤モノ事ニ候然ラハ左様可致候

左様希望致シ候

諸琉人ヲ殺害致シ候牡丹蕃地ノ外ニモ御手ヲ着ケラレ候

哉

夫ハ無之候

但此外ヘ不涉儀ハ彼ヨリ兩三度問返

其事ニ無關係蕃人共ヘハ粗暴ノ義無之様精々説諭可致

牡丹社ノ御處置ハ幾日頃御結局可相成哉

今日ヨリ定メ難シ併シ長クハ掛リ申サズ積リ

但此處分結局ノ事彼ヨリ幾度モ問返シタリ我ヨリハ前

同様ニ答フ

御處分相濟候上兵隊ハ直ニ御歸シニ相成候哉又ハ此地ニ

被召置候哉

是モ我政府ヘ申立候上政府ヨリ命令次第ニ取計フ可シ

右ニテ一段落畢テ少シ間アリテ

牡丹社處分結底候迄貴國人民ヨリ彈藥等生蕃トモヘ賣渡シ

候儀無之様精々御申渡シ置有之度

委細承知

此ニテ畢ル跡ニテ洋酒差出ス

貴國皇帝ヲ祝シテ此酒御勸申候

忝シ多謝々々

相濟引取ル來容總テ兵隊正列シ挨拶ナシ營傍ヨリ直ニ

乘駕シ去ル

〔朱書〕
一應接第二號

七年六月廿二日午後四時西郷都督佐久間參謀小川大尉盧

高朗彭城中平欽差幫辦潘爵臺灣道臺夏獻綸ヲ車城ノ寓居

ニ訪フ坐中佛人兩名同坐ス席上應接左ノ如シ接待畢テ

潘曰暑中遠路ノ枉駕過懇ノ至曰過刻來臨天幕中甚失敬セリ

其節佛人書付ヲ出シテ卑南ニモ派兵可有之趣ニ承候處果シ

テ然ルヤ曰無シ佛人曰牡丹問罪ノ處置彌兩三日中結局ニ至

ルベキヤ曰否先刻モ申ス通り不遠處置スヘキ目途ニハ候ヘ

トモ皆山林ニ逃散シタレバ日限ハ期シ難シ潘曰牡丹社ノ儀

ハ清國ニ於テ處分致シ彼レヲ捕ヘテ貴軍ニ率渡シナハ何ソ

如此炎熱中徒ラニ日ヲ送ランヤ速ニ事定ルベシ曰我此地ニ

來リ手ヲ下テヨリ今日ノ勢ニ至今更何ソ他ニ讓ンヤ潘曰第

三條後來ノ處分ハ如何高考アリヤ曰牡丹ノ處置了テ後辦理

スヘシ潘曰其方法預メ聞ヲ得ヘキ哉曰大概見込ハ立置タレ

トモ何レ牡丹ノ事終リテ後機ニ應シ治定スベシ預メ言ヒ難

シト答ケレハ潘夏兩氏又佛人ヨリ右牡丹ハ清國ニテ處分シ

後來ノ辦理亦清國ニテ之ヲ爲ン事ヲ乞フ事再三ニ及ヘトモ

我亦固辭ス

此後一二尋常ノ談話アリテ彼ヨリ洋酒ヲ饗應ニ出シテ曰

大日本皇帝ヲ敬賀シ兩國ノ親睦ヲ厚セン事ヲ乞フ此酒ヲ獻

ス曰多謝我亦

大清皇帝ヲ祝シ永ク親睦ヲ敦セン爲此酒ヲ頂戴セン了テ辭立ス

註 本號文書ハ一〇一附屬書第十二號ノ第一及第二部ナルモ便宜故ニ獨立文書トシテ採録セリ

八〇 六月二十四日 寺島外務卿ヨリ 三條太政大臣宛

臺灣出兵ニ付清國政府ヨリノ書翰ニ對スル回答ニ關シ伺ノ件

〔御指令は無之候へ共此通にて宜敷趣にて卿殿御持越相成候事〕

三條太政大臣殿 寺嶋外務卿

臺灣蕃地御着手相成候ニ付清國政府ヨリ別紙寫ノ通書翰差越候に付別紙案の通返簡可差遣存候此段相伺候也

明治七年六月廿四日

尙以て明日差立申度候間今日中御指令有之度候也

註 右文書ニ謂フ「清國政府ヨリ別紙寫」ハ五五本文ト同文ニ付省ク尙別紙案の通返簡「トアルハ八一ノ草案ニシテ且同文ナルヲ以テ省ク

八一 六月二十五日 寺島外務卿ヨリ 清國恭親王宛

臺灣出兵ニ關シテハ柳原公使ヨリ事情聽取サレ度旨回答ノ件

大日本欽命總理外務大臣寺島

照覆事茲接准貴國同治拾三年三月二十六日來文據悉

貴國傳聞我政府將有事於臺灣生蕃之地之說甚爲不解因以承詢各節查此誠如來示所言是往年我

欽差全權大使副島種臣奉

命往入貴朝之際經該大使遣其僚屬轉令面諮董兩大臣而據

其趣旨今甫下手而已別無他意又此等情節先於未接來文

時早有我

欽使柳原前光派往

貴國想已該使當爲辨覆見悉畢矣故其來示所詢不及縷

々逐辨也爲此照覆希即查照可也須至照覆者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治七年六月二十五日

(英餘)

註

右回答書翰送達ノ日ニ關シ「英餘」ニハ「六月二十五日先是清曆三月二十六日總理大臣書ヲ寺島外務卿ニ寄セ換約ノ後彼此和誼ヲ敦スヘキヲ約セシニ今貴國征蕃ノ舉何等ノ故ナルヤ其意ヲ了解セサルヲ以テ詳細ノ答覆ヲ要スト此日公使ノ手ヲ經テ總署ヘ照覆」云々トアルモ一方八〇ニ據レハ六月二十四日寺島外務卿ハ三條太政大臣宛ニ右回答書翰案ニ關シ伺ヲ立テ同日異議ナキ旨ノ決裁ヲ經居レリ惟フニ是ヨリ先柳原公使ハ回答書翰案ノ送付ヲ受ケ二十四日該書翰案カ三條太政大臣ノ決裁ヲ經ルヤ寺島外務卿ヨリ其ノ送達方ヲ電報ニテ命令サレ二十五日清國側ヘ送リシモノカ

八二 六月二十五日 臺灣龜山ニ於テ西鄉臺灣蕃地事務都督等ト潘清國欽差幫辦大臣等ト對話書

臺灣生蕃處置ニ關スル件

〔應第三號〕

明治七年六月廿五日午後第四時於龜山營中清國欽差大

臣幫辦潘爵臺灣道臺夏獻綸同知謝寶鼎與西鄉都督佐久

間中佐應接筆話如左

一 柳原大臣信內所言三條

一 臺灣生蕃討撫一件 八二

貴中將奉

勅限辨之事如能照辦可以商定

本中將欲辦理三條來逐次將施之

各大人果有何等高見敢見

教

一 柳原大臣第一條捕前殺害我民人者誅之查牡丹社雖害琉

球國人惟該處係中國所屬應由中國派兵辦理現在本幫辦

大臣來議此事先請

貴中將按兵勿動

第一條辨議其理不能了解何則如前日所面晤本中將到此地及

將施處分牡丹人埋伏于箐間擅自狙擊我斥候殺之故不得已舉

兵進擊勦其巢窟親視此地景況實非

貴國版圖明矣而今見 教

貴國派兵辦理是何之謂也敢問其所以有此言

牡丹社實係中國版圖載在志書歲完番餉可以爲憑因係中國

所管故應由中國辦理

我聞所謂版圖者保護其人民施其政教使其人民知爲人之道也

然而未曾聞

貴國二百年來有保護蕃人施其政教況於歲完番餉乎所以本中

將奉

勅遠航海不憚艱險來施處分也

中國版圖甚廣如湖南之湘西貴州之苗四川雲南之獮皆與生蕃相類不得不謂之中國版圖因其性與人殊難施政教我

朝廷寬大爲懷聽其生聚現在既有戕害琉球國民人之案以致貴國勞師遠來中國不得不出爲辦理以期解釋而敦和好

註 本號文書ハ一〇一附屬書第十二號ノ第三部ナルモ便宜
茲ニ獨立文書トシテ採録セリ

八三

六月二十六日

米國公使ヨリ
寺島外務卿宛

米國船紐育號臺灣行中止ニ關スル訴訟裁判ノ爲
參考諸書類送付方依頼ノ件

No. 50.

United States Legation, Tokei,

June 26, 1874.

Your Excellency :

I am in receipt of a despatch from the United States Vice Consul at Kanagawa notifying me of a suit pending in the Consular Court before him,

wherein the Okurasho of your Government is plaintiff against the Pacific Mail Steamship Company, in which I am requested to apply to Your Excellency's Government for production at the trial of said cause on Monday next the 29th inst. at 10 o'clock a. m. of certain official communications, to wit: The instructions of Mr. Okuma to Mr. Yoshida Dairo touching the voyage and charter party of the steamer "New York"; also all official instructions and despatches issued by authority of Your Excellency's Government touching the employment of the "New York" in the Formosan Expedition and the detachment of said steamer from said service; also any official instructions to Mr. Le Gendre respecting the charter party entered into for the use of the said ship "New York", or respecting the voyage of the same thereunder; also official copy of Your Excellency's communication to me relative to the detachment of said steamer from the Formosan Expedition of date the 22nd April last, together with an official copy of the instructions detaching the steamer from said service, referred to in the last mentioned com-

I have the honor to be
Your Excellency's
Obedient Servant,
JNO. A. BINGHAM.

His Excellency,

Terashima Munenori,

H. I. J. M. Minister

for Foreign Affs.

(右和譯文)

第五十號

貴政府大藏省より太平洋海郵船會社へ對し神奈川に在る合衆國領事裁判所へ控訴相成候に付ては來る廿九日月曜日十時右訴訟致審問候間左の諸公書類總て御廻し相成候様拙者より貴政府へ相願吳候旨右領事より申越候就ては蒸氣紐育船雇入航海約定に付大隈公より吉田大承えの達書及び右船臺灣征討の爲雇入相成且右備入停止の義に付貴政府より御達相成候諸公書類且又右船雇入且臺灣航海の約定に付リセンドル氏えの諸達書類且又右船臺灣航海差止の義に付去る四月廿二日附にて閣下より拙者えの書翰且右貴翰中に被仰越候通右船航海差止に付ての達書類寫且臺灣征討の爲雇

munication; also the official instructions, telegrams and letters, or copies thereof duly certified, issued by the Japanese Government or any Department thereof to any Department or officer of said Government directing that the vessels engaged in the Formosan Expedition, or some one or more of them, should not proceed beyond Nagasaki.
Inasmuch as this is a proceeding instituted by a Department of the Japanese Government against citizens of the United States for not proceeding with the "New York", a United States vessel, to Formosa in direct violation of the orders of Your Excellency's Govt., as communicated to me by Your Excellency in your despatch No. 26, dated the 22nd April last, I deem it proper, not only in the interests of justice but also in the interest of Your Excellency's Govt. and of my own as well, to respectfully ask of Your Excellency that there be forwarded to me for transmission to said Consular Court on Monday next official copies duly certified of the several despatches, communications, letters and telegrams herein before mentioned.

入候諸船は都て長崎表より航海差止候義貴政府及其各省より貴政府各省及其官員え通達相成候公達電信及書翰類の本書或は確實たる寫御廻し有之度候去る四月廿二日附第二十六號を以て閣下より被仰越候通合衆國蒸氣船紐育號臺灣表え航海不致候より貴政府の命令に相背き候に付貴政府は一省より合衆國人民を相手取り右様控訴相成候に付ては只裁判上の事に拘る而已ならず貴我兩政府にも關涉致候義に付何卒右の諸公書通信書類電信等の確實なる寫不殘來る月曜日合衆國領事裁判館え相廻し度候間閣下より拙者え右書類御送り被下度此段敢て致伏願候也敬具

千八百七十四年六月廿六日

ジョン、エー、ビンハム

外務卿 寺島宗則閣下

八四 六月二十六日

臺灣龜山ニ於テ西郷臺灣蕃地事務都督等ト潘清國欽差幫辦大臣等トノ對話書

臺灣生蕃處置ニ關スル件

〔朱卷〕
〔應第四號〕

同廿六日午前第九時（註八三番照）如前日

昨日見 教

貴國版圖甚廣湖南之獠貴州苗四川雲南之獠皆與此生蕃相類其性與人殊難施政教然不得不謂之版圖如此生蕃者現今致勞我師

貴國不得不出爲辦理如獠苗獠之類則我不知如此蕃者我久聞非

貴國之版圖所其憑亦甚多不遑枚舉雖然此番地以接近

貴國所屬地本中將將到此也以書報知閩浙總督部堂也是爲敦和好也

琅瑯十八社歸化爲中國所管載在臺灣府志最爲可憑

貴中將謂久聞非中國版圖所憑甚多不遑枚舉謂略舉一二見教

蕃地雖不屬貴國之徵甚多如大人所言臺灣府志則何足必爲據今欲詳辨之則自各國載籍及地圖異同不校合考定安得一定是亦近空論耳當今日不可虛度時日宜就實地現事速辨明之

如有各國書籍記此地事者見示一二我質之各國公使

如前所言當此時豈遑聞書籍上之空論乎以所目擊辨明之亦何妨

然則請問第三條之處分

牡丹社已辨至半途現派兵進山駐紮牡丹蕃俱已逃散擬俟其能

否出來悔過請罪見機行事

請問中國官令牡丹蕃來謝罪以省兵力

貴中將願意辨否

前年如有此辦法最好惟現在事已辨至半途應我一手辦理

貴國官可不必管

一請問第二條抗拒爲敵者殺之現在各社均無此事可無庸議

惟此來係辨牡丹社高士佛社因何剿辦請教

因初到時有斥候者二人被牡丹社高士佛爾乃社生蕃殺害故往

剿辦

請問蕃俗反覆難治應立約使永遠誓不剽殺現已傳各社蕃頭

出具切結以後永遠保護不敢再有欺凌殺害槍奪情事此事已

照

柳原公使信內所云辨要應將蕃頭各結由本幫辦大臣寄與

柳原公使查核

以

貴國官員未到之前所有未抗拒各蕃社已與商議明白

惟此事係關中外保護不敢再有欺凌殺害槍奪情事即中外各

一 臺灣生蕃討撫一件 八四

國均露利益

貴中將自辨亦不過如此請各國公評亦必均以爲然是即

柳原大臣信內之意故不必再商現在辨定即可告知

柳原大臣并通知各國也

潘大人爲欲商定柳原信內所云三箇條來而使各蕃頭出具切結

未曾所商量似與前所言抵牾何則以我兵力懾服各蕃既辨明其

事之大人等到又辨之若欲行之先商議之我而後從事則可今也

不然雖報告之柳公使使豈信之乎是所以謂

貴國官不必關此事而可也此條以下係譯官通辨

雖不肖今我以朝衣朝冠來我所屬地行我事謂不必關是太不

遜之言也蓋譯官之語耳中將大人豈有此言乎

潘大人爲三箇條來似未盡其商議我亦欲言者甚多時既過午宜

喫飯後更商定

中將大人未盡其意我亦然祈乞寬話

於是共就食卓

〔朱卷〕
〔應第五號〕

午食畢喫茶中

潘曰三條中ニ付中將大人談話スヘキ事アリヤ若シ之アラハ

此席ヲ改メス茶上ノ談話ニシテ互ニ實情ヲ述ヘ盡スヲ得ハ麼

曰高諭ノ如ク談話未タ盡キス互ニ情ヲ盡ス事是即兩國和好ヲ敦スルノ好意ナリ先ツ問ハント欲スルハ前日來屢牡丹蕃ノ處分ハ貴國ヨリ之ヲ成スヘシト言ヘリ是ニ因テ熟考スルニ此事ニ付テハ一昨年來許多ノ財用ヲ糜シ數千ノ兵ヲ率ヒ兇番ノ巢窟ヲ勦シ今日ニ至レリ此上ノ處分結局ニ及ハ、必ス費用償却ノ道ヲ作サスンハアルヘカラス此ノ如キ瑣細ノ事ニ至ルマテ論セスシテハ愚考モ亦決定ナリカタシ大人ノ高按アラハ見教

潘曰中國ヨリ之ヲ處分スレハ彼兇徒ヲ捕ヘ之ヲ誅シ其老幼婦女無罪ノモノハ之ヲ懷柔セシム是臺灣府道臺ノ任ナリト云ヘハ 夏曰我能ハス 潘曰何ノ謂也云々内話之久潘更ニ其言ヲ改テ曰兇徒ヲシテ謝罪セシメ後來ヲ警戒シ琉人ノ死體番地ニ藏スルモノヲ出シテ之ヲ返サシメ寛大ノ處分ニスヘシ

曰如此ノミカ
潘曰然リ
曰如此寛大ノ處分ヲ施スニ至テハ其之ヲ寛ニスル所以ノ道

曰全ク消却スル所ノ失費現在凡ソ百二十萬弗ナリ

於是潘問夏清國銀ニ比較シテ若干ナルヤ
夏曰一百弗ヲ清銀七十兩ト見做シ凡八十萬兩餘ナルヘシ

潘曰此事我等三人相トモニ熟考シ府城ニ歸リ沈欽差大臣ニ謀リ而後柳原大臣ニ商議スヘシ

曰然ラハ潘大人親ラ柳原公使ノ許ニ之ヲ商量スルヤ
潘曰否我府城ヨリ軍艦ヲ差シ書信ヲ以テ商量スルナリ
就テハ貴國續テ送ル所ノ兵員ハ急ニ止メシメ現ニ此地ニ來ル所ノ兵ハ之ヲ按シテ動ク事ナカラシムヘシ

曰諾
潘曰貴國之此舉アルハ全ク洋人ニ德憑セラレ爰ニ及フト聞ク貴中將亦之ヲ知ヤ麼

曰我會テ知ラス
潘曰我滬ニ來テ窃ニ之ヲ聞ケリ且新聞紙上此行ノ事ヲ記載スルモノ甚多或ハ貴國費ス所ノ財用ニ至ルマテ詳細記載スルモノアリ故ニ人皆之ヲ知レリ貴國ノ我國ニ於ル隣並接近ノ國ニシテ古來未タ會テ釐ヲ開カス之ヲ各國ニ比シテハ唇齒互ニ相成スノ國ニシテ既ニ和好ヲ結ビ條約ヲ嚴ニスレハ益好意ヲ敦クスヘシ然リ而シテ洋人ハ動モスレハ離間ノ術ヲ以テ相德憑スルノ風アレハ互ニ其術中ニ陷

ヲ立テスシテハ不可ナラン然ル所以ノモノハ前ニ云フ所ノ如我國大師ヲ出シ財ヲ糜シ兵ヲ損シタル所ノモノ少シトセス其償却ノ道大人ニヲイテ高見アルヤ麼

潘曰先ツ貴中將ノ高考ヲ問フ
曰兇番謝罪ノ道ヲ盡サハ此ヲ番地ニ就テ費用償却ノ道ヲ立スンハ有ヘカラス此儀ニ付御存付アラハ幸見教是ニ於テ夏笑曰牡丹番地人口僅二百餘人其所有ノモノハ家畜及ヒ數畝ノ田園ノミ爭テカ此ノ大軍ノ費用ヲ償却スヘキノ道アラシヤ

潘曰是迄ノ談論未タ互ニ其情ヲ露ハスニ至ラス幸ヒ他員ヲ雜エス對話ニテ今一層各其肝膽ヲ吐露スヘシ是全ク國事ノ公幹上ニテハ不可ナリ食卓上懇親好意的ノ談ニシテハイカ、

曰然リ
潘曰此行之費用其數凡若干ナルヤ
曰即今兵ヲ徹セハ許多ニ至ラサレトモ此上曠日持久ニ及ンテハ兵員ノ俸給其他百般ノ費不尠今之ヲ算スレハ凡二百十餘萬弗ナルヘシ
潘曰是迄ノ現費若干ナルヤ

ルヘカラス今若兩國ノ間ニ不和ヲ生セハ互ニ大ナル不利ナレハ厚ク注意アラシム事ヲ希望ス

曰然リ今日各大人ト親シク互ノ情實ヲ談スル如ク以來トモ國事ニ關涉スヘキ事ハ互ニ相忠告スヘシ
潘曰感荷極我ニ於テモ國事關涉ノ事件ハ必相照關スヘシ貴國ノ此舉アルモ實ハ我國政令ノ至ラサル所ノアル故ナリ貴國ノ意亦豈徒牡丹社ノミニアラシヤ是亦我知ル所ナリトテ一笑ス

曰柳原公使照覆ヲ得ルノ後ハ再ヒ駕ヲ枉ルヤ麼
潘曰柳原公使照覆ヲ得ハ速ニ先ツ報告スルニ汽船ヲ差シテ爰ニ到ラシメテ可ナリ

曰然ラハ大人ハ再來ラサルヤ
潘曰否照覆ノ消息ニ從テ再ヒ來テ商定スヘシ且明日車城ヲ發シ陸路府城ニ返ラン貴國風港ノ營盤ニ通知アラン事ヲ請フ

曰諾
潘曰明日ハ早旦上程更ニ來テ別ヲ告ル能ハス幸ニ恕セヨ
曰我將貴寓ニ之テ別ヲ告ヘシ
潘曰大臣來ラハ我亦來ラサルヲ得ス暑熱ノ候大臣ハ殊ニ病

餘自愛必來ル無キヲ請フ畢テ辭去

註 本號文書ハ一〇一附屬書第十二號ノ第四、第五部ナルモ便宜故ニ獨立文書トシテ採録セリ

八五 六月二十九日 寺島外務卿ヨリ 米國公使宛

米國船紐育號臺灣行中止ニ關スル訴訟裁判ノ參考諸書類中ノ一部送付ノ件

附屬書一、四月二十日三條太政大臣ヨリ長崎出張大隈臺灣蕃地事務局長官宛書翰寫書拔

米國船紐育號等ノ臺灣行ニ關シ米國公使ヨリ異議申出アリタル旨報告竝ニ今後ノ方針指示ノ件

二、四月十九日、同二十日太政官正院ヨリ宮川長崎縣令宛電報寫

大隈長官ノ到着迄紐育號ノ渡臺差止ノ取計アリ度旨指示ノ件

六月廿九日達す

第四十三號

本年四月廿二日附を以て當省より閣下え差進候書簡の寫併

々外務卿え異論申立候委細は別紙書簡往復寫三通及對話筆記にて御承知中外の都合と政府一體の趣意御通考適宜の御所分有之度尤米公使より申立の趣に基き金井權少内史殿よりも詳悉御聞取可被成候
右相違無之候也

外務省四等出仕 田邊 太一

(附屬書二)

四月十九日發

外國公使議論アリ北海丸長崎ニ着迄出帆延引スベシ右船便ニテ委細ワカルベシ大隈着セハ此ノ傳信御通シアルベシ

正 院

宮川長崎縣令へ

四月廿日發

昨日申遣ハセシ北海丸ハ今日午前十一時長崎へ向ケ出帆セリ右船到着迄ハ一同長崎ニ待ツベシト大隈西郷へ傳達スベシ

正 院

宮川長崎縣令へ

右相違無之候也

汽船ニユオルク號臺灣行差留の一件に付當政府にて發せし命令即ち閣下於て命令と御推想被成候書附寫御所望有之候本月二十六日附貴簡落手致候就ては貴望に應し四月二十二日附を以て閣下え差進候書簡の正譯寫併三條太政大臣より大隈參議兼大藏卿え本年四月廿日附を以て差送りたる和文書拔及右正譯寫差進候右は貴東中御申越のニユオルク號及米人三名の事に關し都ての事を書載せるものに有之且その末文に記候通特命の使者持越候ものに候右の外宮川氏に送りたる電報寫并正譯共差進候其他貴望の命令書に至りては無取糺方可申時間無之候間今日其寫差進兼候乍併右等の命令書は閣下え可差進哉又は貴國橫濱領事裁判所え直に可差進哉追て篤と勤考可致筋と存候此段回答如此候敬具

明治七年六月廿九日

寺 嶋 卿

米公使閣下

(附屬書一)

四月廿日附三條太政大臣閣下より大隈大藏卿閣下えの書狀書拔

臺灣生蕃地處分事件に付兼て申含置候趣も有之候處昨今李仙得初外貳人の御雇米人及紐育船雇入方に付米公使より云

外務省四等出仕 田邊 太一

八六 七月一日 清國駐劄柳原公使(上海ニテ)ヨリ 清國恭親王宛

臺灣出兵ノ正當ナル所以ヲ述ヘ寺島外務卿ヨリ 清國へノ照覆來着スル迄ノ間又潘幫辦ヨリノ照會アル迄ノ間應江蘇藩司、沈上海道臺ト平心辨理シ以テ兩國ノ和好ニ努メ度旨回答ノ件

大日本欽差全權大臣柳原

爲

照覆事明治七年六月二十日接沈道遞來

貴王大臣同治十三年四月二十七日所發公文内開各節業已閱悉本大臣案查此事原委始于壬申之秋我朝據琉球藩呈訴其民漂到臺灣入牡丹社遇害一事夫琉球島原爲我薩摩候附庸目今統歸大政朝議該島從前疊訴此案溯自明末至今已有五次當初日本即經派差問罪由鄭成功賠償三萬餘金以贖難民遺族以後數次因德川氏概禁官民出洋每有其愆置而不問今者舟車所至賓至如歸即我琉民莫非王臣豈容生蕃一味蠻殺乃欲興師伐蕃以盡義務適我副島大臣將與

貴國踐期換約因上疏曰臣查清國康熙年間始併臺灣收自鄭經即沿故址置府縣廳其所賦猶著有界限是爲官典自此以外迄今視爲人跡不到之地竝無官守初有閩廣流氓冒入番地屏逐土人以漸成集往來府縣營謀鬻販者謂之熟番其被屏諸山谷之番臥薪嘗膽恨不生啖華人之肉乃畫地設防與該熟番世相仇殺目未見朝廷官足未踏中華地者是爲生蕃外人一踵其地立見戕殺蓋由于此從前英美二國商船漂難至此亦受其害即經興兵自行懲辦而清國官竝不過問據此我國自可辨也竊思該番社庄自與清國府縣之治犬牙錯雜我既與清締盟此事未告而行或傷和好臣請仰體朝廷保民至意適清言明方可派差問罪以全兩國和好旨曰可爾後副島大臣逢人便說葛伯仇餉之意以明公義故該大臣上年來與

貴國換和約後正擬詳告前事不圖甫入京師即議觀禮爲日既久本國外務閱月冗積又以接使禮節未合通例停謝觀見欲回本國即日東裝因不暇及面告其事乃于明治六年六月二十一日特令本大臣等至

貴衙門當面言明以表禮義心蹟以保兩國交誼當日詢及臺灣生蕃戕害疏民以後

貴國會否查辦羣凶等語准答復云該地未服王化未奉政令謂之生蕃中國置之度外不甚爲理經本大臣陳以我國屬民既受枉害必須派差查辦以盡政府義務此舉惟在除凶安良以期永無滋事祇我副島大臣以其地接

貴治我國此行恐致

貴國滋生嫌疑謂我侵越境地則于兩國交誼關礙非輕故爾告明言畢辭別是夜孫道訪鄭少承復詢此事原委竝言生蕃隱伏深山似虎負嵎辨之非易觀夫美國兵船曾經往攻生蕃反致敗衄而歸足爲前鑒勸勿妄動等情亦經該承解說本國此舉係爲匹夫匹婦復讎以警將來起見竝無他意至于勝敗非所逆料且看義師一下石卵奚敵等語翌日復承

貴王大臣仍與副島大臣改議觀禮後完觀事告辭出京其間貴王大臣竝無異議副島大臣回國據情復命保其絕無嫌疑所以我朝誠信其言斷然舉行先是副島大臣去貴國也逕自烟臺回到東京會由駐滬領事送回備中民戶上春漂到番地受難者當據訊供境遇細得生蕃撒蠻之狀其如一見船到條有數百土人麇集海濱起剝貨物將船拆開各家分贓更將行李盡行奪去褫取難民身上衣服一絲弗留隨欲加刃忽有老人經過若勸饒命方得生還等情可見其俗強橫殘忍殆非人

類況此一帶島面實係我民航路要衝有是數端致我政府更難容耐當命點撥員辨趕辨其事據海軍省覆稱此時風潮尙險容緩數月以此事又屢歇後副島大臣因病開缺朝廷允其退養著寺島大臣頂缺直至今春

簡命陸軍中將西鄉作爲都督委以伐番之事都督即率親兵駕船啓行一面先備公文即令廈門領事馳遞福建總督部堂報明事由方可以禮過境及至番地如遇有清國兵駐防處所即將我兵退避三舍毋得毫有侵越一面

命本大臣火速赴任以備

貴國有所指問便于應對務以保護兩國和好爲重及本大臣到滬即晤沈道始悉

貴王大臣已有公文寄我

外務大臣竝得閱其文稿續承應藩司亦爲此事先後來滬會談面詢經本大臣逐次剖說其情夫西鄉中將進辦事宜本爲弭殺起見其意不過往攻其心即用兵仗亦不過鎮壓蠻撞之備則與上年本大臣等所陳言語何嘗不符上陳各節係本大臣履歷所知用特縷述以明下文答覆之意茲准

貴王大臣來文內稱本年三月准各國駐京大臣告知貴國興兵赴臺灣將有事於生蕃本王大臣查臺灣全地久隸中國版

圖雖生蕃散處深山總屬中國管轄即有如琉球民受害前事亦當知會應管轄之地方官查辦貴國興兵未經向本王大臣議及亦未准知照因何事派兵赴臺既與上年所言未符亦與條規所載兩國所屬邦土不可稍有侵越等詞相背等因本大臣准此三復其詞似屬不揣其本而齊其末如貴王大臣大書臺灣全地久隸中國即有他國人受害情事應歸管轄之地方官查辦乃提興兵之目責我未經議及未准知照竟引侵越邦土等字駁難不亦滅我副島大臣會向

貴國說明其由以存和好之意乎今云生蕃應歸地方管轄則從前命案疊出何以

貴國竝未懲辦一任他國自行伸冤上年既讓我國派員問罪迨我將兵而往請是侵越屬土則前此之猝發兵船而往者果何義耶觀夫番俗前將琉民六十餘人頃刻斃殺殆盡備民四人則被百餘土人圍困爭剝衣物請自試思似此豺狼成性之人果能不動刀兵而查辦乎本大臣於此一層實未能貫通也所云我國春日兵艦此係奉飭測驗沿海礁灘故其灣泊廈門等處之事素常聞知如帶兵官聲稱擬借地操兵一事未審實屬何意容俟查回復其

貴王大臣前後公文之回函迄今均未寄來到即火速轉遞前

者承潘藩司函商爲番地善後事宜應回閩後向沈大臣稟商
咨請總理衙門核示即行奉覆等情本大臣現在惟有准到來
文平心辦理專爲兩國保固睦誼而已至于
貴王大臣優待國使之禮自有一定大典本大臣固有厚望焉
爲此照覆

貴王大臣查照可也須至照會者
右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治七年七月一日

(按餘)

八七

七月一日 潘清國欽差幫辦大臣ヨリ
清國駐劄柳原公使(在上海)宛

諸蕃社謝罪ノ上ハ速ニ撤兵ノ指令ヲ仰カレ度且
ツ出征費用償却ニハ應シ難キ旨申入ノ件

[朱書]
第十三號

欽差幫辦潘爵致柳原全權公使書摘譯

敬啓者。前在上洋。握別清渾倏更月瑄。邇惟貴大臣升社安
和爲頌。

敬啓者。先日上海ニテ拜別以後已ニ一月
ヲ經候處貴大臣益無異御奉務可被成賀頌候
本幫辦由滬到閩。於五月朔日。同沈大臣坐官輪船。東渡臺
洋。抵臺後與沈大臣商議。由沈大臣照會貴國西鄉中將。

拙者上海ヲ福建へ着候後五月朔日即六月十四日沈大臣ト一同
我政府蒸氣艦ニ乗組ミ東ノカタ臺灣ヲ渡リ臺灣へ到着シテ沈大
臣ト商議ノ上沈大臣ヨリ貴國西
郷中將へ照會文ヲ送ラシメリ

本幫辦與臺灣臺道臺。於本月初八日。親赴琅璫。初九日往
拜西鄉中將。並將貴大臣議定三事。交其閱看。並詢其所見。
是非與貴大臣相同。

拙者即チ臺灣ノ夏道臺ト一同本月八日即六月二十一日琅璫へ罷
リ越シ同九日西郷中將へ對面シテ貴大臣ノ議定セシ三個條ノ書
面ヲ以テ同氏ノ披閱ニ入レ並ニ同氏ノ所存
モ貴大臣ト同様ナルヤ否ヤヲ問ヒ尋ネ候ニ

西郷云。伊不敢做。主伊係帶兵之人。須俟貴大臣奏知。有
信前來。方能定奪。

西郷申サレ候ハ自分ニ於テ何トモ主意ヲ做ス事能ハス自分ハ只
兵務ヲ掌ルノモノ者ナレハ兎ニ角柳原大臣ヨリ奏聞ヲ遂ケ我朝
ノ書信到來セシ上ニテ事
情決定スルノ外ナシト

又詢其牡丹社辨完。可即算了事否。此後尙有話說否。

又同氏牡丹社ノ處分全ク形付候ハ、夫レニテ御用濟ト見做シ然
ル可キヤ否其以後ニモ尙又何ソ御議論ノ筋有之ヤ否ヤト尋ネ問
ヒ候

答云。牡丹社辨完。可算了事。以後有無話說。應候本國之
示。

此答ニハ牡丹社ノ處分全ク形付タラハ夫レニテ用濟ト見做ス可
ク候ヘトモ其以後議論ノ筋有ルヤ無キヤハ本國ノ示令ヲ何ヒ定
ムヘシト申
サレタリ

即日西郷前來回拜。復詢其卑南覓地方。有無事故。

斯クテ西郷ハ即日答禮ニ參ラレ候ニ付重ネテ同氏へ卑南覓
ノ地方ヲ何トカナサル御趣意有ルヤ無キヤト尋ネ問ヒ候ニ

答云。無事。
何モ事無シ
ト答ヘラル

又詢其此來。既專爲牡丹社。不爲別社。牡丹社辨完。是否
即行退兵。抑尙有別見。

又同氏今度當地へ來ラレシ其意ハ既ニ專ラ牡丹社ノ爲メニシテ
別社ニ關係スル事無之上ハ牡丹社ノ處分全ク形付候ハ、直ニ兵
ヲ引揚ケ御歸リナサルヤ或ハ尙別
ニ御所存有ルヤ否ヤト尋ネ問候ニ

答云。係專辦牡丹社。并無別意等語。

此答ニ專ラ牡丹社ヲ處分スル儀ニ有之候
故曾テ此他ノ所存無之趣ヲ申サレタリ

此本幫辦。兩次與貴中將西郷面論之大概情形也。

右ハ拙者兩度西郷中將殿ト
面論セシ大概ノ情形ニ候

本幫辦思。比次貴國用兵前來。既專爲牡丹社生蕃殺害琉球
國難民一事。

拙者勘考候ハ今度貴國ヨリ出兵ニ及ハレ候義全ク牡丹社ノ
生蕃琉球國ノ難民ヲ殺害セシ一件ニ就テノ事ニ有之候處
現在該社已經痛辨。似可洩忿。若窮兵不已。無論牡丹社餘蕃。
畏兵潛匿。不能剿盡。亦萬無此辦法。

現今右牡丹社ハ既ニ貴國ノ嚴シキ御處置ニ及ハレ候上ハ最早ヤ
其難忿モ御晴レナサレ候義ニ可有之若シ此上兵事際限無之テハ
牡丹其餘香社ノ差別ナク何レモ貴國ノ兵ヲ畏レテ深山ニ逃籠リ
居候故所詮悉ク剿殺スル事ハ出來申マシク且亦左程マテ御處分
ニ及ハルヘキ法ハ
萬々無之事ト存候

前經貴大臣所訂。第三條立約保護。不准再有剿殺等事。自
係此事要着。

就テハ先日貴大臣御訂約ノ第三條ニ申サレタル以後ノ約束ヲ立
テ其保護ヲ爲シ再度人ヲ剿殺スルナドノ事ヲ准ルサ、ル等ノ義
ハ固ヨリ右一件中
ノ要着ニ御坐候故

當經本幫辦派員辨。將各蕃社頭目人等帶到。

早速拙者ヨリ屬員兵辨ヲ遣ハシ諸蕃社ノ
頭立チタル者共ヲ連レ出候様申付置候處

大者爲社主。小者爲社仔。又爲阿眉共百五六十人。前來行
館。

其頭分ノ者ヲ社主ト唱ヘ次ナル者ヲ社仔ト唱ヘタハ阿
眉ト唱フル者共百五六十人拙者ノ旅寓へ參リ候ニツキ

當經本幫辦諭以利害。嗣後遇有中外遭風船隻。必須保護送
官。不准再有剽殺自取罪戾。

差當リ拙者ヨリ其利害ヲ説キ聞カセ以後何レノ國ニ不拘難難ニ
逢テ來ル船有タラハ必ス之ヲ保護シテ我官府ニ送ルヘシ此後決

一 臺灣生蕃討撫一件 八七

シテ之ヲ剽殺シ罪科其身ニ及フ様
ノ義ヲ致ス事不相成旨ヲ相諭候處

各蕃社頭目真心向化。均各出具切結。共有十五社。
諸蕃社ノ頭分共中心誠ニ省悟致シ銘々揃テ實
正ノ請證ヲ認メ差出セシ者都合十五社有之候
惟牡丹。中社里乃三社。因貴國兵攻迫。不敢出來。

然ルニ牡丹中社里乃ノ三社ハ貴國ノ兵ニ攻迫
セラレ候ニ付敢テ出頭スル者一人モ無之候

本幫辦復經函約西鄉。兩次會晤。據西鄉云。蕃社非中國版
圖。中外各書中均有記載。即英美荷蘭諸國人。皆有此說。
並有地圖。當詢其地圖及各書所載交出一看。西鄉又復枝梧。

右ニ就キ拙者又々手紙掛合ヲ以テ西郷氏ト兩度ノ對談ヲ爲セリ
同氏申サレ候ハ蕃社ハ原來清國ノ領地ニ非サル事貴國其他外國
ノ書籍中ニ何レモ記載有之且英亞蘭ナト諸國ノ人皆此說ヲ述ヘ
又其地圖モ有之トノ趣ニ付其地圖並ニ記載ノ諸書ヲ持出御見セ
被成度ト問掛候處西郷氏ハ免角
ニ言ヒ紛ラシ突留タル答無之候

本幫辦當將臺灣府志及該蕃社歲完課餉。可以爲憑實係中國
版圖。自應由中國辦理。現在本幫辦。曉諭各蕃社出具切結。
爲將來保護之計。中外各國。諒必均以爲然。

拙者ニハ臺灣府志及ヒ右蕃社ヨリ年ニ納ムル所ノ賦稅モ有之ヲ
以テ是コソ實ニ清國ノ領地タル證據ト爲ス可レハ固ヨリ清國ニ
テ此義ヲ辦理スヘキ管ニ候故現在拙者ヨリ諸蕃社ヘ告諭シテ其
實從ノ證文ヲ取リ置キ將來屹ト難民ヲ保護セシムルノ手數ヲ爲
シ候儀ニ付當國ハ勿論其外各國ニ於テモ定
テ皆當然ノ事ニ思フヘクト存候旨ヲ申置候
西郷又問。牡丹社蕃出來謝罪。究係如何辦法。

一四六

西郷氏又問ハレ候ハ牡丹社ノ生蕃ヲ差出シテ謝罪
セシムルトノ義ハ到底如何ナル御取計方ニ候ヤト

「譯者曰此件元彼ヨリ申セシ事ニ付西郷氏斯ク問ヒシナリ」
當告以牡丹蕃如能悔過。以後誓不剽殺。並將前年戕害琉球
難民屍身交出即算謝罪。

右ハ牡丹ノ生蕃ニ於テ誠ニ其前非ヲ悔ヒ以後誓テ難民ヲ剽殺セ
ス且前年殺害シタル琉球難民ノ屍骸ヲ出シ渡スナラハ是ヲ其謝
罪ノ證トナスヘキ
積ニ候旨答置候

如此辦法悉係貴大臣原信內第三條之議今本幫辦業經辦定
右取計ノ廉々ハ何レモ貴大臣御書翰中第三
條ノ議件ニ付今度拙者右ノ通辦定候義ニ候
除將取具各蕃社切結報明總理衙門察核外茲將蕃頭各結照錄
附寄貴大臣查閱

依之今度取置候諸蕃社ノ證文ヲ總理衙門心得ノ爲メ報申致シ候
外右生蕃ノ頭分銘々ヨリ差出セシ證文ヲ速々寫取リ此書ニ添ヘ
貴大臣ニ御查閱
可有之寄送候

自應查照前議速即諸示貴國早爲撤兵以便中國派兵設汛永相
保護而敦和好

然ル上ハ何卒前日ノ所議ニ御引合セ急速貴國ノ指令ヲ御伺ヒ早
々兵ヲ引戻サレ我國ヨリ兵隊ヲ繰出シ警衛ヲ設ケ永遠保護シテ
和好ヲ敦ウシ
候様致タク候

素知貴大臣篤信爲懷定不別生意見也
貴大臣ハ義理篤信ノ御志ナルヲ深ク存知居候
故別ニ意見ヲ御替ヘ不被成義ハ疑フ不容候

八八 七月五日 大隈臺灣蕃地事務局長官ヨリ
寺島外務卿宛

西郷臺灣蕃地都督ヨリノ書翰寫ヲ柳原全權公使
宛轉達サレ度旨掛合ノ件

蕃地事務都督西郷從道ヨリ六月七日附書面參軍谷干城持參
歸朝同人去月廿三日着京ニ付翌廿四日正院へ致上申候間全
權公使柳原前光爲心得急便御轉達有之度依而寫一通御回付
此段及御掛合候也

七月五日

大隈蕃地事務局長官

寺嶋外務卿殿

註 本號文書中「寫一通」ハ七一ト同文

八九 七月八日 寺島外務卿ヨリ
三條太政大臣宛

征蕃一件ニ付清國ヨリノ再度ノ來翰ニ對スル回
答ニ關シ伺ノ件竝ニ之ニ對スル三條太政大臣決
裁

至西郷向本幫辦。提及興兵來此。用費已多。未知牡丹蕃社
能貼補否。當告以蕃社貧窮。從何貼補況係貴國自行興兵前
來。並非中國有請助兵之舉。當可毋庸置談也。

西郷氏拙者ニ向テ當地エ出兵候ニ就キ費用既ニ莫大相掛リ候處
隨分牡丹蕃社ヨリ償出スル事可相叶ヤ否ヤト申出サレ候一件ハ
拙者ヨリ右蕃社ハ貧窮ニシテ償出ノ道ハ有之マシク殊ニ貴國自
カラ出兵致サレシ義ニ有之曾テ我國ヨリ御討テ下サレト頼ミシ
事ニモ無之候ヘハ更ニ論議
及ハサルヘク存候旨ヲ答候

特此詳布順。頌台社。並希回音。不一。

附結底一紙。

名另具 五月十八日

此段及詳布序ニ御安ヲ頌シ且御返書ヲ希ヒ候也

證文寫シ一葉添 名ハ別ニ認ム 五月十八日

大清國欽差幫辦大臣福建而政使司潘爵拜。紅紙名帖
大日本國欽差大臣柳大人台啓。 封筒ノ宛

- 註一、本號文書ハ一〇一附屬書第十三號ノ前半ナルモ便宜
茲ニ獨立文書トシテ採録セリ
- 二、本號文書ノ和譯文ノ部分ハ在清國日本公使館ニテ作
成セシモノカ
- 三、本號文書ハ七月八日ニ(九〇參照)柳原公使ニ手交サ
レタリ

(朱考)
「此返簡口號の義は御指合間に不合候へ共早く可達旨田邊氏申聞られ候に付本月九日便を以差立濟」
(朱考)
「第五百三十九號」

臺灣蕃地の儀に付清國政府へ照覆書の伺

臺灣蕃地御著手の儀に付清國政府より猶又別紙イ號の通書簡差越候に付口號の通返簡可差遣存候此段相伺候也

明治七年七月八日

外務卿 寺嶋 宗 則

三條太政大臣殿

尙以明日差立申度候間同日午前十一時迄御指令有之度候也

(朱考)
「伺之通」

明治七年七月十八日

(朱考)
太政大臣三條實美印

注 本號文書中「別紙イ號」ハ便宜六八トシテ「口號」ハ一〇六附記トシテ掲ケ置ケリ

九〇 七月八日

在上海日本領事館ニ於テ清國駐劄柳原公使ト沈上海道臺トノ對話書

西郷都督ト潘幫辦トノ交渉ノ結果ト稱シ速ニ撤兵ノ指令ヲ西郷都督宛發セラレ度旨ノ申出ニ關

服罪ノ證書ヲ取り仍テ銀牌衣類ナト潘爵ヨリ相與エ扱今半日本政府討蕃ノ義務ハ果タリ此上ハ如何被成候哉ト及尋問候處西郷氏答ニ蕃地處分ノ大略方付タリ方今暑熱之際兵士モ困苦スル故本朝ノ命令次第凱旋シタシト被申聽候

右西郷ノ答へ振我ハ信用致兼候但シ此他ニ談話アリシヤ

西郷氏又被申シハ六千人ノ精兵ヲ本朝ニ請ヒ不日可成右ハ清政府ニテ頃日萬餘ノ兵ヲ臺灣府ニ繰込我ヲ襲撃スル哉ニ聞ユルニ付如是ト潘爵因テ答エ候ニハ今般一舉ニ付物議多少相生シ候得トモ敢テ貴君ヲ襲撃シ交戦スルノ目途ハナシ右援兵ハ不用ナリト申候得ハ西郷氏然ラハ其言ヲ信シ早速本邦エ電報シテ可爲見合ト被申又討蕃ノ用費略二百萬金ヲ費ス牡丹蕃人等此償ヲ出サス足下周旋セヨト被申ニ付朋友財ヲ通スルハ條理ノ當然況ンヤ貴邦トハ唇齒ノ隣國ナレハ平時ニハ其方法隨分御相談ニ可及候得トモ今般討蕃ノ舉我ヨリ成兵ヲ請ニ非ス故ニ此事ニ付償金ハ斷然不出來抑蕃地ヲ良好ノ沃腴ト宣言候ハ全ク米人李仙得ノ浮言御輕信ヨリ起リ候義ナルベク是ハ其虛實御實驗ニテ判然タラント申候趣既ニ潘爵西郷氏ト及熟儀候

スル件

明治七年七月八日上海領事館中ニ於テ柳原全權公使清國上海道臺沈秉成ト對話要略

一等書記官鄭永寧通譯
會審同知陳福勳侍座

潘爵事瑣瑣ヨリ下官へ書面差起委曲貴大臣へ申述へ並ニ同人ヨリ貴大臣へ差上候書狀モ御坐候抑今般貴國討蕃ノ舉ハ清政府物議洵々實ニ和戰不可計大事ニ付潘爵モ深ク配意シ貴大臣ニ拜別後沈葆楨ト及談合其後臺灣道臺夏獻倫ト一同蕃地エ到リ西郷氏ト反覆及辨論意氣相投シ都合克趣ニ候

潘君ノ來書彼是遷延ナリシ事ニ候委詳尊話拜聽可致抑西郷ハ軍權從事ノ職掌ニテ貴國官僚ト談合可致任ニ非ス此義ハ每々潘君ニ熟話致置同君モ承知之儀ナリ然ルニ當地ニテ會テ其御談示無之突然西郷エ談判ニ被行候ハ頗ル不審ト被存候事ニ候

潘爵儀當地ニテ貴大臣ト及談合候義西郷氏へ申込此上兩國ノ爲都合克協議致度申述候處同氏至極同意ニテ其末同氏ノ手續キニテ諸蕃社ノ酋長ヲ呼寄セ懇々説諭シテ悔悟
上ハ貴大(臣カ)ニヨモヤ御異論モ可無之故早速本國エ御建議ニテ退兵セヨト西郷ニ被命今般ノ義ヲ團禦ニ御成局被下度潘爵ノ書狀即チ呈上候御落手披閱相願候

潘爵ノ書面熟閱畢リ云フ全體潘爵突然西郷エ及談判候義意外ノ上此來書ハ當地ニテ同名ト及談合候義ト全ク齟齬セリ其故ハ足下モ御承知ノ通り六月七日潘君ト貴公館ニテ及會議同君我ニ復書ヲ送り有罪ノ蕃夷ヲ討ツハ日本政府ノ美舉ナリ將來蕃地ニ施設ヲ布クハ清政府日本ニ對満足ノ様ナサントノ意ナリ尤此將來施設ヲ貴國ニ讓ルハ不容易儀ニテ本大臣權内ニテ治定シカクシ乍去固ヨリ和好ヲ掌理スルノ職掌ナレハ尙公然照會アラハ本國エ伺ヒ廟議ノ方嚮ヲ承リ可否如何ハ追テ御答ニ可及申セシ事ニテ同君委曲領掌シテ其復書ヲ福建ニテ沈大臣ト議シ同一ノ意味ニテ公然可及照會ト被申居候然ルニ今西郷ト談判ニ被及候耳ナラス其旨ヲ以テ我ニ疑キ本國エ建議シテ退兵ヲ請コトハ何等ノ不都合ナルヤ甚タ不服候

尊說御尤ニ候乍去今般事件實ニ切迫ノ時節ナルニ西郷ニ迫レハ貴大(臣カ)ニ問エトキ、貴大(臣カ)ニ論ズレハ本國ニ決ヲ取ルト云フ如此時日遷延スルハ機會ヲ誤ルノ理ナリ故ニ

此藩爵書面ヲ證トシ速ニ本朝エ御申立有之退兵ヲ御進メ被下度候既ニ蕃人ヲ膺懲シタレハ今更機ヲ見テ止ム事可ナラスヤ

第一ニ藩爵事我トノ前約ニ背キ第二ニ此書ハ啓文ノ體ニテ照會ノ公文ニ非サレハ印章ナクシテ信憑ニ足シ第三ニ藩爵ノ來翰中專ラ西郷ト協議熟合セシモノ、如ク見ユレトモ西郷ハ實際ノ職掌ニ非サレハ如是込入候辯論ニ涉リ候事無覺東且西郷ノ來書未到レハ我更ニ信用セス抑藩爵ノ片言ニ因テ國家ノ大事ヲ不可決ナリ

前年英米ノ處分セシハ纔ニ蕃地ヲ膺懲セシ者ニテ我國モ不知者ノ如シ今般ハ多少物議有之實ニ不容易儀ニテ最初ハ強ク申張り候得トモ貴大臣藩爵トノ應接ニテ漸ク平順ニ度リ遂ル同人西郷氏ト熟圖シテ今日ハ兩國合縱共同ノ體ヲナシ處分上ノ尤モ正シキ者ナリ且啓文ノ尊意ニ不適スハ照會ノ公文ニ改メサセ候事容易ニ候
何分ニモ前件三條ノ不都合ナルト西郷ヨリ來使アル旨ナレ共未タ到ラス俄ニ片言ヲ信聽シテ本邦エ輕々敷退兵ノ建白ハ不致候
西郷氏來使ハ何日頃ニ可成哉片言ニテ信用シカタクトハ

明治七年七月九日

註 本號文書ハ一〇一附屬書第一號ナルモ便宜故ニ獨立文書トシテ採録セリ

九二 七月九日 大隈臺灣蕃地事務局長官ヨリ 寺島外務卿宛

思召ヲ以テ御雇獨國人醫師ヲ臺灣ヘ向ケ差遣シタル旨通知ノ件

附屬書 六月十三日宮内省ト獨國人醫師トノ契約書寫

思召を以外國醫師一名御雇入臺灣在陣の向へ被差遣候旨六月五日被
仰出候に付醫師人撰の儀文部省え掛合普醫ミルレル等え遂協議獨逸人シエーンベルゲル同月十二日雇入於宮内省條約取結相成同廿六日横濱解纜の末郵船ニユオルク號へ爲乗込長崎港迄差送夫より渡蕃爲致申候依て別紙條約書寫相添此段申進候也

明治七年七月九日

大隈蕃地事務局長官

又御尤ノ義ニ存候
廈門領事館電報ニテ西郷ヨリ下官へ使介差立候旨申來リ候耳ニテ到着ノ日期ハ定メ兼候
右ニテ畢

註 本號文書ハ一〇一附屬書第十三號ノ一部ナルモ便宜故ニ獨立文書トシテ採録セリ

九一 七月九日

三條太政大臣ヨリ陸海軍兩卿宛内達演說書

不虞ニ備ヘ方略ヲ籌畫ス可キ旨内達ノ件

〔第一號〕

三條太政大臣殿ヨリ陸海軍兩卿へ

〔内達演說書〕

今般臺灣蕃地處分ノ爲メ都督發遣候ニ付清國へ公使派出被仰付精々兩國和親ヲ不破様可及談判候得共若シ彼ヨリ覺隙ヲ設候哉モ難測不得止ニ出レハ戰爭ニモ可及旨廟議一決候方今陸海二軍創立日久カラス固ヨリ其充分ヲ望可カラスト雖モ我力ニ隨ヒ緩急ニ應シ不虞ヲ戒ムル等ノ設備無ル可カラス宜ク斯意ヲ體シ篤ク省議ヲ盡シ其方略籌画可致事

寺島外務卿殿

〔附屬書〕

帝國日本宮内省ト獨逸國人セエンベルゲル氏トノ間ニ結フ所ノ條約左ノ如シ

第一條

當時臺灣地方ニ在ル日本政府人員中ノ病者治療ノ爲ニ明治七年六月十二日ヨリ同十二月十一日迄總計六月間同氏ヲ雇入候事

第二條

同氏給料トシテ一ヶ月五百弗宛相給スベシ最モ初三ヶ月分ハ條約調印ノ時相渡シ殘三ヶ月分ハ毎月初ニ相渡スベシ但日本金貨ヲ以テ相拂フ時ハ洋弗ヲ元ニ立テ相渡スヘシ

第三條

同氏飲食竝ニ雜費料トシテ一ヶ月ニ百五拾弗宛毎月初ニ相給シ且住居モ相渡スベシ但從僕ハ同氏自費ニテ相雇且航海ノ節モ其食料タケハ同氏ヨリ相拂ヒ可申事
但右百五拾弗日本金貨ヲ以テ相拂フ時ハ洋元ヲ本ニ立テ相渡スベシ

第四條

外科器械繃帶木綿藥劑等ハ日本宮内省ヨリ一切之ヲ支給スベシ

第五條

譯司トシテ一人同氏ニ附屬セシムヘシ

第六條

横濱ヨリ臺灣ヘノ航海並ニ滿期ノ上歸國ノ節臺灣ヨリ横濱ヘノ航海ハ共ニ日本宮内省ノ費用タルベク且同氏荷物及ヒ食料ヲ船載スルノ地モ船中ニテ手廣ニ之ヲ與フ最モ日本船ニ乗ル時ニ限リ外國船ニ在テハ此限ニアラザルベシ

第七條

同氏受持ノ場所ニ在ル所ノ病者ハ勿論日本醫員等ニ至ル迄總テ治療ニ關係スル諸件ハ一切本人ノ指揮ヲ受ケシムベシ

第八條

右ノ條々相定候上ハ内地外地ノ論ナク職務盡力イタスベキ事
日本明治七年六月十三日此約定書日本文二通獨逸文二西洋千八百七十四年六月十三日此約定書日本文二通獨逸文二通總計四通ニ認メ調印記名ノ上日獨文各一通計二通宛雙方ニ留置後證ト爲ス者也

宮内卿德大寺實則代理

蕃地事務局御用掛

外務少丞 平井希昌 ○

大藏少丞 岩橋鞞輔 □

DR. GUSTAV SCHOVENBERG.

九三 七月十日 清國駐劄柳原公使(上海ニテ)ヨリ
潘清國欽差幫辦大臣宛

七月一日附ノ書翰ハ六月七日ノ議定ニ反スルニ
ヨリ更メテ差越サレ度旨回答ノ件

柳原公使復潘爵書摘譯。

敬覆者。七月八日即五月二十五日。承沈道臺來本行館。先詳致貴幫辦囑來之意。手遞琅函。接誦之下。稔悉懋祺佳安爲慰。

致敬覆候七月八日即五月廿五日上海道臺沈氏我旅館へ參ラレ先ツ貴下ヨリ同氏へ御申越ノ意ヲ詳カニ述ヘ手ツカラ貴翰ヲ相渡サレ接閱致シ候處先以テ貴下ノ御安泰ナルヲ知リ欣慰存候

所云本幫辦親赴琅瑤。與西鄉中將面論之情形。及諸辦法悉係貴大臣原信內第三條之議。自應查照前議。速即請示貴國早爲撤兵等因。

文中ニ拙者自ラ琅瑤ヘ赴キ西鄉中將ト面論ニ及ヒシ情形并ニ諸計ヒ振ハ悉ク貴大臣御書翰中第三條ノ議件ニ候故何卒前日ノ所議ニ引合急速貴國ヘ指令ヲ伺ヒ早々兵ヲ引揚ケ歸ラレ候様致度ト云々御申越ニ付

本大臣查。前在滬上會晤。函議三件結局。當因西鄉中將專奉兵權行事。不與辨論。如其交涉兩國和好事宜。獨推委本大臣從善辦理。

拙者取調ヘ候ニ先日上海ニテ面晤ノ節書契ヲ以テ三個條ノ極意ヲ商議及ヒ候ハ詰リ西鄉中將只兵權ヲ奉シテ事ヲ行フノミナレハ談判向ニ關係セサル心得ニテ其兩國和好ノ義ニ交渉セル事件ハ專ラ拙者ヨリ宜ク取計吳候様拙者ヘ推譲リ來候故ノ義ニ有之候

是以請貴幫辦到閩後。會同沈大臣。將該三件事宜。商定應作如何辨理之處。連銜辨其公文給本大臣。以便轉請本朝。是ニ因テ偏ニ貴下ヘ依頼シ何卒福建ヘ御着ノ後沈大臣ト會同シテ右三個條ノ事件ヲ屹ト如何様ニ辨理スヘキ段御評議決定ノ上沈ト連名ニテ照會文ヲ認メ拙者ヘ御送成サレ候ハ

夫レテ以テ本朝ヘ伺立可申旨ヲ願ヒ候ニ承貴幫辦回函。以本司回閩後向沈大臣稟商。咨請總理衙門核示。即行奉覆等語爲契。

其時貴下ヨリノ御返翰ニ拙者福建ヘ着候後沈大臣ヘ申立相談ヲ遂ケ總理衙門ノ指令ヲ請ヒ早速回覆スヘシトノ御契約ニ候故後接總理衙門照會。內開貴大臣既爲兩國和好而來。必盡事權以固睦誼等因。經本大臣亦即于答覆內。申敘貴幫辦所契之本司回閩後向沈大臣云々等。文而自稱。本大臣現在惟有准到來文。平心辨理保固睦誼而已等語在案。

其後總理衙門ヨリ拙者ヘノ照會文ヲ受取ルニ文中ニ貴大臣ハ既ニ兩國和好ノ爲メ參ラレタル故必ス其職分ヲ盡シテ陸誼ヲ堅固ニ致サレ度トノ趣ヲ申來ル拙者モ亦其答復文ノ內ニ貴下ノ契約セラレシ拙者福建ヘ歸候後沈大臣ヘ向テ云々ノ文言ヲ書述ヘ次ニ拙者ハ現在只福建ヨリ到來スル照會文ヲ待受ケ心ヲ平カニシテ辨理シ陸誼ヲ保固スル而已トノ旨ヲ申送リ候義ニ有之

爾後日盼貴處文來。以期照議踐辨。豈意今來此。函絕與前言相反。本大臣遠難准信

斯クテ以後貴處ヨリ照會文來ラハ約議ノ通り取計ハント日々待詔ヒ罷在候處不圖モ今此様ノ書翰ヲ送ラレ全ク前言ト相反シケル故拙者ニ於テハ率爾ニ之ヲ受取信用致シ難ク候

茲特所切囑于貴幫辦者。仍依原議。即照在滬面定。回閩稟商之貴函文字樣繕成照會。連銜送來。以昭前議可也。

茲ニ貴下ヘ至急ニ望ム所ハ原々議定セシ通り上海ニ於テ面談取極メ福建ヘ御歸着ノ後沈大臣ヘ申立ラレ候貴翰文言ノ形ヲ照シテ照會文ヲ作り沈ト連名ニテ御送リ越シ先日御約定ノ廉相立候様致タク候

專此佈復。並頌助綏。不宣。
名正具。 七月十日
此段回覆ニ及ヒ且ツ御安ヲ祝シ候也不宜
名ハ本帖ニ書ス 七月十日
大日本欽差全權大臣 柳原前光拜
大清欽差幫辦大臣 潘大人台啓

註一、本號文書ハ一〇一附屬書第十三號ノ後半ナルモ便宜

一 臺灣生蕃討撫一件 九四

茲ニ獨立文書トシテ採録セリ

二、本號文書ノ和譯文ノ部分ハ在清國日本公使館ニテ作成セシモノカ

九四

七月十二日 清國恭親王ヨリ 清國駐劄柳原公使宛

豫メ總署ニ照會スルコトナク臺灣ニ出兵セルハ 條約違反ナル旨抗議申入ノ件

大清欽命總理各國事務王大臣

照會事 前據上海沈道稟報

貴大臣到滬時曾經詢問上年

副嶋大臣在京派

貴大臣到本署提及臺灣生蕃之事並未說到發兵前去此時 遽爾興兵前往實屬違約當由貴大臣答以上年卻未提及帶 兵此時實恐生蕃再加殘害是以帶兵自護等語茲於本月十 七日據上海沈道申送

貴大臣公函一封知本王大臣三月二十六日專足賚送

貴國外務省公文已經收到

貴國業經照錄咨送來滬又四月二十七日交上海稅務司轉

寄

貴國外務省公文

貴大臣亦經收到代爲遞去本王大臣三月二十六日公文

貴國外務省下郵必有回文或委

貴大臣代辦照覆各等因函達前來查臺灣用兵一事上年

副嶋大臣在京既未與本王大臣言明本年中將西鄉赴臺

貴國復未先期照會聯盟違約各國皆無似此辦法本王大臣

上兩次公文均已詳載不知

貴大臣此次來華是爲通好而來仰爲用兵而來如謂修好而

來則現在用兵焚掠中國地土又將何說來函云

本王大臣前次公文或由

貴大臣辦其照覆究竟

貴國外務省暨

貴大臣是否辦給照復抑姑以好言款我統希

貴大臣詳示須至照會者

右 照 會

大日本國柳原大臣

同治拾參年伍月貳拾玖日

(焚餘)

註

本號文書竝ニ九九ハ柳原公使發滬ノ後上海ニ着シタレハ沈上海道臺ヨリ清國總理衙門ニ返呈セリ而テ右ハイ ツレモ九七、九八ト共ニ八月三日清國恭親王ヨリ鄭一等書記官ニ手交サレシモノナリ

九五

七月十五日 清國駐劄柳原公使ヘノ訓令

清國トノ談判要領竝ニ心得ヘキ條件等訓令ノ件

〔第二號〕

臺灣ノ凶暴慘虐絶テ人理ナキハ獨我民ノ其毒ニ罹ルノミナラス萬國ノ同ク見ル所天人ノ具ニ怒ル所ナリ清國已ニ共ニ壤ヲ接シ何ヲ以テ久ク傍觀シテ問ハサルヤ豈其強悍ヲ恐レテソノ自恣ヲ肆シムルカ甚キハ不易俗ノ古語ニ托言スルニ至ル是我

皇帝陛下ノ遂ニ都督ヲ派シ其地ニ臨ミテ其罪ヲ問シムル所以ナリ乃チ我民ヲ保ノ義務ニシテ匹夫匹婦ノ爲ニ其讎ヲ報ヒ長ク東洋航海者ノ爲ニ此一害ヲ除去シ萬國人民ニ惠マントス故ニ財ヲ費スヲ厭ハス竟ニ事ニコ、ニ從ヒシニ今既ニ勦撫其處ヲ得全番悉ク我化ニ向フ該地ハ清國政府既ニ之ヲ

一 臺灣生蕃討撫一件 九五

化外トシテ理セサルモノナレハ其所屬トイフヲ得サルハ疑

ヲ容レスサレハ今日此地ヲ占領シ此人ヲ教化スヘキノ權ハ

果シテ孰ニ屬スヘキヤ我日本政府義マタ之ニ任セサルヲ得

サルナリ則官ヲ建テ兵ヲ置キ政ヲ布キ刑ヲ設ケ皆已ヲ得サ

ルノ義務タリ是決テ其地ヲ利シ其人ヲ貪ルニアラサルナリ

再ヒ番民ノ猖狂ヲ恣ニセシメサル方法ヲ立ルハ日本政府ノ

志ストコロ既ニカクノコトシ故ニ清國政府ソノ疆場ヲ固セ

ンカ爲ニ我コノ地ニ在ルヲ以テ危懼不安ノ情アラハソノ地

ヲ舉テ之ニ與フルモ固ヨリ吝惜セス但爾來ノ處分如何ニア

ルノミ即チ潘霽照會書中ニ云ヘル如ク營汛ヲ設ケ兵船ヲ派

シ望樓燈塔等以テ不虞ヲ戒メ通航ヲ利スルノ備充實シテ我

日本政府ノ義務ニ代ルヘキモノアルヲ期シ將タ今日ニ至ル

マテ清國政府其接壤ノ地ニ在リテ其人ヲ化スルノ義務ニ怠

リタルニヨリ我日本政府不得止コレヲ勦撫懷柔スルニ至リ

我日本政府ニテ廢スル所ノ財貨所費ノ人命モ亦清國政府ヨ

リコレカ相當ノ償ヲ出サシメン事ヲ要ス

清國談判ニ付可心得條件

第一

清國委員ト蕃地處分ヲ談判スルハ都テ別紙要領ノ趣ニ照シ

毫毛屈撓スル處アルヘカラス且力メテ談決ヲ促シ故ナク立約蓋印ノ期ニ遲延スヘカラス

第二

談判ノ要領償金ヲ得テ攻取之地ヲ讓與スルニ在リト雖モ初ヨリ償金ヲ欲スルノ色ヲアラハスヘカラス是毎ニ論議ノ柄ヲ我ニ取ランヲ欲スレハナリ

第三

談判漸ク償金ニ涉リ其額數ヲ論スルニ至レハ固ヨリ所費ノ外ヲ要セストイヘトモ力メテ我ヨリ其額ヲ言出ス事ナク彼ノ云々スル所ヲ我政府ニ電報シテ其若干額ヲ伺定ムベシ

第四

談判ノ要領其欲スル所ノ如キヲ得ハ速ニ約ヲ立ツベシ尤立約ノ大旨既ニ定ラハ或ハ人ヲ以スルモ或ハ書ヲ以テスルモ一應政府ヘ通報シ其答電^{尤用}ヲ得テ之ヲ決定スヘシ

第五

前文ノ約成リテ公然コレヲ政府ニ通知セハ政府乃チ都督ニ命シテ臺地ニ在ル兵ヲ退カシムル事ニ手ヲ下スヘシ故ニ約成ノ日ハ必速ニ電信ヲ以テ預報スベシ但其兵退了ノ期限ハ預定スヘカラサルモノアレハ其旨ヲ伺出ヘシ

第六

潘爵公然ノ照會書ヲ得ハ乃談判ノ端緒ヲ開クモノト看做シ先面論ヲ先ニシ書通ヲ後ニシ臨機制變ノ都合ヲ圖ルヘシ

但シ右照會書ハ近便ヲ以テ必ス政府ニ上ルヘシ

第七

沈潘應接ノ爲ニ別ニ一重官ヲ派スルモ其益ナキカ如シ矢張最前ノ引合懸リヲ追ヒテ前書公然タル照會狀ヲ得ル時ヨリ談判ヲ初ムルヲ可トス但其地ハ雙方ノ便宜ニ撰定スル所タルヘシ

第八

謁帝禮畢臺地處分ノ事宜奏稟ノ爲一時歸京ノ命アリトイヘトモ現地事務如是上ハ勢談判ヲ措テ謁帝ヲ先ニスルヲ得ス且此事極メテ神速談決ヲ尙フナレハ猶更然ラサルヲ得サルナリ就テハ一時歸京ノ事モ太タ要用タラサルハ必シモ前令ニ拘ラサルベシ

第九

今者李仙得ヲ派シ福建地方エ往カシメ總督其他ノ官員ニ^{(原註朱卷) 游方}說セシメ周旋勤事ノ任ヲ授ク就テハ雙方ノ事情隔闕不通ハ必互ニ參差ヲ生センヲ恐ル依テ兩間實地ノ形況ハ毎ニ相電

報シテ^{(原註朱卷) 脈カ}氣脈ノ相通スル事ヲ要スヘシ

第十

這回ノ機會ヲ以テ琉球兩屬ノ淵原ヲ絶チ朝鮮自新ノ門戸ヲ^{(原註朱卷) 微カ}開クヘシ是朝廷ノ微意當職ノ輿計ナリ

第十一

命令ニ準據シ達意談判スルニ因リ萬一兩國ノ交和相保タザルニ至ルト雖トモ注意盡力ノ上ハ責ヲ公使ニ歸セス政府其責ニ當リ自ラ便宜處分アルベシ必ラス爰ニ顧慮スル事勿レ

明治七年七月十五日

註一、本號文書ハ一〇一附屬書第二號ナルモ便宜茲ニ獨立文書トシテ採録セリ
二、右訓令ハ田邊外務省出仕カ携行セルモノナリ因ニ田邊ノ北京ニ到着セル日ニ關シテハ諸書一致ヲ缺クモ「焚餘」ニヨレハ「八月八日外務四等出仕田邊太一本國政府ノ密旨ヲ奉シ陸軍少佐樺山資紀ト共ニ進京ス」トアリ

九六

七月十五日 清國駐劄柳原公使(上海ニテ)ヨリ
潘清國欽差幫辦大臣宛

七月一日附ノ潘幫辦ノ書翰ハ柳原公使トノ前約

一 臺灣生蕃討撫一件 九六

ニ違背シ且西郷都督ヨリノ情報ト矛盾甚シク准

據シ難キ旨詰訊ノ件

敬啓者日前託

沈道臺寄奉復函諒已登

覽本月十一日即五月二十八日有西郷中將專差陸軍大尉池田

陸軍中尉日高幸頼

方便承飛雲艦允附來滬具徵和藹相待殊深感謝當據該員

面稟旁知西郷與

貴幫辦數次晤談情形竝接西郷手書面論一切筆記更覺瞭晰乃

將先到

貴函内與西卿面論情節兩下對照又向來員細詢彼此形狀其

間不無套脫齟齬因思此等辦法攸關重大豈可倉率從事茲

略舉其一二于左

一前者獲晤承問本國興師伐番之由要本大臣具函以對所以

首先陳其根由未舉西郷此次奉

命限辦三事原意不過剖說其情以矢靡他冀存兩國睦誼因

貴幫辦復函將第一第二條歸我國所應辦至第三條云欲應

歸中國接辦以紓我國隱憂本司是係幫辦須回閩後稟

沈大臣熟商奉

覆等因當告以我中將專奉兵權伐番而已雖經閩浙制臺屢勸撤兵終不肯退蓋因此舉係為保民之義現已布告全國何可中止莫若不與西鄉言論停其撤兵之議言歸兩國和好委本大臣妥慎商辦實為公便然係國家大事本大臣何敢擅自裁定故有回閩即將復函文意連銜照會由本大臣速即轉稟本國之請伊時經 貴幫辦逐一然諾並未提及欲與西鄉面論之意何以逕與西鄉面論即用此函稱為柳原議定三事甚至沈大臣送西鄉公文內亦云幫辦潘布政使自上海晤柳原公使已商允退兵等因殊屬轉調謬何堪駭異

一如 貴函所云即日西鄉前來回拜復詢其卑南寬地方有無事故答云無事據西鄉筆記則云 潘曰值此暑熱遠路勞駕我曰頃蒙來臨帳房小營簡藝之至時法國人在座問曰人言卑南之地亦有派兵前去果然乎否答曰無蓋云無者言未曾也看 貴函添一事字則人無不將謂西鄉已無志于卑南也夫卑南番搶掠我民一事經本大臣在滬與 貴幫辦函議之時具述在內即 貴復函亦專指牡丹卑南二處搶害之生蕃而言等語即使西鄉不事辯論此各函內數言尙能一筆勾抹耶豈有此理

一又貴函云西鄉又問牡丹社番出來謝罪究係如何辦法當告以牡丹番如能悔過以後誓不剽殺並將前年戕害琉球難民屍身交出即算謝罪如此辦法悉係貴大臣原信內第三條之議今本幫辦業經辨定以下至可毋庸置議也等語據西鄉筆記則云潘曰請問第三條之處分我曰牡丹社番現已辨到半途況又派撥兵辨進山駐紮奈牡丹番俱已逃入深山擬俟其肯出來悔過請罪見機行事彼曰請問可中國官令牡丹番出來謝罪以省兵力貴中將願意辨否我曰貴國如早兩年有此辦法最好現在我已辨到此地應仍歸我一手辦理貴國官可不必管彼曰我以朝衣朝冠來我地行我事誰敢言不必管是不遜甚蓋譯官姑妄言耳中將大人豈有是言乎我曰潘大人來辨第三條似未盡其商議我亦未盡其言時過午矣宜喫飯後再談彼曰中將大人既未盡言我亦同然於是同就食席飯畢呷茶潘曰第三條事有何話說請不離席只當茶話彼此談心西曰暢敘衷情是敦親睦敢不如教大人曰來欲將牡丹社番必由中國處分因思我國勞師糜餉為民復讎自非容易今日仇在目前將次進剿豈可輕讓別人兇番如欲不死須有償却費用之道不知大人有何高見潘曰令中國官辨此捕彼兇徒誅之其老弱及婦女無罪者懷柔之此我臺灣道臺之任

計附文稿一紙即前文七月一日總署
寄七照覆稿ナリ

名正具 七月十五日

大日本欽差全權大臣柳原前光拜

大清欽差幫辦大臣潘大人 台啓

(焚餘)

九七 七月十九日 沈清國欽差大臣等ヨリ
清國駐劄柳原公使宛

臺灣生蕃處置方針三箇條ニ關シ回答シ蕃地將來ノ事ハ清國側其ノ責ニ任スヘキニ付速ニ撤兵アリ度旨申入ノ件

大清欽差幫辦臺灣等處海防兼理各國事務大臣沈

大 臣 潘

爲

照會事照得五月初三日本幫辦抵臺與本大臣會晤將在上海接准

貴大臣來函呈閱當查函內所稱限辦三事內第一條第二條係專指牡丹社殺害難民之生番而言與別社並未滋事之生番無涉至卑南社於上年

貴國人遭風至此曾經該社番目陳安生救護交官送回

也夏向潘曰我不能也潘曰是何言與二人低語良久潘乃改其言曰誠使兇徒出來謝罪以後誓不殺人並將番地所埋琉民屍骸交還以從寬大處分西曰如斯而已乎潘曰然西曰如此寬大處分似太便宜若欲如此不可不就番地論償費用夏笑曰牡丹人口僅二百餘數頭瘦畜幾畝野蔬何能補償如許軍費潘曰此來費用幾何西曰往返總需二百拾餘萬元潘曰現費多少西曰鎖過壹百貳拾萬餘潘曰此事容我等回府城謀之于沈大臣後與柳原大臣商議可也等語此其所互異也至西鄉言番社非中國版圖云云亦係確有主意設使本大臣置身西鄉之地亦當如是持奉之也前本大臣條陳西鄉所奉辦法三條經

貴幫辦復以其第一條第二條專指牡丹卑南二社至第三條尙在各請本國核示之分而乃逕與西鄉言論爾耶又如貴函末言況係貴國自行興兵前來並非中國有請助兵之舉當可毋庸置議等語對查西鄉筆記並無此詞於

貴幫辦送該中將之文件內均未提及凡事如此本大臣所接貴幫辦來函實難據准相應一再聲明茲恐徒滋辯論有傷和誼另附本大臣回覆總署文稿一紙以冀參閱特此佈順頌助安不一

貴國是卑南社非特無殺害之事兼有救護之勞揆情度理必不致累及無辜今牡丹社番目番衆被殺番社被焚是第一條第二條業已了結矣第三條所云番俗反覆難制須立嚴約使永遠不剽殺難民等語查生蕃隸中國版圖載在臺灣府志保護商民中國責無旁貸設官駐兵建造望樓塔表使商船免致悞入再被生蕃擾害本大臣查核悉屬可行與本幫意見相符理合照會

貴大臣查照迅將

貴國兵隊撤回以守條約而敦和好須至照會者

右 照 會

大日本欽差全權大臣柳原

同治十三年六月初六日

(俟餘)

註 本號文書ノ送達ニ關シテハ九四ノ註參照

九八

七月十九日

潘清國欽差幫辦大臣ヨリ
清國駐劄柳原公使宛

臺灣生蕃處置方針三箇條ニ關シテハ沈清國欽差大臣之ヲ實行スヘキニ付日本側ハ速ニ撤兵アリ

敬啓者頃接

來函藉諭

貴大臣臺祺迪吉爲頌本幫辦由滬抵臺與

沈大臣會晤即將

貴大臣所致信函與

沈大臣閱看信內所開辦法三條經

沈大臣查核悉屬可行特備照會請

貴大臣照約辦理務望早日撤兵以遵條約而敦和好再本幫辦

前赴琅璫與

貴國西鄉中將面商各節先經另函奉致矣泐此即頌

臺社不一

名正具 六月初六日

大清欽差幫辦大臣福建布政使司潘霽拜

大日本國欽差大臣柳原大人台啓

(俟餘)

註 本號文書ノ送達ニ關シテハ九四ノ註參照

九九

七月二十二日

清國恭親王ヨリ
清國駐劄柳原公使宛

臺灣出兵ノ不條理ヲ責メ且生蕃問題ノ解決ニ關シテハ沈清國欽差大臣等ト商議アリ度旨回答ノ件

大清欽命總理各國事務王大臣

爲

照覆事同治十二年六月初二日據江海關道遞到

貴大臣照覆內開各情查中國與

貴國相交總以彼此換約訂明兩國邦土毋稍侵越爲始從前之案無可牽涉至上年

貴國大臣副島遣

貴大臣來本衙門面談各節本衙門前次照會

貴國外務省已盡言之竝無許

貴國自行查辦之說查琉球國與中國禮部時有文件往來官員亦常來中國如琉球會受生蕃之害應由琉球國請中國處置即謂琉球國與

貴國素有往來

貴國必欲與聞其事亦應照會本衙門辦理至謂

貴國人民曾經受害兩國既有條規如有其事尤應明言某年月日某人在某處若何被害照會本衙門查辦中國無不爲查辦之理萬一中國不爲查辦

貴國或以允否自行辦理詢我中國可也斷無逕自用兵之理中國亦無允

貴國自行查辦之理乃竝無一二文件照會本衙門請爲辦理

而遽自行查辦不但查辦而且突然稱兵入我境內揆之於理

豈可謂乎兩國所屬邦土毋相侵越盟言具在載入條規乃謂

本衙門滅視

貴國副嶋大臣之言然則

副島大臣即應滅視兩國修好盟約之言乎且副嶋大臣於上

年來

觀時竝未一言及此本王大臣何從異議即

貴大臣來署向本大臣述及臺灣生蕃一事竝無派兵前往之說乃

貴國外務省照覆稱據其旨趣下手等因是本王大臣未嘗許

貴國自行查辦本衙門前次照會內業經詳細聲敘且上年

貴副島大臣在京時屢次晤談實未明言臺灣生蕃之事而本

大臣等却將兩國所屬邦土不准侵越等語特於送行時觀面

申明現鄭少丞近在滬上必深知之而

貴大臣此次照會內稱

貴中將西鄉進辦事宜與上年

貴大臣所言何嘗不符是

貴大臣以自誣者誣本王大臣也至

貴大臣所稱本王大臣優待國使之禮自有一定大典等因

貴國如真篤念和好

貴大臣如真爲兩國保固睦誼能以禮待中國本衙門自無不

以禮優待

貴國使臣因應之宜理當如此

貴國外務省照覆稱來示所詢已由

貴大臣辦覆本衙門因就

貴大臣照覆所及約略剖明現不另覆

貴國外務省矣所有該處事宜前經奉

旨派沈大臣辦理竝

派潘藩司幫辦茲

貴大臣照會稱惟有准到來文平心辦理等語應俟

貴大臣與沈大臣潘藩司彼此商辦可耳相應照覆須至照覆

者

右 照 會

大日本國柳原大臣

同治拾參年陸月初玖日

(英餘)

註 本號文書ノ送達ニ關シテハ九四註參照

一〇〇 七月二十七日 寺島外務卿ト英國公使トノ對話書

臺灣撤兵ニ關スル件

明治七年七月廿七日於外務省寺嶋外務卿英國公使ハ一
クス應接記の内

一此頃臺灣の事御問合におよひ候得しが其後は如何相成
候哉同島には交易場四ヶ所もあり其次第に寄り貿易上
に關係いたし候事故委細に伺度候

一藩尉と云人柳原公使と那の場所を受取々縮する筈に談判
せしに始めは那の地方を受取迄人數を其儘差置くと云ひ
し處即今にては早く人數を引取れといふ事にて少し談判
行違たり
現に柳原公使も北京に入りたり

一早く引取れとは藩尉か申せし事に候哉

一色々あり始めは藩尉なり其後は藩尉自分行きしや柳原公
使と直に懸合はなし

一其懸合になり柳原公は北京に行かれし哉
一然り

一李仙得と云人は新聞紙上にては此行特權を持ちし様見
へ候全く貴政府より其權を與へられしや

一否其地方を管轄する上官の人多く李仙得は其中懇意の人
もあり且其地方を熟知の事なれば其人に談判の爲に行き
し也

一其上官は多くにあらず二人に候矢張道臺にて地方官也
道臺位はさ程は無之候

一併し財用杯の事を任せたるは此方より餘程重もし

一縣を合て府となし府を合せて臺となし臺を合せて州と
なす州は御國位の事なり

一最一人を名は忘れたり其人か餘程權ある由なり
〔公使洋字にて人名を出し〕

一此人か特權を持って北京より出張せり
一なる程其人は皇室ならん歟

一嘗て北京に行きし時李鴻章か別段の取扱を致せし事有
之候

北京の上官は總督と申せしや

一然り

〔此時公使制臺總督撫臺の三様を書し卿公の覽に供す〕

一方今の處にては將來如何の御見据に御坐候哉

一先つ夫れ丈にて餘は不明なり

一もし支那にて強ひて人數を引取れと申せし時は如何被
成候哉

一夫れか六ヶ敷原とに訴ほる也那の地方は支那政府の風化
不及と云はぬ處へ手を附けし事なれば此方も悪く候得共
敢て一言を言はぬには非ず然るに彼方にては人を遣はす
と云は知りたり兵を送るは知らぬと云ふ然しかゝる蠻地
へ人を遣はすにはいくらか兵を副へ遣らすはならぬ筈な
り

一支那より直ぐに引取れと申候節は如何被成候哉

一支那地と確定なれば早々引取すはならぬ事なれ共固より
さに心得ひ且直ぐに引取と云はならぬ事なりいくらか延
引せねはならず

彼より申には右類似する風化の不及地多分あり我地にあらずとは云はぬといひしか人の爲害を不爲はよし苟も害を爲す時は出来る丈けはせねばならず實地上に就ても支那邦化の及はざる事は瞭然なり且談判も届きたり唯人を遣ると兵との事を六ヶ敷申すなり

一 現今支那人二萬計同島に行き居り候彌引取と申候節は手間も取れ間敷候唯是非直ぐに引取と云ふては御不承知ならん

一 然り

一 彼れか不法の舉動ある時は貴國より又兵を被遣てもよし他國より遣はしても可宜敷候

一 然り此方にては彼管轄外と見做し且副島の昨年引取候節夫々談判を遂げ置きしなり

一 其副島氏の談判には確證有之候哉萬國の公論にては確乎たる證跡あればよし無ければ此大事を擧げらるゝ甚た六ヶ敷候

一 此事に就ては何等の談判もなく仕出したる事と御見做しかも知られず
一 蠻地も至て少人數也李仙得は幾萬もありといひしが追々

一 即今の處にて如何の御見込に候哉

一 不分明

一 世間では迎の船の用意を被成候と申候如何有之候哉

一 然り其用意は致し候

(朱書)

一 公使新聞紙を出たし

一 此新聞紙面にては李仙得は第一等の上官の様見へ候夫故支那への談判も同人より致し候歟

一 否支那への談判は柳原公使に任せたり李仙得は上官に非ず

一 併し李仙得も政府より遣はされたる人に可有之すれば當人も公けの談判を致し候か

一 否公けの談判を附せしに非ず

一 李仙得は一體大言を吐く人なり何か各國公使に對し威として用ひし言葉あり一國なれば自分の口上と見做ても宜敷候得共各國へ言ひ入れし上は當人の言を貴政府の言なりと世間にては見候當人は二等官也米國へ行くはよし魯國へ行くは内話に無之全く公けの事なり各國へ李仙得氏より申入候は不相當に有之候

報知の處にては男女老幼を合せて四千計の様子也さ程の事なれば僅かの人にて護衛出來しなり

一 先きの李仙得の事に倣ひ多人數を遣はしたり今生蕃の一部分なれば那の多人數は入らぬ事なりし

一 夫で支那の方では引を望み居る也其事柄に寄りては御承諾も出來間敷支那より人數を引連れ談判を遂げし上は御引取有之候歟

一 然り

一 引取の談になれば直に御引取歟

一 然り夫れは柳原公使へも申遣したり

一 其事は始より被申遣候歟

一 否追々申遣したり

一 柳原公は天津に至り誰に御逢被成候哉

一 天津より未だ便りなし多分十六日頃行きしならん

一 柳原公は早速北京に至られ宜しかる可きに何故に藩蔚と談判を被成しや

一 一體上海にて談判を開く積にて行きしに非ず通り掛り幸藩蔚に逢ふたる故談判を開きしなり又上海よりは往復も近く便宜なればなり

一〇一 七月二十八日 大隈臺灣蕃地事務局長官ノ奏議

蕃地處分ニ關スル清國トノ談判妥結ニ至リ難キ

ニ付國論ヲ開戦ニ一決スルノ件

附屬書一、明治六年三月九日副島外務卿へ賜ハリタル勅語

寫

臺灣生蕃ノ我カ漂民殺害一件ニ關シ清國

トノ交渉御委任ノ件

二、清國總理衙門ヨリ清國駐劄各國公使へノ

布告書等

明治七年七月廿八日

大臣

參議

海外出師之議

明治七年七月九日海外出師ノ議廟決シ陸海兩軍へ第一號ノ密諭ヲ下シ又第二號談判要領等ノ文書ヲ具シ外務省四等出仕田邊太一ヲシテ特命全權公使柳原前光ニ送ラシム夫レ廟議ノ茲ニ決スル徒爾ニ非ルナリ蓋シ其由テ來ル抑々故アリ明治四年十一月琉球人民五十四名臺灣蕃地ニ漂到シ土人ノ爲メニ慘毒殘害ヲ蒙ル事第三號始末ニ備ル明治六年三月

備中人民四名同ク臺灣蕃地ニ漂到シ土人ノ爲メニ剽奪掠取セラル實ニ第四號始末ノ如シ因テ琉球藩王其狀ヲ具シ小田縣令其情ヲ奏ス於是廟堂問罪ノ議起リ遂ニ其著手ノ順序ヲ講究シ當時外務卿副島種臣ヲ清國ニ派遣シ北京老臣ト渡蕃問罪ノ事ヲ談決スル事第五號始末ニ委シ本年三月西邊亂平キ尋テ問罪ノ廟議一決シ陸軍中將西郷從道ヲ以テ蕃地事務都督ニ任シ之ニ勅書特諭ヲ賜ヒ蕃地ニ發航セシムル事第六號始末ニ詳ナリ都督着蕃福建總督ニ照會シ彼ヨリ覆照スルハ即チ第七號ノ兩翰ナリ又從道蕃地ノ兇良勦撫ノ處分ハ第八號從道ノ書中ニ盡セリ是ヨリ先キ五月柳原公使ヲ清國ニ派ス發スルニ臨テ前光ニ賜フ所ノ内諭ハ第九號ニ悉セリ又夕前光仍上海滯在中總理衙門ヨリ我外務卿ニ照會スル文書ハ第十號ニ在リ前光上海ニ於テ清官潘爵ト談判假約ノ仔細ハ第十一號ニ述ヘタリ六月廿二日廿五日潘爵渡蕃西郷都督ニ迫リ應接ノ次第ハ即第十二號ナリ七月八日潘爵福建ヨリ上海ニアル沈秉成ヲ以テ柳原公使ニ照會書且沈秉成應接及ヒ公使ヨリ爵へ覆照スル文書ハ俱ニ第十三號ニ掲グ夫レ問罪着手ノ順序ト清國關係ノ次第ハ前號中ニ明瞭タリ潘爵先ニ柳原ト約シ央ニ西郷ト談シ後ニ柳原ニ答フ皆矛盾齟齬詭

凌百端輕悔既ニ甚シ是レ極メテ彼内ニ戰心ヲ含蓄シ敢テ驕氣ヲ抱藏ス故ニ其物色ノ外ニ顯ル、モノ此ノ如シ唯姑ク恭恨相交エ我ヲシテ其眞意ヲ疑ハシムルモノハ他無シ彼兵備未夕整ハズ急發敗屢ノ憂ヲ慮リ我カ兵鋒ヲ紓フスルノミ近日漢洋新聞紙中清國兵備ヲ修整スル事累々續々トシテ露出ス況又第十四號軍機大臣ノ密寄及ヒ沈葆楨ノ上書二篇皆我兵力ヲ恐レ大ニ我ニ備フルノ證以テ見ルベシ是ニ因テ之ヲ推セバ即今柳原公使特ニ舌戰筆鬪ノミヲ以テ北京ノ談判ハ極メテ容易ナルベカラズ或ハ彼我議論果シテ協ハザルニ至ルトキハ則チ交和隨テ破ル一旦交和ノ破ル、不測ノ禍實ニ知ル可カラズ深ク慮ラサルベカラズ夫レ兵ハ兇器戰ハ危事ナリ固ヨリ我欲スル所ニ非ス然レトモ理勢既ニ此ニ迫リ兵權以テ彼ヲ壅制スルニ非レバ何ヲ以テ彼ノ驕氣ヲ破リ又天帝國タル所以ノ體ヲ立ツル事ヲ得ンヤ且誠ニ今日國論ヲ戰ニ決スルヤ終ニ不戰ニ歸ス若シ今日國論ヲ不戰ニ決スルヤ終ニ戰ニ歸ス其故何哉今日戰議一決シ現兵急進海陸並迫ル彼兵備未夕實セズ周章狼狽爲ス所ヲ知ラズ遂ニ彼ヨリ和ヲ請ヒ罪ヲ謝スルニ至ラン惜哉着手遷延彼ヲシテ多少ノ備設ヲ爲サシムルノ時日ヲ與フ然レトモ今日蚤ク之圖ル尙未夕晚

シトセズ是所謂戰ニ決スルハ終ニ不戰ニ歸スルモノナリ萬一今日不戰ニ歸ス彼ニ在テハ兵備益修メ他日大舉以テ我ニ迫ラハ勢戰ハザルヲ得ズ是所謂今日不戰ニ決スルハ終ニ戰ニ歸スルモノナリ而シテ今日先シテ戰フト他日先シテレテ戰フト其兵鋒ノ利鈍豈ニ唯一トト而已ナランヤ實ニ國家ノ榮辱得失ニ關涉スル多辨ヲ俟ズシテ照々タリ況又昨日ノ電報彼襲撃ノ機動クト傾刻モ遲々爲ス可カラザルノ際ナリ仰キ願クハ急ニ陸海軍備ヲ脩メ疾雷耳ヲ掩ハシメザルニ非レバ時機漸ク失シ恐クハ事去リ計敗レテ遂ニ蹙ヲ嘆ムトモ及ハザルナリ是今日海外出師ノ事急ニセザル可カラザル所以ナリ謹議

註一、右文書ハ大隈重信關係文書ニ採録シアリ且「大隈公八十五年史」ニ據レハ臺灣蕃地事務局調製ノ臺灣蕃地處分一覽表ニ七月二十八日「長官海外出師の議を奏す」トアル旨ナルニ徴シ右同日大隈蕃地事務局長官ヨリ奏議セルモノト認メラル

二、本號文書ニ附屬書トシテ提出セラレタル「第一號」「第二號」八九一及九五ニ獨立セル文書トシテ掲ケタリ「第三號」「第四號」ハ省略セリ「第五號」ハ左ニ附屬書トシテ掲ケタリ「第六號」八九九及一〇〇ト同文ニ付省略セリ「第七號」ハ其ノ前半ハ二〇ノ後半「附片」ト

(附屬書一)
〔朱考〕
〔第五號〕

外務大臣 副島種臣

朕聞ク臺灣島ノ生蕃數次我人民ヲ屠殺スト若棄テ問スンハ後患何ソ極ラン今爾種臣へ委スルニ全權ヲ以テス爾種臣其往テ之ヲ伸理シ以テ朕カ民ヲ保スルノ意ヲ副ヘヨ欽哉

神武天皇即位紀元二千五百三十三年
明治六年三月九日

天皇御璽

註三、右ノ次ニ副島全權ノ報告アルモ本書第六卷九六二〇七頁下段終ヨリ三行目ヨリ二〇九頁下段終ヨリ六行目迄ト同文ナルニ付省略ス

(附屬書二)

(朱書)

第十四號

總理衙門ヨリ各國公使へ布告書

軍機大臣ヨリ地方諸大臣へ密示書

沈葆楨ヨリ英人日意格隨從並ニ甲鐵艦買入建白書

沈葆楨ヨリ福建造船局豫防ノ上書

(朱書)

總理衙門布告

京都總理衙門。業經知照各國駐京欽使。云沈中丞現奉諭旨。調往臺灣。任其便宜行事不准日人侵佔寸土。若日人舉動有犯萬國公法者。任從沈憲禁止。

(朱書)

軍機大臣密書

軍機大臣。密寄前江西巡撫沈。大學士直隸總督一等肅毅伯李。福州將軍文。兩江總督李。閩浙總督兼署福建巡撫李。同治十三年三月二十九日。奉上諭總理各國事務衙門。奏日本兵船現泊廈門請派大員查看一摺日本國之使臣。上年在京換約時。並未議及派員前赴臺灣生蕃地方之事。今忽與兵到閩口稱借地操兵。心懷叵測據英國使臣函報。日本係有發生蕃。南北洋通商大臣咨覆情形相同。事關中外交涉。亟應先事防範。以杜釁端李鶴年於此等重大事件。至今未見奏報。

掣之東行。以爲指臂之助。是否有當。伏乞聖鑒諷示。謹奏。

(朱書)

同上

再臣渡臺後。船政工程。委內閣中書銜莆田縣學訓導吳仲翔提調。該員素以篤誠剛直。爲在事員紳所信。可以保無他虞。惟廠地。費國家數百萬帑金。外人垂涎已非一日其左羅星塔。即閩海咽喉。前數日前。有琉球人來看廠後又有日本人踵至愚者千慮。不無內顧之憂。倘倉猝變生。非有威望卓著之大員。難資鎮壓號召。查前陝西藩司林壽圖在籍服滿。不日進京。合懇天恩飭林暫緩北行。籍籍船政爲名。資其坐鎮。並隨時察看海口情形。以固省垣門戶。萬一事出不測。可否准其專摺奏事。以專事無仰權臣等飭帶福靖後營駐守船廠之總兵銜副將王正道。添募新後一營。仍歸正道統帶。聽候林壽圖調度。其船政工程。仍責成吳仲翔一手經理。俟各事定局。林壽圖便可起程。入都是否有當。伏乞聖鑒訓示。謹奏。

1011 七月二十八日 寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

日清兩國開戦ノ眞偽問合等ニ關スル件

明治七年七月廿八日於外務省寺島外務卿米國公使ピン

殊堪詫異。生蕃地方。本係中國轄境豈容日本窺伺。該處情形如何。必須詳細查看妥籌布置。以期有備無患李鶴年公事較繁。不能遽離省城着派沈葆楨。帶領輪船兵辦以巡閱爲名。前往臺灣生蕃一帶察看。不動聲色相機籌辦。應如何調撥兵辦之處。着會商文煜李鶴年。及提督羅等。酌量調發。至生蕃如何開禁即設法撫綏駕馭。俾爲我用藉慰地方。以免外國侵越。並着沈葆楨酌度情形。與文煜李鶴年悉心會商請旨辦理。日本兵船。到閩後作何動靜。着文煜李鶴年沈葆楨切實具奏。南北洋如探有確耗。並着李鶴年李宗義。隨時咨明總理各國事務衙門核辦。原摺均着抄給關看。將此由六百里加緊密諭知之。欽此遵旨寄信前來。

(朱書)

沈葆楨上書

再採辦軍火。有在船政局總監工之廣東候補道葉文瀾。可勝其任。惟鐵甲船水雷等件。西洋所珍秘者非得廉幹洋員。無從得其要領。臣等擬函召前船政監督日意格適該洋員。從上海來據稱。聞英國有兩鐵甲船可購。但必須與中國海口相宜。乃適于用。請先打電線。往詢實在情形。並其價值。如蒙諭旨准購。應懇飭總理衙門。行文英國公使威安瑪。俾咨回本國辦理。方不費資。該洋員議論日本事宜。多中窺要。臣擬

ハム應接記の内

禮畢

一兼て申候通り拙者日本に在留する米國公使なるも日本の國體政事等に嘴を容るゝ理は無之候得とも日本政府と取結ひたる條約の義務は遵守すへき必せり又支那政府と結へる條約に於ても亦然り依て何度事に候乍然強て質問候譯には無之候間御差支さへ無之候得は御洩し被下度候近頃聞く日本政府支那と戰端を開くとの事眞なりや否

一此義に付ては兼て御話申候通り此方於ては初めより支那政府へ對し戰を交る積りは無之依て素より其用意は不致候然るに支那政府は大に恐れ戰の用意をなすとの事也右蕃地へ人を遣すの事は先年既に談判濟の事にて支那政府も承知の事也乍然兵を送る事は支那へ懸合は行届居不申候依て支那政府は臺灣を掠奪に来るものと見なし大に騷擾するとの事なれとも此方於て支那と戰ふ意は無之候北京在留貴國公使并英公使等へ支那政府より答へたる言に會て日本へ對し問罪のため臺灣え人を送る事を承諾せし事無之趣なれとも同政府より此方へ申越せし言には先年

副島へ談判の節臺灣人を遣す事は承知せしも未だ兵を送るとの事は我に於て肯せざる所也といふ然るに其地の風俗他國人の來る時は之を殺すといふ依て其暴行を防ぐ丈の者を率ひて行かざるを得ず且此方於て未だ其地の内部分を見たる事無之故に人員數萬ありと思察す依て五十や百人を送るも防ぎに不相成事と思ふ依て先年李善得八百の兵を師ひて渡るとの例にならひ夫丈の兵を送り彼の暴行の防となしたる也且李氏の行や支那の地より進退す故に陣營旅泊萬事差支無之此般の義は路を他國の領地に借らず直に當地に上陸す依て兵營旅泊等に障礙有之を以て右兵營等を以建るため大工其外諸職人も準備せり故に人員甚大數に至るも兵員は八百に上らず候且右兵は全島掠奪のためならず去れば支那も出兵して戦ふ事はなかるへし

一支那より出張の兵隊日本の兵隊に對し戦ひたるとの説あり實なるや

一否其事なし支那にては全島を掠奪せられん事を恐れ之を防かんかため萬一の用意は致居候趣なり

一昨日の新聞を閱するに支那政府より日本派遣の官員へ

るへからす故に萬一條約面に差響き候事もやと心配いたし候故御尋申候事也今後御話被下候事も候はゞいつにても出省可致候且又夕刻より拙館へ御光來も被下度願候臺灣事件は早く平定候事を祈居申候

1011 七月二十九日 寺島外務卿ヨリ 清國駐劄柳原公使宛

清國政府ニ對シ彼ヨリ我力政府宛ノ書翰ヲ清國新聞紙ニ掲載セル件ニ關シ辨責方指令ノ件

七月廿九日附ヲ以柳原特命全權公使エノ公信書被

一 清國政府ヨリ吾政府へ差越候清曆三月廿六日附書ノ文面其地方新聞紙ニ掲載有之且既ニガセツト等ニモ翻譯ノ上發兌有之候處右ハ清國政府ノ命ニテ掲載致候事ニ候哉或ハ其筋ノ官員等ヨリ相洩候事ニ候哉一應其旨清國政府へ御引合可有之元來兩國間ニ生ズル事故未ダ其結局ニ到ラザル者ヲ猥リニ新聞紙等ニ記載候テハ雙方事理分明ナラザルヨリ衆人ノ疑惑ヲ相生シ終ニ兩國交際ヲモ相傷フニ可至不容易事ニ候乍然自然該國ノ制ニ寄り一事一物悉ク掲載セザルハ

對し早く兵を撤せよとの布告をなしたりとあり實に然るや否

一現今派出の公使柳原支那と引合中なり布告の事并に如何に談判決定候哉未だ承知不致候是迄の談判は左の通りに候

初め支那政府より速に兵を引けと申せり然るに其後に直に兵を引揚るに不及日本政府の十分と思ふ丈蕃民を討し満足したる後兵を撤すへし其後の取締は我方に於て處分すへきなれば永く兵を滞留せしむる勿れといふ依て右取締方は爾後は鎮臺兵并に軍艦等を備へ置各國人の來る時は丁寧に待遇し燈明臺等をも建築して航海者の安全を保護すへしとの懸合をなしたり然るに其後又彼の返答變り直に兵を引けといふ依て我公使其言の反覆無定を詰らんかため上海より進んでツルヤメンえ出發せり是其談判の大略也此後未だ報知無之十二三日前我公使上海を發軔せり故に其後の様子は未だ相分不申候公使派遣後の手續如此也

一委細相分り多謝候貴政府の事務に付兎や角異議申候譯は無之候得とも貴國并支那と取結ひたる條約は守らさ

無シト申事ニ候ハゞ獨り彼ヨリ發セシ書翰ノミ掲載シ而シテ吾ヨリ申遣セシ分ハ其儘秘シ置ク譯有之間數候將亦假令右事件ハ其官員ノ手ヨリ洩洩シ世間ニ流布スル者トナス共到底彼ノ政府ニ於テ其責免ル可ラザル儀ニ付此邊御含ミ御引合ノ模様ニ隨へ御辨責可有之尤モ其趣委細御通知可有之候

註 右文書原文見當ラス尙右ハ發信人ノ名ヲ缺クモ寺島外務卿ヨリ發セラレタルモノカ

1014 八月二日

大久保辦理大臣へノ御委任權限要項

附記 自八月一日至八月十八日大久保參議等ニ對スル清國派遣ニ關スル辭令

全權辦理大臣 大久保利通

今般全權辦理大臣トシテ清國へ被差遣候ニ付テハ左ノ件々御委任候事

一全權公使柳原前光へ内勅ノ次第及ヒ田邊太一ヲ以テ被仰遣候件々綱領不動ノ要旨ニ候ヘトモ實際不得止ノ都

合ニ寄テハ便宜取捨談決スルノ權ヲ有スル事
 一 談判ハ兩國懇親ヲ保全スルヲ以テ主トストイヘトモ不
 得止ニ出レハ和戰ヲ決スルノ權ヲ有スル事
 一時宜ニヨリ在清國ノ諸官員以下一切指揮進退スルノ權
 ヲ有スル事
 一事實不得止トキハ武官トイヘトモ指揮進退スルノ權ヲ
 有スル事
 一 李仙得ヘ御委任ノ次第有之トイヘトモ便宜進退使令ス
 ルノ權ヲ有スル事
 明治七年八月二日

太政大臣 三條實美

(使清辦理始末)

註 全權辦理大臣並ニ其ノ隨員任命ノ辭令左ニ附記ス

(附記)

八月一日

參 議 大久保利通

全權辦理大臣トシテ清國へ被差遣候事

權少內史 金井之恭

全權辦理大臣大久保利通清國へ被指遣候ニ付隨行被 仰付

候事

八月三日

同 文

租稅助 吉原重俊

同 文

開拓使七等出仕 小牧昌業

同 文被 仰付候事

內務省十等出仕 川村正平

同 文被 仰付候事

內務省七等出仕 池田寬治

八月四日

銜道權頭 太田資政

同 文被 仰付候事

司法省七等出仕 名村泰藏

同 文被 仰付候事

租稅寮九等出仕 平川武柄

同 文被 仰付候事

陸軍大佐 福原和勝

同 文被 仰付候事

同 中將 關定暉

同 文被 仰付候事

同 同 坂元常孝

同 文被 仰付候事

陸軍省十等出仕 黑岡季備

同 文被 仰付候事

同 十五等出仕 園田長輝

同 文被 仰付候事

外務大臣函文據云本外務省前者再接

總理衙門同治十三年四月十八日寄來公文內開本年四月

十四日奉

上諭沈葆楨著授爲欽差辦理臺灣等處海防兼

理各國事務大臣以重事權欽此查該大臣素悉中外情形茲奉

特旨派充

欽差辦理臺灣等處海防兼理各國事務大臣必能悉心籌畫其

事權以符條約而敦睦誼相應照會等因業已閱悉當經稟明

奉

示本朝現已簡放駐清公使即飭該使辨具覆文可也等因等語

本大臣奉此即將前因備文照覆

貴王大臣希爲查照可也須至照會者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治七年八月三日

一〇六 八月三日 清國駐劄柳原公使ヨリ

寺島外務卿宛

爲

一〇五 八月三日 清國駐劄柳原公使ヨリ

清國恭親王宛

同治十三年四月十八日附清國總理衙門ノ回答ニ

對シテハ柳原公使ヨリ回答スヘキ旨ノ訓令ヲ受

ケタル次第照覆ノ件

大日本欽差全權大臣柳原

一 臺灣生蕃討撫一件 一〇五 一〇六

爲

一七三

第二次清國總理衙門へノ照覆書文字不穩ニ付臨機ノ處置ヲ講セシ旨通知ノ件

附記 寺島外務卿ヨリ清國恭親王等宛
臺灣事件ノ處理ニ關シテハ柳原公使ト談判アリ度旨回答ノ件

明治七年八月三日出在清國特命全權公使柳原前光ヨリノ公信拔萃

一 第二次總理衙門へノ照覆書披封ニテ御回シ致閱覽候然ルニ其末文ニ兩國欽差應必彼此熟商ノ文字有之右ハ頗ル不穩如何トナレバ下官當國到著已降清人等頻リニ臺灣ニ行キ沈葆楨ト會商セヨト相勸候へ共下官承引不致其故ハ沈氏欽差ノ重命ヲ奉シ居候へ共到底同人ハ末ニテ北京政府其本ナリ誠ニ斯ル非常大事ノ時ニ方リ末ニ據ルハ不可ナレバナリ故ニ固執ノ清人一度此御照覆ヲ得レバ必ラス下官ヲ促シテ臺灣ニ行カシメント爲シ實地頗ル不都合ノ上下官從來之議ニ齟齬候間不得止御照覆ハ抑留致シ置別紙如^①號此返書事宜ハ下官へ被託候事ニ取計候右ハ無據事實故臨機ノ處分可然御容察望候

註一、右文書原文見當ラス尙右ハ受信人ノ名ヲ缺クモ寺島

清國駐劄全權公使トシテ到着ノ旨ノ通知竝ニ國書捧呈ノ爲謁見ノ期日間合ノ件

附記 七月二十四日柳原公使ト李鴻章トノ天津ニ於ケル應接記

大日本欽差全權大臣柳原

照會事茲本大臣欽奉我

大皇帝簡命委以全權駐劄

貴國京師以便掌理兩國交涉事宜竝奉

國書信憑呈遞

貴國

大皇帝前用昭所職今於明治七年七月三十一日

已入都下合應備文報到竝請

貴王大臣煩爲諒定

觀期示覆是望爲此照會希即查照可也須至照會者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治七年八月三日

(扶餘)

外務卿宛ト認メラル

二、右文書中「別紙」ハ一〇五ト同文ニ付略ス
三、右文書ニ謂フ「第二次總理衙門へノ御照覆書」ノ和文ト思ハルルモノ左ニ附記ス

(附記)

⑩號

貴國同治十三年四月十八日附照會書接手我國より彌臺灣生番地出兵候趣御承知相成候に付船政大臣沈に欽差辦理臺灣等處海防兼理各國事務大臣を授けられ右事件に付兩國修好の條規に基き御談判可有之旨御申越承知致候既に本月廿五日附を以貴國去る三月廿四日附の照會書に照覆およひ候如く此方おもても欽差全權公使柳原に委任有之候間兩欽差の間に必熟談を遂げ兩國和親を不傷様適當の處置可有之事と信し候右照覆及候也

註四、右文書ハ發受者ノ記載ナキモ六八ノ回答書翰ナルヨリ推シ寺島外務卿ヨリ清國恭親王等宛ト認メラル而シテ八九ノ端書ニ據レハ七月九日便ニテ柳原公使へ向發送セラレシモノナリ尙右文書ノ漢譯文見當ラス

一〇七 八月三日 清國駐劄柳原公使ヨリ 清國恭親王宛

註一、右文書ハ八月三日鄭一等書記官ニヨリ清國總理衙門ニ齎ラサレタリ

二、柳原公使北京ニ赴ク途天津ニ於テ七月二十四日李清國直隸總督ト應接セル記事「扶餘」中ニアリ便宜左ニ附記ス

(附記)

註二、同ハ七月ヲ誤ス
同二十四日柳原公使鄭書記官直隸總督李鴻章ノ行院ニ赴ク初メ庚午ノ秋柳原通信ノ爲メ來津セシ時李專ラ兩國ノ和好ヲ首倡シ其後換約既ニ畢リ未幾我ヨリ討蕃ノ師ヲ舉クルヲ以テ李ハ今度公使ノ入津ヲ待チ必ス臺事ヲ己カ手中ニテ辦結セント欲スルヤ久シ於是言論勃々極口駁撃ス公使前キニ上海ニ在テ伐蕃ハ我國ノ義舉ト承認セシ潘爵ノ復書ニ據リ先ツ其論鋒ヲ摧キ應對自若トシテ辯論ヲ事トセス且告ルニ觀見ノ期忽諸ス可カラス明日即チ行クヲ以テス李云貴國兵ヲ稱ケ境ヲ侵ス我皇上決シテ接使ノ禮ヲ行ハサルベシ若カス滯津シテ臺事ヲ熟議完清シ然シテ後進京センニハト公使遂ニ聽カスシテ別ル^①對話書備サニ内翰往復内ニ在リ

註三、右文書ニ謂フ「内翰往復」見當ラス

(扶餘)

一〇八 八月五日

大久保辦理大臣への御信任狀

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝此書ヲ見ル者ニ宣示ス往歲我人民難船ノ爲臺灣島ニ漂到シ土人ノ暴行ヲ受ケタルヲ以テ其罪ヲ問ハン爲ニ我委員ヲ命シ且不虞ヲ警ムルヲ以テ之ニ兵士ヲ附屬シテ送リタリ此一舉ニ付兩國間ニ不都合ヲ生シ交際ノ障碍トナラサル様深ク注意シ曩ニ我清國駐劄全權公使柳原前光ヲシテ大清國政府ト平穩ニ商議セシムヘキヲ命シタリ然ルニ爾後種々ノ論端ヲ啓クヲ致ス朕又以爲ク事至重ニ屬ス宜ク更ニ朕カ切近ニ望ム所ノ意ヲ熟知セル貴重ノ大臣ヲ簡テ委スルニ全權ヲ以テシ其事ニ任セシムヘシト朕深ク參議兼內務卿大久保利通ノ才幹忠直能ク其任ニ堪フルヲ信シ乃チ全權辦理大臣ト爲シ大清國へ遣シ大清國皇帝ヨリ任スル右同權ノ大臣ト朕カ希望ノ趣ヲ達スヘキ條約ヲ約定シ又ハ約書ヲ締成シ而シテ朕カ名ヲ以テ其決議シタル書面ニ調印シ右事件ヲ充分ニ結落スヘキ權ヲ與ヘタレハ凡ソ這般ノ事ハ朕躬ヲ其地ニ臨ミ親

ラ之ヲ處スルト異ナルヲ無キヲ證ス
神武天皇紀元二千五百三十四年明治七年八月五日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ記シ國璽ヲ鈐ス

奉勅 太政大臣 三條實美

(使清辦理始末)

(右漢譯文)

粵保ニ有天祐ニ踐ニ萬世一系帝祚ニ大日本國皇帝。宣示凡瞻ニ諛書ニ者。往歲有下我人民破レ船漂ニ到臺灣島ニ被ニ彼土人橫暴ノ者。以レ之命ニ我委員。往問ニ其罪。且派兵屬レ之以警ニ不虞。有ニ此舉也。或恐有下事出ニ謬傳ニ交際生ニ釁。因以命下我派駐清國ニ全權公使柳原前光。令與大清國政府。將ニ懇親之意。妥爲中商議。上在レ前。而爾後致啓ニ種々論端。朕又爲事屬ニ至一重。宜地別簡レ于朕之信重大臣。以下其熟知朕意切近所望者。委付全權。令天往。便是參議兼內務卿大久保利通。朕深信。其有ニ才幹。且忠直能堪中厥任。乃茲授爲ニ全權辦理大臣。著往ニ清國。令與大清國皇帝所。派該其同權大臣。或議ニ定條約。或議ニ成

約書ニ以副ニ朕意所望爲天要。而其所ニ議定ニ之約。准レ即。用ニ朕名ニ批。以便令レ其盡權從レ事好爲ニ收局也。凡此行辨。事即與ニ朕躬親臨做主無異。准レ此爲憑。神武天皇即位紀元二千五百卅四年明治七年八月五日於ニ東京宮城ニ親記レ名蓋用國璽ニ者也。御名 國璽

奉勅 太政大臣 三條實美 花押

(使清辦理始末)

一〇九 八月七日 清國駐劄柳原公使ヨリ 清國恭親王宛

征蕃ノ件ハ副島大使既ニ總署ニ諒解済ニシテ蕃地處分ニ關シテハ悉心辦理スヘキ旨回答ノ件

大日本國欽差全權大臣柳原 爲

照覆事茲我八月三日因派書記官鄭至

貴衙門報本大臣到任接回

貴王大臣同治十三年五月二十九日及六月初九日所發照

會並

一 臺灣生蕃討撫一件 一〇九

沈潘ニ大臣公文附函等共四件繳到本大臣已一併收閱就貴王大臣文內開各節本大臣查上年我副島大臣在京議觀事初因禮節不合通例刻欲東裝謝辭回國特派本大臣至貴衙門代陳臺灣生蕃之事是與副島大臣親口相告原無差別其時本大臣云我國屬民既受生番枉害必須派差查辦以盡政府義務此舉意在除兇安良惟是番地不奉貴國政教畫地自居然思我國此行恐觸貴國嫌疑故特相告而去等語夫我國論以爲伐一野蠻不欲以告諸他人之國然我副島大臣篤念兩國和誼乃爾相告則帶兵與不帶惟我所欲且貴王大臣當時並無細論又無異議於我何所再言況爲特防嫌疑而相告原無請允查辦之意又何煩文書往來乎本大臣信不自誣敢誣貴王大臣哉如來文所稱貴大臣此次來華如謂修好而來則現在用兵焚掠中國地土又將何說等因本大臣查貴國從前棄蕃地于化外是屬無主野蠻故戕害我琉球民五十數名強奪備中難民衣物憫不知罪爲一國者殺人償命捉賊見贓一定之理何乃置之度外從未懲治是無政紀又無法典焉得列于人國之目所以我國視爲野蠻振旅伐之也宜前

者本大臣在滬遇潘藩司銜奉

欽旨下閩承詢此事原委經本大臣具函細述竝舉西鄉中將奉
勅限辦三事告之一曰捕前殺害我民者誅之二曰抗抵我兵爲敵
者殺之云々其潘藩司復書則稱第一條第二條貴大臣稱專
指牡丹卑南二社而言足見辦事頭緒分明等語是無異議我
西鄉中將之進師伐罪固不外此則

貴國亦應可無嫌疑至本大臣責任保固兩國睦誼凡於該處
事宜固所悉心辦理豈敢姑以好言款

貴國也合應再行照覆希

貴王大臣幸諒焉須至照會者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治七年八月七日

(焚餘)

一一〇 八月九日 清國駐劄柳原公使ヨリ
清國恭親王等宛

沈清國欽差大臣等宛書翰轉達方依頼竝ニ總署大

臣下面商シ度ニ付其ノ日時間合ノ件

附屬書

八月九日清國駐劄柳原公使ヨリ沈清國欽差大臣
等宛書翰

前約ヲ履行セサルヲ難詰シ蕃地處分ニ關
シテハ總署ト直接交渉スヘキニ付右承知
アリ度旨照覆ノ件

啓者日前經

貴衙門寄來

沈欽差 大臣公文竝附函共二件到本大臣接已查閱茲具覆

文一件復煩由

貴衙門加封轉遞

該大臣收拆是感再本大臣另有要事踵

貴衙門面商請

貴王大臣即爲擇日指示以便就見端此佈懇順頌

助社

名另具八月九日

柳原前光

中堂 王爺 台 啓

大臣

(焚餘)

大日本欽差全權大臣柳原

照覆事明治七年八月三日接准

爲

貴大臣 公文竝附函共貳件其公文內開本幫辦抵臺與本大

臣會晤將在上海接准貴大臣來函呈閱當查函內所稱限辦

三事內第一條第二條係專指牡丹社殺害難民之生番而言

與別社竝未滋事之生番無涉至卑南社於上年貴國人遭風

至此曾經該社番目陳安生救護交官送回貴國是卑南社非

特無殺害之事兼有救護之勞揆情度理必不致累及無辜今

牡丹社番衆被殺番社被焚是第一條第二條業已了結矣第

三條所云番俗反覆難制須立嚴約使永遠不剽殺難民等語

查生番隸中國版圖載在臺灣府志保護商民中國責無旁貸

設官駐兵建造望樓塔表使商船免致悞入再被生番擾害本

大臣查核悉屬可行與本幫辦意見相符理合照會貴大臣等

因到本大臣准此據查前在上海

貴幫辦會晤面陳暨所往復函約情節絕與前言不符來文所

稱今牡丹社目衆被殺番社被焚是第一條第二條業已了結

矣等語是謂我國已將牡丹番社焚殺應已無措辦之處又稱

卑南覺社非特無殺害之事兼有救護之勞等語以謂卑南覺

社絕無其罪不當累及無辜之意查牡丹社懲辦未半不暇辦

及卑南之事何得便稱業已了此兩條夫我備中州民曾被劫

掠實係該社醜番所爲

貴大臣 止知陳安生救護一層未經查知該社番人搶掠船貨

衣物一空人證實在今若置而不問將何以答我

大皇帝恤民如子之仁意乎此事前經與

貴幫辦說過已承

然諾覆以足見辦事頭緒分明在案至第三條我國應辦事宜

貴大臣 極稱隸中國版圖等語在本大臣了有主張不能奉教

況我將帥所臨民皆箠壺以迎一仰我國政府保護如該善後

事宜縱令 貴國必欲代我政府處置接辦嗣後免致往來商

船悞入再被生番擾害亦須酌議其款揆厥情理不能無故相

授之也滬上遇

貴幫辦已成函約之後臨別訂言凡爲番地交涉兩國辯論保

存和好事宜與本大臣和衷商酌辦安全局等語詎料

貴幫辦抵臺後不能踐約徑向西鄉中將面議又從將其所議

彼此謬調致本大臣責任之事參商相左已于日前兩次函內

辯覆詳晰今據來文亦復如是殊深駭異因思此事攸關重大

傳云出好興戎豈容倉卒毫無齟齬如

貴幫辦 所辦實無據以憑照即本大臣轉就再辦恐致復生齟

船却有妨礙兩國和好是可慮也茲本大臣已抵京都下車祇應向

總理王大臣從善面議了此一事以保存和好耳爲此照覆即希查照可也須至照會者

右 照 會

大清欽差辦理臺灣等處海防兼理各國事務大臣沈

明治七年八月九日

(英餘)

一一一 八月十日 三條太政大臣ヨリ外務省ヘノ達

米國船紐育號臺灣行中止ニ關スル訴訟ハ橫濱在

勤米國領事ノ裁判ニテ敗訴トナリタルニ付更ニ

米國加州地方裁判所ヘ控訴方桑港在勤日本領事

代理「ブルックス」ヘ通達スヘキ旨達ノ件

附屬書一、寺島外務卿ヨリ桑港在勤日本領事代理「ブル

クス」宛書翰案

右一件控訴方指示ノ件

二、八月三日司法省御雇米國人「ヒル」ヨリ桑港在

勤日本領事代理「ブルックス」宛書翰

米國船紐育號臺灣行中止ノ事情ヲ述ヘ該件米國加州地方裁判所ヘ控訴アリ度旨依頼ノ件

外 務 省

雇人米國郵船ニウヨルク號航海破約ニ付在橫濱合衆國領事裁判所ヘ訴候末猶又(カリホルニヤ)ニ在ル(デイストリクト。コウルト)ヘ控訴可致旨別紙書翰案ノ通相認桑港我領事代理ヘ通達スヘク此旨相達候事

明治七年八月十日

太政大臣 三 條 實 美

註 橫濱在勤米國領事ノ裁判ノ判決書ハ不詳

(附屬書一)

本文は八月十三日公信にて達す

先般大藏省御用にて米國太平洋郵船商會の鈕約號を雇入長崎を経て臺灣島迄航渡すへき約定の處同船儀長崎迄航海同港に於て同商會の代人約定に背き其航海を遂しめざるより大藏省原告となり郵船會社を被告とし遂に橫濱に在る合衆國領事裁判所ヘ訴え候處其裁決被告に荷擔し正理に背き候

に付今度カリホルニヤに在るデイストリクトコウルトに上訴の儀決定いたし原告代官師ヒルえ命し上訴の書類取調へ出來則同人より橫濱領事裁判所へ差出し置候に付同裁判所より次便を以貴所へ差送候筈に有之訴訟の顛末右にて御承知可有之譯に候得共尙其委細御了解可有之代官師ヒルより貴所宛の告知書別紙差出させ候間御熟覽の上デイストリク、コウルト書記局書き留め其他萬事都合能御取計有之度右一件上訴の節は於其地代官師御雇入れ可被成候是我か意を暢達せしめん爲十分辨論爲致候爲に有之候一切の費用は御申越次第追て精算可相成幾重にも御注意有之度此段申進候也

明治七年八月 日

外務卿 姓 名

桑港に在る

日本領事代理

チャルレスワルコワトブルックス貴下

(附屬書二)

次回ノ合衆國郵便ニテ橫濱在留合衆國副領事ヨリ日本政府原告ニシテ太平洋海郵船會社被告タリシ公事ヲ日本神奈川ノ

一 臺灣生番討撫一件 一一一

合衆國領事裁判所ニテ裁判シタル事ニ就ギ日本政府ノ爲ニ控訴狀ヲ差送申ヘキナリ余ハ政府ノ爲ニ吟味ノ席ニ出テ且ツ控訴ノ用意致申候テ其事ノ次第ハ書取ニテ十分御承知ニ相成ヘク候ヘトモ愚按ニ此書ヲ相添候方然ルヘク存候此書ハ日本政府ヨリ御届相成ルベク且ツ政府ヨリモ被申送事有之ヘクト被存候少モ早ク此一件ニ御配慮有之候様致度存書取ヲ貴君ヘ差出シ候様私示致致セシナリ貴君地方裁判所ニ於テ自ラ此控訴狀ヲ記載スル事御出來可被成又日本政府ノ爲ニ其公事ヲ論辨スル爲メ法律代官人ヲ頼ミ此公事ニ就テハ少モ我等ノ權利ヲ害スル事ナカラシムヘキハ勿論御承知ト存候

余輩裁判ノ一變セン事ヲ望ムニ依頼スル所ノ重立チタル箇條ハ御頼ミ相成候代官人ニ疑ナク明ニ御辨被下度元來其事實ト申ハ至テ譯モナキ事ニシテ大藏省ト太平洋海郵船會社トノ間ニテ「ニウヨルク」船ヲ雇フ約束ヲ取結ヒテ其約ヲ果サハルヨリ破約ノ責何レニ在ルカノ爭論ノミ
「ニウヨルク」船ハ橫濱ヨリ長崎マテ廻リ此港ニテ日本政府ノ爲ニ諸物ヲ積ミ臺灣ヘ到ルヘキノ處右船長崎滯港ノ間ニ橫濱東京ニテ太平洋海郵船會社ノ方ニ何カ妙ナル事起リシカ

其原因ハ法律上ノ箇件ニ付テハ敢テ考窮スルニ及ハス而シテ横濱ノ船主ノ管事ヨリ長崎ノ同會社ノ管事ニ命シテ彼「ニウヨーク」船ヲ其港ニ止メシヲ以テ終ニ出帆ヲ止メタリ然ルニ船主自家ノ爲シタル所ヲ蔽ヒテ備主(日本政府)先ツ右船ヲ當時臺灣へ差向クル船中ヨリ除キタリト謂ヒ其證シテ引ク所ノ者一ハ船主管事(セントル)ノ言ニシテ日本外務卿ヨリ合衆國公使へ送リタル書翰ヲ合衆國公使ノ讀聞カセテ「ニウヨーク」船ハ臺灣へ差向クル船中ヨリ除キタリト云ヘルヲ聞キタル事又一ハ合衆國公使ノ受取りタル書翰ノ寫シニシテ合衆國公使館ノ書記官ヨリ證據ニ出シタル者ナリ

扱逐一詳細ナル事ハ述ヘスシテモ上文ニ謂ヘル證據ニ就テ左ニ其首タルケ條ノ何タルヲ説カント欲ス第一雇入約條面ニテ「ニウヨーク」船ノ進退ニ至テハ雇中其船ニ乗込ミ從行スル日本政府ノ役人ノ指圖ニ從フヘキ筈ニシテ船主(及ヒ其管事等ハ右ノ役人ノ外他ヲ顧ミサル筈ナリ其長崎ニテ差留ノ時ニ方テ横濱ノ船主管事ヨリ長崎ノ管事へ「ニウヨーク」船出帆差留ノ沙汰ヲ爲シタルハ約條面ノ主意ニ背キ横濱ノ管事義ニ於テ有スヘカラサルノ權ヲ恣ニ

シテ彼役人ハ頻リニ迫テ船ヲ出サンコトヲ望ミシナリ而シテ余カ考フル所ニテハ雙方ノ現ニ爲セシ舉動ニ非レハ外ニ其航海ヲ止ムル原由ト爲スヘキ者ナシ又雙方ノ處置ハ復タ別ニ言フヘキコトナク其事實前文ニ説ケルカ如クナリシノミニシテ「ニウヨーク」船雇ハレテ役人ヲ乗込マセ横濱ヲ出帆シテ船主及ヒ管事ハ右役人ノ指圖ヲ奉スヘキノミ而シテ其長崎ニ着シタル後數日ニシテ日本政府愈々其港ヲ出帆スヘキ用意整ヒ彼役人ヲ以テ其出船ヲ掛合ヒシ處長崎ノ船主管事之ヲ拒ミケル故日本政府止ム事ヲ得ス「ニウヨーク」船ヲ措キテ他船ヲ雇フコトニ至リシナリ茲ニ又今マテ要求サレタル損失ノ償ニ就テノ一ケ條アルニ付キ貴君ノ御頼ミ可被成代理人左ノ事ヲ承知致スヘキナリ假令法律上ニ於テ損失ノ償高ヲ定ムルトモ余輩ハ敢テ其全額ヲ要求スルニアラス是レ余輩ノ請求スル所ニ越ユルノ高ナリ余輩ハ只雇船條約面ニ掲ケタル約束ニ從ヒ船主へ拂ヒタル金ヲ取戻サントスルノミ一體此公事ハ右ノ高ヲ取戻サントセサルナラハ内濟ニテ止ミタルナレトモ船主ハ我ヲシテ雇船條約面ノ全額ヲ拂ハシメント申セシ故右ハ法外ノ事ト存シ訴訟ニ及ヒ候ナリ愚按ニ上文ニ述ヘ候所ニテ此公事

シ其船ヲ差留タル上ハ即チ是破約セシナリ第二管事ノ公使カ右書翰ヲ讀ミシヲ聞キタルト云フ證據ハ僅カニ風聞ニ過キス又其寫ヲ出シタルモ敢テ之ヲ確證ト爲ス可カラス抑其書翰ハ政府ノ一役人ヨリ此約束ニ全ク關係ナキ者へ送リタル文通ノミニシテ絶テ此ニ由テ「ニウヨーク」船持主ノ爲シタル處置ヲ生スルノ道理由縁ナシ其書翰ニハ「ニウヨーク」船ヲ臺灣行ノ船中ヨリ除ク可キノ沙汰アリタリト記スレトモ此語ヲ以テ破約ノ意アリ其船ノ出帆ヲ止ムル意アリト爲スヘカラス「ニウヨーク」船ハ彼臺灣行ト稱スル事ハ暫ク措テ問ハス航海ヲ爲シ得ヘキナリ蓋シ約條面ニ於テ此臺灣行ノ事ニ就テハ絶エテ關係ナケレハナリ右ノ書翰中ニ記スル沙汰ノ文言(愈發令ニナリタリトスルトモ)何ントアリシトモ何人ヨリ發令セシトモ何人ヘノ沙汰トモ又何日其沙汰出テシトモ何人ヘトモ惣テ其他ノ事一向判然タラスシテ其眞味ノ處ハ只沙汰アリタルトイフ丈ノミニシテ彼「ニウヨーク」船ニ乗込ミタル役人現ニ此舉動ヲ爲シタルトイフニ非ス船主ハ其船ノ進退ニ就テ獨此役人ノ指圖如何ト待チ其約束ヲ破ルカ又ハ全ク其約ヲ違クルカラ顧ミルヘキノミナルニ正シク之ト相反スル所アルコト明ニ

ノ由來ヲ御承知被成候ニ必要ナル事ハ盡キ申スト存候何分時日切迫ニシテ詳悉スル能ハス貴君ハ必ス自ラ此控訴ニ御注意被下御盡力ニ依テ願意伸ヒ可申ト偏ニ御依頼申候恐惶敬白

千八百七十四年八月三日

東京司法省

ル

チャールス、ウラルコツト、ブルークス様

一一二 八月十二日 米國公使館ニ於テ寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

御雇米國人「リ・ゼンドル」拘留ニ關スル件

八月十二日築地米國公使館於テ寺嶋外務卿同公使と應接筆記

大久保參議支那へ發行前參館候哉

御來訪相成候に付支那在留我國代理公使ウキルイアム氏
え委細轉書いたし置候公使ロー氏は先般歸國新任公使不
日來港の積に付尙同氏へも申込め可置候
風聞種々に有之候

リセントル氏廈門に於て領事官より拘留致され候趣申越し此儀に付御談判致たし

私も土曜（原註八月八日に當る）日横濱新聞にて此義致承知候右に付何とか通信有之候哉

二度程電報有之候風聞も取方に依り種々の説に相成候我國清國と兵端を開き候譯にも無之候へは同氏日本を援けるとの譯は有之間敷

リセントル氏は軍事に關係は無之哉

勿論さ様の譯には無之同氏は福州鎮臺と懇意に付此度の一件の情實等を辯解等の爲差遣候義に候

委任狀にても爲持相成候哉

左様に候

彌軍事に關係なき事に候へは拘留いたす譯は有之間敷存候

支那國も先般投書の節英人を以てし臺灣に於ても都て對談の節佛人隨從の趣に候

拘留いたし候は如何の譯柄歟何分相分不申且何方よりも未だ拙者へ報知無之候

上海在留我領事官よりの報知の趣にては同氏支那に對し我

國を援るとの趣を以貴國領事にて拘留被致候に相聞候尤兵と同行なれば兎も角他事なるに如斯事は有之間敷善且支那へ行には獨にて兵もなき事に候

左様なればエゼント同様の者に候哉右委任狀を示さは相分可申軍事を援との證據もあらは兎も角拘留致す譯は無之筈尤拙者權外の事故いかん共取扱方無之候

柳原には委しく申遣置候へとも前々臺灣一條に付ては委詳御對話および置候次第も有之尤今般同氏を支那へ遣候義に付ては別段申入ざりし

今般清國え被遣候義に付御報知なくともよろしき事に候右拘留の趣別段書簡にて差出可申候

書簡御遣に候は、右委任の旨趣を委しく掲げ御申越有之度是か此件の基本に候今日始て同氏の次第閣下より公然承知致候義に候

兼て申上置候通我國人軍事に携候様の義有之候へは米國律に依り拘留いたし候義に有之候

リセントル氏は我政府より貴政府え申入其許諾を得備入候事なれば今日に至り平和の目的を以て同氏を他國に派出爲致候迎同氏を可拒絶次第は無之筈に候

御尤に候軍事に不携義に候へは曾て異論なし何れとも書簡を以可申入候
畢

一一三 八月十三日 清國恭親王ヨリ 清國駐劄柳原公使宛

臺灣蕃地ニハ清國ノ政令及ヘル旨主張シ之ヲ無主ト爲ス所以ヲ反問スルノ件

大清欽命總理各國事務王大臣

照覆事同治十三年六月二十五日接准

貴大臣照會一件以臺灣生蕃之事

副嶋大臣會派

貴大臣代陳其事因篤念兩國和誼乃爾相告帶兵與不帶唯我所欲并謂該生蕃爲無主野蠻等情又日前 貴大臣來署

經本大臣等與 貴大臣面質

貴大臣始謂上年實無本大臣董應許 貴國自辦之說總署亦無應許之事等語查臺灣各蕃社係我中國境地臺灣府志等書開載甚悉即

爲

貴大臣前次照會所云大書臺灣全地久隸中國者是也今貴大臣強指爲非中國之地而猶曰代陳臺灣生蕃之事且曰帶兵與不帶兵唯我所欲夫用兵何事

貴國既與中國修好應如何守約盡誼乃

貴大臣照會如此措詞本王大臣殊所不解

貴國外務省謂告董大臣據其旨趣下手中將西鄉與閩省官

面談謂帶兵到臺灣蕃地會與中國商明 貴大臣此次照會稱生蕃爲無主野蠻或者 貴大臣恐前說不行故又易一說

焉竟謂蕃境非中國地方以自掩其非豈知由前之說明々

認爲中國地方由後之說又強派爲非中國地方不料兩國相交先後議論可以變易若此查臺灣府志非爲今日與 貴大

臣詳辨而始有此書也內載雍正三年歸化生蕃一十九社輸餉折銀各節社即十九社之一亦在琅璫歸化生蕃十八

社中治本等六十五社即卑南寬之七十二社書所列蕃社

指不勝屈皆歸臺郡廳縣分轄合臺郡之生蕃無一社不歸中

國者又恭載乾隆年間裁減蕃餉

聖諭復詳其風俗載其山川分別建立社學等事蕃社爲中國地方彰明較著若此 貴大臣即以爲野蠻亦係中國野蠻即以爲野蠻有罪應辦亦爲中國所應辦若謂其戕害琉球民則琉球